

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motoooka

Kuwabara

元岡・桑原遺跡群12

– 第7次調査の報告 –

2008

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka

Kuwabara

元岡・桑原遺跡群 12

- 第7次調査の報告 -



2008

福岡市教育委員会



1. 7次調査区全景（東から可也山を望む）

巻頭図版2



1. 1、2区全景（南東から）



2. SX123覆土堆積状況（南東から）



1. SX123完掘状況（北東から）



2. SX111内掘立柱建物群（南から）

巻頭図版 4



1. 3、4区全景（東から）



2. 製鉄炉SR53～55（北から）



3. 出土木簡

序

福岡市は大陸に近く、いにしえより日本列島での社会や文化の形成に窓口としての役割を果たしてきました。こうした条件を生かし「アジアの交流拠点都市」を目指し、アジアの各地を繋ぐ学術・文化交流を進めています。

また、九州大学は「時代の変化に応じて自立的に変革し、活力を維持し続ける開かれた研究大学の構築」をコンセプトに、箱崎地区、六本松地区、原町地区的キャンパスを統合移転し、世界的レベルでの研究・教育拠点を創造するために福岡市西区元岡・桑原地区、前原市、志摩町にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めています。

本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うと共に、多核連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的、広域的な観点から検討を行っています。移転予定地内の埋蔵文化財発掘調査は平成7年から開始しています。

本書は九州大学統合移転事業に伴い、平成10~11年に実施した元岡・桑原遺跡群第7次調査の成果を報告するものです。この調査では「壬辰年韓鐵…」と記した木簡が発見され報道を通じて多くの市民の関心が集まりました。干支年銘の木簡としては九州最古例であり、本地域で古代に活動した製鉄集団の実態を検討できる貴重な史料となりました。また関係各位の協力で造成計画の見直しを行い遺跡の保存措置がとられました。本書が文化財保護への理解となり、学術研究の資料として活用頂ければ幸いです。

最後に調査にあたって協力頂いた九州大学と福岡市土地開発公社、同都市整備局、並びに元岡・桑原地区の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が1998、1999年度に行った元岡・桑原遺跡群第7次調査の報告書である。本事業に係わる埋蔵文化財調査報告書としては12冊目である。
2. 本書で報告する元岡・桑原遺跡群は旧石器～中世の複合遺跡であり、遺跡略号は「MOT」としている。
3. 本書に使用した遺構実測図は中園聰、鐘ヶ江賢二、長家伸、松浦一之介、吉留秀敏、小杉山大輔、西村直人、柴田知二、土井良伸、水崎るい、が作成し、遺物実測図は本田浩二郎、本村真弓、境聰子、鳥井幸子、成清直子、名取さつき、吉留が作成した。トレースは本田、田上勇一郎、吉留、境が行った。
4. 本書に使用した座標は国土座標第Ⅱ系を基にしている。
5. 本書に使用した写真は吉留、松浦、中園が撮影した。空中写真については有限会社空中写真企画に撮影を委託した。
6. 本調査時に実施した科学分析は株式会社古環境研究所に依頼した。なお、その成果は来年度報告予定の第18次調査報告書に併せて所収する予定である。
7. 本書の執筆と編集は吉留秀敏が行った。

目　次

I	はじめに	
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
3.	調査の経過	2
II	第7次調査の記録	
1.	調査地点の位置と環境	3
2.	基本土層	5
3.	保存協議と保存策	6
4.	検出遺構と出土遺物	8
5.	まとめ	142

調査番号	調査次数	担当者	所在地	地図番号	調査期間	調査面積	遺跡の時代
9813	第7次	吉留	大字元岡字池ノ浦	桑原129	H10.5.6～H11.6.11	7,500m ²	旧石器～古代の 集落・生産跡

図版目次

頁

Fig.1	調査地点と周辺の遺跡（1/100,000）	2
Fig.2	元岡・桑原遺跡群調査地点位置図（1/20,000）	3
Fig.3	7次の旧地形とグリット配置図（1/2,000）	4
Fig.4	7次調査区主要遺構配置図（1/800）	7
Fig.5	7次調査南半部（1・2区）遺構配置図（1/400）	9
Fig.6	7次調査北半部（3・4区）遺構配置図（1/400）	10
Fig.7	竪穴住居1（1/30・1/60）	14
Fig.8	竪穴住居2（1/60）	15
Fig.9	竪穴住居3、掘立柱建物1（1/60）	16
Fig.10	竪穴住居出土遺物1（1/3）	18
Fig.11	竪穴住居出土遺物2（1/3）	19
Fig.12	竪穴住居出土遺物3（1/3）	20
Fig.13	竪穴住居出土遺物4（1/3）	21
Fig.14	整地遺構SX107、掘立柱建物SB117（1/60）	23
Fig.15	掘立柱建物2（1/60）	24
Fig.16	掘立柱建物3（1/60）	25
Fig.17	掘立柱建物4（1/60）	26
Fig.18	掘立柱建物5（1/60）	27
Fig.19	掘立柱建物6（1/60）	28
Fig.20	掘立柱建物7（1/60）	29
Fig.21	掘立柱建物8（1/60）	30
Fig.22	掘立柱建物9（1/60）	31
Fig.23	掘立柱建物10（1/60）	32
Fig.24	掘立柱建物11（1/60）	33
Fig.25	建物出土遺物（柱穴内出土遺物）（1/3）	35
Fig.26	土坑（1/40）	36
Fig.27	土坑出土遺物（1/3）	37
Fig.28	焼土坑1（1/30）	38
Fig.29	焼土坑2（1/30）	39
Fig.30	焼土坑3（1/30）	40
Fig.31	溝内遺物出土状況（1/6・1/60）	42
Fig.32	溝状遺構平面・断面図（1/40）	43
Fig.33	溝土層断面図（1/80）	44
Fig.34	溝出土遺物1（1/3）	45
Fig.35	溝出土遺物2（1/3・1/2）	46
Fig.36	石垣遺構（1/30）	47
Fig.37	鍛冶炉1（1/20）	49
Fig.38	鍛冶炉2（1/20）	50
Fig.39	鍛冶炉3（1/20）	51
Fig.40	鍛冶炉出土遺物（1/3）	52
Fig.41	製鉄炉SR52・125（1/80）	54
Fig.42	製鉄炉SR53～55（1/80）	55
Fig.43	製鉄炉SR413（1/80）	57
Fig.44	SX51出土遺物（1/3）	58
Fig.45	SX51・107、SR52出土遺物（1/3）	59
Fig.46	造成面SX111平面・断面図（1/200）	61
Fig.47	SX111～SX123断面土層図（1/80）	62
Fig.48	SX111出土遺物1（1/3）	63
Fig.49	SX111出土遺物2（1/3）	64
Fig.50	SX111出土遺物3（1/3）	65
Fig.51	SX111出土遺物4（1/3）	66
Fig.52	SX111出土遺物5（1/3）	67
Fig.53	SX111出土遺物6（1/3）	68
Fig.54	SX111出土遺物7（1/3）	69
Fig.55	SX111出土遺物8（1/3）	70
Fig.56	SX111出土遺物9（1/2・1/3）	71
Fig.57	SX111～SX123上・中層出土遺物（1/3）	72
Fig.58	SX333・304出土遺物（1/3）	73
Fig.59	池状遺構SX123平面・断面図（1/200）	74
Fig.60	SX123土層断面図（1/80）	75
Fig.61	SX123上層出土遺物1（1/3）	76
Fig.62	SX123上層出土遺物2（1/3）	77
Fig.63	SX123上層出土遺物3（1/3）	78

Fig.64	SX123上層出土遺物4 (1/3)	79
Fig.65	SX123上層出土遺物5 (1/3)	80
Fig.66	SX123上層出土遺物6 (1/2・1/3)	81
Fig.67	SX123上・中層出土陶磁器 (1/3)	82
Fig.68	SX123中層出土遺物1 (1/3)	83
Fig.69	SX123中層出土遺物2 (1/3)	84
Fig.70	SX123中層出土遺物3 (1/3)	85
Fig.71	SX123中層出土遺物4 (1/3)	86
Fig.72	SX123中層出土遺物5 (1/3)	87
Fig.73	SX123中層出土遺物6 (1/3)	88
Fig.74	SX123中層出土遺物7 (1/3)	89
Fig.75	SX123中層出土遺物8 (1/3)	90
Fig.76	SX123中層出土遺物9 (1/3)	91
Fig.77	SX123下層出土遺物1 (1/3)	92
Fig.78	SX123下層出土遺物2 (1/3)	93
Fig.79	SX123下層出土遺物3 (1/3)	94
Fig.80	SX123下層出土遺物4 (1/3)	95
Fig.81	SX123下層出土遺物5 (1/2・1/3)	96
Fig.82	SX123その他の出土遺物1 (1/3)	97
Fig.83	SX123その他の出土遺物2 (1/3)	98
Fig.84	SX123出土製塙土器 (1/2)	99
Fig.85	SX123出土金属製品・ガラス製品 (1/1・1/2)	100
Fig.86	SX123出土木製品1 (1/3)	101
Fig.87	SX123出土木製品2 (1/3)	102
Fig.88	SX123出土木製品3 (1/3)	103
Fig.89	SX123出土木製品4 (1/3)	104
Fig.90	SX123出土木製品5 (1/2・1/3・1/6)	105
Fig.91	SX123出土木製品6 (1/3)	106
Fig.92	SX123出土木製品7 (1/3)	107
Fig.93	SX123出土木製品8 (1/3)	108
Fig.94	SX123出土木製品9 (1/3)	109
Fig.95	SX123出土木製品10 (1/3・1/6)	110
Fig.96	SX123出土木製品11 (1/3)	111
Fig.97	SX123出土瓦1 (1/4)	112
Fig.98	SX123出土瓦2 (1/4)	113
Fig.99	SX123出土瓦3 (1/4)	114
Fig.100	SX123出土石製品1 (1/3)	115
Fig.101	SX123出土石製品2 (1/2)	116
Fig.102	SX123出土砥石1 (1/2)	117
Fig.103	SX123出土砥石2 (1/4)	118
Fig.104	道路状遺構 (1/300)	119
Fig.105	道路状遺構断面図 (1/60)	119
Fig.106	3区谷部包含層出土遺物1 (1/3)	120
Fig.107	3区谷部包含層出土遺物2 (1/3)	121
Fig.108	4区谷部包含層出土遺物1 (1/3)	122
Fig.109	4区谷部包含層出土遺物2 (1/3)	123
Fig.110	4区谷部包含層出土遺物3 (1/2・1/3)	124
Fig.111	その他の出土遺物 (1/3)	125
Fig.112	埴輪1 (1/3)	126
Fig.113	埴輪2 (1/3)	127
Fig.114	旧石器時代遺物 (2/3)	128
Fig.115	縄文時代遺物1 (1/2)	129
Fig.116	縄文時代遺物2 (1/2)	130
Fig.117	縄文時代遺物3 (1/2)	131
Fig.118	縄文時代遺物4 (1/2)	132
Fig.119	剥片石器1 (2/3)	133
Fig.120	剥片石器2 (2/3・1/2)	134
Fig.121	弥生時代遺物 (1/3)	135
Fig.122	出土礫石器1 (1/3)	136
Fig.123	出土礫石器2 (1/3)	137
Fig.124	出土礫石器3 (1/3)	138
Fig.125	出土礫石器4 (1/3)	139
Fig.126	出土礫石器5 (1/3)	140
Fig.127	出土礫石器6 (1/3)	141

I はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査地点は平成7（1995）年度に実施した九州大学統合移転地内の確認調査の結果、C区6地点で確認された遺跡である。遺跡は元岡大坂池の上流にあたる狭い小支谷に立地し、数ヶ所のトレンチ調査の結果、炉、柱穴等がある小規模な中世製鉄関連集落と推定された。

発掘調査は平成10（1998）年5月6日から開始した。当初は確認調査で遺跡の範囲と推定された谷部中央の約1,000m²を対象としたが、調査が進むと遺跡は未確認の地下3m以下まで及び、より広範囲に広がり、かつ谷底から豊富な古代遺物と共に干支年が記された木簡が出土したことから、調査計画を見直し、谷部全域を対象として発掘調査を実施することとなった。こうして調査総面積は約7,500m²となり、一部で複数面の遺構面を検出し、調査前の地表から最大深度4m強に達した。およそ一年一ヶ月の調査期間で平成11（1999）年6月11日に終了した。

なお、調査期間中に出土した木簡については記者発表を行い、併せて現地説明会を1999年5月29日に開催した。当日は天候不順で狭隘な山道にも拘わらず、およそ300名の見学者が訪れた。

2. 調査の組織

調査委託者 福岡市土地開発公社

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣 植木とみ子 生田征生 町田英俊 西憲一郎（前任）

文化財部長 矢野三津夫 山崎純男 堀徹 柳田純孝 平塚克則 後藤直（前任）

調査庶務 文化財整備課（現管理課）

文化財整備課長（現管理課長）榎本芳治 上村忠明 平原義行（前任）

管理係長 栗須ひろ子 市坪敏郎 井上和光（前任）

管理係 鳥越由紀子 鈴木由喜 岩屋淳美 中岳圭（前任）

調査担当 大規模事業等担当（現埋蔵文化財第2課）主査 吉留秀敏

課長 力武卓治 二宮忠司 山崎純男（前任）

主任文化財主事（現調査第2係長）常松幹雄 米倉秀紀 濱石哲也 松村道博

池崎譲二（前任）

主事 池田祐司 上角智希 木下博文 菅波正人 星野恵美 小林義彦 久住猛雄

松浦一之介 屋山洋（前任）

調査補助 小杉山大輔 西村直人 櫛山範一 石橋忠治 濱石正子 水崎るい

撫養久美子

調査調整 都市整備局大学移転対策部

3. 調査の経過

発掘調査は当初、確認調査で遺跡の範囲と推定された谷部中央の約1,000m²（1区）を対象としたが、調査が進むにつれ遺跡は未確認の地下3m以下まで及び、より広範囲に広がる事が判明した。さらに谷底から豊富な古代遺物と共に干支年が記された木簡が出土したことから、調査計画を見直し、谷部全域を対象として発掘調査を大幅に拡大することになった。ただし、発掘に伴い排出される土砂が狭い谷部内で処理できないことから、対象地全体を四つの調査区に区分し、排出土砂を重機で反転しつつ順に調査を進めていく事とした。2区は谷上部であり約3,500m²である。次に2区までの調査後に1区の下流域約3,000m²を上下流で二分して3、4区として順次調査を進めた。こうして調査した総面積は約7,500m²となり、一部で複数面の遺構面を検出し、調査前の地表から最大深度4m強に達した。

発掘調査にあたっては、調査区内に20m単位の任意座標を設け、測量原点とした。また大型遺構や谷部包含層の調査ではさらに2m単位のグリットを設定し、実測や遺物取り上げに用いた。

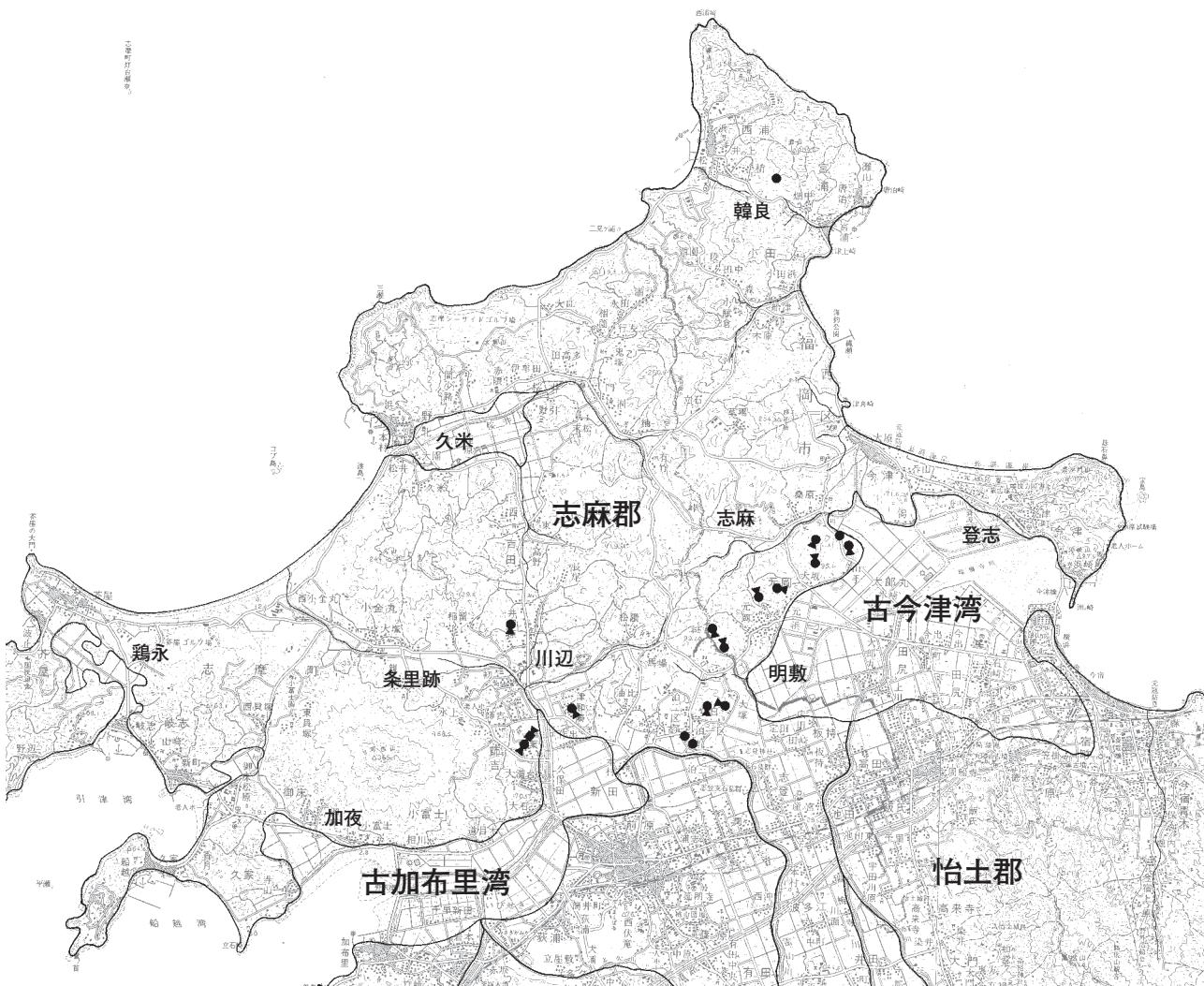


Fig.1 調査地点と周辺の遺跡 (1/100,000)

II 第7次調査の記録

1. 調査地点の位置と環境

元岡・桑原遺跡群は玄界灘に突出した糸島半島の基部に位置し、福岡市西区大字元岡地区と同桑原地区にまたがる丘陵地帯に分布する遺跡群の総称である。遺跡の立地する丘陵は第三紀後葉に形成された花崗岩を基盤とし、高さは標高100m前後を頂部として樹枝状の浸食谷が地形を複雑にしている。遺跡群の東～南側は現在広い水田耕地となっているが、中世までは今津湾が深く入り込み、遺跡近くまで迫っていた。これが近世以降の干拓事業により陸化したものである。本遺跡群では縄文時代の瓜尾貝塚（県指定史跡）と少数の群集墳が知られているのみであったが、平成7年以降に開始した九州大学統合移転用地の事前確認調査の結果、新たに各時代に及ぶ多数の遺跡が発見された。

糸島半島を中心とした歴史的景観を概観すると、北部九州の中での特異な様相を見ることができる。旧石器時代から縄文時代前半期の遺跡は主に山際の段丘面に分布し、周辺地域と同様に狩猟採集活動の痕跡を見せる。縄文時代後半期になると、旧今津湾と関わる貝塚遺跡が現れる。貝塚は北部九州では稀な存在であるが、この今津湾と旧遠賀湾に多く分布している。本遺跡群の北側に位置する大原遺跡では縄文時代後～晩期の焼畑遺構が提示され、この段階には農耕の普及が進んでいたと考えられる。また、大原遺跡や瓜尾貝塚はそれぞれ黒曜石等の北部九州の石材供給起点となっており、糸島



Fig.2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/20,000)

半島を介し玄界灘沿岸を結ぶ海上交易が存在したことが分かる。弥生時代になると水稻農耕が普及し、今津湾に浮かぶ今山に産出する玄武岩を素材とする大型石斧類の集約的生産が開始される。本遺跡群周辺では水稻農耕の導入はやや遅れるが、縄文時代から継続する剥片石器の供給と併せて、この石斧も北部九州から中九州まで広い供給圏を形成する。古墳時代前半期には今山遺跡などで製塩活動が認められるが、周辺は海浜の小規模集落が点在するのみである。その中で本遺跡群の丘陵頂部には塩除古墳、池の浦古墳、峰古墳などの本地域では大型の前方後円墳が多数築造される。古墳時代後半期には石ヶ原古墳など引き続き大型の前方後円墳が築造されるとともに、群集墳の築造や集落の増加が著しい。群集墳の副葬、供献品に鍛冶工具や陶質土器など初期の製鉄関連遺物や朝鮮半島からもたらされた文物がある点は注目される。集落は丘陵の縁辺や谷部にも展開し、糸島半島の広域に集団の増加が予測される。

古代に糸島半島は嶋（志麻）郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、加夜、志麻、鶴永の郷に分かれていたが、本遺跡群が該当する郷は不明である。日本書紀にみる朝鮮半島への久米皇子と派遣軍の志摩郡滞在記録や、国内最古である大宝二（702）年の嶋郡川辺里戸籍の存在、古代鉄生産の記録などは本地域の重要性を伺うことが出来る。

調査地点は池ノ浦古墳のある丘陵から北へ派生する二つの尾根に挟まれた谷地内にある。谷地は幅約60m、奥行き約200mを測る。その標高は20~40mである。この谷地には昭和40年頃まで棚田がつくられ、その後造成工事を経て蜜柑園が開かれている。昭和60年以降に農業は中止され、調査前は竹林と雑木林となっていた。遺跡はこの谷の地下2~4mに埋没していた。

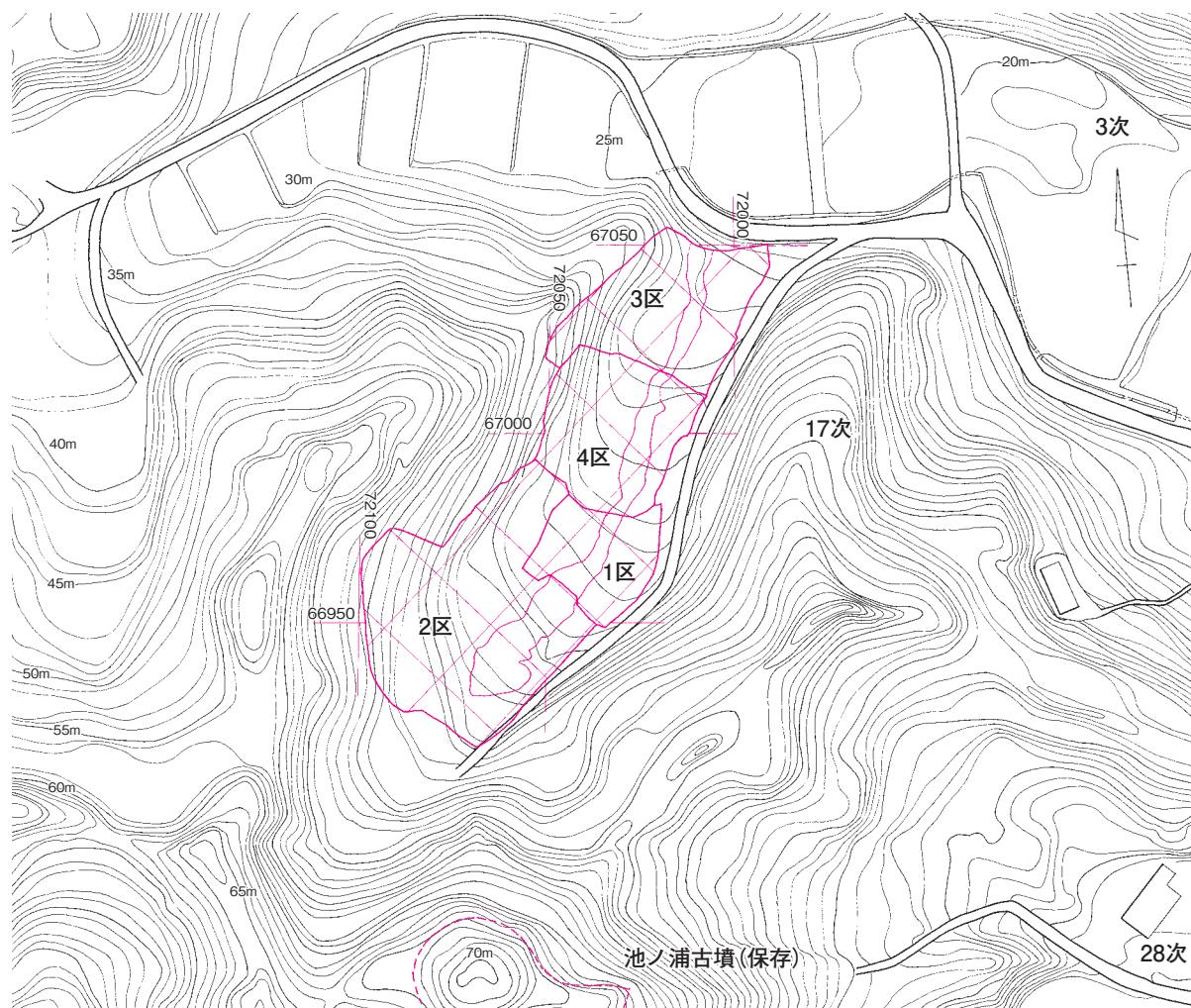


Fig.3 7次の旧地形とグリット配置図 (1/2,000)

4. 検出遺構と出土遺物

発見した遺構は主に古墳時代と古代であるが、出土遺物は古墳時代、古代を主体としながらも、旧石器、縄文、弥生、中・近世の各時代資料がある。遺構、遺物の分布は谷本流と分岐する地点から支流の小谷へ50mほど遡った付近までの出口付近（3、4区）に少数分布し、遡った谷奥部（1、2区）に多数の分布が確認された。

旧石器時代の包含層は確認できず、1、2区西側斜面と谷部包含層中に少量の石器類が出土した。

縄文時代は1、2区西側斜面に包含層があり、それ以外にも1～4区谷部のⅢ～Ⅵ層に少量の土器類、石器類が出土した。このうち2区造成面SX111下部で縄文早期の押型文、条痕文土器類を含む包含層、同斜面上部の整地遺構SX107下部に縄文後期前葉の阿高式系土器の包含層があり、柱穴などの遺構が少数確認できた。晚期前葉の土器、石器類は谷部全体に出土したが、後世の包含層へ混入したものが多く、明確な包含層や遺構は未確認であった。

弥生時代の明確な包含層は確認できなかった。西側～谷部中央の主に古代遺構覆土、古代の池状遺構SX123覆土に混じって須玖Ⅱ式土器類、石斧や石製穂摘具、石鏃などの石器類が出土した。

古墳時代前期の遺物は古代の池状遺構SX123の覆土上部に流入状態で出土した。土師器や埴輪がある。これは北東斜面上約40mに隣接する池ノ浦古墳からの流入物と考えられる。池ノ浦古墳は未調査であるが、墳丘測量図をみると（Fig.3）、後円部東斜面に崩落部がある。その崩落部斜面の延長がSX123にあたる。SX123覆土の観察から、墳丘の崩落は古代でも9世紀頃に発生したと考えられる。

古墳時代後期の遺構は1、2区に竪穴式住居跡6棟、掘立柱建物3棟、溝4条などがある。当該期の遺構は古代の造成や建物、また中世以降の開発行為により大きく削平を受け、保存状況は悪い。古代包含層や遺構内への流入遺物から見ると、相当の遺構が失われたものと予測される。竪穴式住居は1棟のみ東斜面にあるほか全て西斜面に分布する。住居掘方が斜面に直接掘り込まれるため、山側で掘り込みが深くなっている。また竪穴式住居の斜面側上方に排水用の溝が掘られている例がある。西側斜面にある住居2棟（SC41、43）では山側一辺に竈が付設されている。掘立柱建物は斜面上方の標高40～45m付近の急斜面に平坦面を造成して建てられた二間二間と一間一間の総柱建物である。検出された溝は主に建物斜面側の排水用である。溝SD150は古代造成面SX111下部で検出された弧状溝であり、内径で約15mを測る円周を描くが、溝に囲まれる施設は削平されているためか不明である。この時期の遺物としては土師器、須恵器などがある。以上の集落の時期は出土須恵器などから見て小田編年ⅢB期からⅣA期にあたり、6世紀後葉から7世紀前葉の範疇にあたると見られた。なお、住居SC41、43覆土の観察から住居廃棄後暫くは遺物の混入がなく、次の古代集落形成との間に時間的間隙が存在したと考えられる。

古代の遺構は1、2区を中心として遺構密度が高く、造成面、掘立柱建物、杭列、土坑、溝、池状遺構、製鉄炉（精錬炉）、鍛冶炉、焼土坑、石垣などがある。また3、4区は遺構密度が低いものの、掘立柱建物、道路状遺構、杭列、製鉄炉（精錬炉）、焼土坑などがある。

1、2区西斜面の遺構は、造成面SX111の範囲内に集中し、検出標高で大きく三群に分かれ。最上段は標高35m付近であり、中段は標高32～33m、下段は標高30m付近である。それぞれの段に検出される遺構群は斜面山側で遺存状況は良いが、斜面下方では削平のため遺存状況が悪いか、失われている。全ての掘立柱建物は桁行が斜面に並行しているために、斜面下方側の桁行柱列と梁行柱列が不明なものが多い。なお、建物桁行が二間以下とするなら、各段間の切り合いはなく、三群の建物は同時期に、段状造成面に存在したことと考えられる。

中世の遺構は、調査区斜面に多数の溝状遺構が検出された。溝状遺構は地形並びに等高線に沿って長さ数mから十数mの長さがあり、複数が切り合うものがある。古代の段造成による地形変換点などに集中している。埋土は砂質からシルト質土であり上部に腐植土が形成されている例もあった。棚田などの水田經營に伴う灌漑水路の可能性も考えたが、溝床面の高さが不安定であり、何より谷中央部からの水利供給の構造がないことからそれは考え難い。畠地の畝などの痕跡であろうか。溝の埋土内からは遺物はほとんど出土しないが、12~13世紀代の輸入陶磁器片や土師器片が僅かに認められた。なお、近世については特に調査対象外であったが、中世と同様に現地形に残る古代の造成面や段造成などの地形変換点をそのまま利用した遺構が認められた。これは谷部中央の湧水からの水路が主で、その水路と連結した小規模な棚田状の水田が開かれていた。開田の初現は不明である。

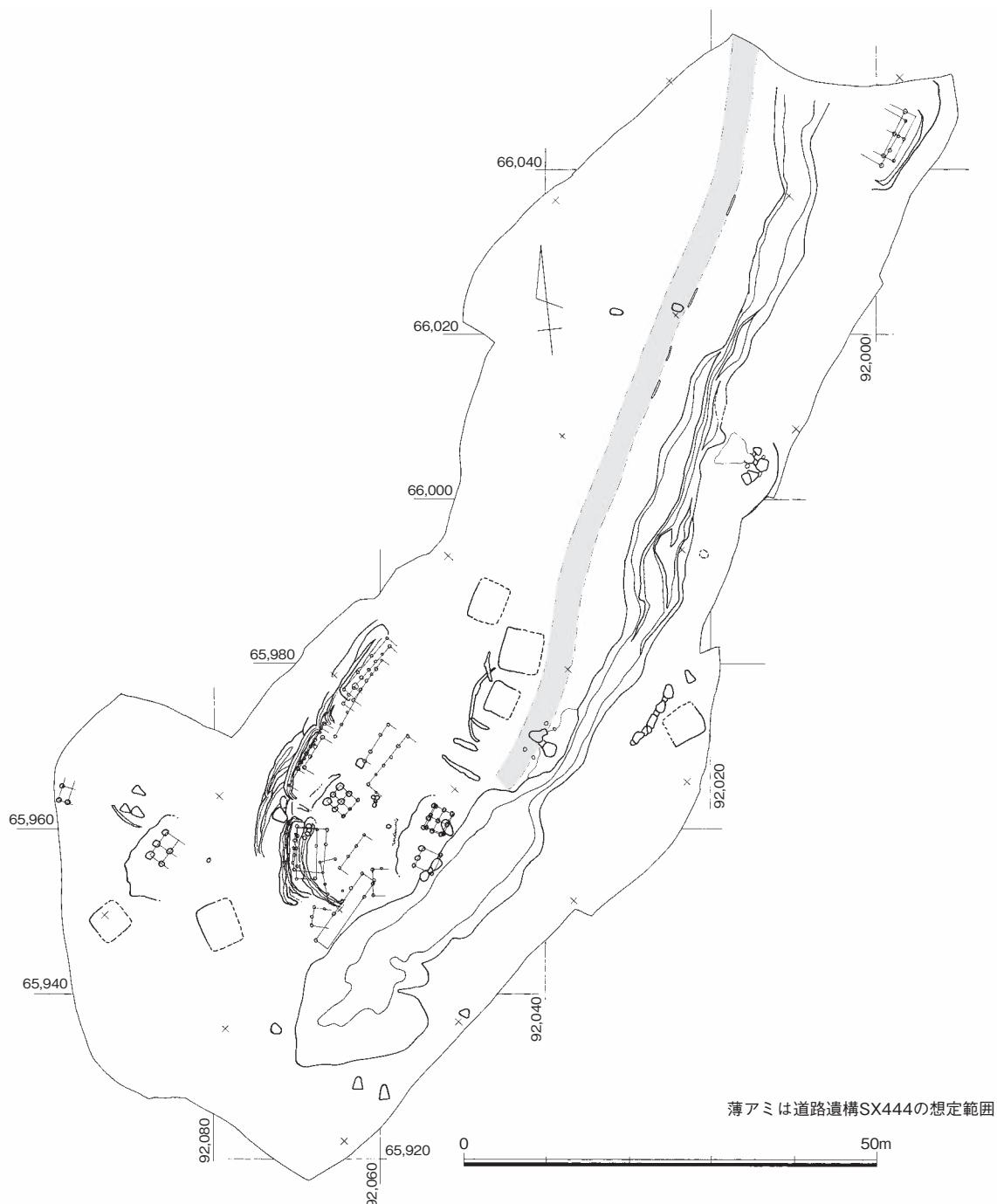


Fig.4 7次調査区主要遺構配置図 (1/800)

1) 壁穴式住居跡

SC41 1区西斜面標高31m付近で検出した隅丸方形の住居である。斜面上方の溝SD42は本住居に伴う排水溝と考えられる。住居は東側を削平で失うが、西側で高さ0.6mの壁が残る。南北約5m、東西約5mの方形に復元される。主柱穴は4本であり、柱間は南北2.6m、東西2.3mである。貼り床があり、床四辺を壁溝が巡り、西壁中央の壁溝覆土上に竈が付設されている。竈の上部は失われていたが下部は遺存し、支柱立石や焚き口、両壁が良好に残る。遺物は竈周辺に土師器甕片が多く、埋土下部に須恵器、土師器片（1～5、11～26）が出土した。この遺物は小田富士雄編年のⅢb～Ⅳa段階である。なお埋土中位の1b～2層は無遺物であり、埋土上部の1a層からは古代遺物（6～10）が出土した。両者の間に断絶があったことを示している。

SC43 SC41の南1.5mにある隅丸方形の住居である。斜面上方の溝SD44は本住居に伴う排水溝であり、溝SD42に切られる。住居は東側を削平で失うが、西側で高さ0.5mの壁が残る。南北3.7m、東西約3.4mの方形である。主柱穴は4本であり、柱間は南北1.5m、東西1.2mである。床四辺を壁溝が巡り、西壁中央の壁溝覆土上に竈が付設されている。竈は破壊され、焼土ブロックが被覆していた。遺物は床面上に多く出土し、須恵器、土師器など（27～35、38～60）がある。小田編年のⅢb段階である。



1. 1区全景（南から）



2. 1区SD13（北から）



3. 2区全景（北から）



4. 2区西半部（東から）

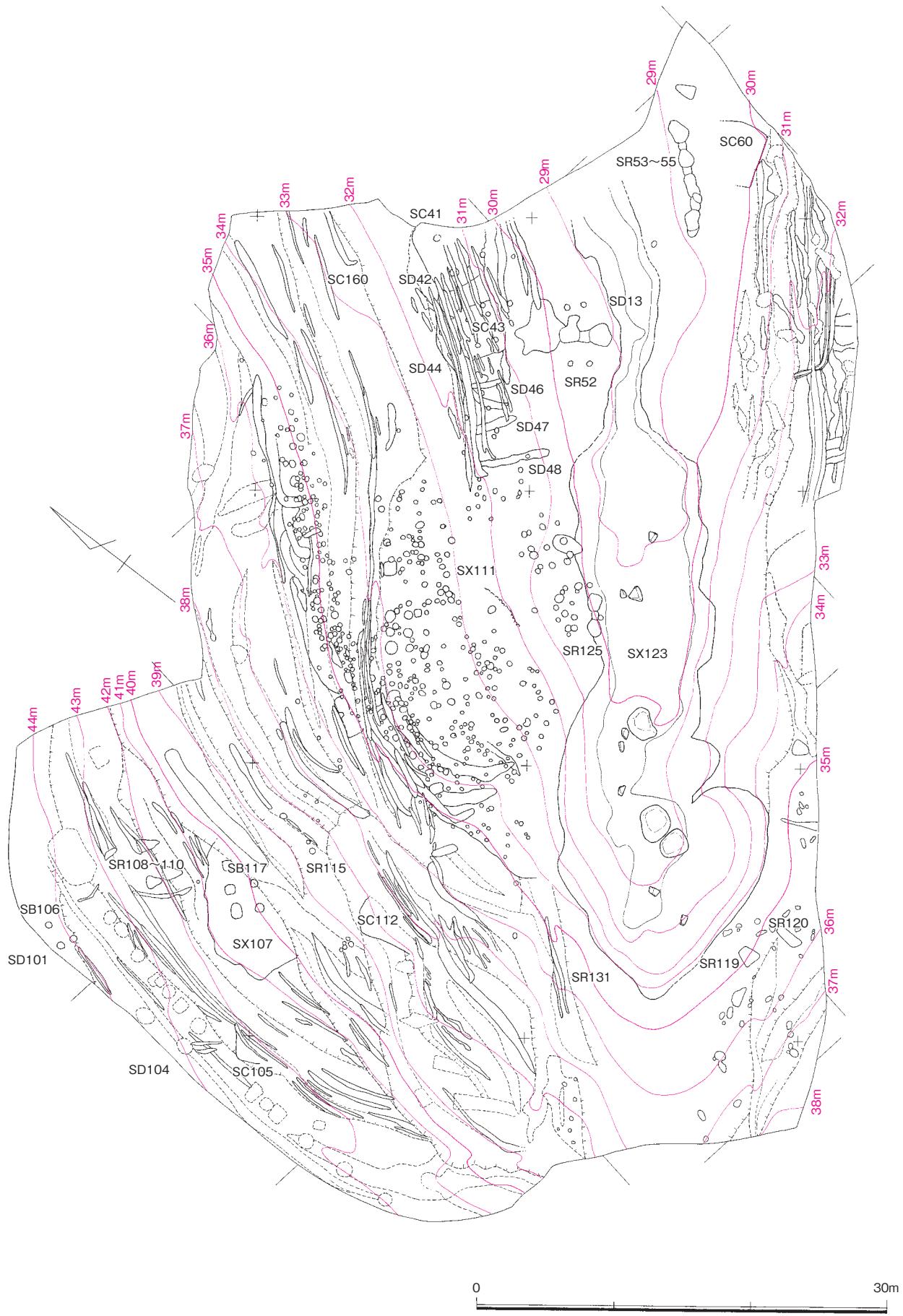


Fig.5 7次調査南半部（1・2区）遺構配置図（1/400）

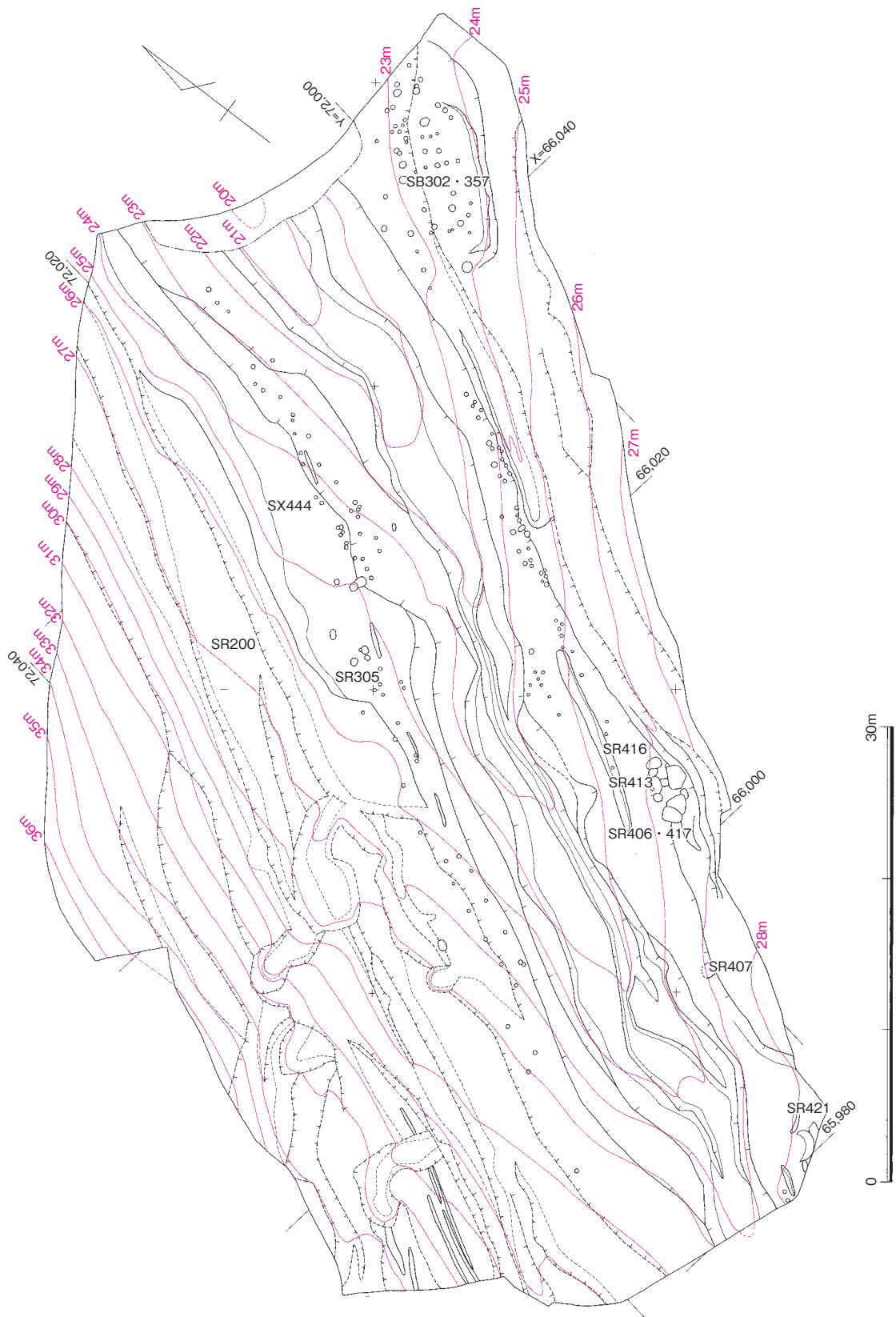


Fig.6 7次調査北半部（3・4区）遺構配置図（1/400）

SC60 1区東斜面で検出した唯一の住居である。本来が急斜面であり、遺存状態は悪い。標高は約31mであり、隅丸方形の住居である。住居は西側を削平で失うが、東側で高さ0.8mの壁が残る。南北約4.5m、東西3.2m以上の方形に復元される。主柱穴や竈は不明である。遺存する床面の三辺を壁溝が巡る。遺物は少なく、埋土下部に土師器壺片（62）が出土した。

SC105 2区西斜面の標高43m付近にある隅丸方形の住居と推定される遺構である。斜面の削平のためコーナー部分のみが残り、西側で高さ0.4mの壁高がある。現状で南北約3.3m以上、東西1.5m以上の方形に復元される。主柱穴や竈は不明である。遺存する床面の二辺を壁溝が巡る。壁溝床面の掘方は基盤の花崗岩風化土に達し、掘削時の鍬鋤痕が残る。遺物には床面上に多く残り、須恵器、土師器片（63～69）が出土した。小田富士雄編年のⅢb～Ⅳa段階である。

SC112 2区西斜面の標高38m付近にある隅丸方形の住居と推定される遺構である。斜面の削平のためコーナー部分のみが残り、西側で高さ0.8mの壁高がある。現状で南北約4.7m、東西2.7m以上の方形に復元される。主柱穴や竈は不明である。遺物には埋土下部を中心に須恵器、土師器片（70～80）が出土した。小田富士雄編年のⅢb段階である。

SC160 2区北端の標高33m付近にある隅丸方形の住居と推定される遺構である。SC41の西斜面上方に位置する。削平のために西側で高さ0.2mの壁高のみが残る。現状で南北約5.2m、東西1.0m以上の方形に復元される。主柱穴や竈は不明である。住居外の南西側に同軸の溝が巡るが、排水溝としては近すぎ、関連は不明である。遺物は未検出である。



1. 3区全景（東から）



2. 3区全景（西から）



3. 4区全景（北から）



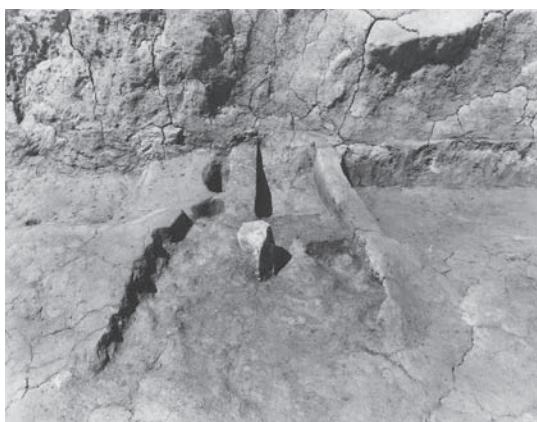
4. 3、4区全景（南から）



1. SC41、43 (北から)



2. SC41 (東から)



3. SC41カマド (東から)



4. SC43 (東から)



5. SC60 (東から)



6. SC105 (南から)



7. SC112 (北から)



8. SC160 (南から)

2) 掘立柱建物

SB106 二区西端の最高所に検出した。標高約44.5mであり、周辺はミカン畑造営に際して大規模な掘削が行われ、ベルト状に残された土壁の上部で検出した。一間一間以上の建物である。柱穴3個は直交軸で配置し、長軸がN4° -Eをとる。柱間は南北1.8m、東西1.2mである。斜面に直交する東西軸の柱掘方の底面がほぼ同じであり、本来水平に近い平坦（造成）面上に建てられたと考えられる。

SB117 二区西側の斜面に検出した。標高41m付近に設けられた整地遺構SX107内にある。二間一間以上の建物であり、推定される整地面の規模からみて本来二間二間の総柱建物と推定される。柱穴5個は直交軸で配置し、主軸がN-69° -Eをとる。建物規模は南北1.6m、東西3.6mと推定され、柱間は南北1.8m、東西1.7～1.9mである。斜面に直交する南北軸の柱掘方の底面がほぼ同じであり、SX107の水平な床面に建てられたとみられる。建物の時期はSX107溝内遺物からみて古墳時代後期で、小田編年Ⅲb期と考えられる。

SB134 造成面SX111下段と池状遺構SX123が接する標高31m付近にある二間二間の総柱建物である。複数の柱穴を共有しながらの建て替えがあり、SB134a、bの二棟に区分した。主軸はN-53～60° -Eの範囲内で歪みがある。建物規模は南北2.8m、東西2.3mであり、柱間は南北約1.4m、東西約1.2mである。斜面に直交する東西軸の柱掘方の底面は約12°で傾斜しており、本来傾斜地に建てられたとみられる。13基の柱穴から遺物の出土があり、このうちP140、141からは須恵器、土師器片がある。8世紀中～後葉の時期である。

SB135 造成面SX111中段の標高34m付近にある二間二間の総柱建物である。主軸はN-18° -Eをとる。柱掘方は大きく、建物規模は南北2.7m、東西2.6mであり、柱間は南北、東西共に1.3m前後である。斜面に直交する東西軸の柱掘方の底面がほぼ同じであり、本来水平な土地に建てられたとみられる。

SB144 造成面SX111中段の標高34～35m付近にある二間三間の側柱建物である。主軸はN-9° -Wをとる。建物規模は桁行5.2m、梁行3.5mであり、その柱間は桁間1.7m、梁間1.7～1.9m前後である。斜面に直交する東西軸の柱掘方の底面は約9°で傾斜しており、本来傾斜地に建てられたとみられる。4つの柱穴から遺物の出土があり、このうちP71、73からは須恵器、土師器片がある。8世紀後葉の時期である。建物の西側には建物をコの字形に囲む溝SD199が掘られている。

SB145 造成面SX111中段の標高34.5m付近にある三間一間以上の建物である。主軸はN-09° -Eをとる。建物規模は桁行3.6mであり、桁間1.8mである。

SB146 造成面SX111下段と池状遺構SX123が接する標高33.5m付近にある一間五間の建物である。主軸はN-40° -Eをとる。建物規模は桁行9.6m、梁行東西1.9mであり、柱間は梁間、桁間共に1.9～2.0mである。北西端の柱穴は花崗岩岩盤を削り抜いて掘られている。斜面に直交する南北軸の柱掘方の底面傾斜は約3°であり、本来水平に近い平坦面に建てられたとみられる。

SB147 造成面SX111中段の標高33m付近にある四間一間以上の側柱建物である。削平により斜面上方の側柱列のみの検出である。主軸はN-48° -Eをとる。建物規模は桁行6.0mであり、桁間1.4～1.6mである。

SB148 造成面SX111中段の標高33m付近にある三間一間の側柱建物である。主軸はN-38° -Eをとる。建物規模は桁行5.3m、梁行2.4mであり、桁間は中間が長く2.4m、外側が1.5m、梁間2.4mである。斜面に直交する東西軸の柱掘方底面は約7°で傾斜する。

SB149 造成面SX111上段の標高35m付近にある五間一間以上の建物である。主軸はN-35° -Eをとる。建物規模は桁行8.7m、梁行1.5m以上であり、桁間2.1～2.2m、梁間1.5mである。建物西側の斜面

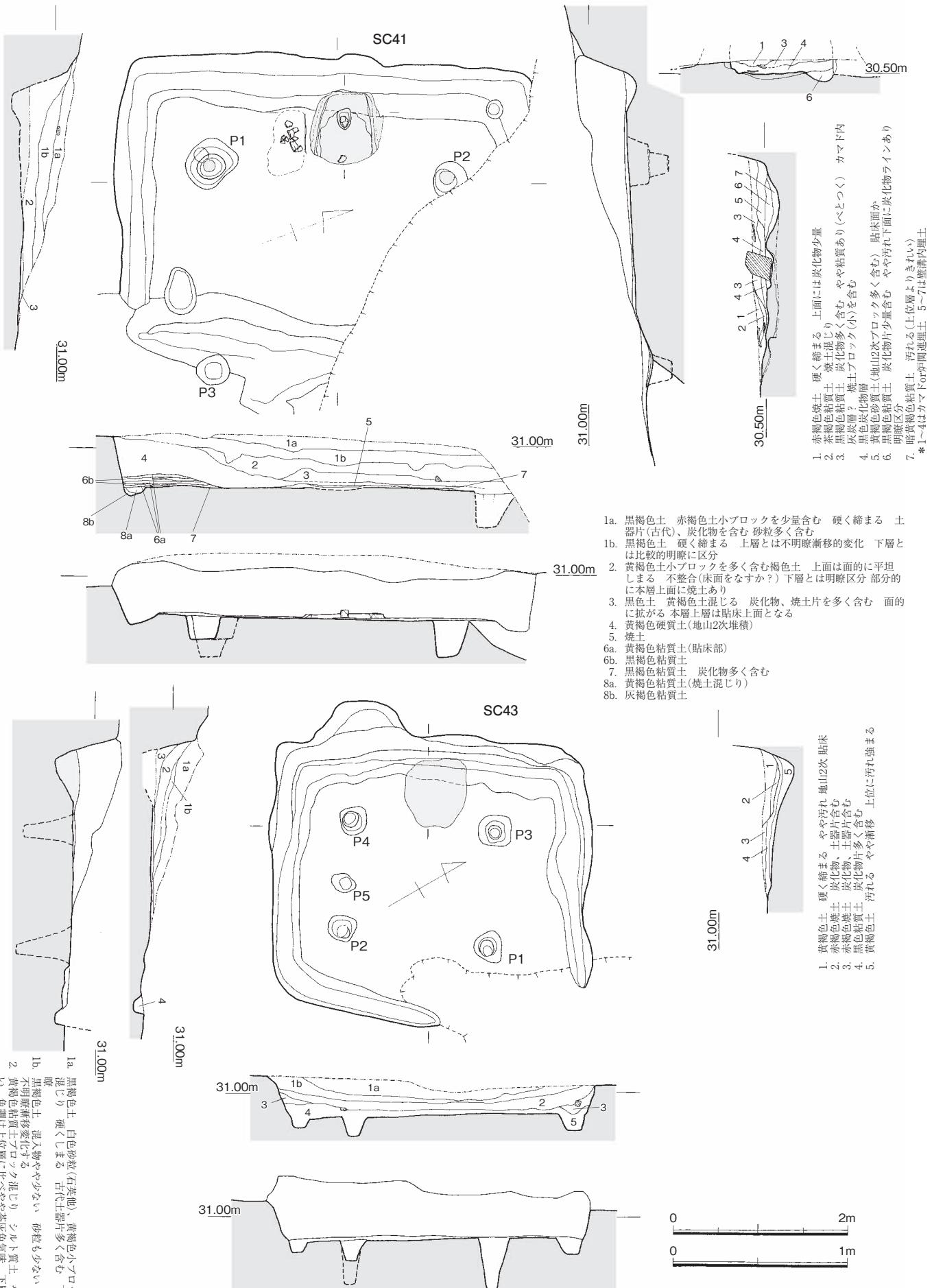


Fig.7 積穴住居1 (1/30・1/60)

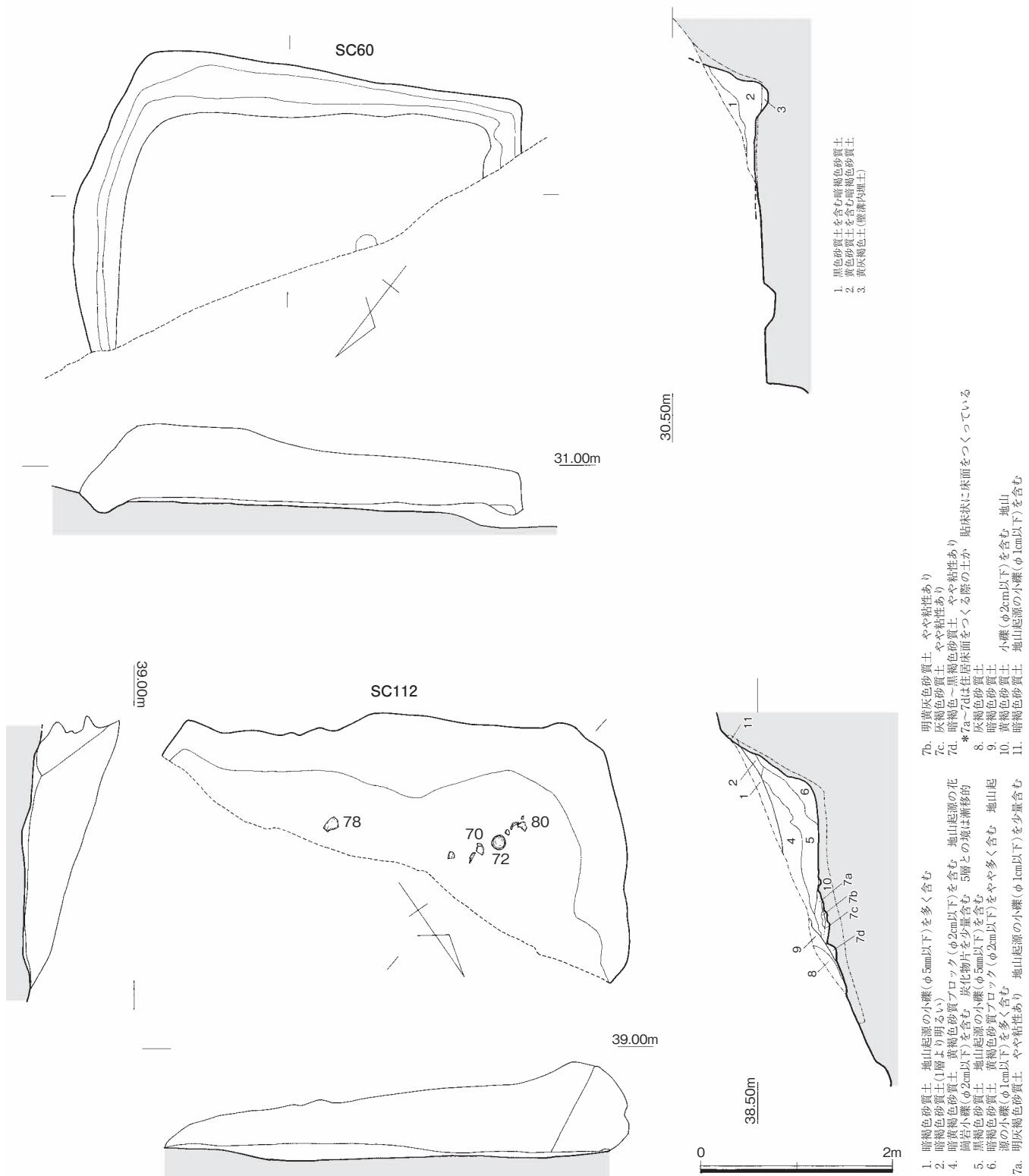


Fig.8 積穴住居2 (1/60)

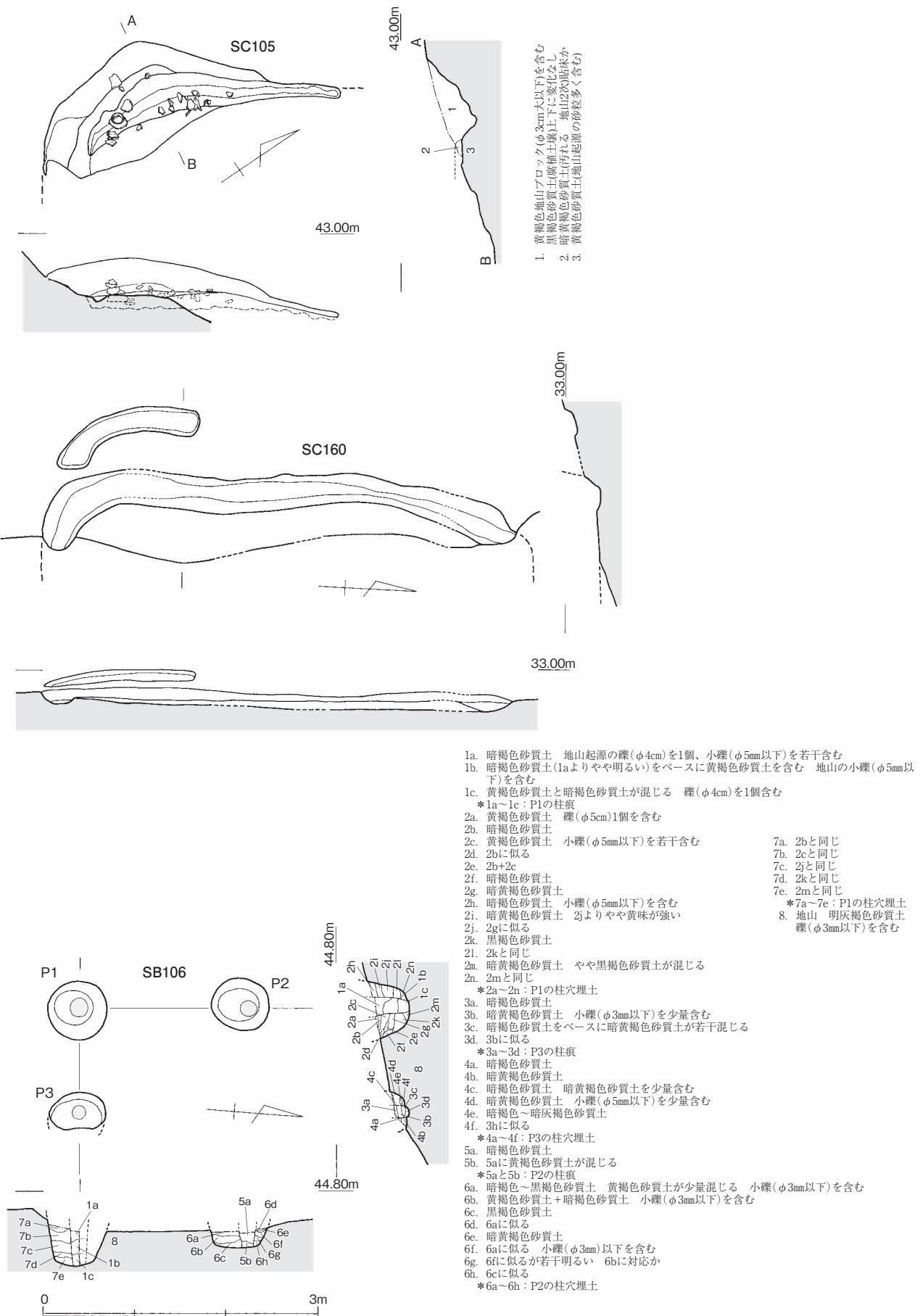


Fig.9 壁穴住居3、掘立柱建物1 (1/60)

にはコの字形の掘方がある。斜面に直交する東西軸の柱掘方の底面傾斜は約5°であり、本来水平に近い平坦面上に建てられたとみられる。

SB150 造成面SX111上段の標高35m付近にある四間一間以上の建物である。主軸はN-36°-Eをとる。建物規模は桁行4.4m、梁行1.7m以上であり、桁間1.4~1.5m、梁間1.7mである。建物西側の斜面にはコの字形の段状の掘方がある。斜面に直交する東西軸の現状の傾斜が15°に対し、柱掘方の底面傾斜は約6°であり、本来水平に近い平坦面を設けて建てられたとみられる。4つの柱穴から遺物の出土があり、このうちP268、270からは須恵器壺、高壺がある。8世紀後葉の時期である。

SB151 造成面SX111上段北側の標高35m付近にある五間一間以上の建物である。主軸はN-25°-Eをとる。建物規模は南北6.3mである。多くの柱穴に径15cm前後の柱痕が残り、柱間は芯々で1.25mである。建物西側の斜面にはコの字形の溝状掘方がある。

SB152 造成面SX111上段の標高35m付近にある四間一間以上の建物である。主軸はN-33°-Eをとる。建物規模は桁行6.5m、梁行2.3m以上であり、桁間1.5~1.8m、梁間2.3mである。建物西側の斜面には段状の掘方がある。

SB153 造成面SX111上段北側の標高35m付近にある三間一間以上の建物である。主軸はN-45°-Eをとる。建物規模は桁行8.1mであり、柱間は広く、桁行2.7m前後である。建物西側の斜面にはコの字形の段状の掘方がある。同じ平坦面ではSB151、152、174、175などと重複するが切り合いは少なく、前後関係はSB151→175のみが判明した。

SB154 造成面SX111中段の標高34m付近にある二間一間以上の建物であり、柱間や掘方の深さからみて本来二間二間の総柱建物と推定される。主軸はN-18°-Eをとる。建物規模は南北2.2m、東西1.2mであり、桁間1.1~1.2mである。掘方底面から見て本来造成された平坦地に建てられたと推定される。SB146と重複関係があるが、切り合い関係は不明である。

SB171 造成面SX111上段の標高35m付近にある四間二間以上の建物である。主軸はN-34°-Eをとる。建物規模は桁行6.5m、梁行1.9m以上であり、桁間1.6m前後、梁間0.8~1.1mである。

SB172 造成面SX111上段の標高35m付近にある五間二間以上の建物である。主軸はN-35°-Eをとる。建物規模は桁行7.5m、梁行1.6m以上であり、桁間1.5m前後、梁間1.7mである。南梁側の一間分は庇となるか。同じ平坦面ではSB149、150、152、152、171、172、174、175などと重複し、このうち切り合いでは、SB171→172→149の前後関係が推定された。

SB173 造成面SX111中段の標高34m付近にある五間一間以上の建物である。主軸はN-07°-Eをとる。建物規模は桁行6.2m、梁行2.3mであり、桁間1.1~1.3mである。SB144、145と重複関係があるが、切り合い関係は不明である。なお、建物内北側の位置に鍛冶遺構SR121、137、138、143が分布するが、建物と同時存在したかは判断できなかった。

SB174 造成面SX111上段北側の標高35m付近にある四間一間以上の建物である。主軸はN-41°-Eをとる。建物規模は桁行6.0mであり、桁間1.3~1.8mとばらつく。

SB175 造成面SX111上段の標高35m付近にある二間一間以上の建物であり、柱間と掘方の深さからみて本来二間二間の総柱建物と推定される。主軸はN-36°-Eをとる。建物規模は一辺2.4mと推定され、柱間1.2mである。建物西側の斜面にはコの字形の溝状掘方がある。

SB176 造成面SX111中段の標高34m付近にある四間一間の建物である。主軸はN-10°-Wをとる。建物規模は桁行5.3m、梁行1.8mであり、桁間1.2~1.4m、梁行1.8mである。SB146と重複するが前後関係は不明である。

SB177 造成面SX111下段と池状遺構SX123が接する標高31m付近にある二間一間以上の総柱建物で

SC41

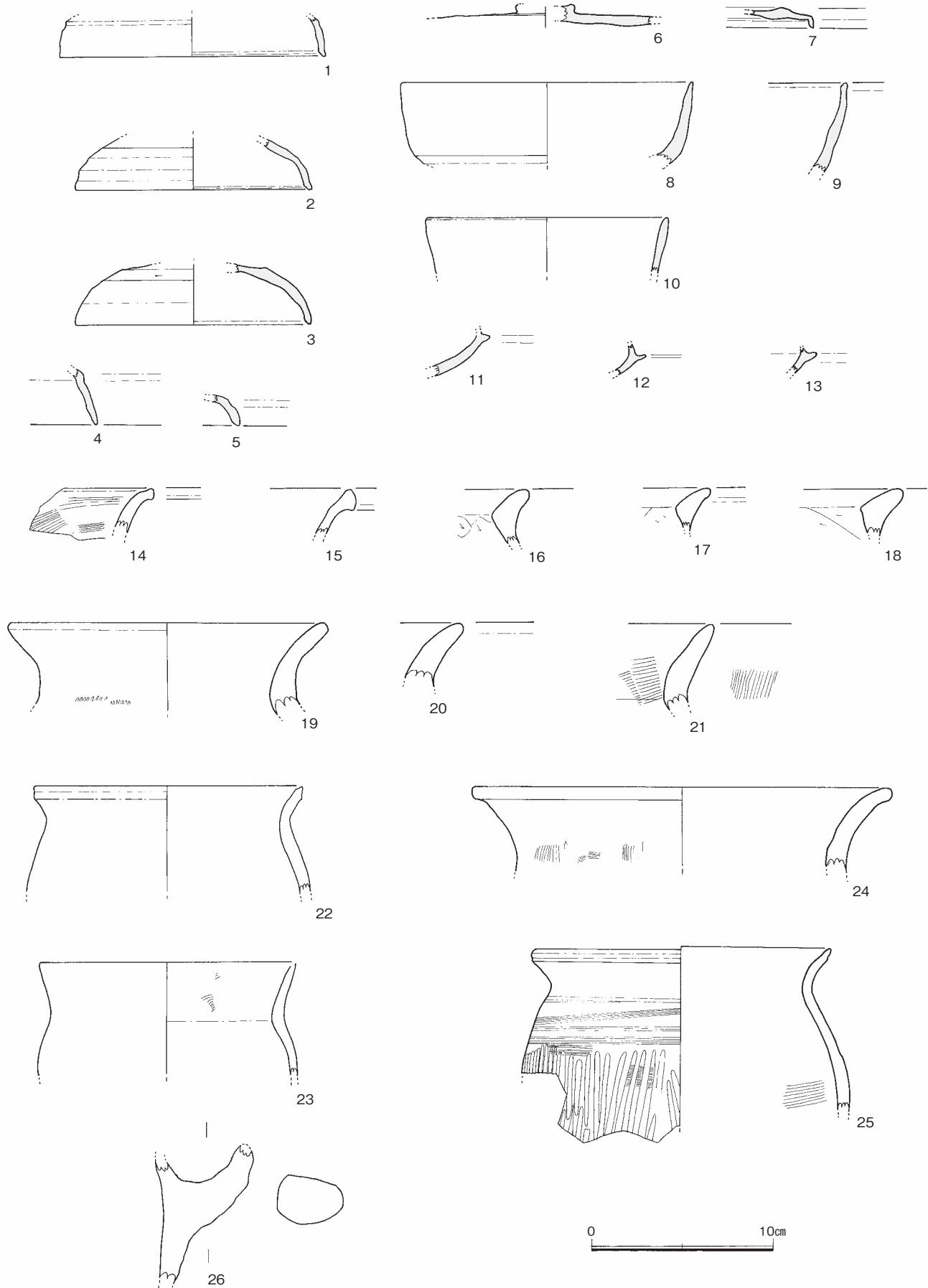


Fig.10 墓穴住居出土遺物1 (1/3)

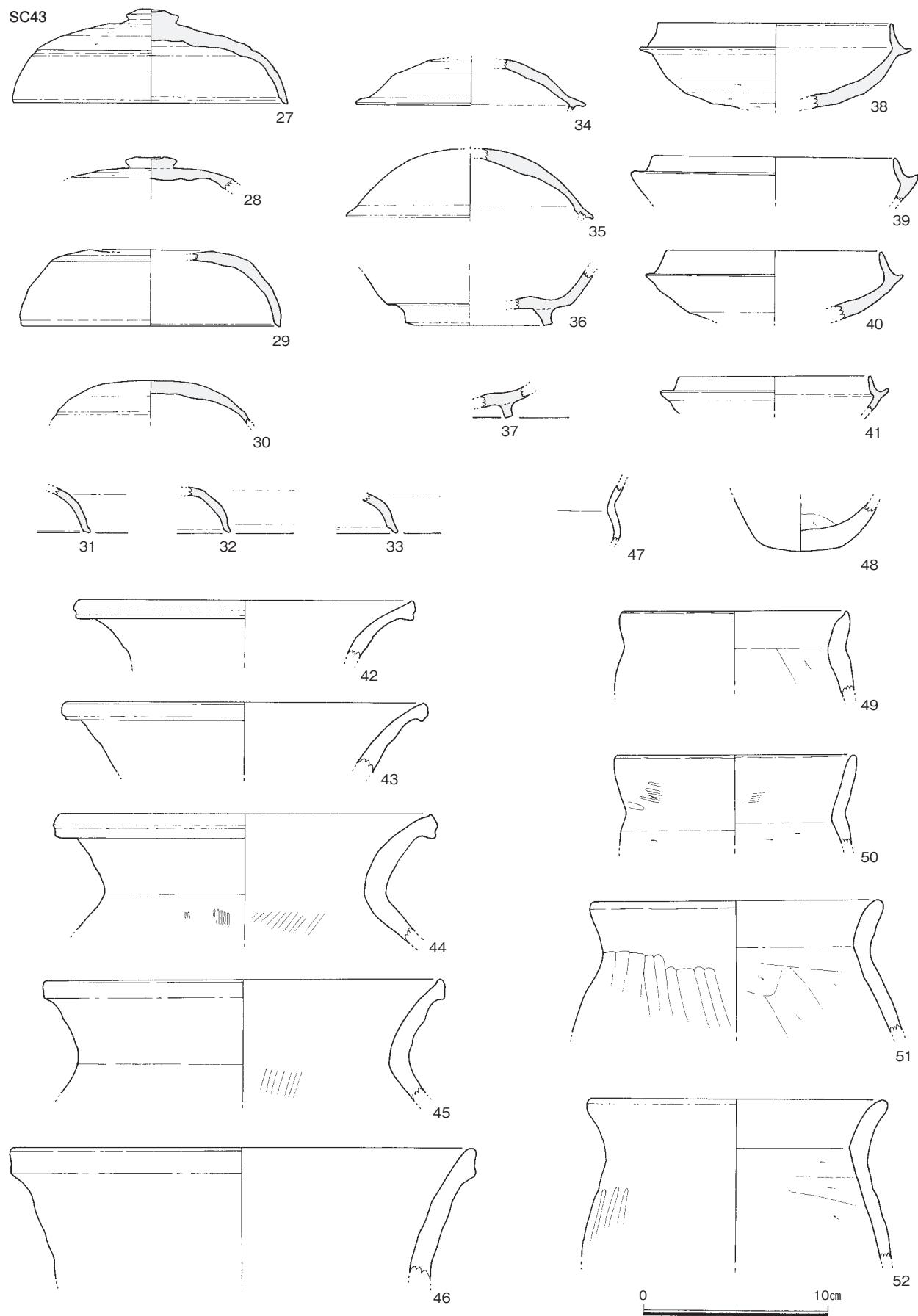


Fig.11 竪穴住居出土遺物2 (1/3)

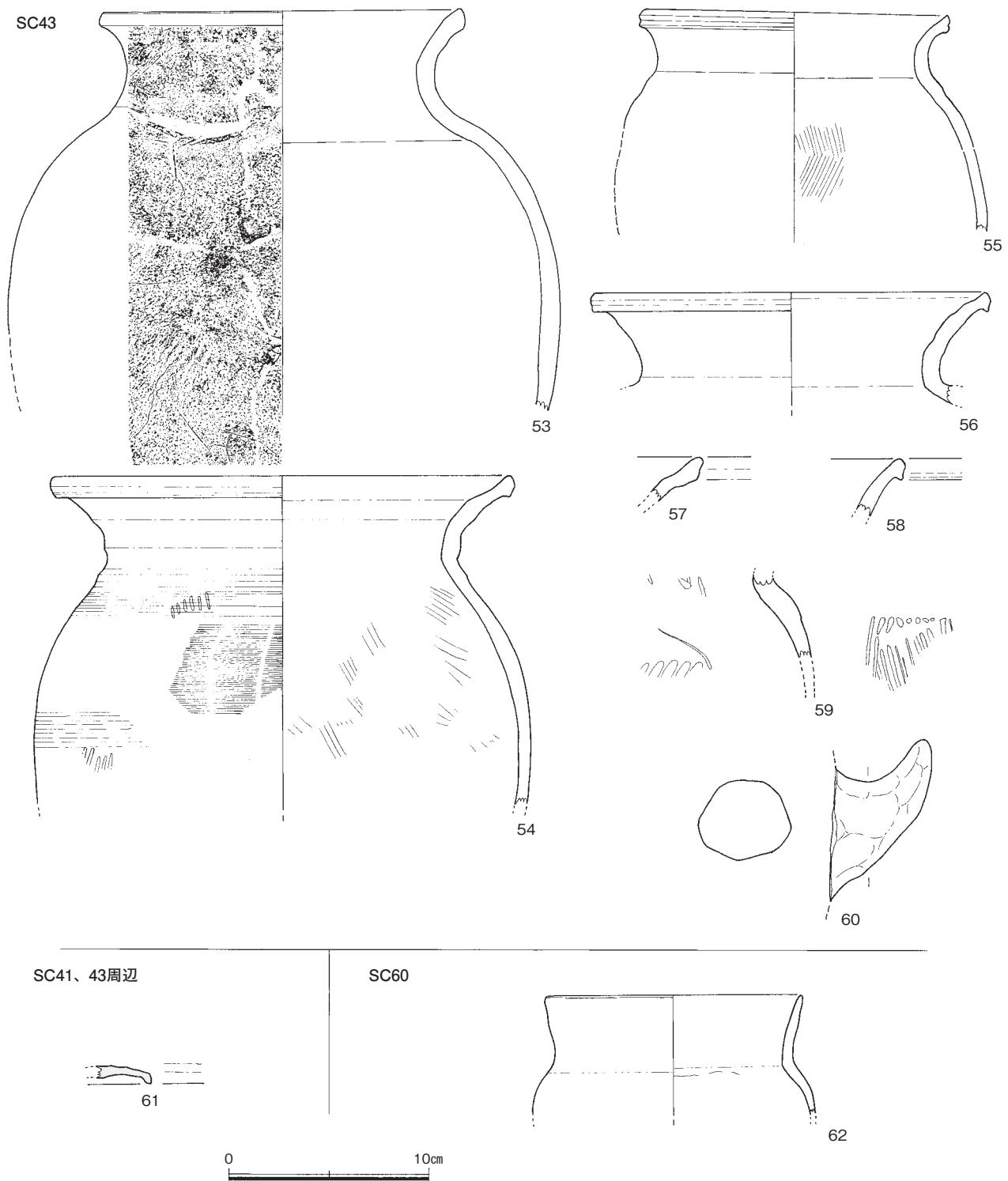


Fig.12 壇穴住居出土遺物3 (1/3)

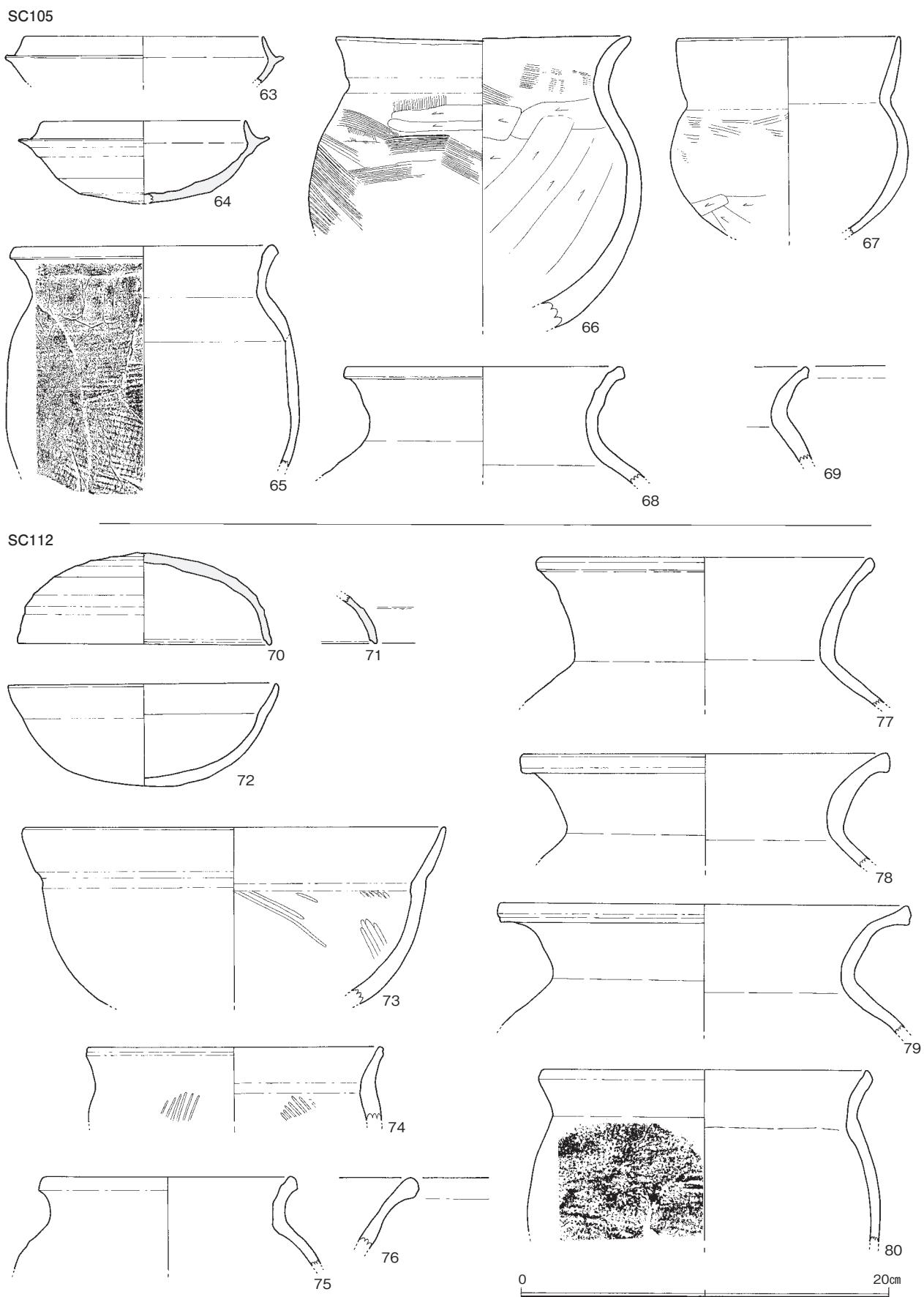


Fig.13 積穴住居出土遺物4 (1/3)

ある。黒色包含層中の検出で柱穴を見出すのが困難であった。北側にSB134a、bがほぼ並行して配置しており、二棟が同時存在したことも想定される。主軸はN-38°-Eをとる。建物規模は南北2.4m、東西2.2mであり、柱間は南北約1.2である。池側の柱穴には腐食が進んでいたが径15cmほどの杭材が残されていた。斜面に直交する東西軸の柱掘方の底面は約12°で傾斜しており、本来傾斜地に建てられたとみられる。

SB178 造成面SX111中段東側の標高32~33m付近にある二間一間以上の建物であり、柱間と掘方の深さからみて本来二間二間の総柱建物と推定される。主軸はN-01°-Eをとる。建物規模は南北3.2m、東西2.4mと推定され、柱間は南北1.6m、東西1.2mである。斜面に直交する東西軸の柱掘方の底面は約22°で傾斜しており、本来傾斜地に建てられたとみられる。SB146と重複するが前後関係は不明である。

SB179 造成面SX111中段の標高33m付近にある三間一間以上の建物である。整地土の流失が著しく、柱穴下部が僅かに残る。主軸はN-41°-Eをとる。建物規模は桁行5.1mであり、桁間は1.7mである。

SB302 3区北東端に検出したテラス状の造成面に建てられた三間一間以上の建物である。標高は約24mであり、テラスのほぼ中央に位置する。西側は谷部の侵食で失われている。主軸はN-35°-Eをとる。建物規模は桁行6.2mであり、桁間2.1~2.2m、梁間2.1mである。

SB357 3区北東端に検出したテラス状の造成面に建てられた二間一間以上庇付の建物である。標高は約24mであり、テラスの北側に寄っている。3区北東端に検出したテラス状の造成面に建てられた三間一間以上の建物である。標高は約24mであり、テラスのほぼ中央に位置する。西側は谷部の侵食で失われている。主軸はN-35°-Eをとる。建物規模は桁行6.2mであり、桁間2.1~2.2m、梁間2.1mである。建物規模は桁行6.0m、梁行3.0m以上であり、桁間3.0m、梁間1.7mである。東側に1.3m幅で庇がつく。SB302と重複するが、切り合いがなく前後関係は不明である。



1. 建物群全景（南から）



2. 上段建物群（南から）



3. SB106・SD101（東から）



4. SB117・SX107（南から）

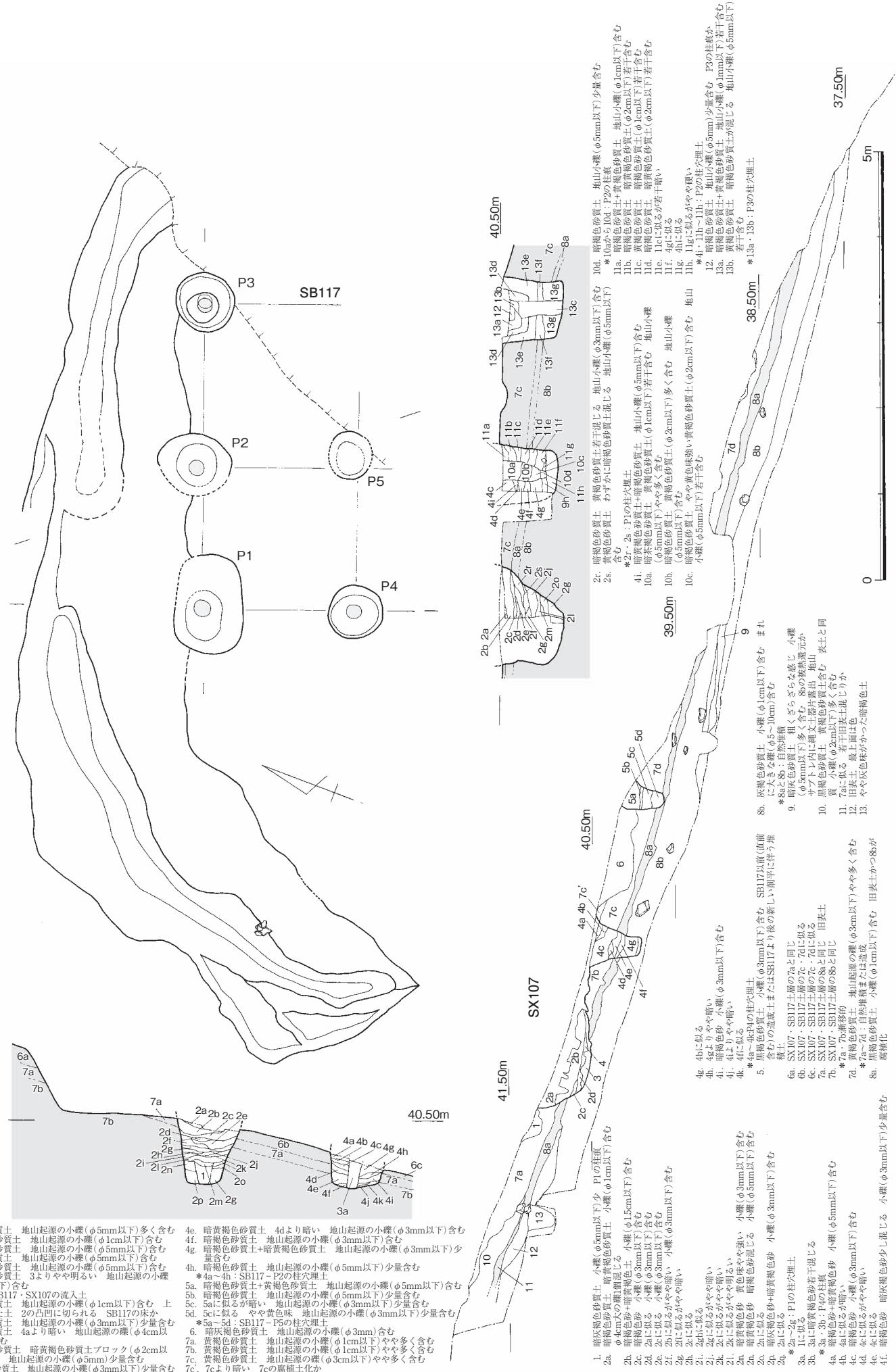


Fig.14 整地遺構SX107、掘立柱建物SB117（1/60）

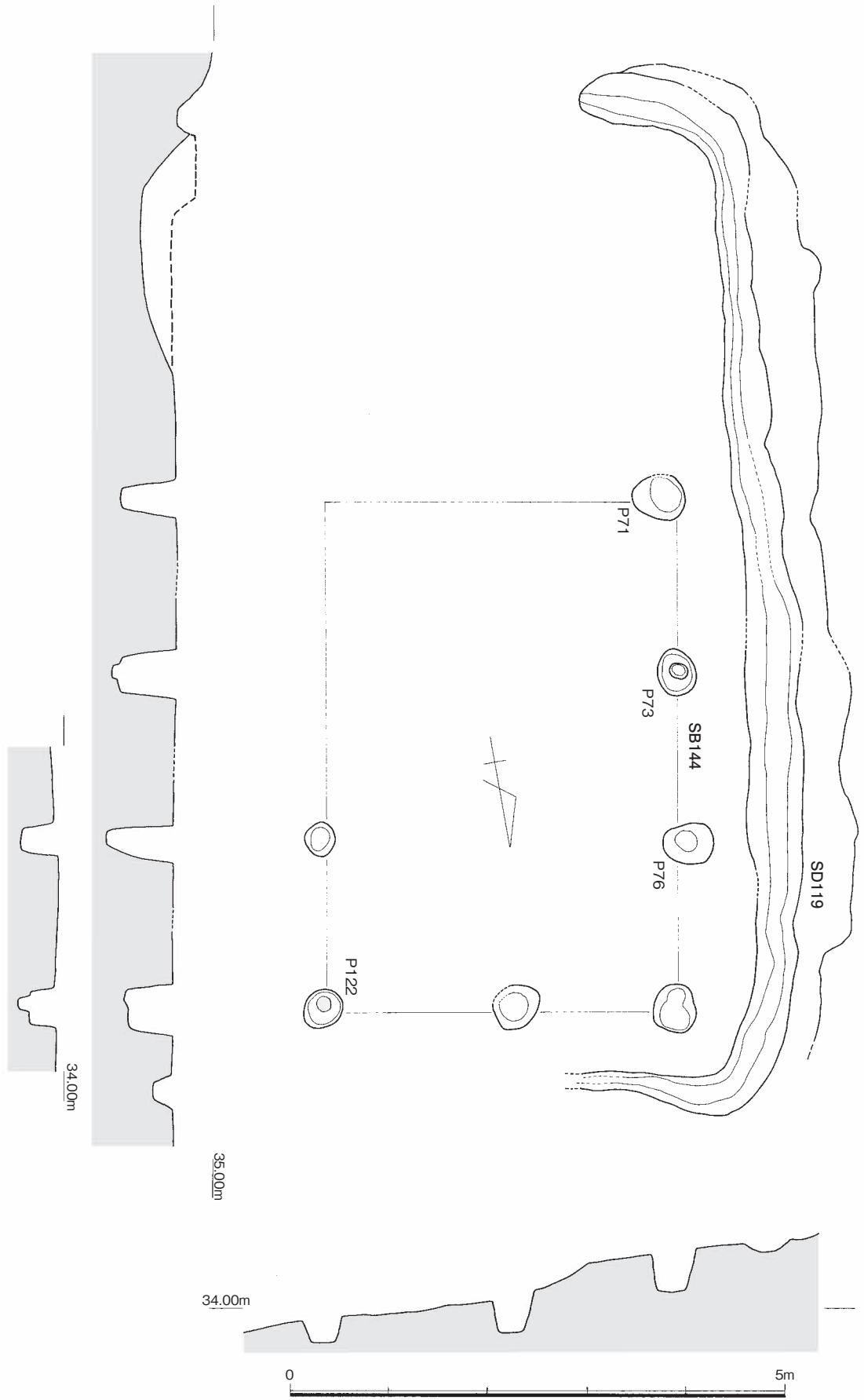


Fig.15 掘立柱建物2 (1/60)

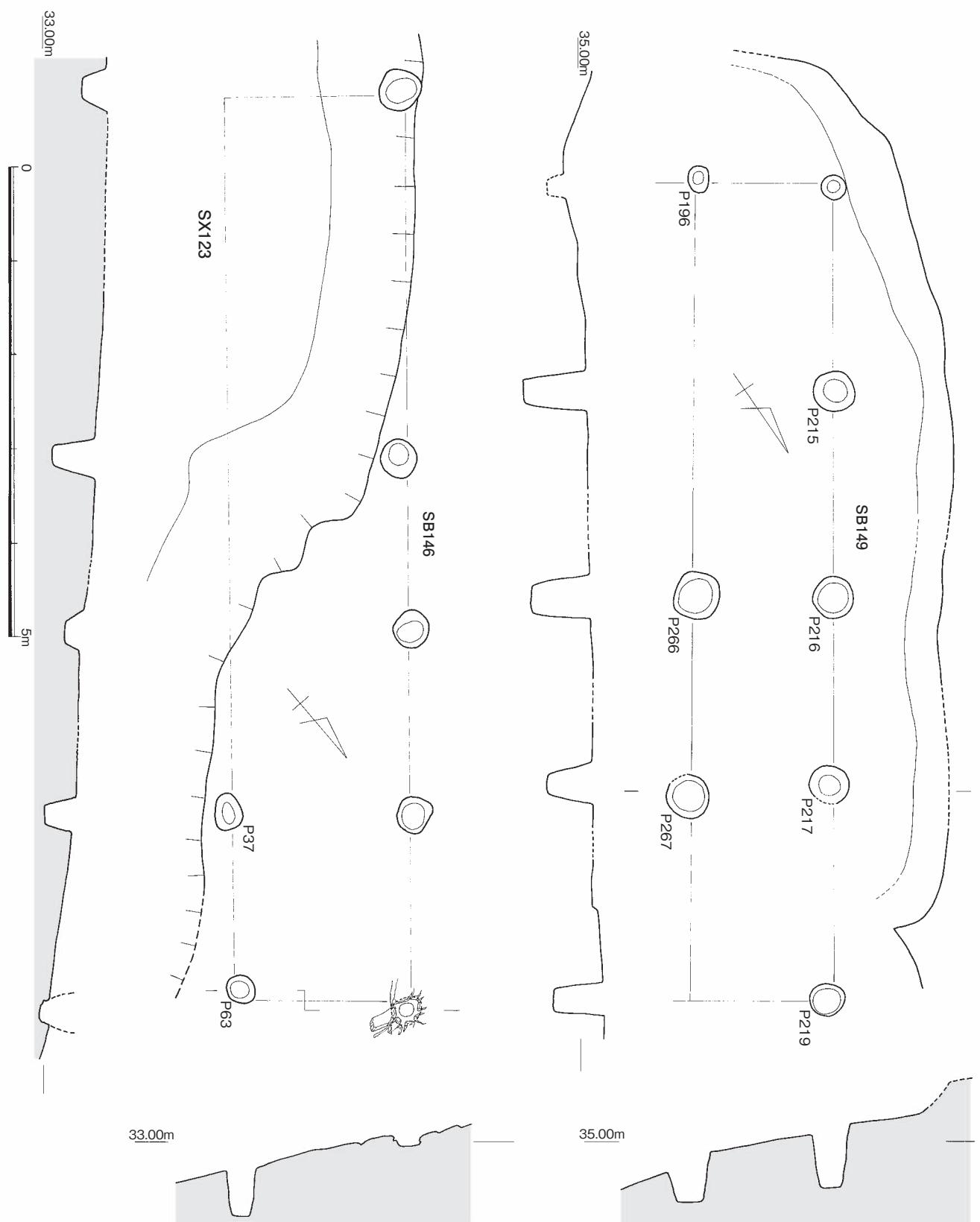


Fig.16 掘立柱建物3 (1/60)

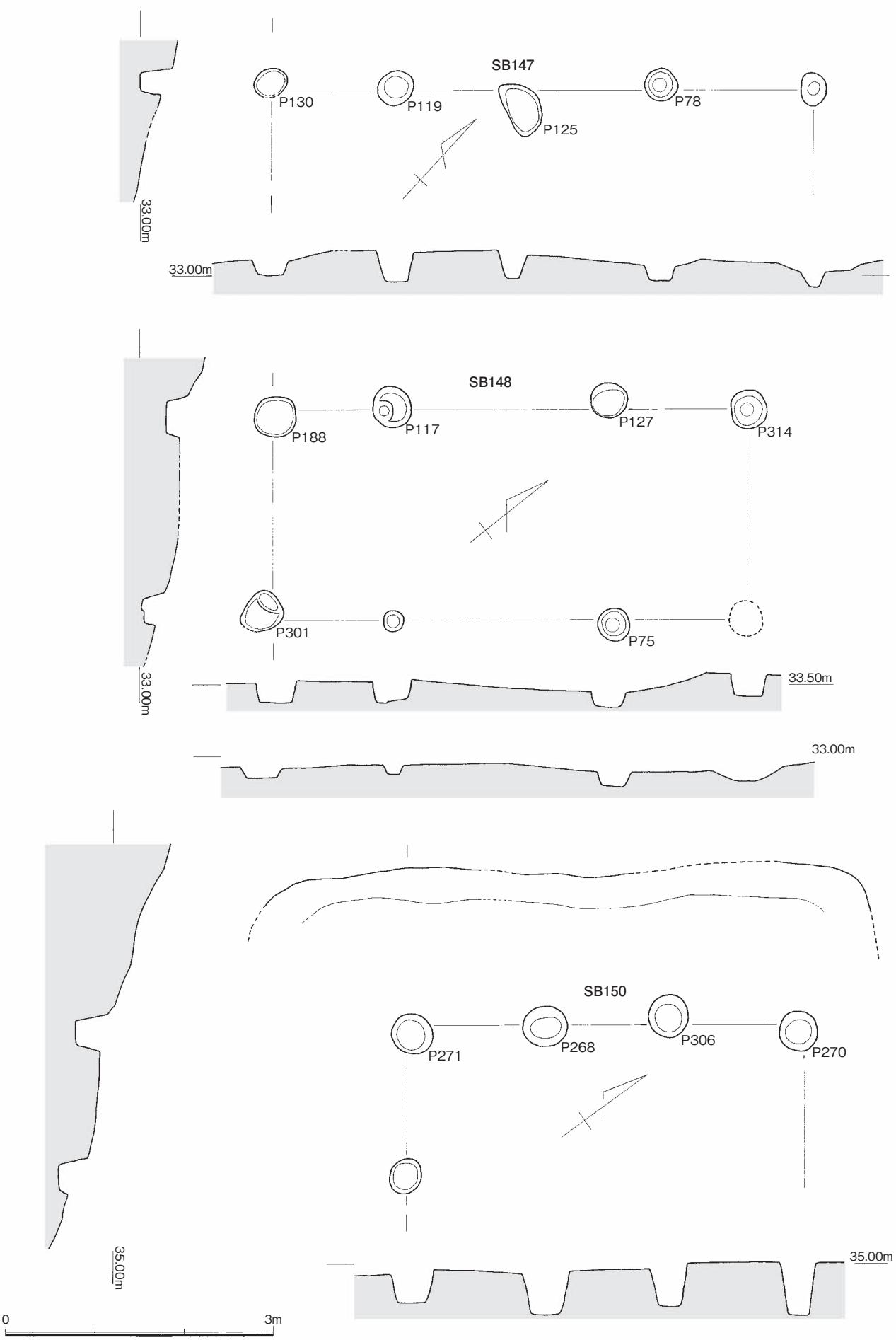


Fig.17 掘立柱建物4 (1/60)

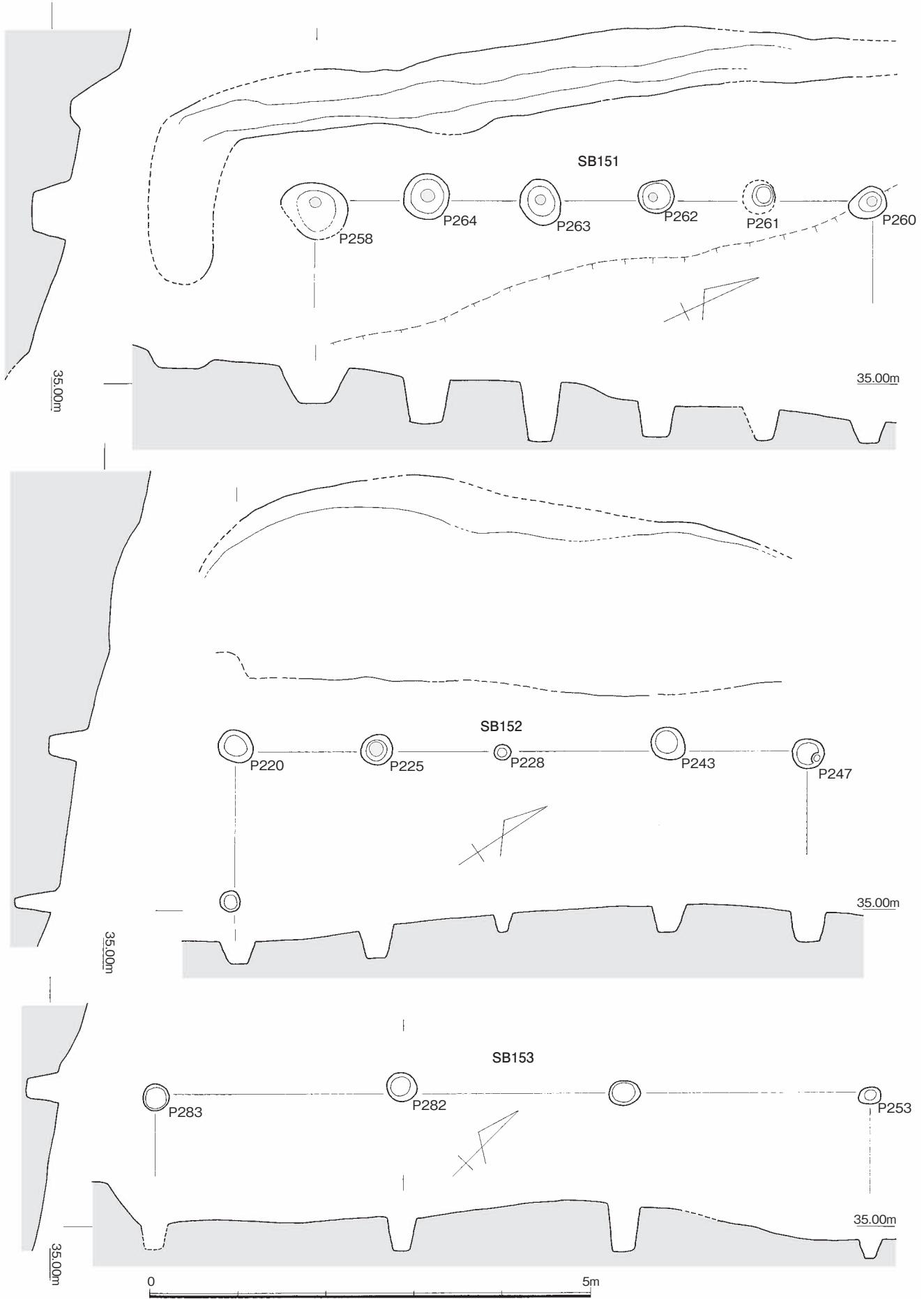


Fig.18 掘立柱建物5 (1/60)

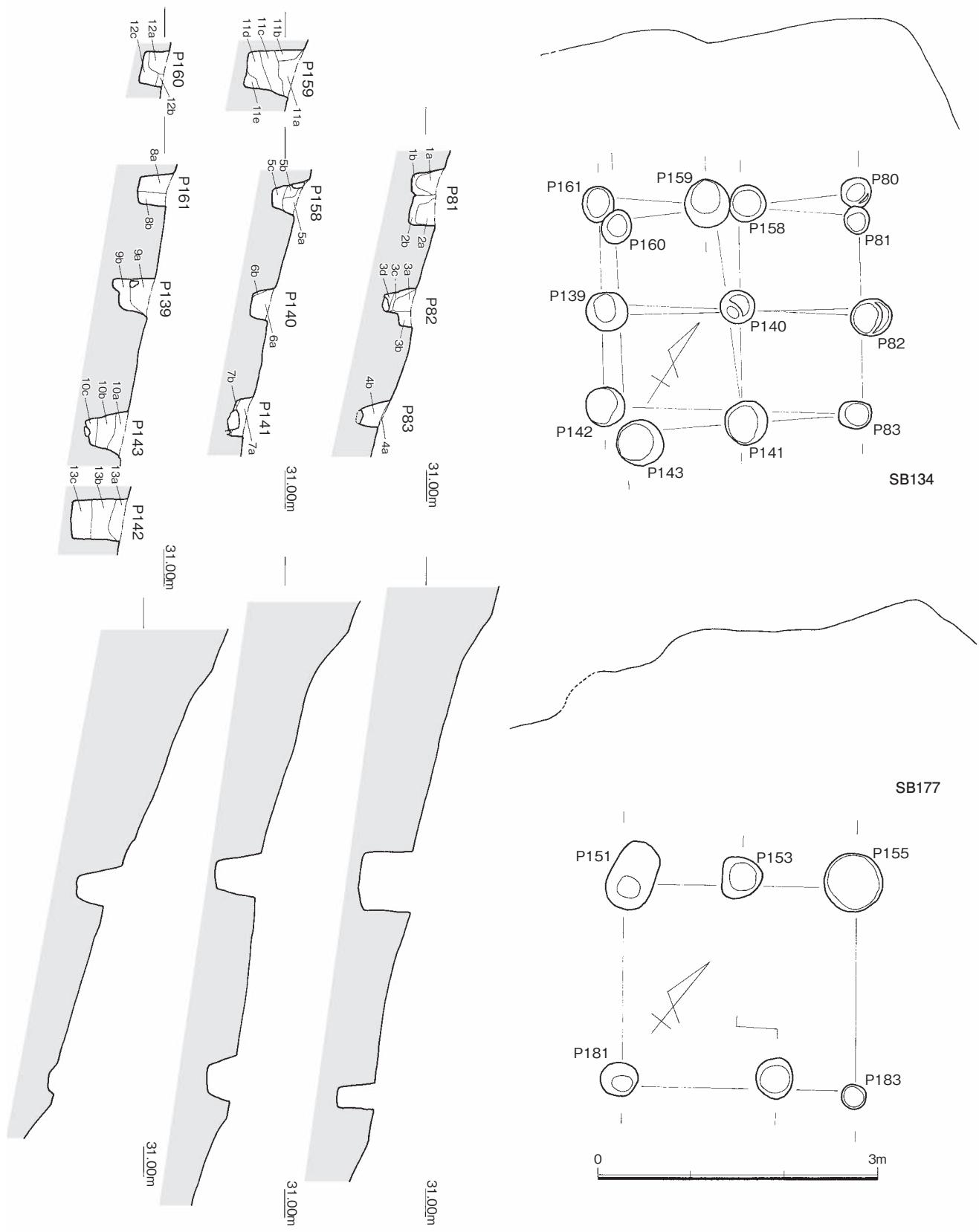


Fig.19 掘立柱建物6 (1/60)



1. SB135 (北から)



2. SB145 (北から)



3. SB154 (南から)

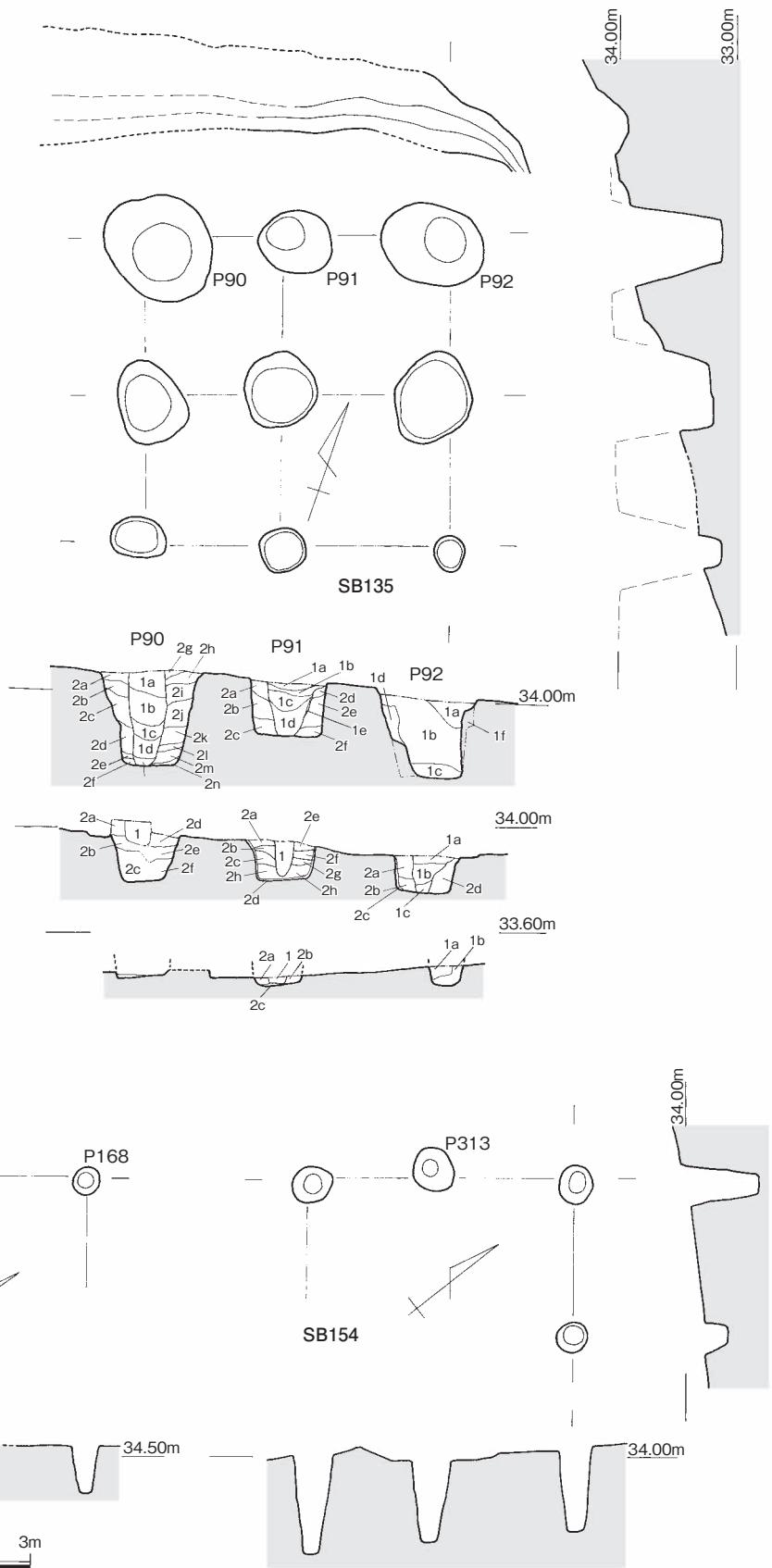


Fig.20 掘立柱建物7 (1/60)

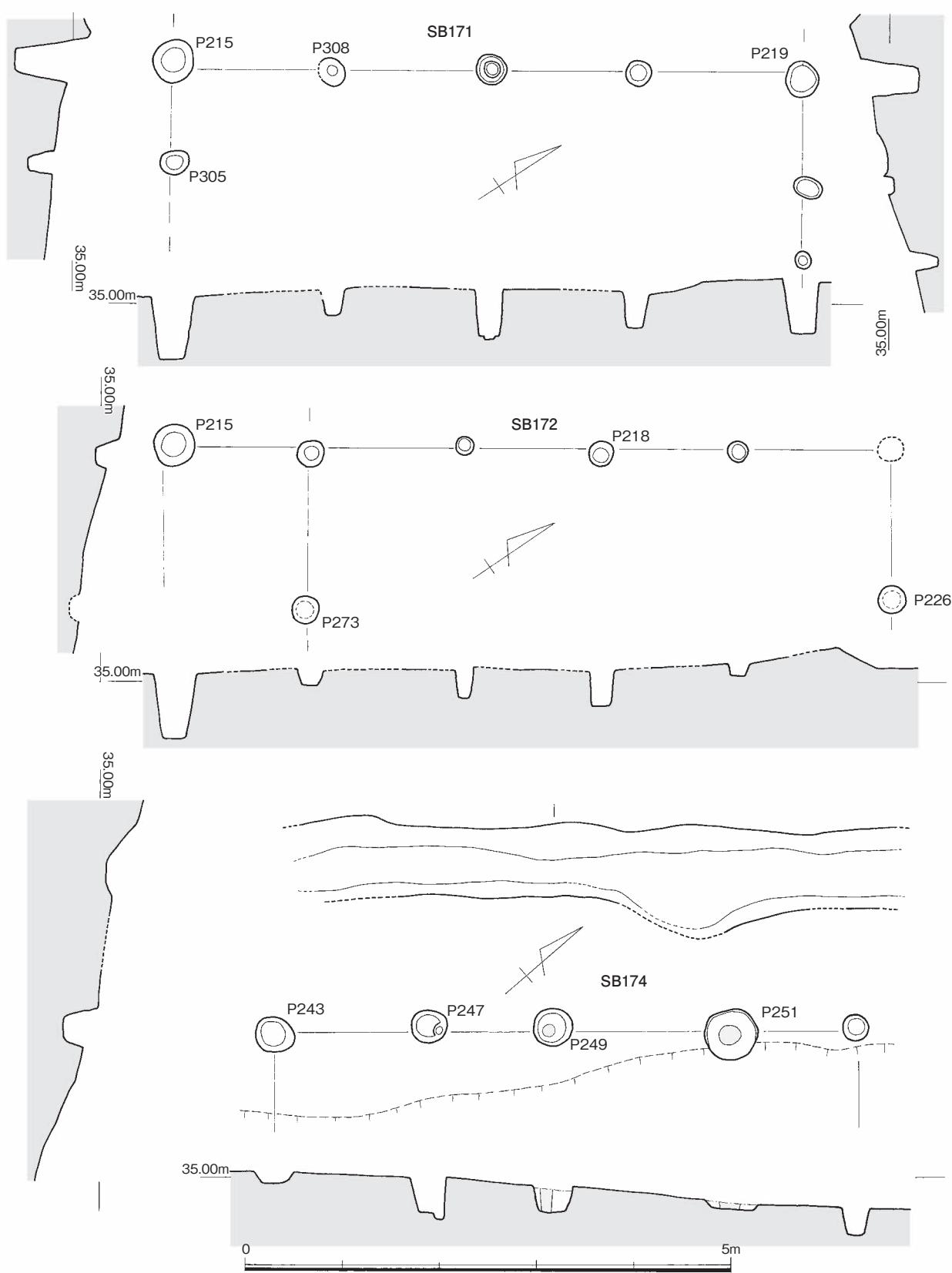


Fig.21 掘立柱建物8 (1/60)

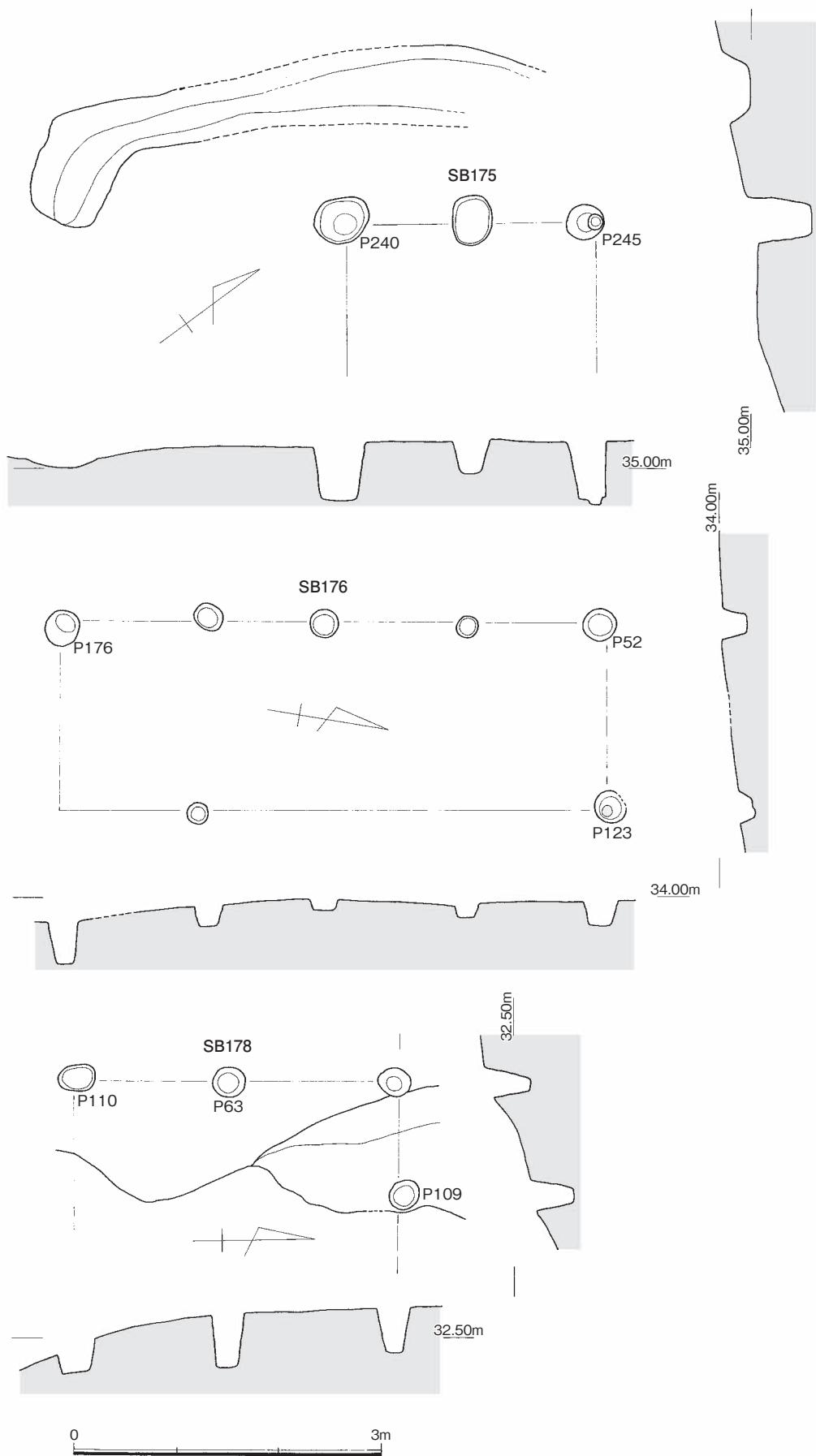


Fig.22 掘立柱建物9 (1/60)

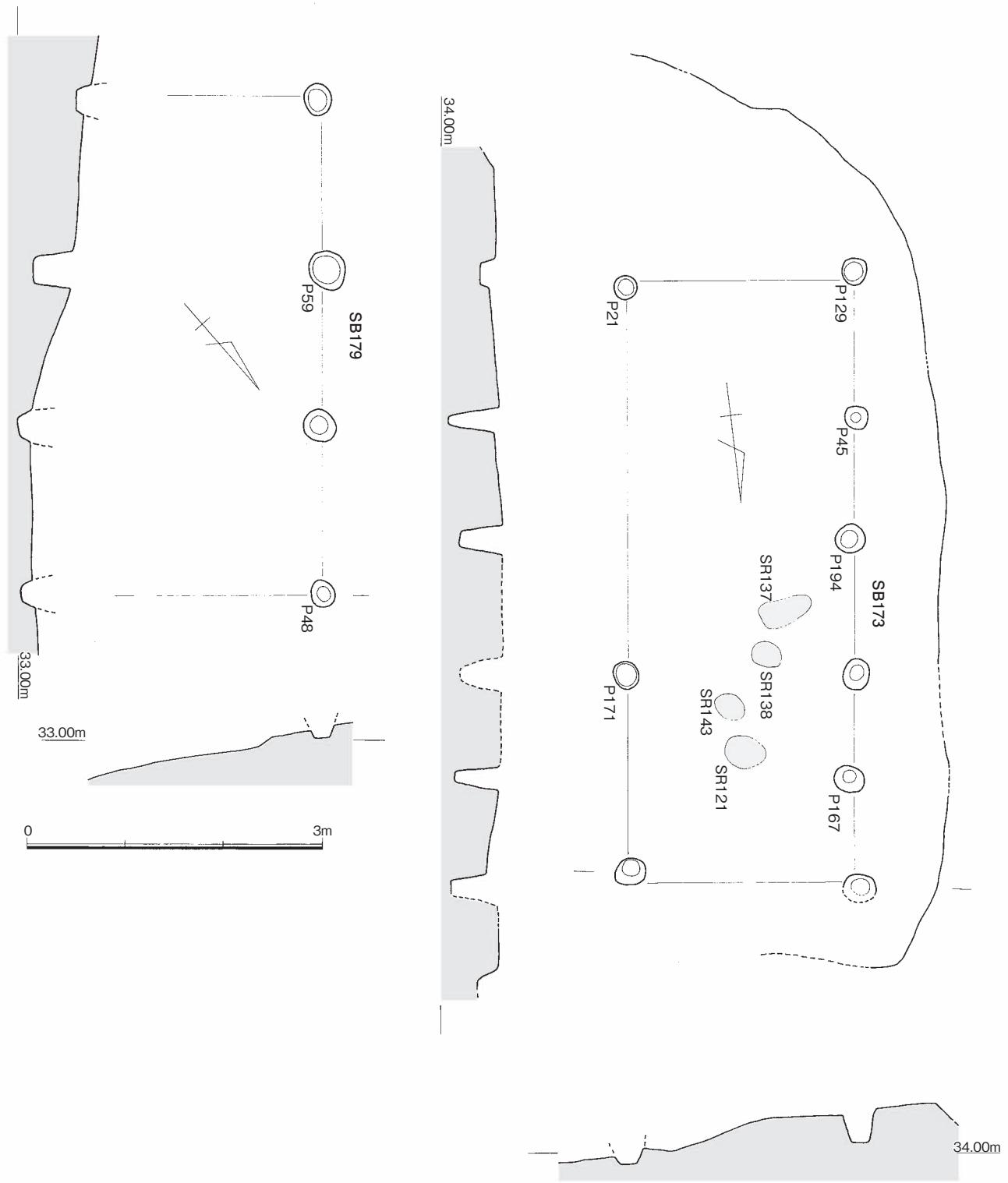


Fig.23 掘立柱建物10 (1/60)

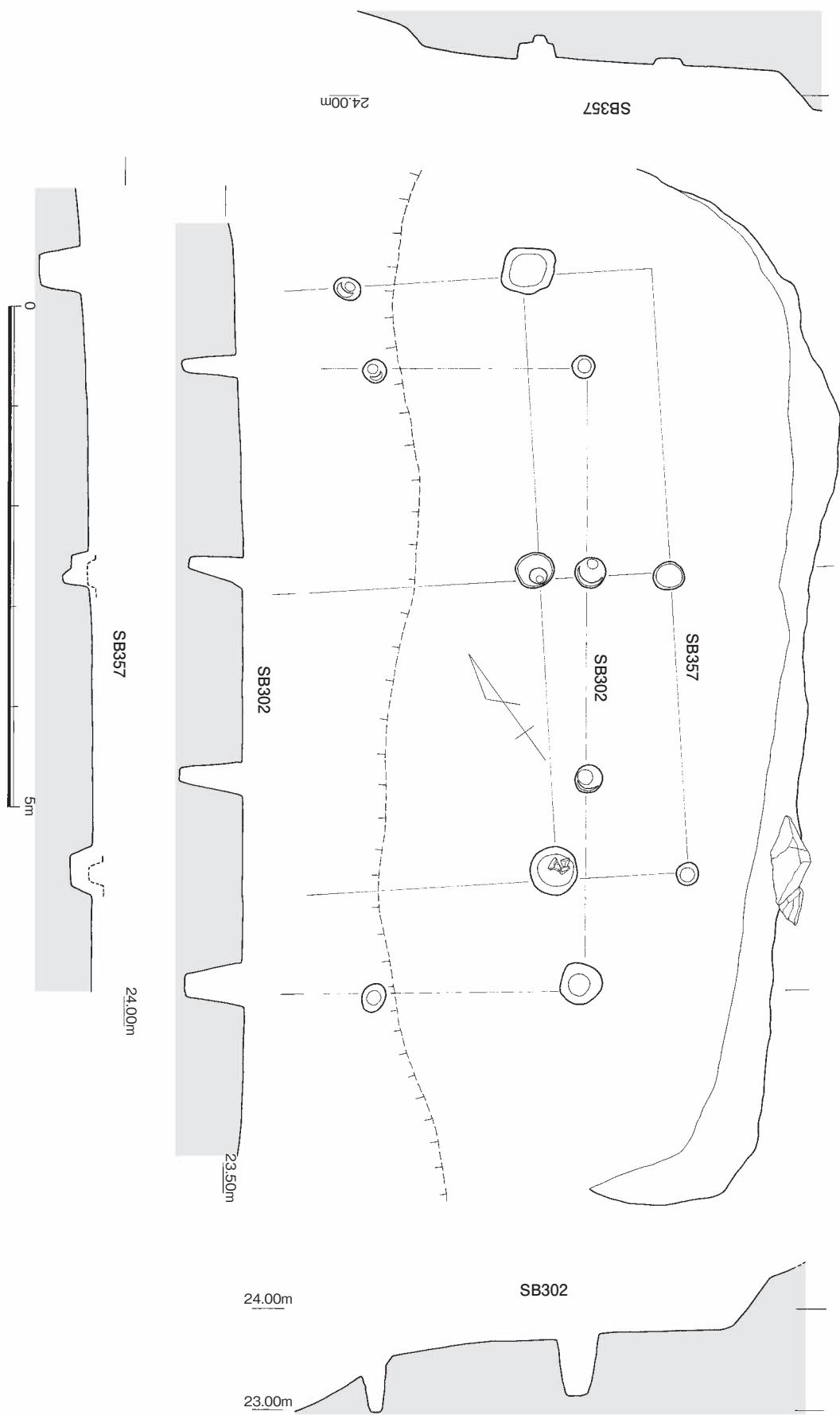
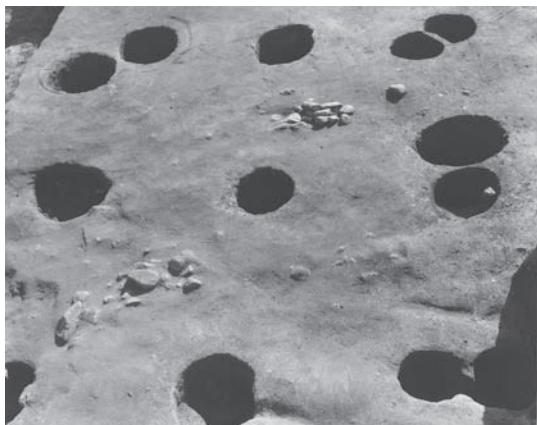


Fig.24 掘立柱建物11 (1/60)



1. SB134 (東から)



2. SB144 (北から)



3. SB146 (東から)



4. SB147 (北から)



5. SB149 (南から)



6. SB151 (南から)



7. SB152 (南から)



8. SB153 (北から)

3) 土坑

SK122 2区造成面SX111中段北側にある隅丸方形の土坑である。標高は33.8mであり、主軸はN-37°-Wをとる。規模は南北1.3m、東西1.4mであり、深さ0.2mである。桁間2.1～2.2m、梁間2.1mである。遺物は床面から須恵器、土師器など(81～89)が出土した。須恵器には壺類、壺、甕、土師器には碗、鉢形土器などがある。8世紀中～後葉と見られる。この土坑は堀立柱建物SB148や溝状遺構に切られる。

SK180 2区造成面SX111上段西側にある隅丸長方形の土坑である。標高は35.2mであり、主軸はN-65°-Wをとる。掘方は二段掘りとなり上段は長さ1.6m、幅1.6m、下段は長さ1.2m、幅0.8mである。深さ0.9mである。遺物の出土はない。

SK181 2区造成面SX111上段西側にあり、SK180と隣接して設けられた平面橢円形の土坑である。標高は35mであり、主軸はN-12°-Eをとる。長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.4mである。

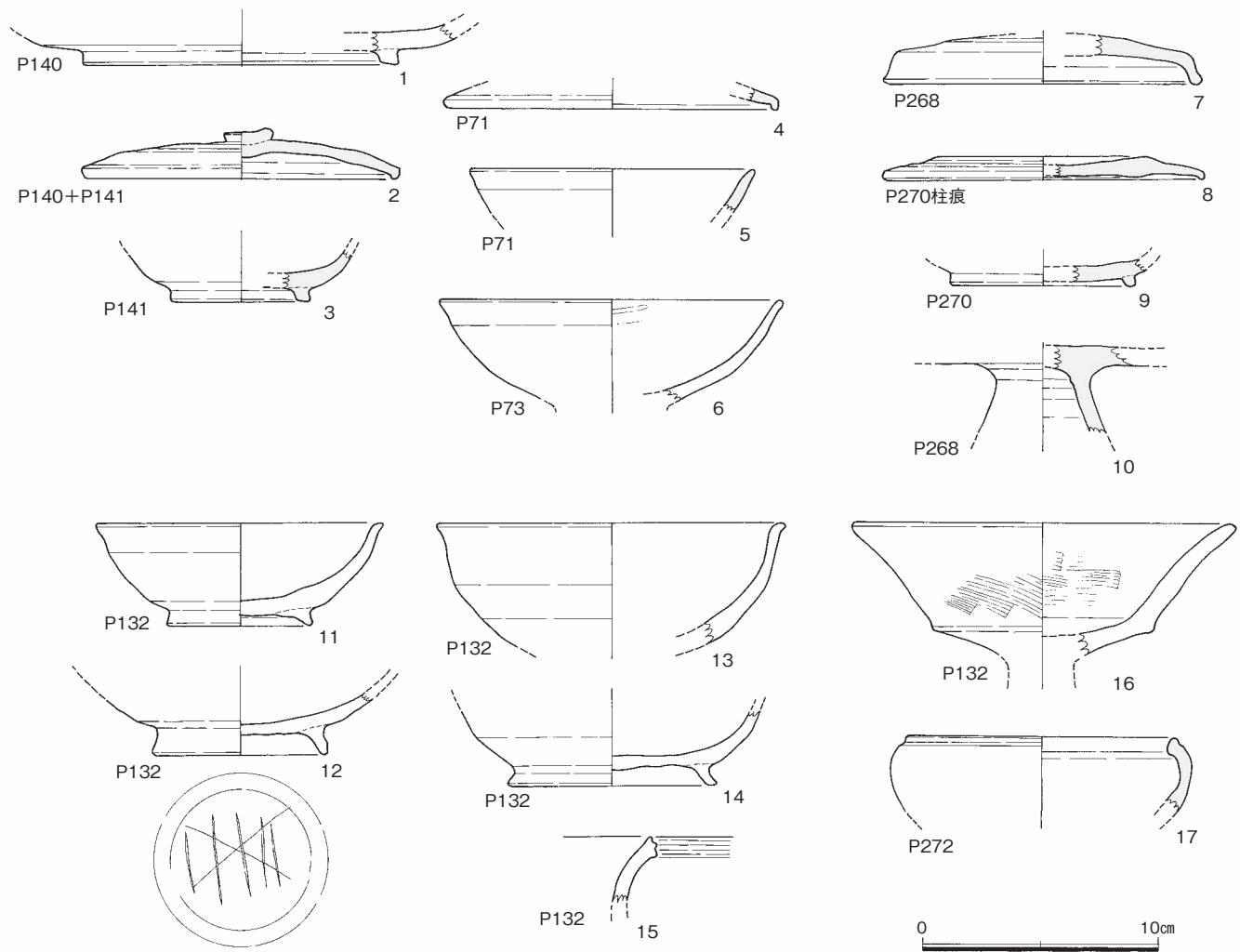


Fig.25 建物出土遺物（柱穴内出土遺物）(1/3)

4) 焼土坑

SR108 2区西斜面最高所に近い斜面に近接する3基の焼土坑（SR108～110）のうちの1つである。なおこの3基の焼土坑の南側には区画溝SD116が付設する。SR108は標高42.5mにある。平面は斜面下方の焚き口から上方へ拡がる隅丸三角形を呈する。主軸はN48°-Wで、長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.1mである。床面は地形に沿って約11°で傾斜する。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR109 2区西斜面最高所に近い標高42mにある。平面は斜面下方の焚き口から上方へ拡がる隅丸三角形を呈する。主軸はN46°-Wをとり、長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.3mである。床面は地形に沿って約8°で傾斜する。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。なお、一部の壁面に焼面が二重となっている。壁面の貼り替え、改修を通じて複数回の使用が推定される。

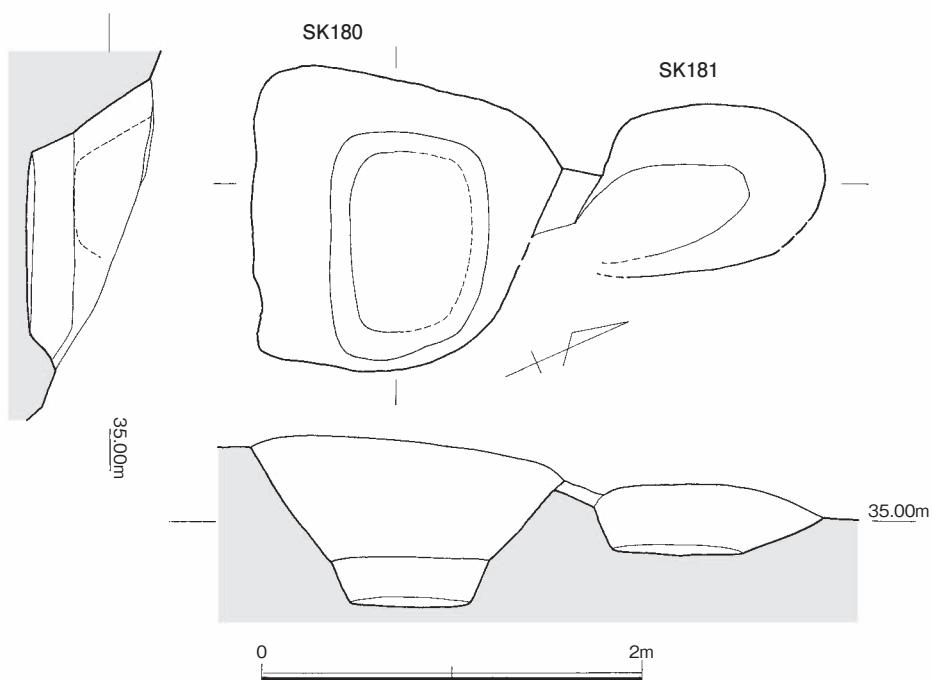
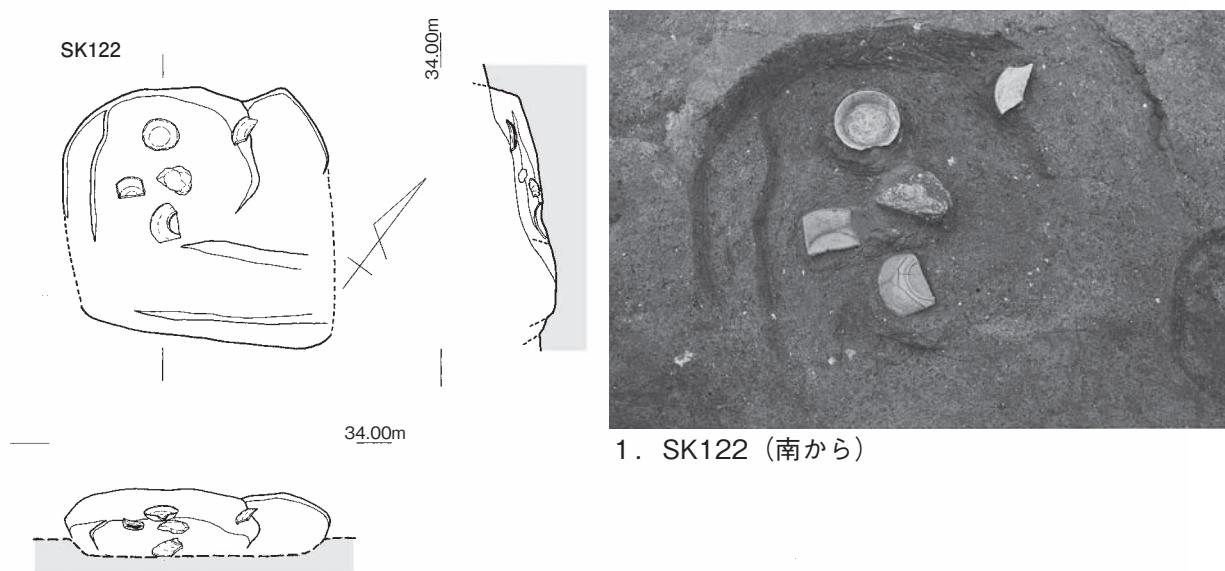


Fig.26 土坑 (1/40)

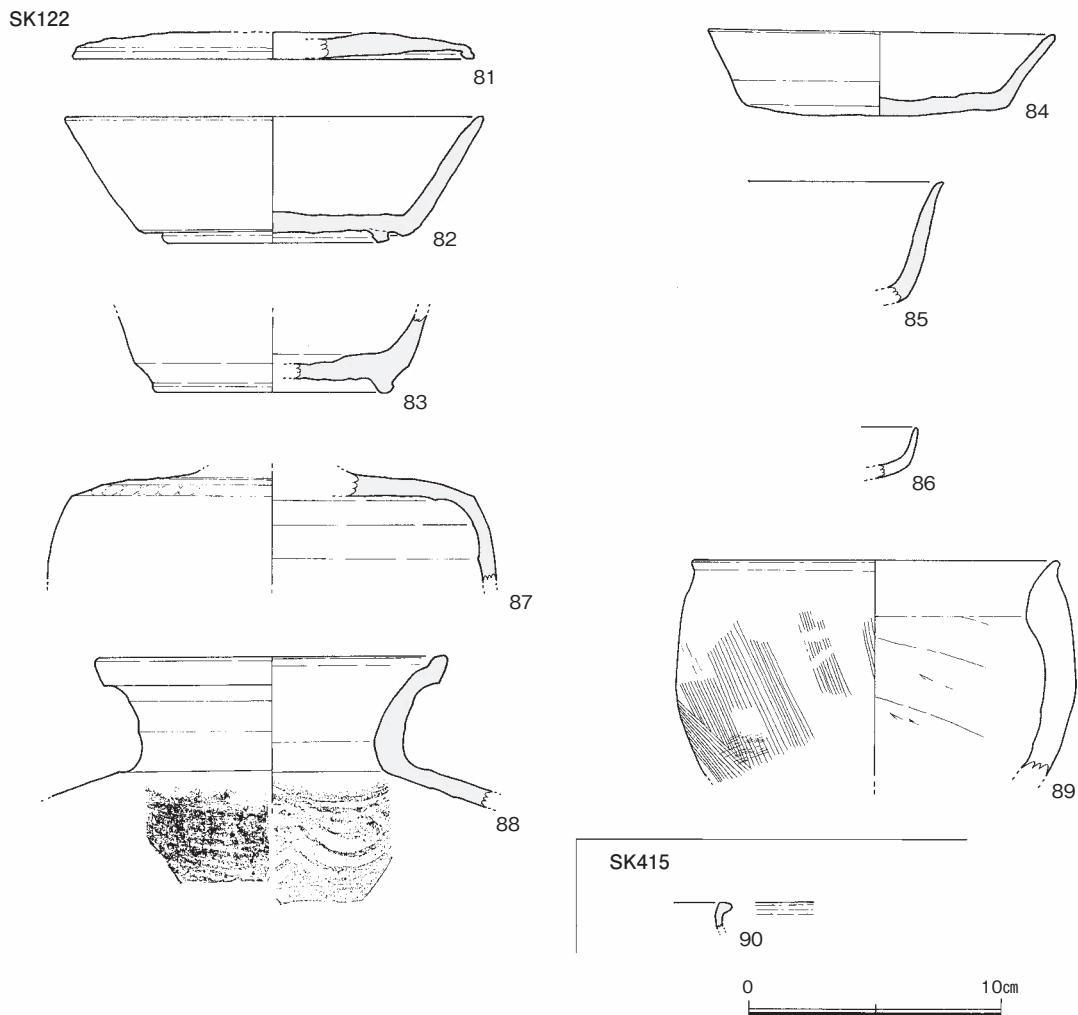


Fig.27 土坑出土遺物 (1/3)

SR110 2区西斜面最高所に近い標高42.5mにある。平面は斜面下方の焚き口から上方へ拡がる隅丸三角形を呈する。主軸はN-58° -Wをとり、長さ1.7m、幅1.1m、深さ0.2mである。床面は地形に沿って約10°で傾斜する。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR119 2区東側で池状遺構SX123の南側斜面で標高35m付近にある。平面は斜面下方の焚き口から上方へ拡がる隅丸台形を呈する。主軸はN-21° -Eで、長さ1.5m、幅1.2m、深さ0.3mであり、床面は地形に沿って約17°で傾斜する。土坑壁面は一部赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR120 2区東斜面でSR119の東2mに位置する。標高は35.7m付近にある。平面は斜面下方の焚き口から上方へ拡がる隅丸三角形を呈し、焚き口の掘方がある。主軸はN-02° -Wをとり、長さ1.8m、幅0.9m、深さ0.3mである。床面は地形に沿って約10°で傾斜する。土坑壁面は一部赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR131 2区南側で池状遺構SX123の西側斜面、標高35.5m付近にある。斜面下方の焚き口部分は削平により失われている。本来の平面は隅丸三角形を呈すると想定される。主軸はN-56° -Wをとり、現状で長さ1.3m、幅1.2m、深さ0.6mである。床面は平坦に近いが約5°で傾斜する。土坑壁面は一部赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR200 3区西側で斜面上部、標高26.6m付近にある。平面は長楕円形を呈し、主軸はN-65° -Wをと

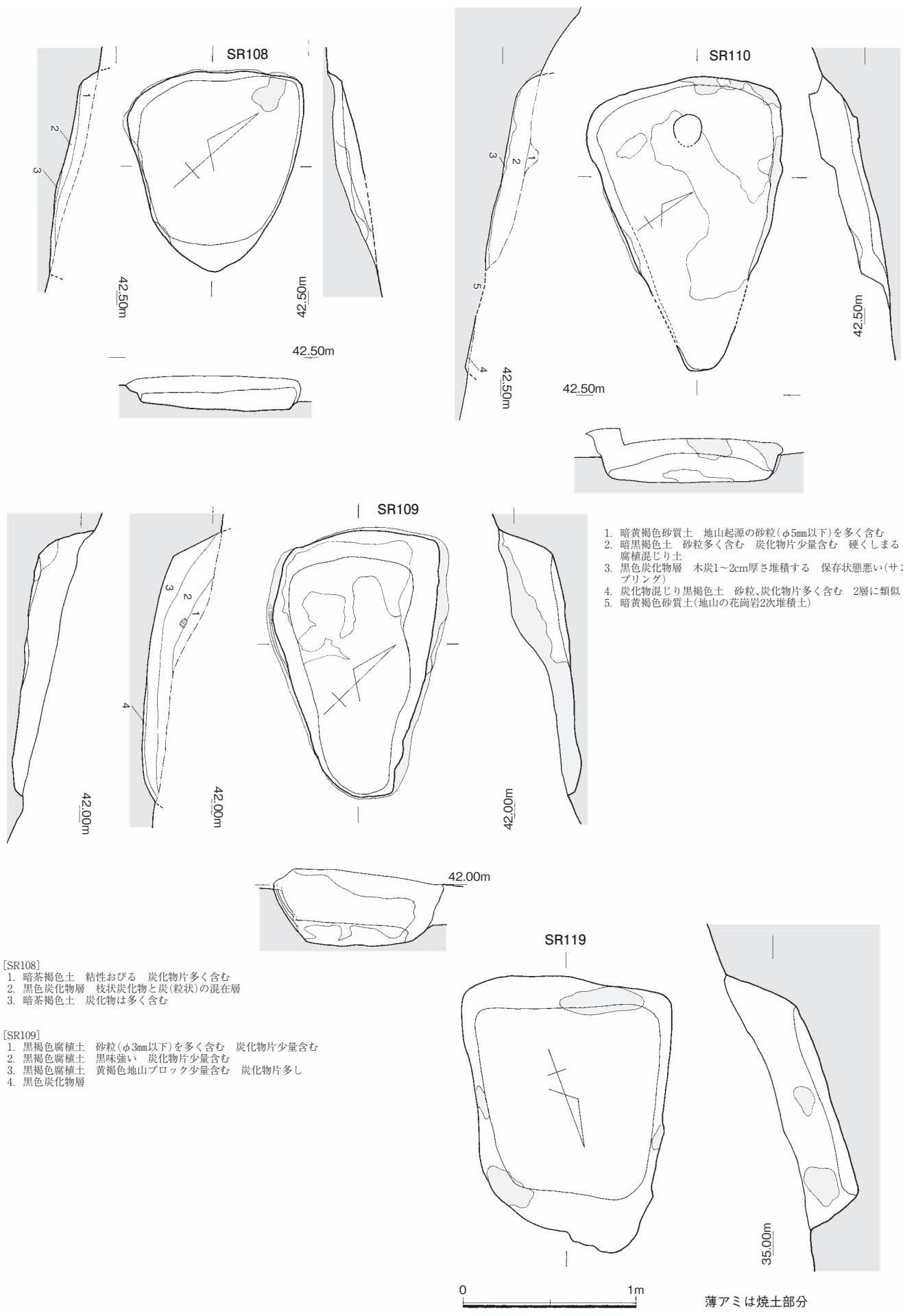


Fig.28 焼土坑1 (1/30)

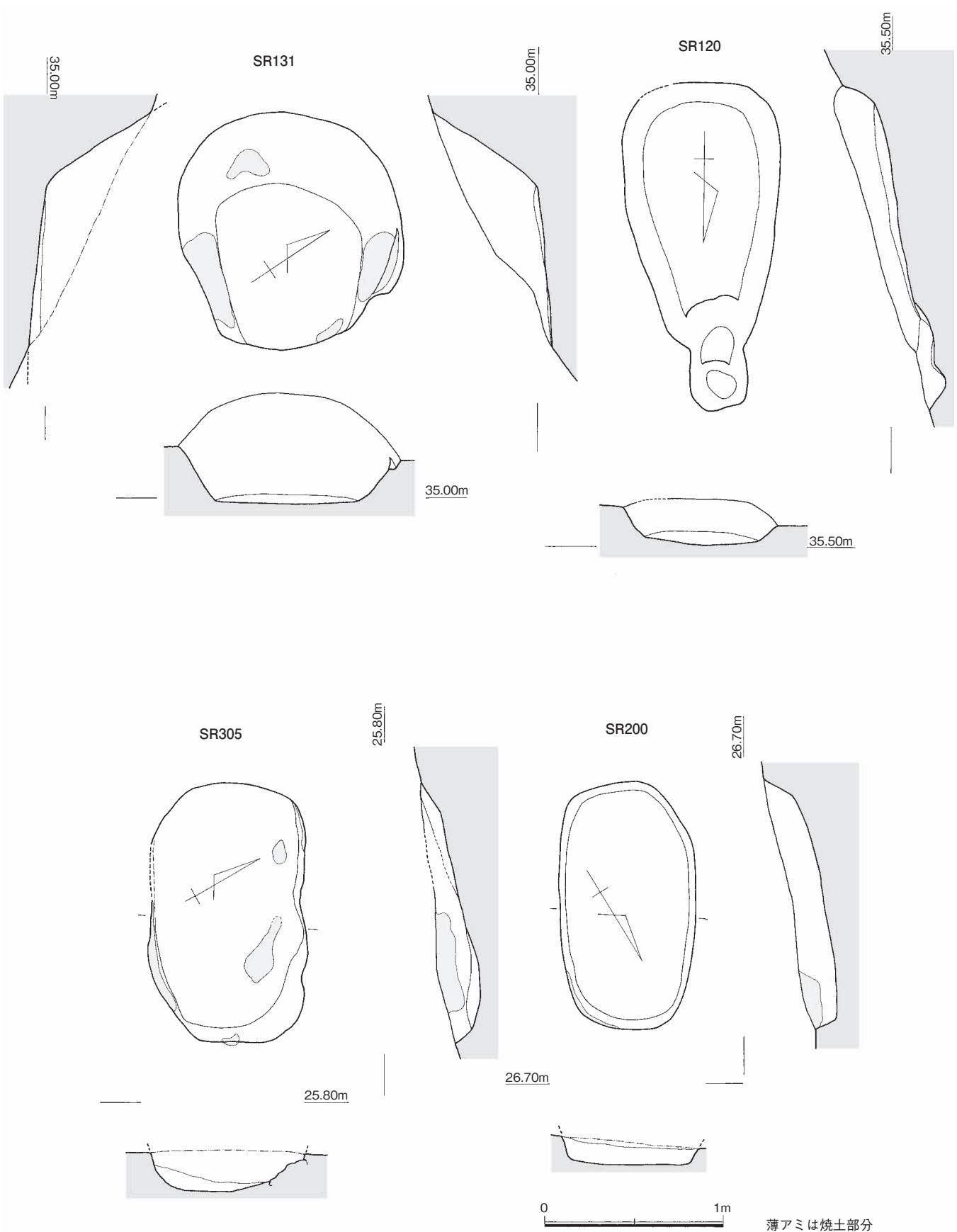


Fig.29 焼土坑2 (1/30)

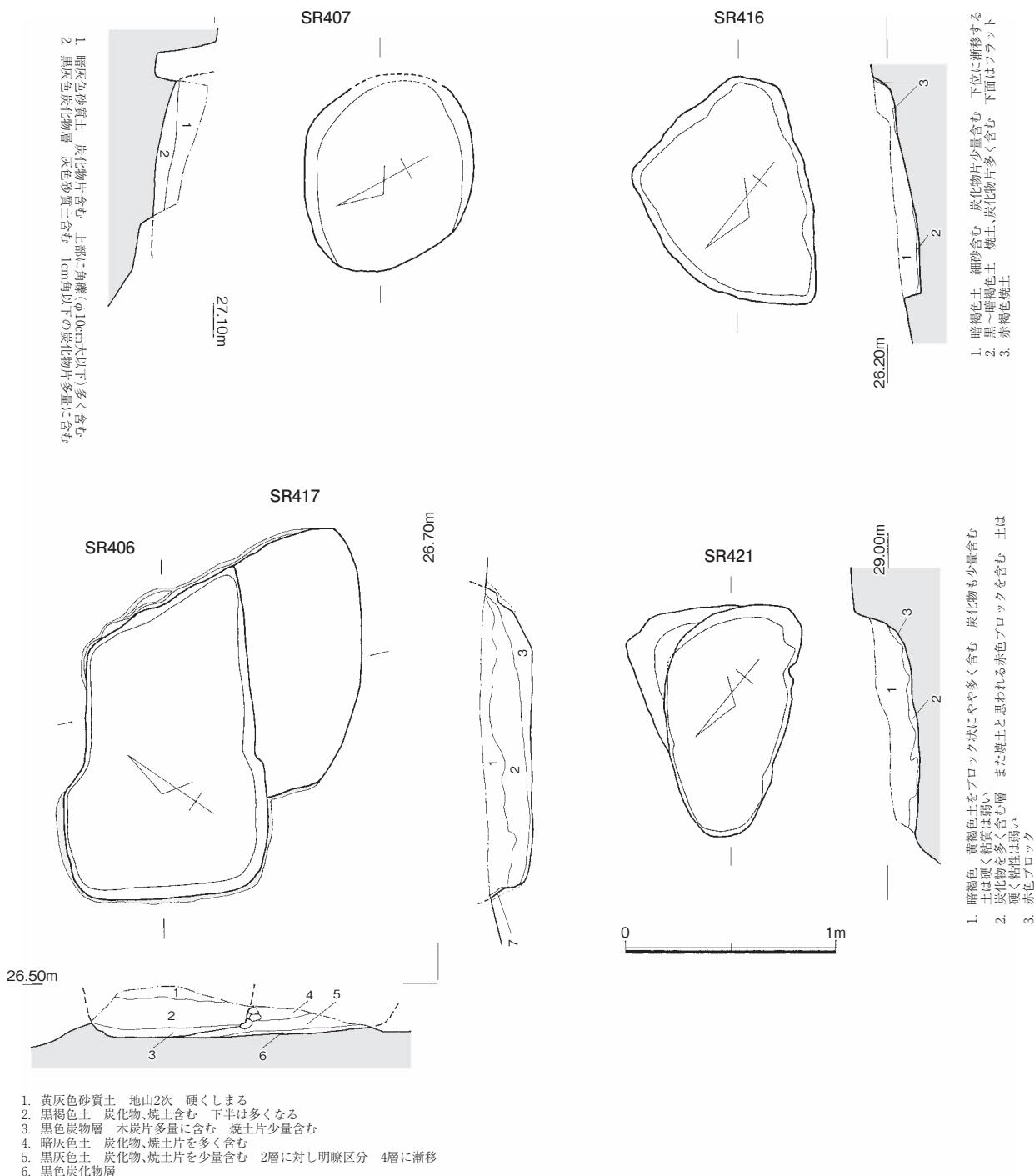


Fig.30 焼土坑3 (1/30)

り、現状で長さ1.4m、幅0.8m、深さ0.3mである。床面は地形に沿って約15°で傾斜する。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR305 3区西斜面中位で標高25.5m付近にあり、道路状遺構を切っている。平面は長楕円形を呈し、主軸はN-60°-Wをとり、現状で長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.2mである。床面は地形に沿って約12°で傾斜する。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR406・417 4区東斜面にあり、製鉄炉SR413の南側に隣接する。SR413の関連遺構と見られる柱穴や鉄滓層を切ることからより後出すると見られる。当初は単一の焼土坑と考えていたが、調査過程

で2つの焼土坑の切り合いと判明した。SR417をSR406が切っている。何れも標高25.5mで検出した。SR406は不整な隅丸長方形であり、北東側短辺はSR417の壁面に規定され斜めとなり、南西短辺側は一段幅広くなっている。主軸はN-53°-Eにとり、長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.2mである。北東側壁面はSR417埋土を切ることになるが、この壁面は強度を確保するためか鉄滓を積み上げて形成している。床面はほぼ平坦に近い。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。SR417は本来の厳密な形状は明確でないが、平面は焚き口を東側におく隅丸三角形と推定され、主軸はN-83°-Eにとり、推定で長さ1.3m、幅1.0m、深さ0.1mである。床面はほぼ平坦に近い。土坑壁面は赤変層が2面あり、埋土下部に炭化物が多く分布する。

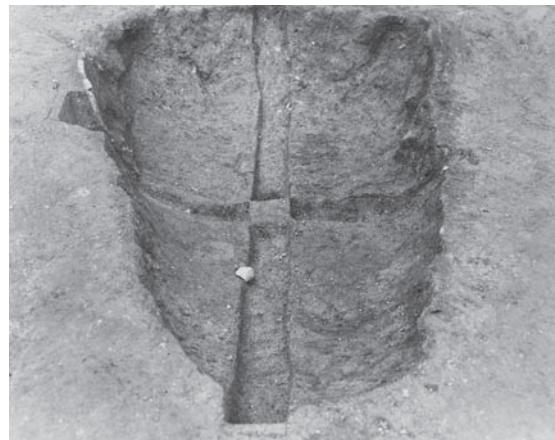
SR407 4区東斜面の標高27m付近にあり、両端を切られる。平面は橢円形を呈し、主軸はN-60°-Wをとり、現状で長さ0.9m、幅0.8m、深さ0.2mである。床面は地形より緩やかで約9°の傾斜である。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR416 4区東斜面の標高27m付近にあり、製鉄炉SR413の東側に隣接する。SR413の関連遺構と見られる柱穴や鉄滓層を切ることからより後出すると見られる。平面は隅丸三角形を呈し、主軸はN-72°-Wをとり、長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.1mである。床面は地形より緩やかで約10°の傾斜である。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

SR421 4区東斜面の標高29.2m付近にある。平面は隅丸三角形を呈し、主軸はN-40°-Wをとり、長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.2mである。内部で切り合いがあり、再利用時に規模を縮小している。床面はほぼ平坦であり、焚き口より約3°の傾斜がある。土坑壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。



1. SR108～110、SD116（南から）



2. SR109（東から）



3. SR131（北から）



4. SR406（南から）

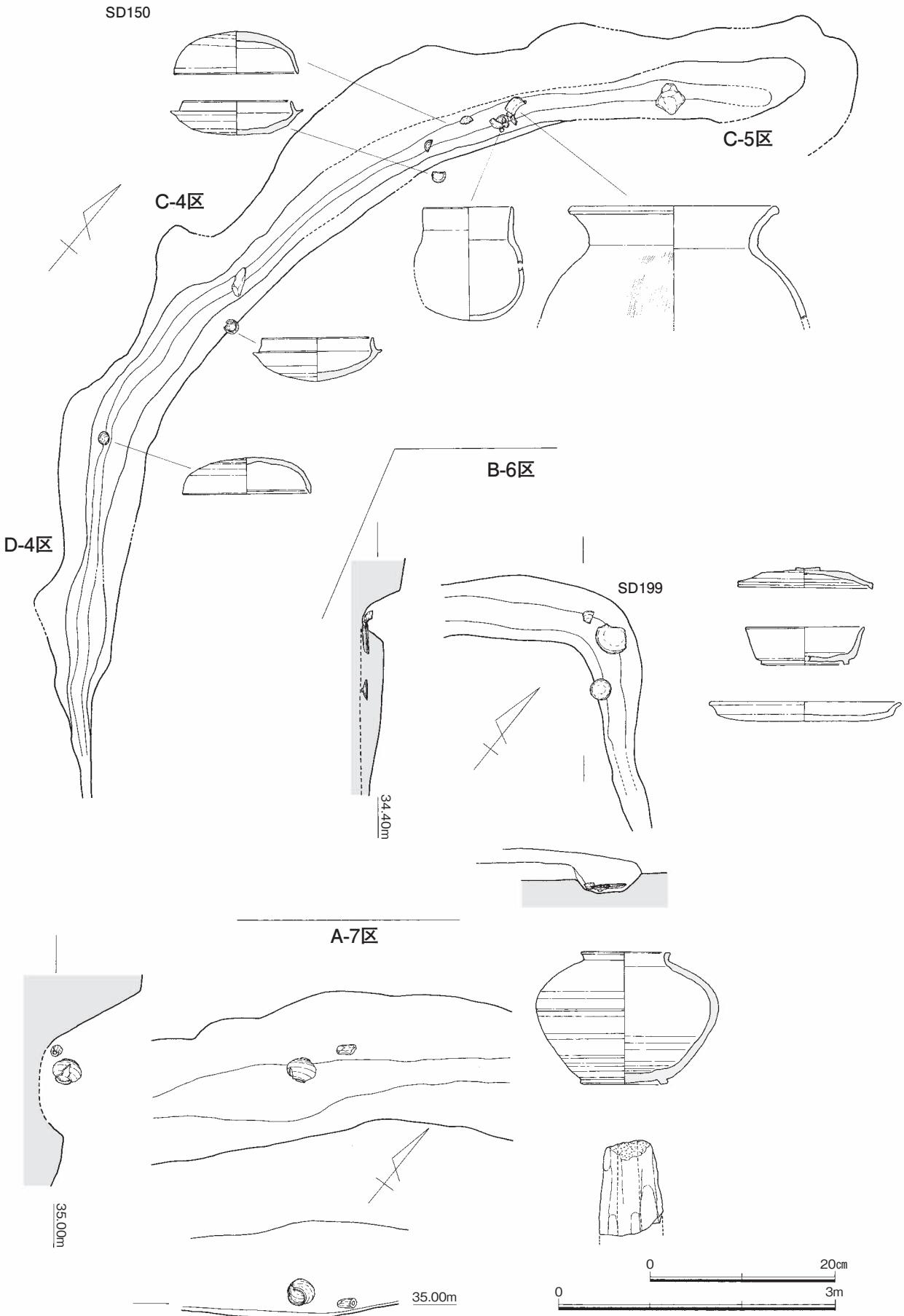


Fig.31 溝内遺物出土状況 (1/6・1/60)

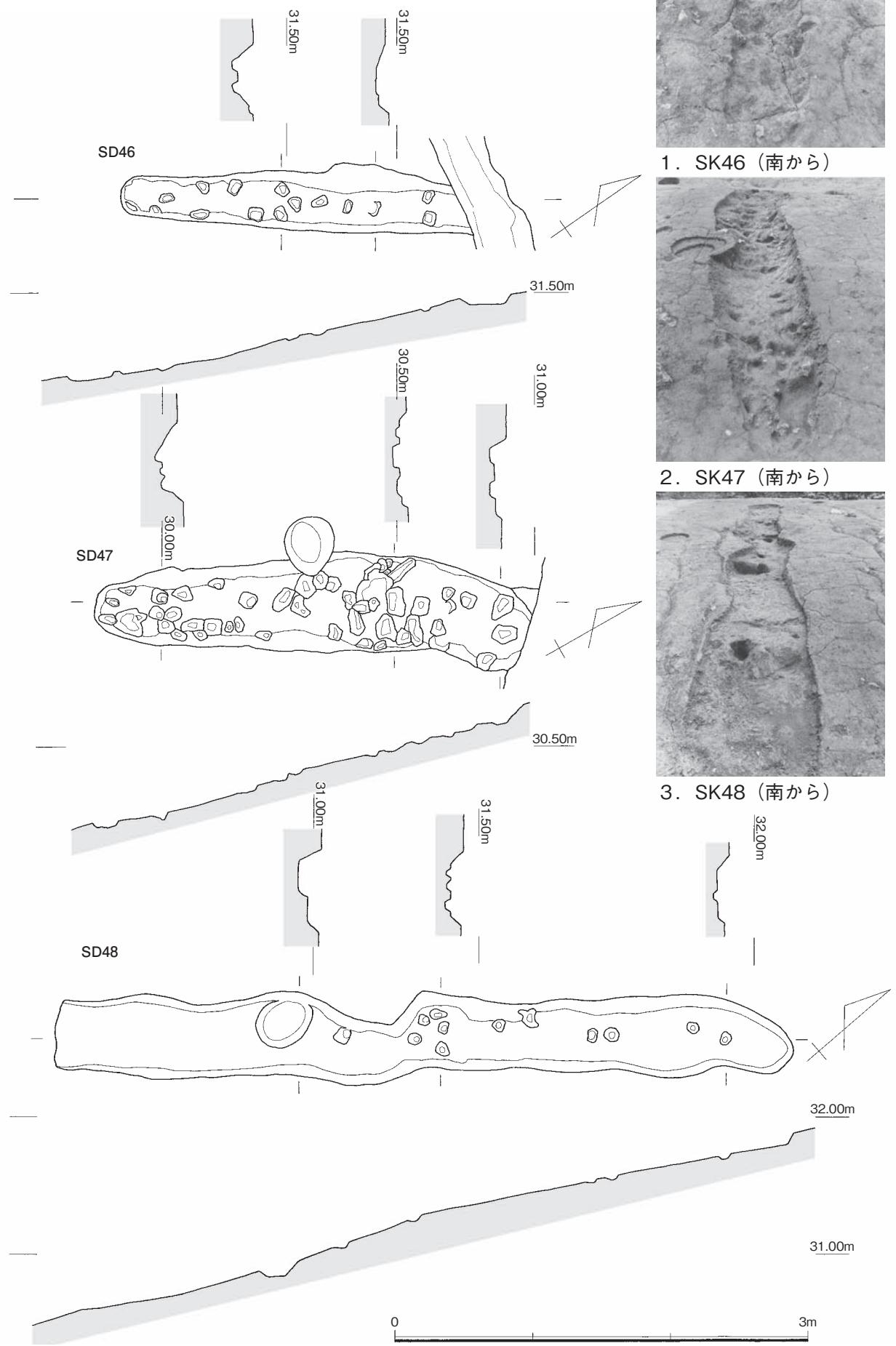


Fig.32 溝状遺構平面・断面図 (1/40)

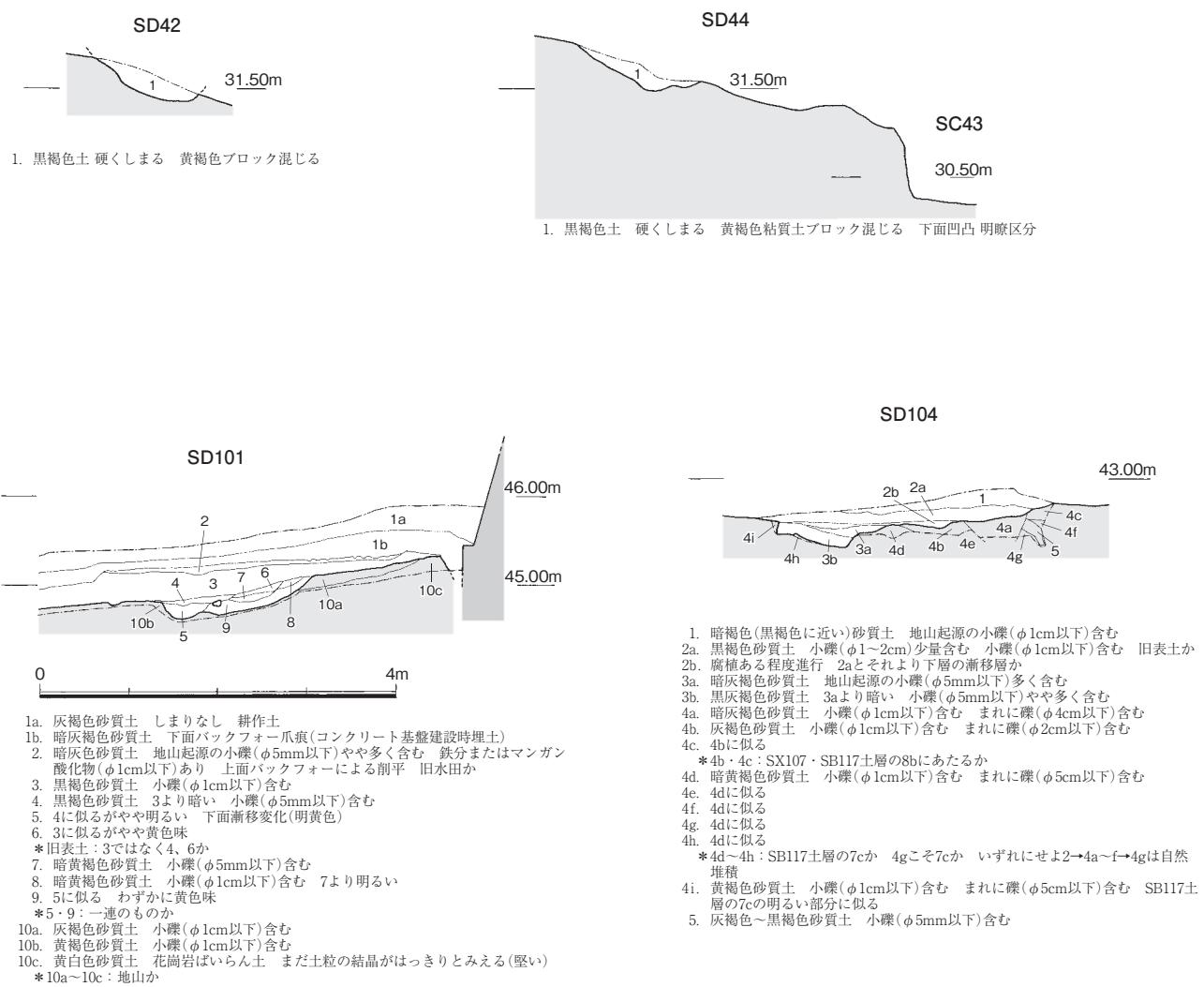
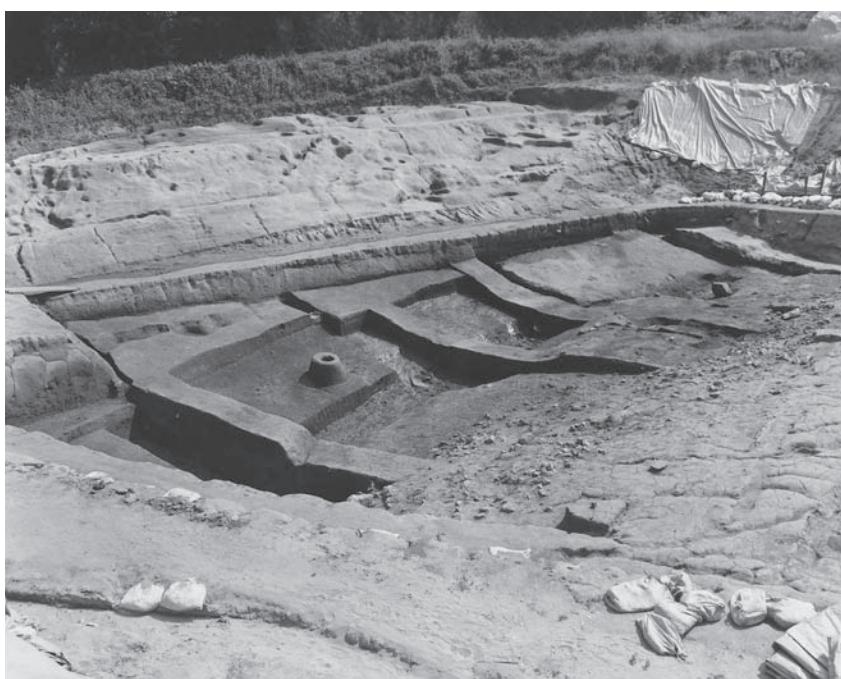


Fig.33 溝土層断面図 (1/80)



1. SD13 (北から)

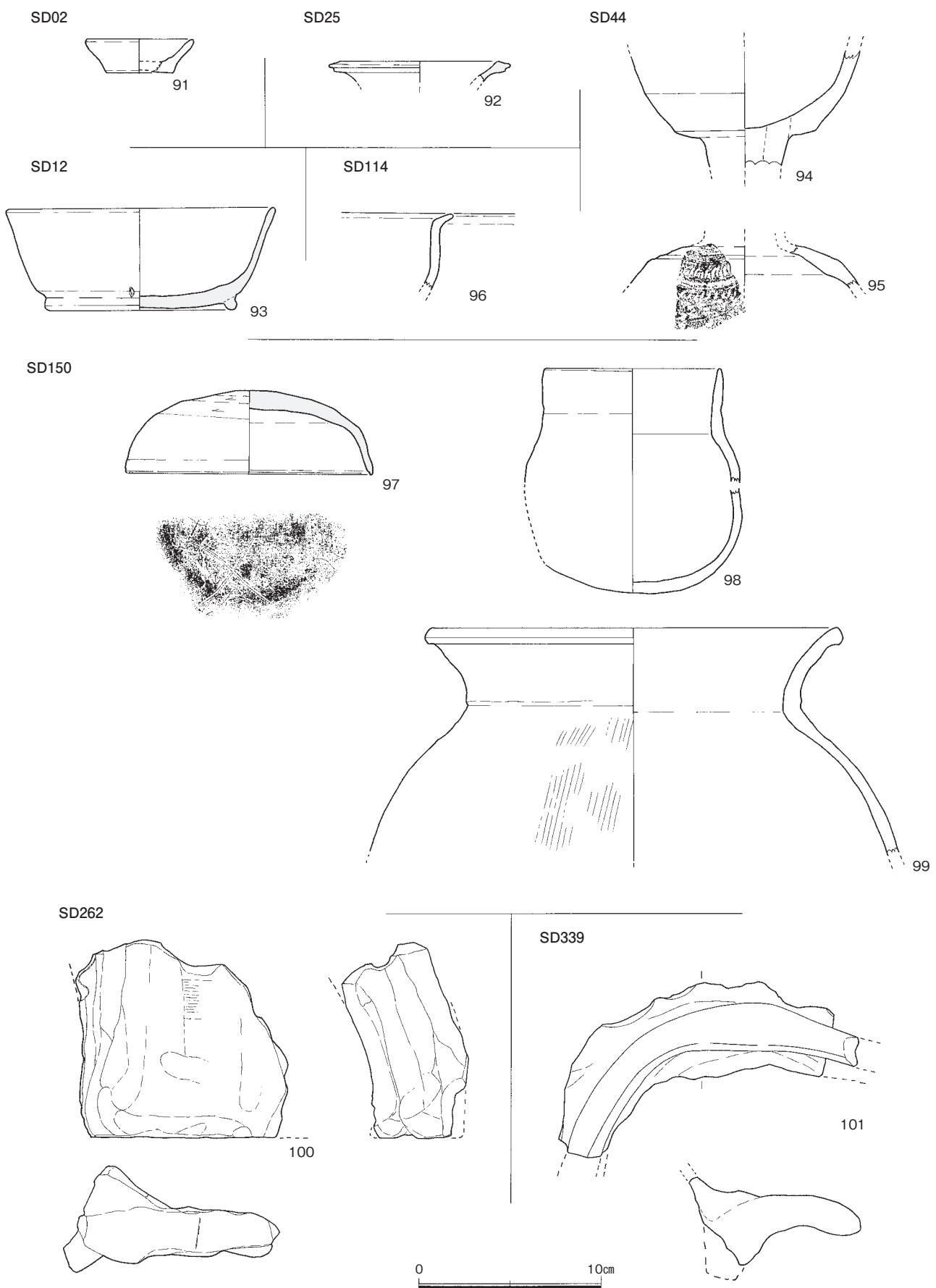


Fig.34 溝出土遺物1 (1/3)

5) 溝

本調査区では200条以上の溝、溝状遺構を検出した。ここでは全てについてふれることができない。ここでは代表的遺構の紹介にとどめ、他は観察表に譲りたい。

SD13 1区谷部中央で検出した溝状遺構である。池状遺構SX123からの排水路であるがその接続部分には池側に積み石状の遺構はあったものの堰などの施設は未検出であった。流路は平面で東側に大きく蛇行するがこれは製鉄炉SR52の排滓が溝の西側まで達していることにも関わる。断面形は下部で明瞭なU字形となるが、上部が拡がり肩部はやや不明瞭となる。現状で幅約2~4m、深さ0.6mを測る。溝内からは須恵器、土師器、製鉄関連遺物や木片などが出土した。また、鉄滓などが含まれない溝最下部の黒色砂質土（標高28.1m）から「壬辰年韓鐵」銘の木簡1点（Fig.92-385）が出土した。

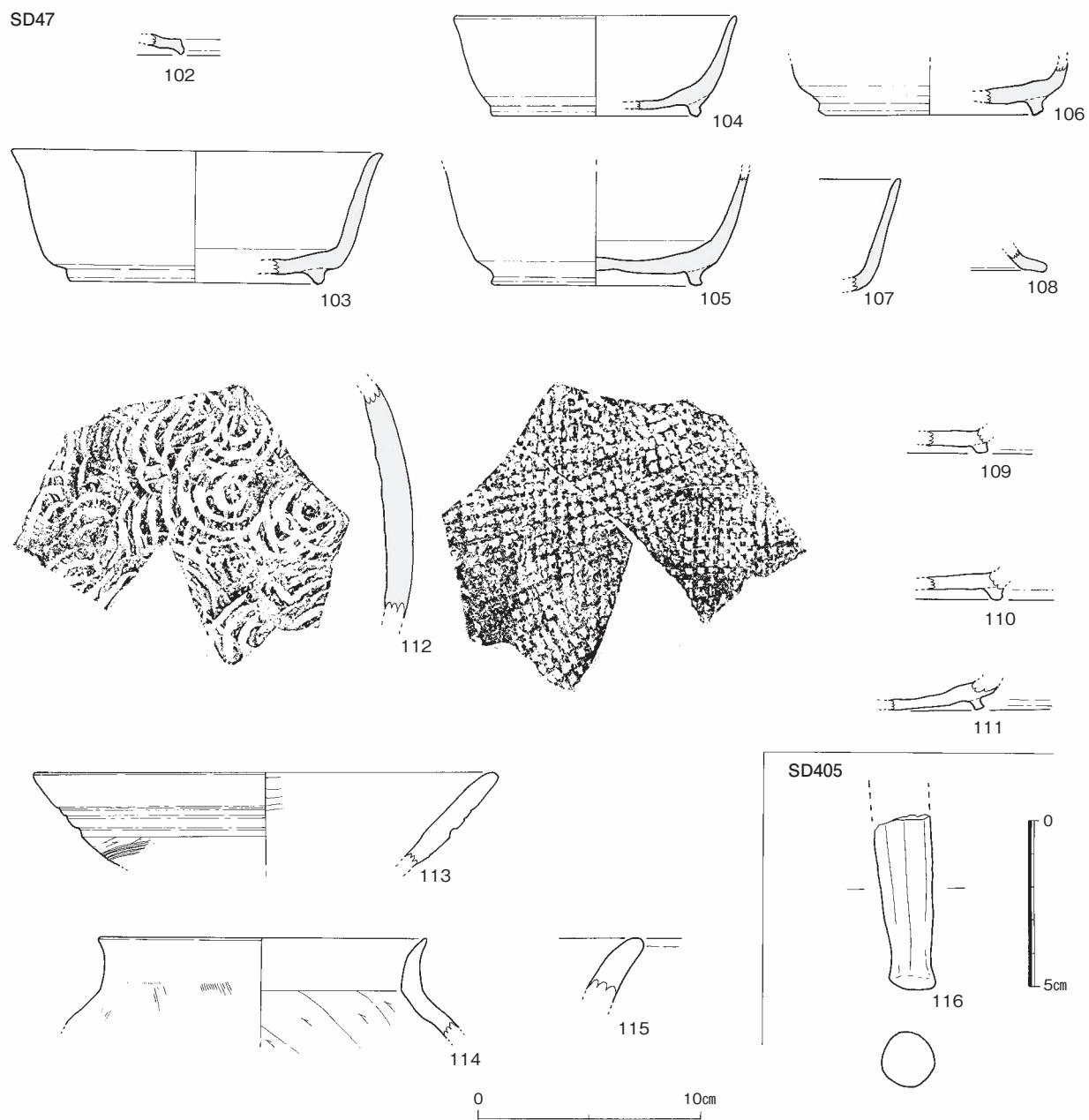


Fig.35 溝出土遺物2 (1/3 · 1/2)

SD46～48 1区西側斜面下部で検出した。斜面に直交して掘られている。3条の溝は約3mずつ離れて並行する。両側のSD46とSD48は幅0.3～0.5m、深さ0.1m、中央のSD47は幅0.8m、深さ0.1mを測る。溝断面は浅い逆台形であり、特徴的に床面に凹凸が認められる。また床面の傾斜は周辺地形と同様に10～15°である。遺物はSD47からまとまって出土し、須恵器、土師器（102～115）がある。それらの時期は8世紀後葉である。遺構の性格は、推定される道路状遺構SX444の南端部にあたることから、斜面上方の建物群のある造成面SX111方面へ登る道路の延長と考えられる。その場合、溝は側溝であり溝間の約3mが本来の道路と考えられるが、路面を示す痕跡は見出せなかった。なお溝底面の凹凸は登坂用の足掛かりと推定し、側溝も通路として利用されていたと考えている。

SD150 造成面SX111の下部で検出した溝状遺構である。標高34.5m付近から33.2mまで弧状に伸びている。断面は浅いV字形を呈し、最大値で幅1.2m、深さ0.3mである。溝底で復元される弧状の円周は径約15mである。溝内埋土中から須恵器、土師器が出土し、小田編年のⅢb期であった。溝の性格は不明であるが、溝SD42、44と同様に住居や建物の周囲を巡る排水溝か、あるいは古墳周溝の一部かと推定したが、円周内部はSX111による削平が著しく関連遺構は未検出であり、判断できなかった。本遺構は建物SB144～146、173、176と切り合いがあり、確認できるSB144、176には切られてい。また、溝埋土上に鍛冶炉SR121、137、138、143が分布する。

6) 石垣遺構

SX142 造成面SX111の中段と下段の境界部分に設けられた石垣遺構である。平面ではやや曲線を描くが、ほぼ南北方向に長さ3.5mが遺存する。調査中の指示ミスにより中央部の3段程度の石積みについては、断面土層図（Fig.47）には示せたが、本体実測図や写真などの記録前に除去してしまった。図上では両端と中央基底部のみしか提示できない。図での網部が本来の石垣構築の略範囲である。石垣の石材は花崗岩角礫並びに亜角礫を使用し、斜面下方に近い南側に一辺約40cmの大礫を据え置き、北側には30～20cmの礫を小口積みで積み上げている。構築は比較的乱雑であり、石垣構築は先の土層図でも分かるように斜面の旧地表上に一定の盛り土後、特に掘方を設げず、積み上げている。石垣は一段ごとに内部の盛り土を行い、都合3段の石垣に対し3層の盛り土が認められる。こうしたあり

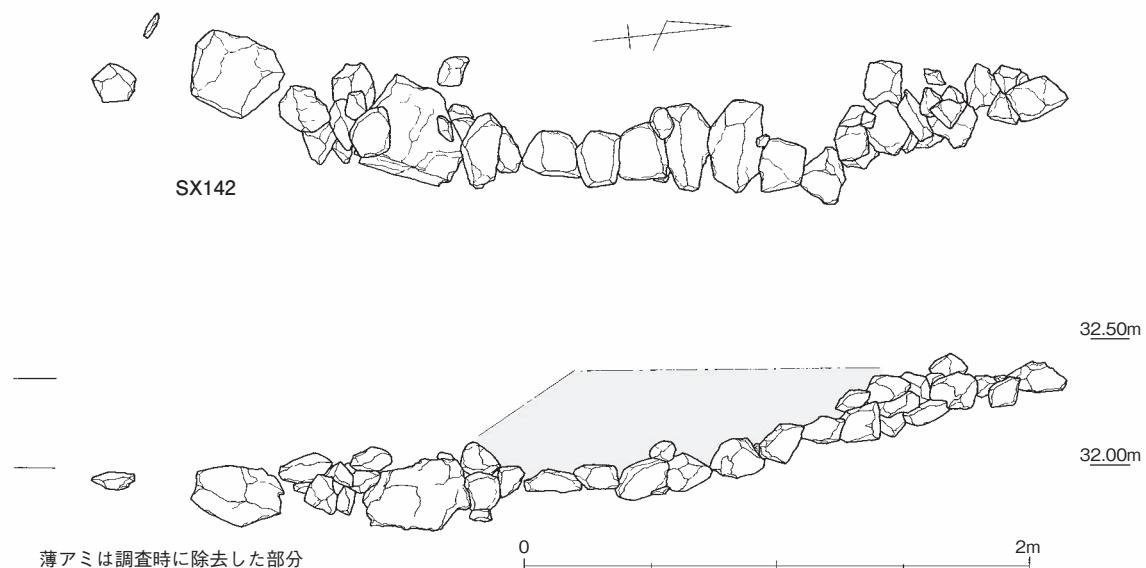


Fig.36 石垣遺構 (1/30)



1. SX142検出状況（東から）



2. SX142土層断面（東から）



3. SX142（西から）



4. SX142（南から）

方は後期古墳石室における石室構築と墳丘盛り土の様相に類似する。石垣は中央部が斜面側に孕むが、これが本来の形態であるのか、あるいは斜面上方からの土圧（地滑りなど）により二次的に形成されたものかは不明である。

7) 鍛冶炉

SR115 2区西斜面の標高38.7mで検出した。整地遺構SX107の造成面流出後の斜面に形成されている。平面は不整橢円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は $0.45 \times 0.4m$ 、深さ0.1mであり、床面に傾斜がある。炭化物、焼土、鉄分沈着がある。

SR121 造成面SX111の中段、溝SD150直上の標高34m付近にある。平面は不整橢円形であり、僅かに浅い掘り込みがある。規模は $0.35 \times 0.3m$ で床面に僅かな傾斜がある。炭化物、焼土がある。

SR124 造成面SX111の下段で標高31.7m付近にある。南北で2つに別れ、北側を124a、南側を124bとした。124aは平面が不整橢円形であり、僅かに浅い掘り込みがある。規模は $0.7 \times 0.5m$ で炭化物、焼土があり、下部の地山が赤変している。124bは掘方がなく、地山の赤変部のみが残る。SR124aの上部から轆羽口（117）が出土した。

SR126 2区造成面SX111の中段でSB147南側の標高33.2m付近にある。SR126～128の4基の鍛冶炉が密接している。SR126はその南端であり、平面は不整橢円形で浅い掘り込みがある。規模は $0.95 \times 0.6m$ 、深さ0.1mで、内部から炭化物、焼土、鉄滓、鍛造鉄片が出土した。基盤部が赤変している。

SR127 造成面SX111の中段で標高33.2m付近にある。SR126と128に挟まれた位置にあり、上下に切

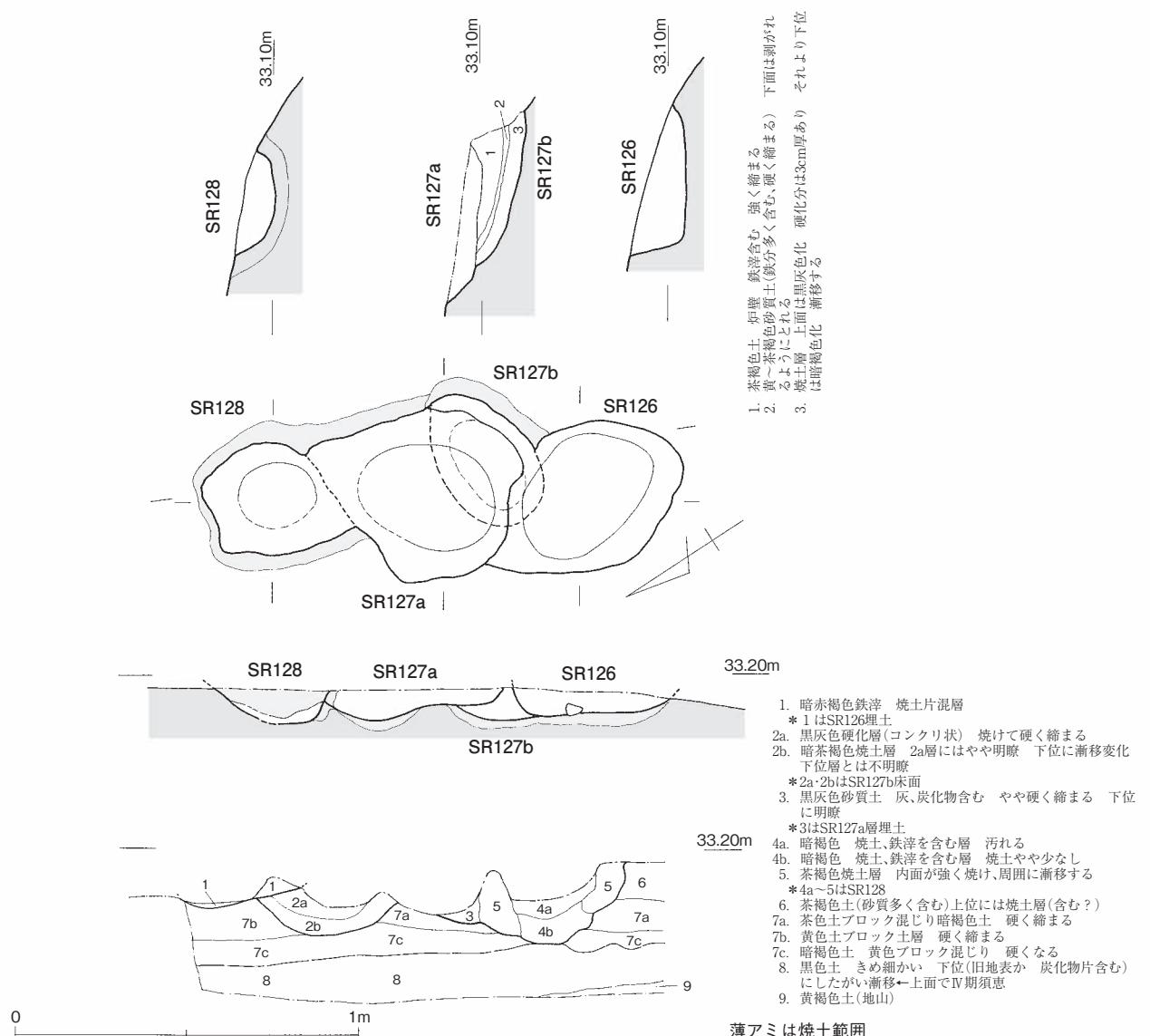
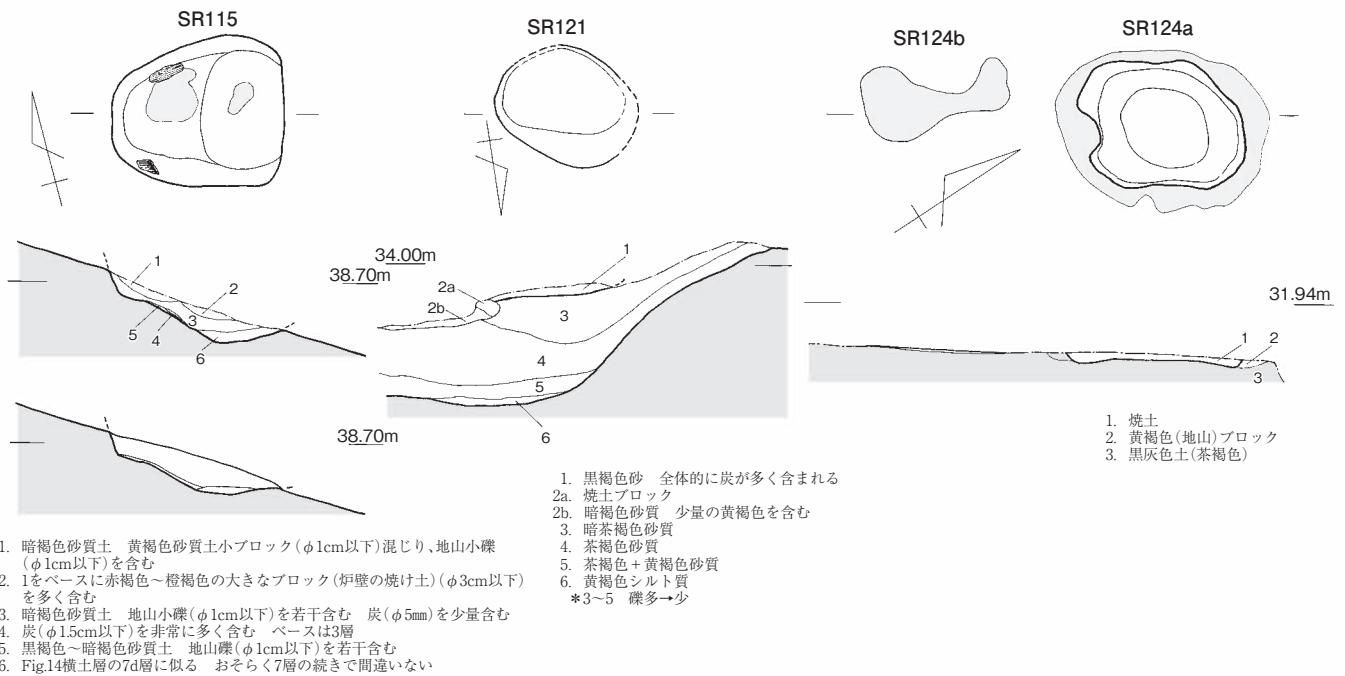


Fig.37 鍛冶炉1 (1/20)

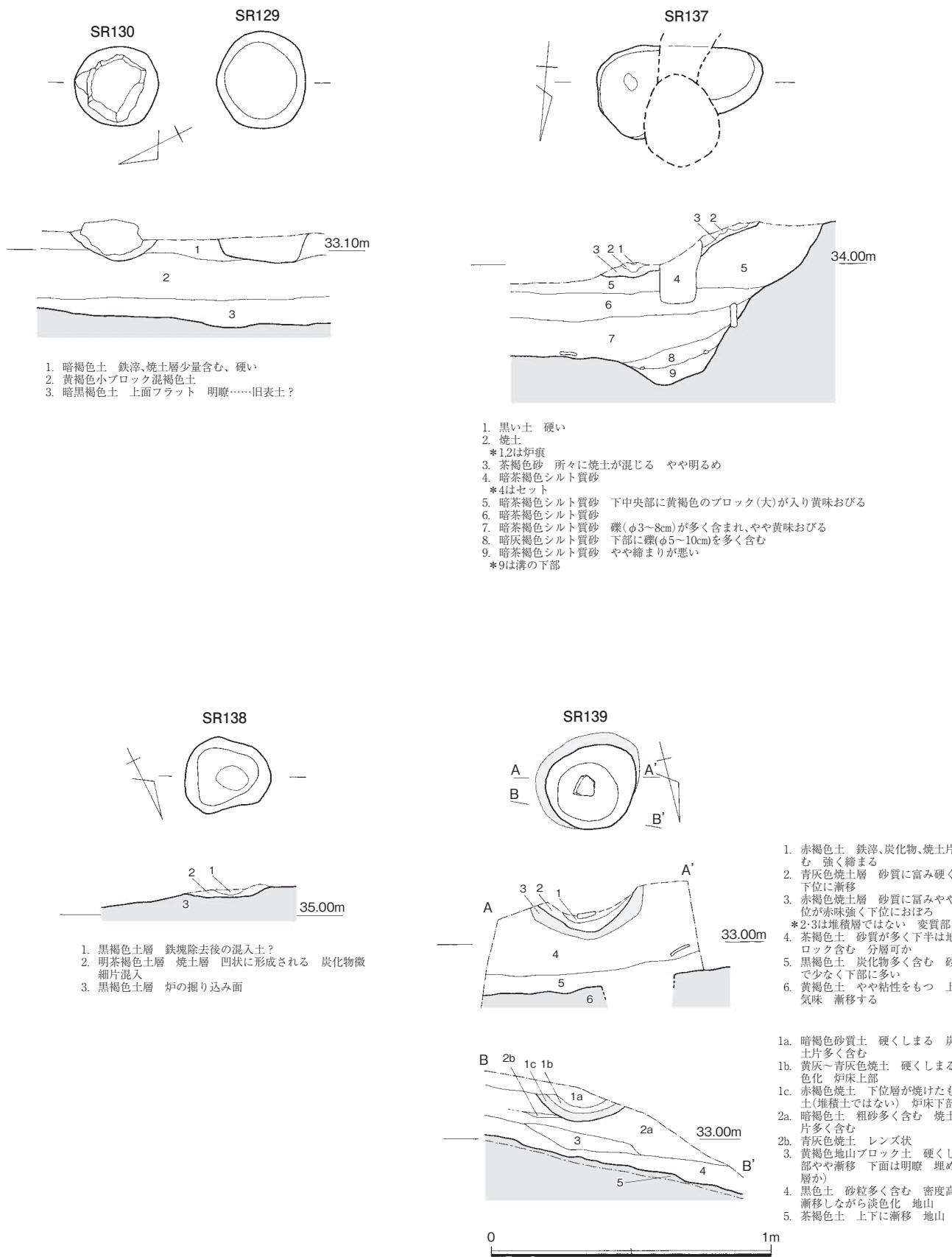


Fig.38 鍛冶炉2 (1/20)

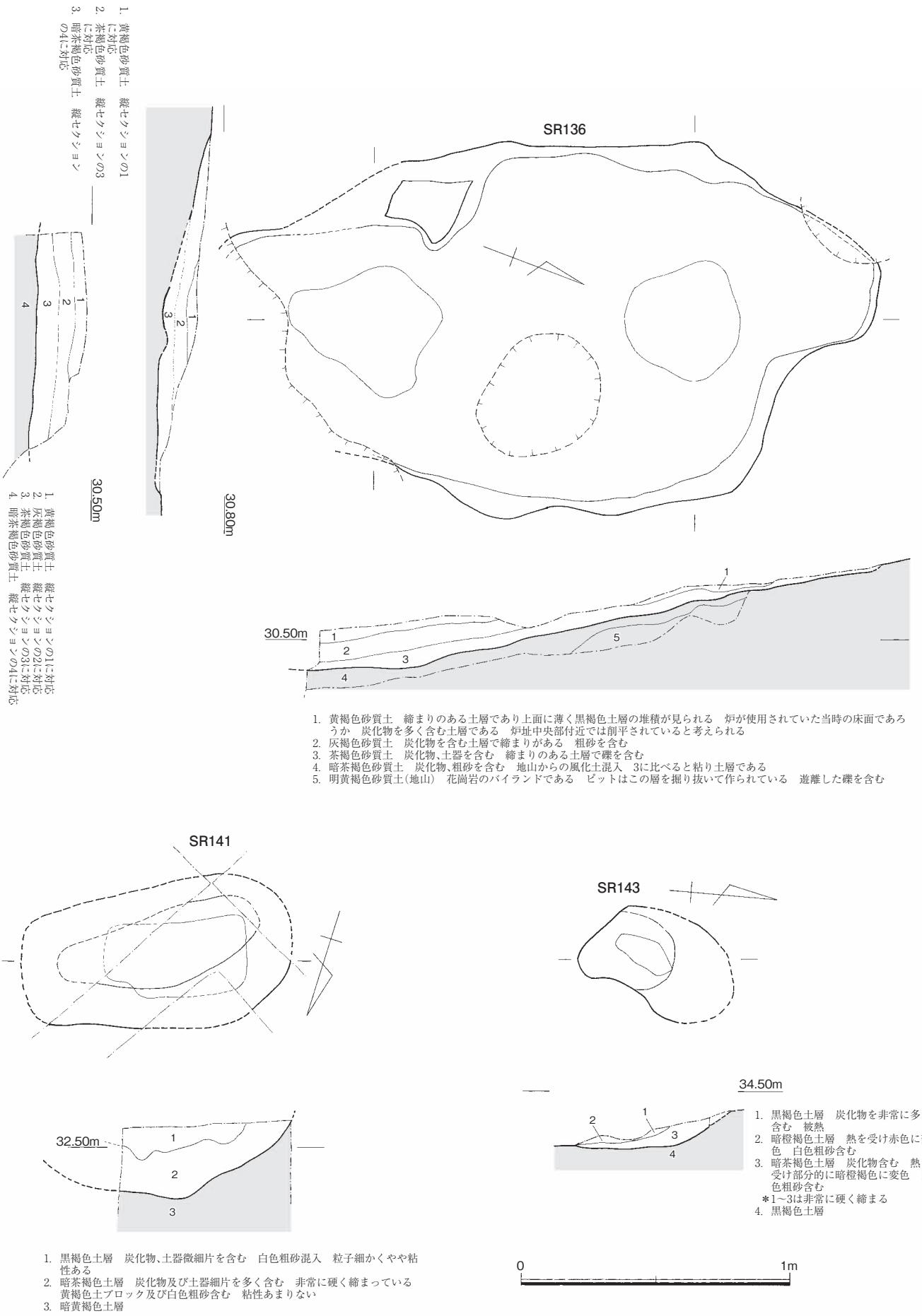


Fig.39 鍛冶炉3 (1/20)

り合う2基の鍛冶炉からなる。上側を127a、下側を127bとした。127aの平面は不整な卵形であり、浅い掘り込みがある。規模は 0.9×0.8 m、深さ0.1mである。灰、炭化物、焼土、鉄滓があり、基盤部が赤変している。127bはより下部で検出されやや東側に偏る。やや小型の卵形をなし、規模は長さ0.6m、幅0.4m、深さ0.2mである。炭化物、焼土、鉄滓があり、基盤部が赤変、硬化している。スコップでは歯が立たず、ハンマーで割りながら掘り下げた。

SR128 造成面SX111の中段で密集する4基のうち北端にある。平面は不整橢円形で浅い掘り込みがある。規模は 0.7×0.5 m、深さ0.15mで、内部から炭化物、焼土、鉄滓が出土した。基盤部が赤変、硬化している。

SR129 造成面SX111の中段で建物SB147と重複する標高33.2m付近にある。SR126～128の北側2mの位置である。平面は不整円形を呈し、径約0.65～0.7m、深さ0.2mを測る。内部から炭化物、焼土が出土した。基盤部が赤変している。

SR130 SR129に近接している。平面は不整円形を呈し、径約0.6m、深さ0.15mを測る。内部に炭化物、焼土、鉄滓が含まれ、中央に炉底滓（椀形滓）が現位置のまま出土した。鉄滓は 0.4×0.45 m、厚さ0.2mとやや大型である。全体に固着しその掘り上げは容易ではなかった。

SR136 造成面SX111の下段の建物SB134下部で検出した。長さ約2.5m、幅1.4m、深さ0.2mの全体に浅い掘り込みがあり、炭化物を多く含む埋土上に、 0.4×0.5 mほどの炭化物、焼土を混入する硬化部を2ヶ所確認した。検出時には鉄滓も多く出土し、検出した部分は炉底部ではなく、炉の基礎部分と推定した。

SR137 造成面SX111の中段、溝SD150直上の標高34.2m付近にある。平面は不整卵形であり、僅かに浅い掘り込みがある。中央部は柱穴と溝が破壊している。規模は長さ1.2m、幅0.7mで、深さ0.1m程度である。床面には 23° の傾斜がある。炭化物、焼土があり、硬化する。

SR138 造成面SX111の中段、標高35.2m付近にある。平面は不整橢円形であり、僅かに浅い掘り込みがある。規模は 0.6×0.6 m、深さ0.05m程度である。掘り下げ時に出土した炉底滓が本遺構から出土したと考えられた。炭化物、焼土、鉄滓片があり、下部は硬化する。

SR139 造成面SX111の中段でSR128とSR129の中間位置で検出した。平面は不整円形を呈し、径約0.65～0.7m、深さ0.2mを測る。内部から鉄滓、炭化物、焼土が出土した。基盤部が赤変、硬化している。

SR141 造成面SX111の中段で石垣遺構SX142上部の土層観察用土層ベルト中で確認した。そのため、平面的形態を損なってしまった。平面は不整橢円形を呈し、長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。上部から鉄滓、炭化物、焼土が出土した。基盤部が僅かに赤変している。

SR143 造成面SX111の中段、標高35.4m付近にある。平面は不整形であり、僅かに浅い掘り込みがある。規模は 0.6×0.35 m、深さ0.07m程度である。炭化物、焼土があり、下部は赤変、硬化する。

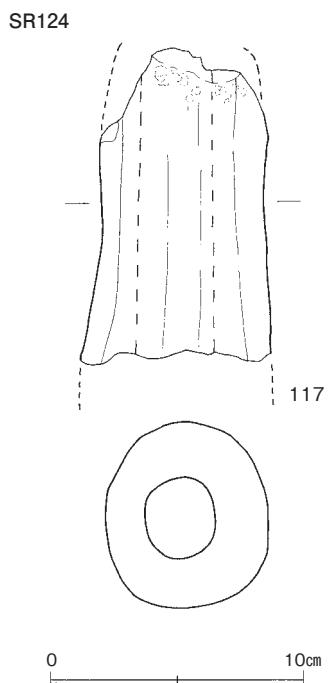


Fig.40 鍛冶炉出土遺物 (1/3)



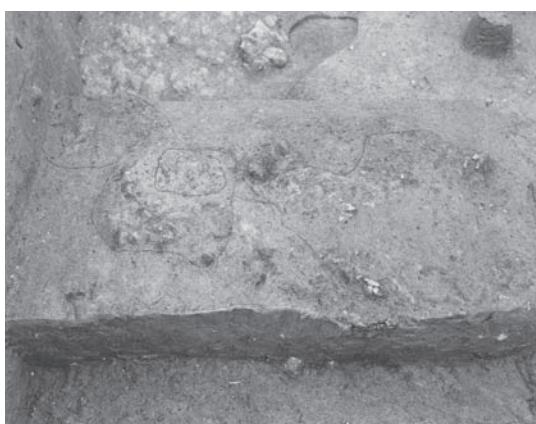
1. SR115断面（南から）



2. SR121検出時（北から）



3. SR124（東から）



4. SR125（東から）



5. SR126~128（西から）



6. SR136（西から）



7. SR138断面（北から）



8. SR139断面（北から）

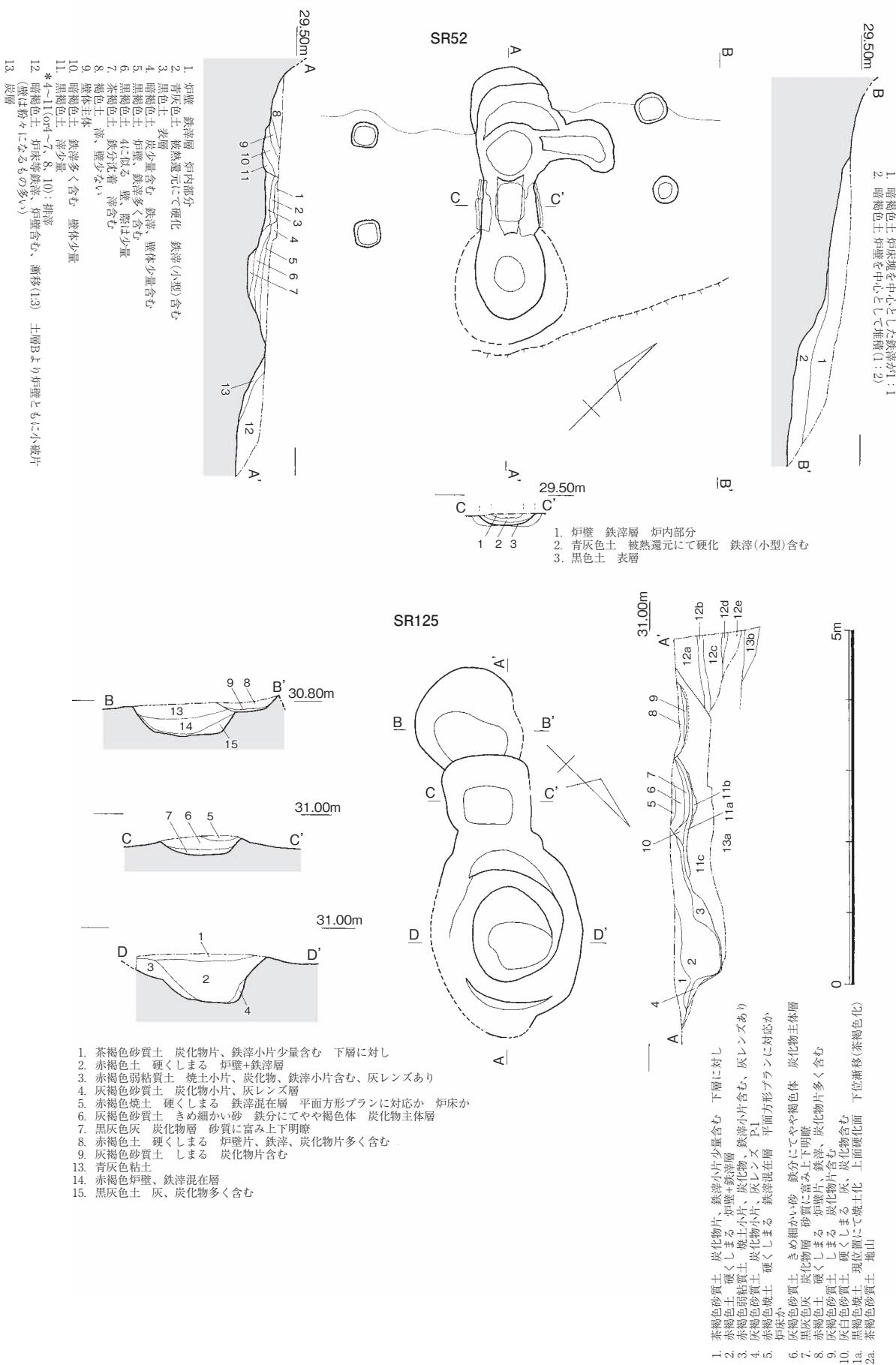
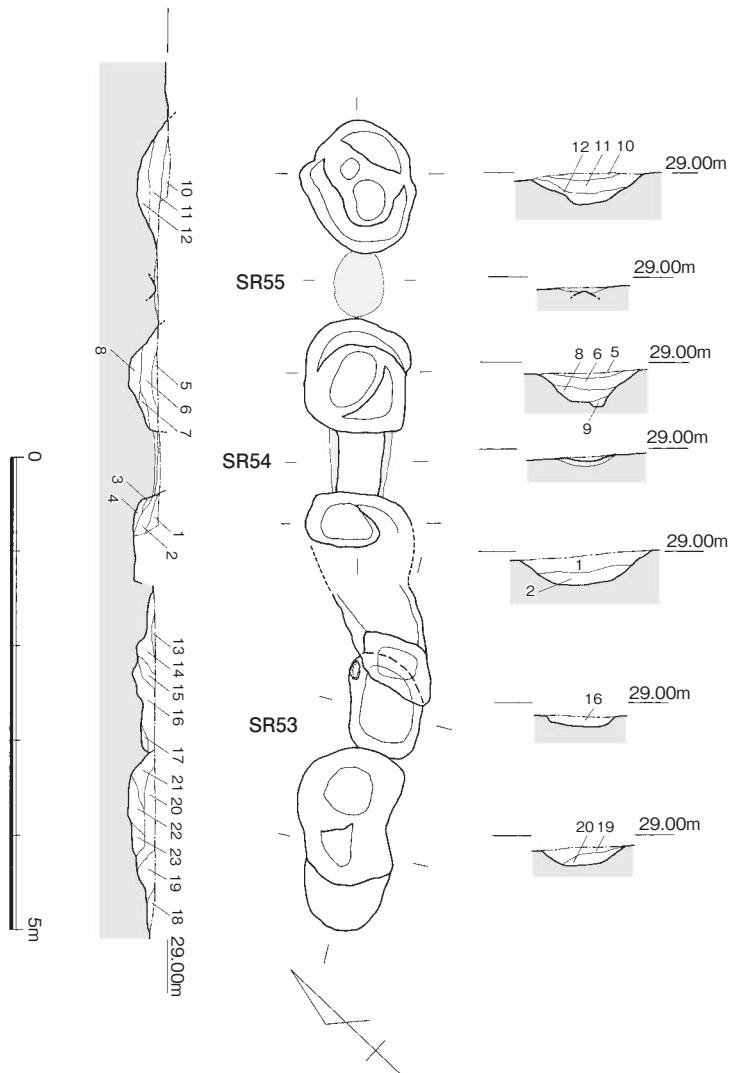


Fig.41 製鉄炉SR52・125 (1/80)



1. 灰味をおびた茶褐色土 壁体、鉄滓(小破片)、炭化物わずかに含む
2. 鉄滓 壁体層 床面に炭化物うすく堆積
3. 青灰色砂質土 被熱還元された土に壁体粒が入る
4. 灰褐色砂～砂性土
5. 灰白色土 壁体、鉄滓は少ない 1, 10と同じ
6. 壁体、鉄滓層 壁体小破片のもの多く量的に滓のほうが多い
7. 6に黄褐色土混入
8. 黄褐色土 一部黄褐色土(ブロック状)混入 地山に似るが鉄滓、小粒炭化物含み地山とは区別可
9. 黄褐色土と黄褐色土の割合 1:1
10. 5と同じ
11. 壁体、鉄滓層 壁体下破片多い
12. 8と同じ
13. 暗褐色土 鉄滓、焼土多く含む 北側は排滓によるものか(乱れて段あり) 上層不明瞭
14. 黑褐色土 炭化物少量含む
- *13・14:炉底下部
15. 灰茶褐色粘質土 烧土、炭化物少量含む
16. 灰褐色粘質土 烧土等混入少量
17. 茶褐色粘質土 鉄滓含む
18. 15に同じ
19. 炉壁、鉄滓集中
20. 茶褐色粘質土 烧土、炭化物含む 炉体に近い部分に大型炉壁破片含む
21. 茶褐色粘質土
22. 灰褐色砂質土 炭化物含む
23. 22に茶褐色土(ブロック状)混入
- *15~23:排滓
- *19・20:上層に鉄滓、壁体多い
- *21~23:灰色基調 鉄滓、壁体ほとんどなし

Fig.42 製鉄炉SR53～55 (1/80)

8) 製鉄（精錬）炉

SR52 1区西斜面下部の標高29.5m付近で検出した。形態は炉の両側に排滓坑をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。谷底に近い斜面を造成し、南北約15m、東西約6mの平坦面を設け、その中央に主軸を谷に対して直交方向に構築している。残存する遺構の規模は排滓坑を含めた全長約7mであり、炉の掘方は $70 \times 75\text{cm}$ を測る。箱形炉と見られるが、炉壁基部などは残存していない。炉底には深さ15cmの掘方があり、下部に炭層、中位に青灰色硬化層が充填している。上部には炉壁片と炉底滓が見られ、炉内部の大きさは基底部で長さ55cm、幅40cmほどに復元される。両側の排滓坑は鉄滓、炉壁が含まれるが、排滓坑を越えて、周囲の平坦面から東側の溝SD13にかけての斜面に鉄滓、炉壁片、炭化物などが、東西5m、南北15mの範囲に最大50cmの厚さで堆積し、流路を通じて下流まで分布している。なお炉を囲んで4方に柱穴が認められる。その範囲は $4.0 \times 1.3\text{m}$ であるが、炉被覆施設の基礎であるのか、轍座に関わるものかは判断できない。何れの柱穴も径20cm前後、深さ15cm以下と小さく、上屋ならば簡易の小施設と考えられる。こうした柱穴はSR413や12次023製鉄炉でも認められている。

SR53～55 1区東斜面下部の標高29m付近で検出した。SR52の谷をはさんだ東側約10mに位置する。形態は炉の両側に排滓坑をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。谷底に近



1. SR52 (東から)



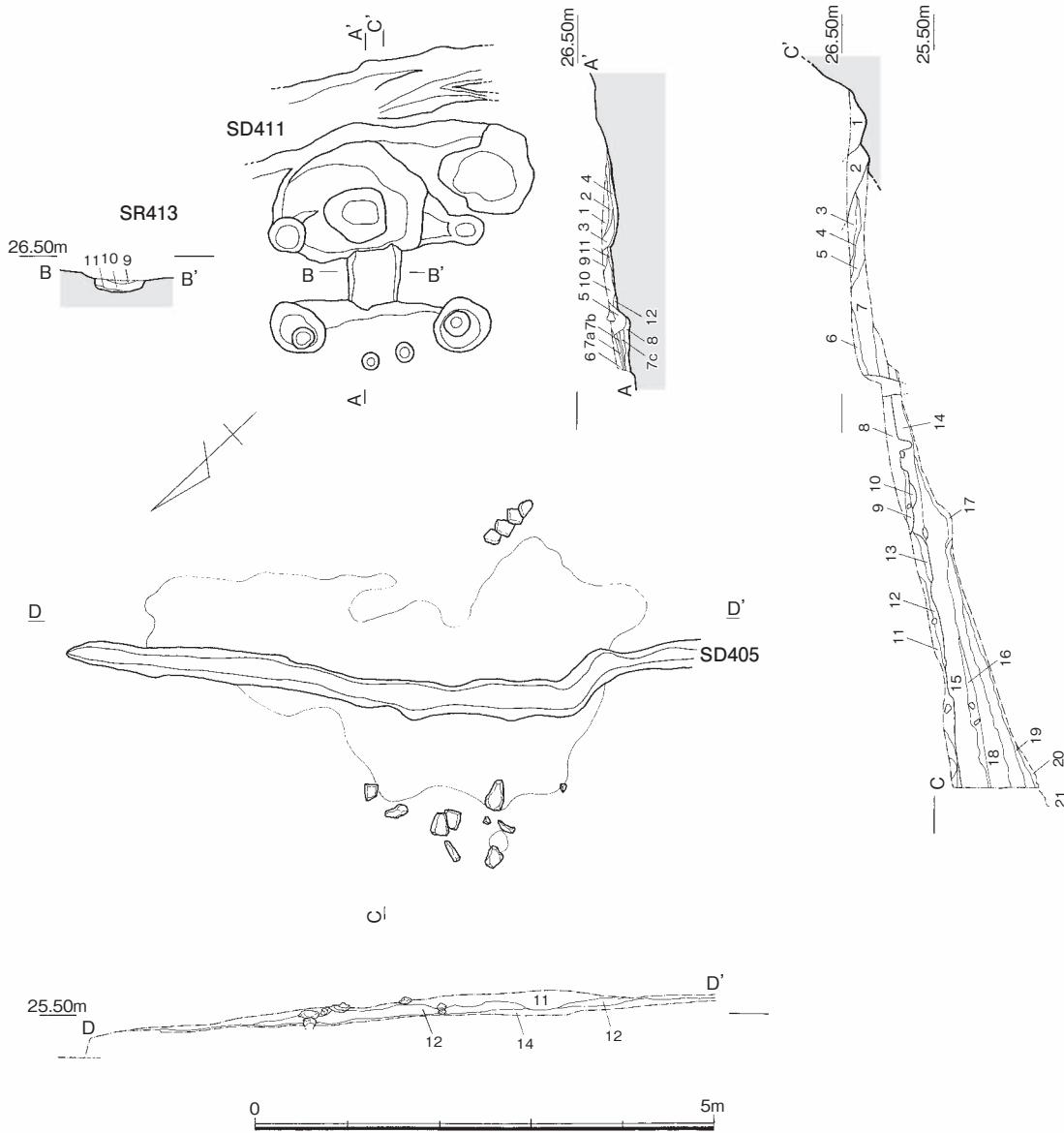
2. SR125 (北から)



3. SR53～55 (北から)



4. SR413 (南から)



[A - A' · B - B']

1. 暗褐色土 燃土、炭化物多く含む
2. 黒色炭化物層 炭片主体 燃土、鐵滓含む
3. 鉄滓、燃土塊層 硬くしまる 固着状況 炉壁か
4. 暗黄褐色炭化物含む砂質土 上層明瞭区分
5. 暗褐色土 鐵滓 燃土、炭化物多く含む
6. 暗褐色土 鐵滓含む 燃土片、炭化物片少量含む
- 7a. 黄褐色地山土 きれいな地山二次堆積
- 7b. 赤褐色燃土 炭化物片、燃土少量含む
- 7c. 黄褐色地山土 きれいな地山二次堆積
- *7a~7c: 連続層
8. 暗一黒褐色土 炭化物片多量に含む 燃土、鐵滓多く含む
9. 暗褐色土 やや赤色味あり 炭化物、燃土片含む
10. 黑褐色土 炭化物片多く含む
11. 黑色砂質燃土 硬くしまる 鐵滓ではない 下面燃土床面(赤色)密着
12. 黑色炭化物層 炭化物多し 燃土少量含む
14. 赤色(燃土)

[C - C' · D - D']

1. 灰色粗砂 ザラメ状 下半に角礫多く含む
2. 細粗砂 水分多く黒灰色
3. 暗褐色土+茶褐色土 やや粘性あり 炭化物含む
4. 茶褐色粘質土 レンズ状 上下層に
5. 黑褐色土 炭化物、燃土多量に含む 鐵滓少量
6. 暗褐色土 きめ細かい 下位に漸移変化 下面は凹凸不明瞭
7. 褐色土 下半に炭化物、燃土片、鐵滓多く含む
8. 暗褐色土 鐵滓多し 炭化物、燃土を含む SK41埋土
9. 暗褐色砂質土 燃土塊(Φ1cm)若干含む 炭多く含むと黄褐色砂質土が互層状
10. 暗褐色砂質土 炭(Φ5mm以下)若干含む 黄褐色砂質土混じる
11. 暗灰褐色砂 砂非常に多い
12. 赤褐色土 硬い ガチガチ 燃土(炉壁か)
13. 暗褐色砂質土 炭(Φ1.5cm以下)、燃土(Φ1.5cm以下)多く含む
14. 黄褐色砂質土 暗褐色砂質土若干混じる
15. 暗褐色砂質土 黄褐色砂質土混じる
16. 暗褐色砂質土 下部は灰褐色砂ラミナ 上部漸移(腐植化)
17. 黑灰色粘質土 やや砂質含む ベとつく 下面フラット明瞭
18. 黄褐色地山ブロック混褐色土
19. 黑色粘質土 砂粒含む 上下に漸移の変化
20. 黑灰色砂礫層 粘質含む
21. 灰橙色砂質土 地山起源の角礫(Φ5cm以下)含む

Fig.43 製鉄炉SR413 (1/80)

SX51

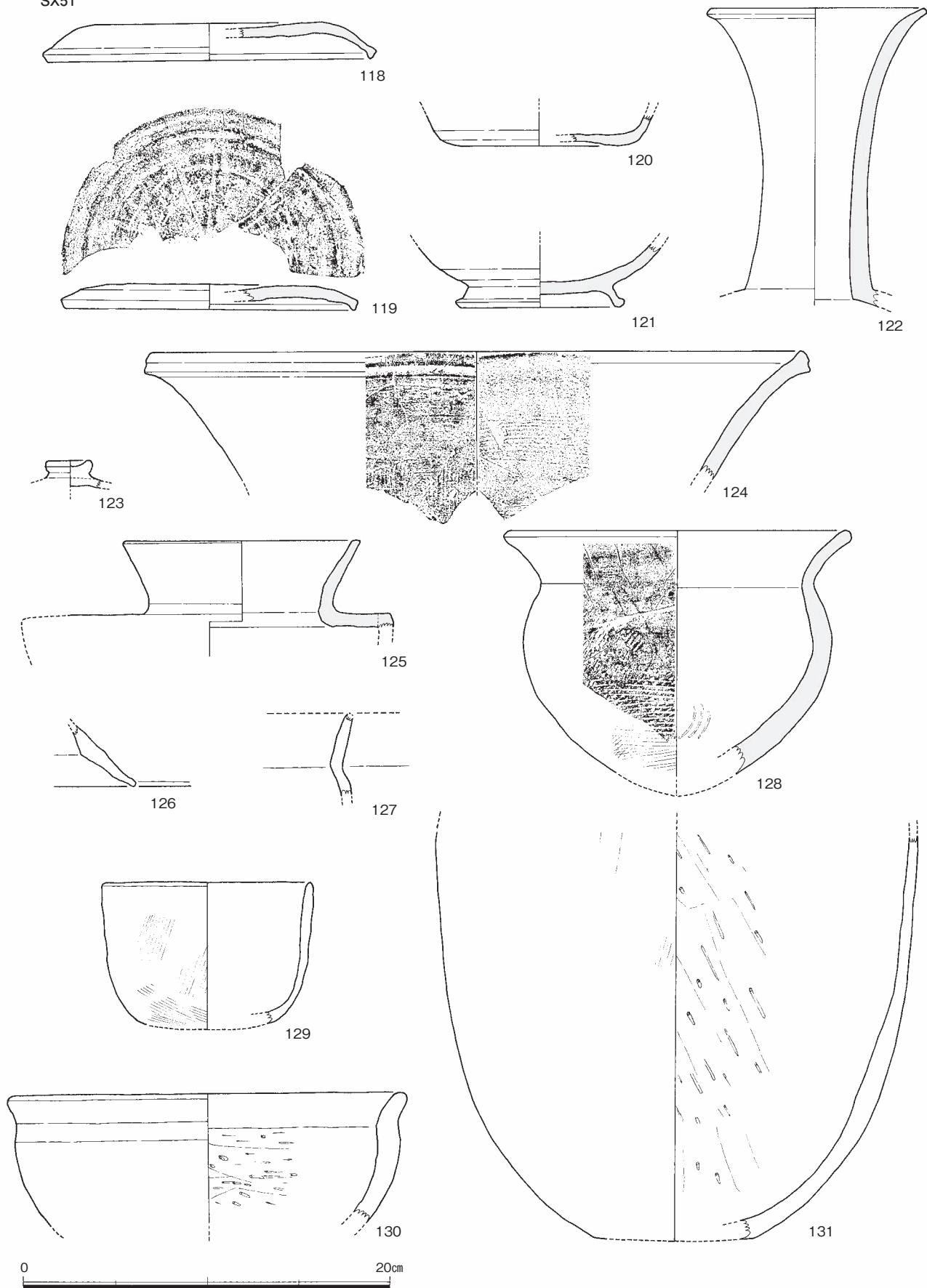
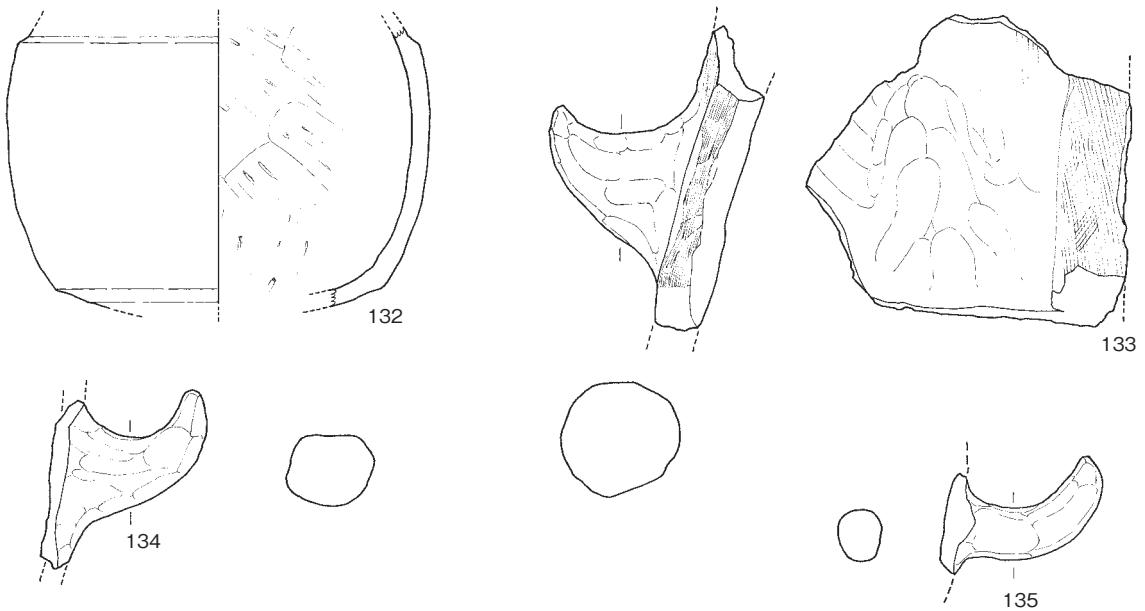
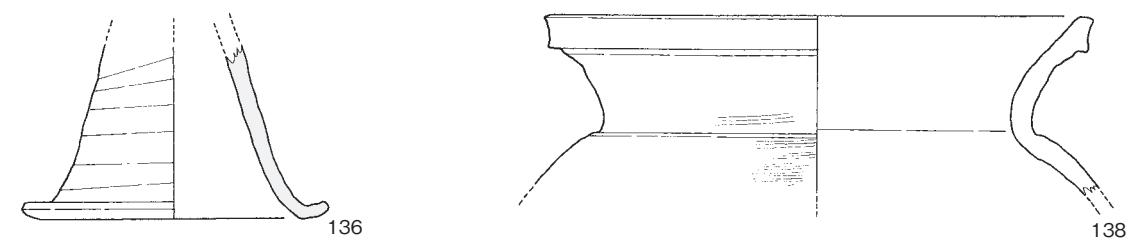


Fig.44 SX51出土遺物 (1/3)

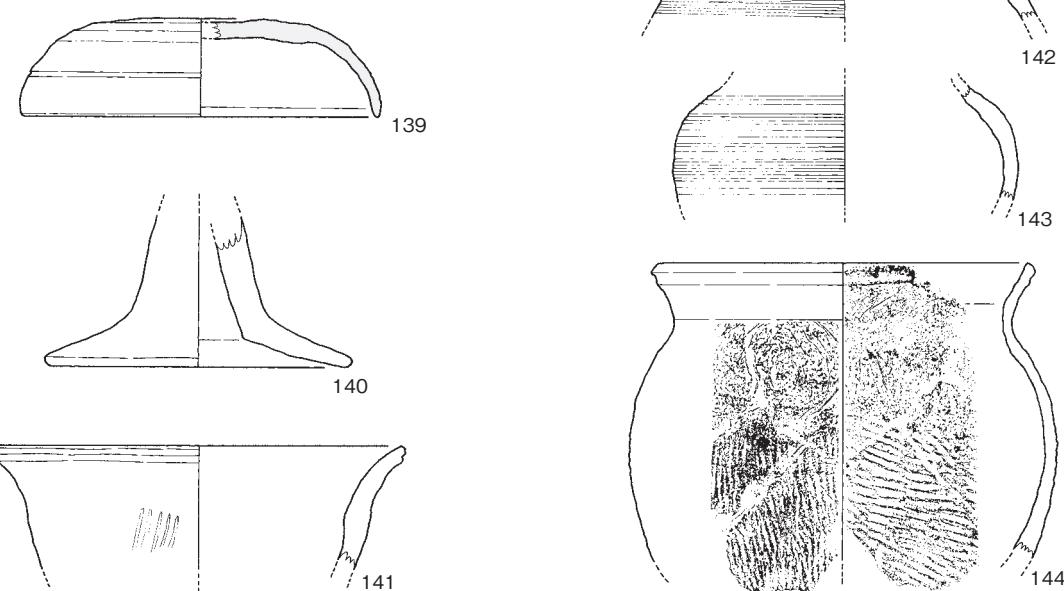
SX51



SR52



SX107



0 20cm

Fig.45 SX51・107、SR52出土遺物 (1/3)

い斜面や住居SC60堀方などを造成し、南北約15m、東西約5mの範囲に平坦面を設け、その中央に谷に対して併行して構築している。3基の炉底部が近接して直線に並び、炉底部の両側に排溝坑が共有して設けられている。そのため、炉底部3基に対し、廃溝坑は4基となる。残存する遺構の規模は排溝坑を含めた全長8.6mである。炉底部は南から順にSR53、SR54、SR55と呼称した。SR53炉の掘方は 1.0×0.6 mを測る。箱形炉と見られるが、炉底溝や炉壁基部などは残存していない。炉底には深さ10cmの掘方があり、鉄溝、焼土を含む暗褐色土が充填している。SR54炉の掘方は 0.6×0.5 mを測る。箱形炉と見られるが、炉底溝や炉壁基部などは残存していない。炉底には深さ5cmの掘方があり、黒色硬化層が形成されている。SR55炉は掘方が失われ、 0.7×0.5 mの範囲に炉底以下の赤変した焼土が残る。他と同様に箱形炉と見られるが、全て不明である。このように全体に保存状況が悪く、後世に上部を大きく削平されている。排溝坑からの鉄溝も少ないとこうした理由と考えられるが、溝SD13側の斜面にも鉄溝は少なく、本来的にこの製鉄炉の操業は極めて小規模であったと推定される。

SR125 2区西斜面下部の標高30m付近で検出した。形態は炉の両側に排溝坑をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。池状遺構SX123の西斜面を埋める埋土中にあり、建物SB177の下部で検出した。谷に対し併行構築されている。残存する遺構の規模は排溝坑を含めた全長5.2mであり、炉の掘方は 1.1×1.2 mを測る。箱形炉と見られるが、炉底溝や炉壁基部などは残存していない。炉底には深さ0.3mの掘方があり、黒色砂、炭化物、鉄溝片が充填している。排溝坑やSX123側に鉄溝は分布するが多くない。

SR413 4区東斜面下部の標高26.5m付近で検出した。形態は炉の両側に排溝坑をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。南北4m、東西6mの範囲に平坦面を設け、その中央に主軸を谷に対し直交して構築されている。斜面側には弧状の溝が巡る。残存する遺構の規模は排溝坑を含めて全長約3mであり、炉の掘方は 0.7×0.6 mを測る。箱形炉と見られるが、炉底溝や炉壁基部などは残存していない。炉底には深さ10cmの掘方があり、炭化物を多く含む黒色土が充填している。西側の谷部斜面には鉄溝、炉壁片、炭化物が東西約7m、南北約6mの範囲に厚さ20cm以下で分布し、一部は中央流路に達している。なおSR52と同様に炉を囲んで4方に柱穴が認められる。その範囲は 2.0×1.0 mであるが、炉被覆施設の基礎であるのか、輪座に関わるものかは判断できない。何れの柱穴も径20cm前後、深さ15cm前後と規模が小さく、上屋ならば簡易の小施設と考えられる。

9) 整地遺構・造成面

SX107 2区西側斜面上部にあり、標高38~42m付近にある。掘立柱建物SB117が建てられる平坦地を形成している造成盛土の範囲であり、南北約10m、東西約12mを測る。この部分は西側斜面のなかで僅かに窪む浅い谷地形をなしている。造成土下の広範囲に旧地表が遺存していることから、まずここを埋め立てた後、標高40.5m付近を水平に掘削し、SX107を削出している。平坦地の後背部分には基盤層に達する溝が掘られている。溝は中央に削り残しがあり、幅約1mの陸橋状の分水嶺をなしている。溝の機能は排水溝と考えられ、山側からの雨水や湧水は平坦面からこの溝に沿って両側に分かれて斜面に排水され、造成土の流出を避けていると考えられる。この谷を埋めた造成土は現在最大0.6mの厚さが残るが、SB117の配置などから見て当初は最大2mに達するものであったと考えられる。この造成土の供給源については明らかでないが、斜面上部の尾根線に近い範囲にも建物SB106や溝状遺構などがあることから、尾根線上を段状に造成し、その排出土砂を利用していると考えられる。

SX111 2区西側斜面中~下部にあり、標高30~36m付近にある。その範囲は南北約40m、東西約



Fig.46 造成面SX111平面・断面図 (1/200)

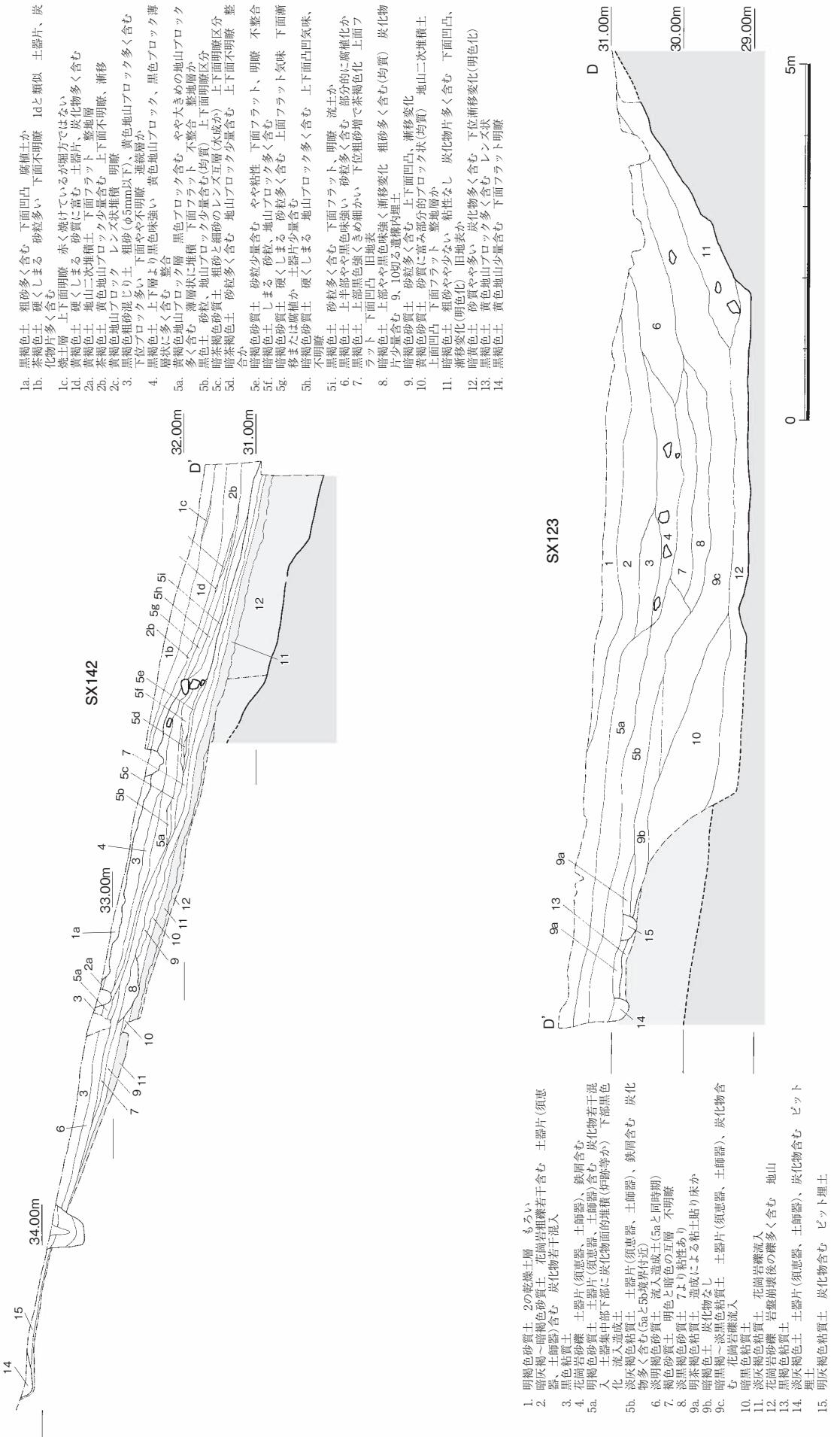


Fig.47 SX111～SX123断面土層図 (1/80)

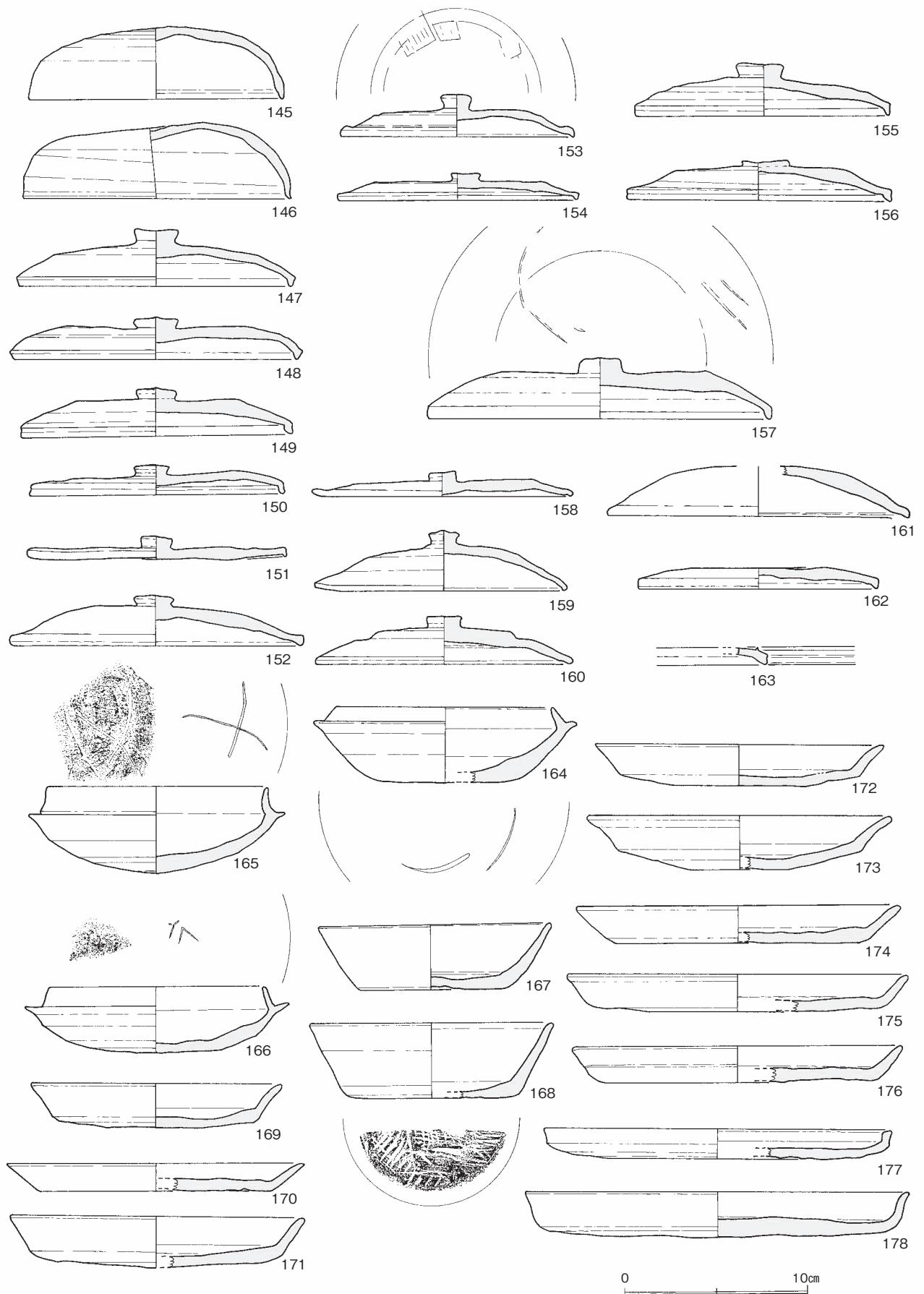


Fig.48 SX111出土遺物1 (1/3)

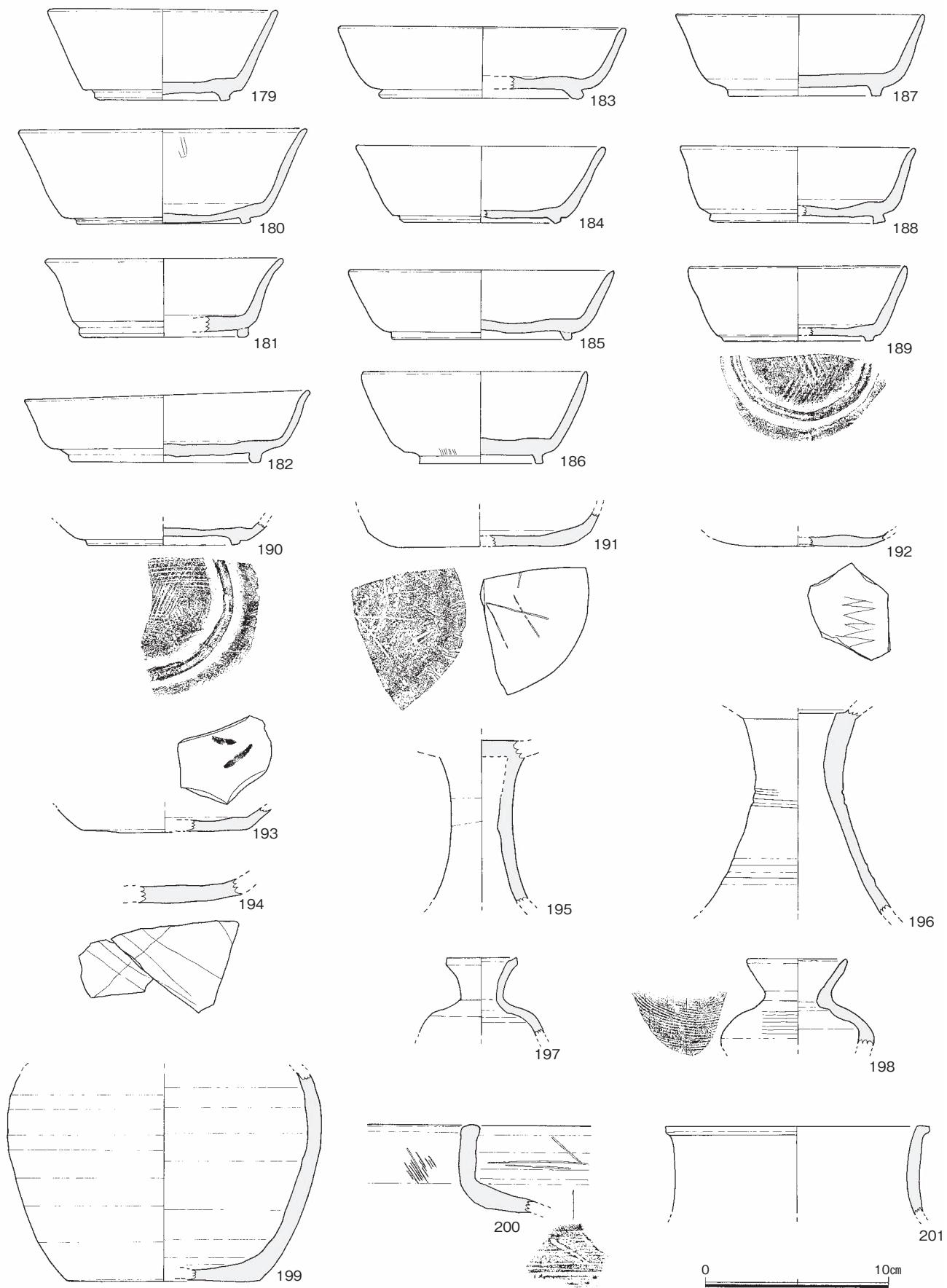


Fig.49 SX111出土遺物2 (1/3)

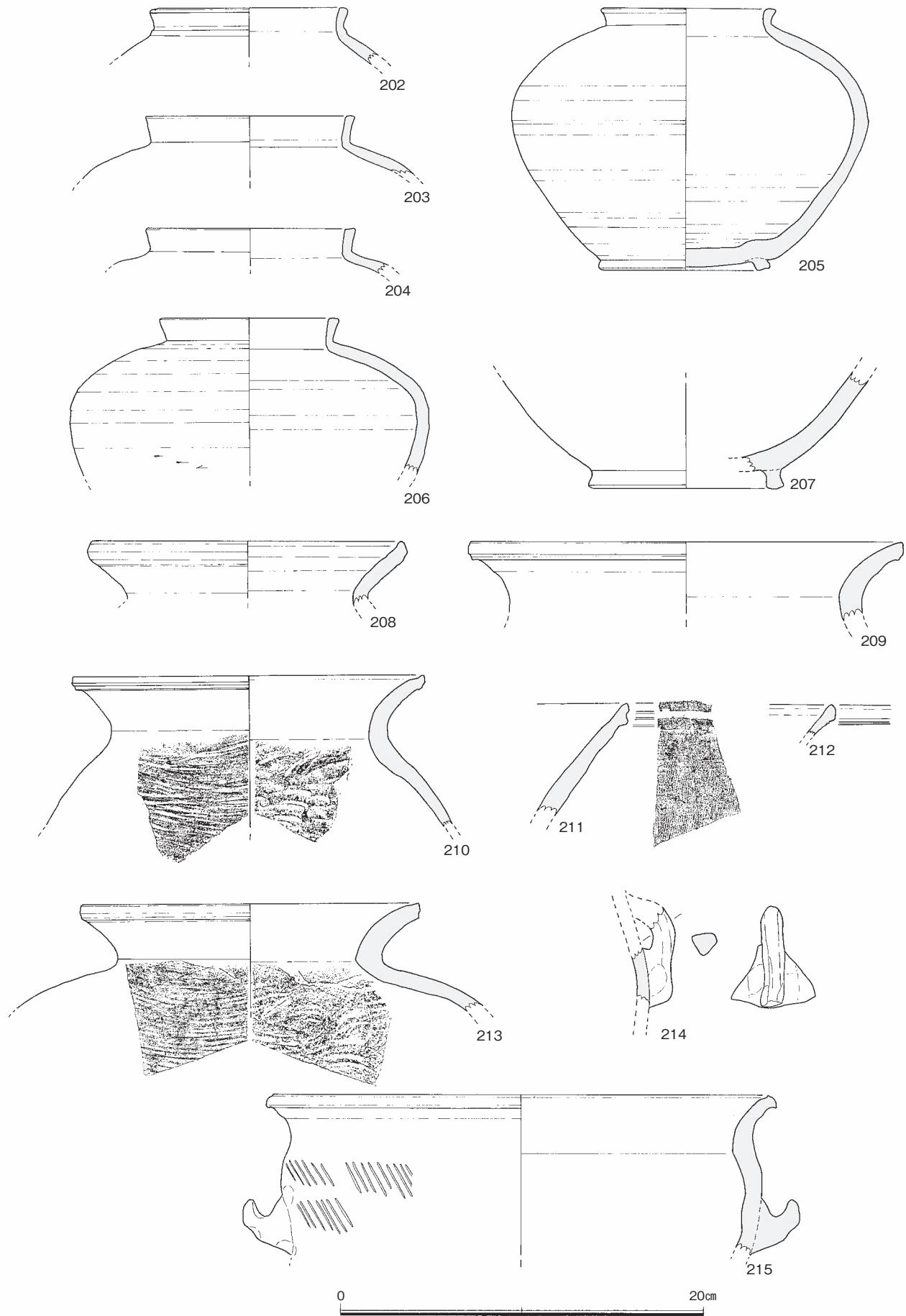


Fig.50 SX111出土遺物3 (1/3)

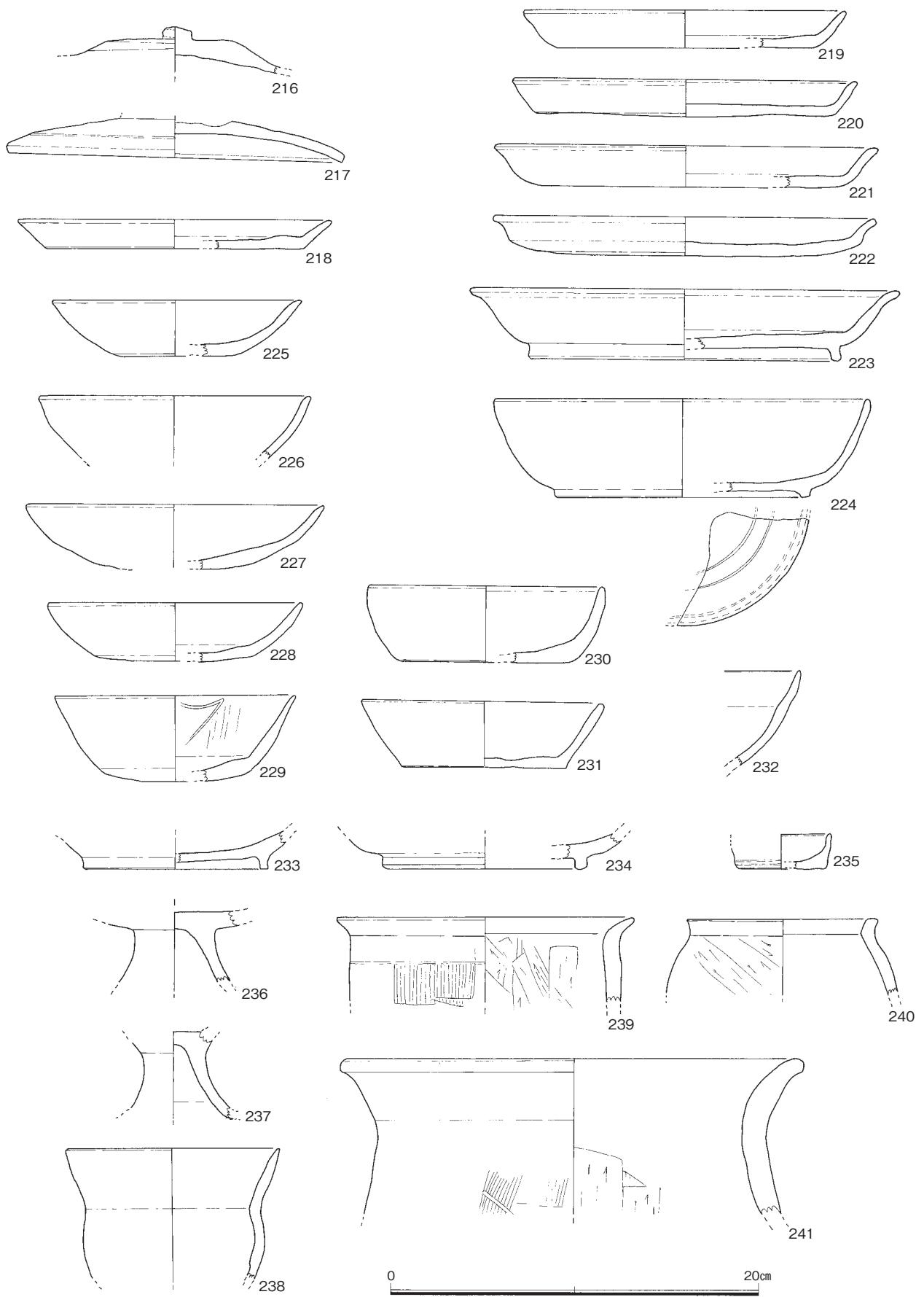


Fig.51 SX111出土遺物4 (1/3)

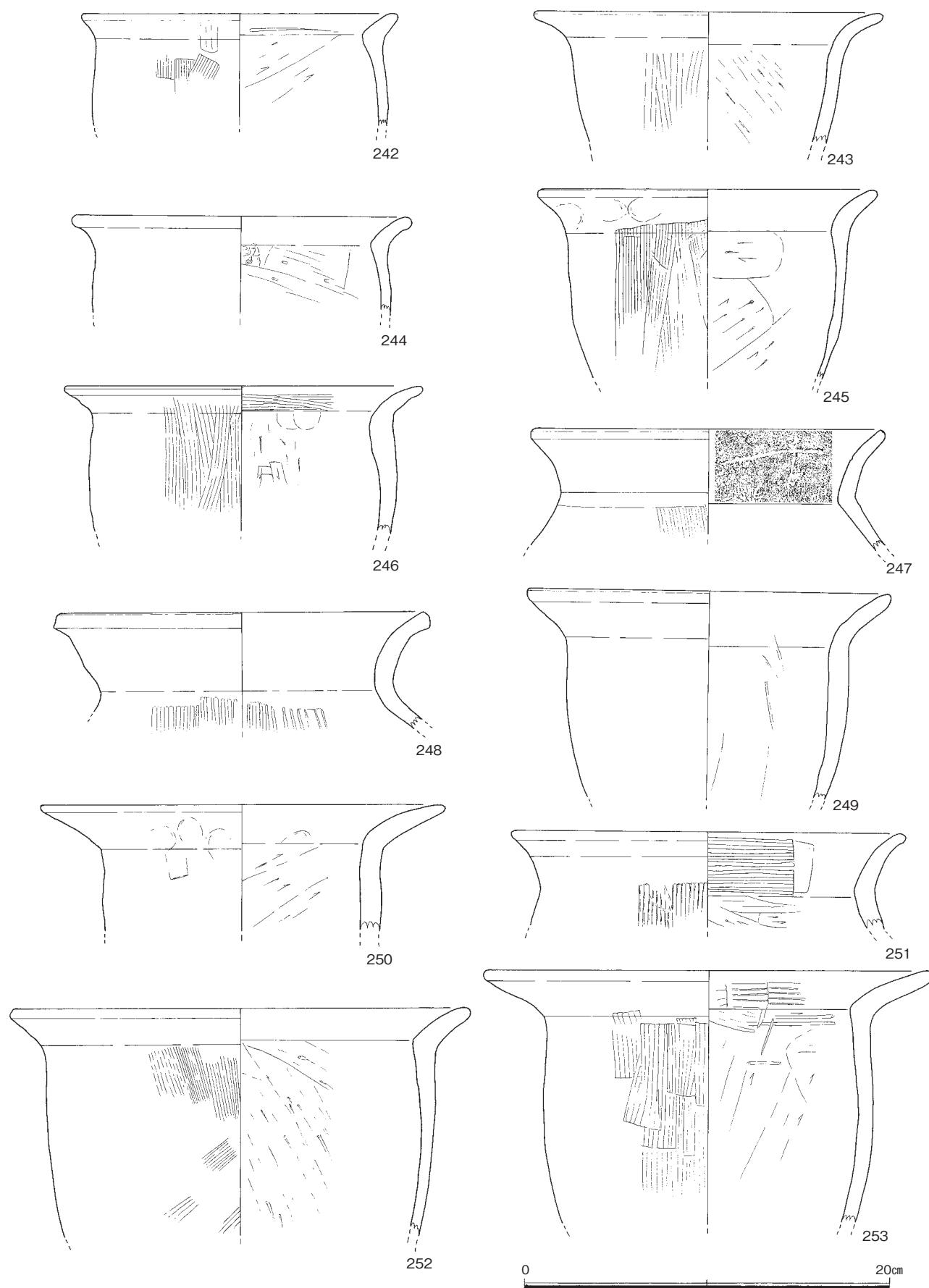
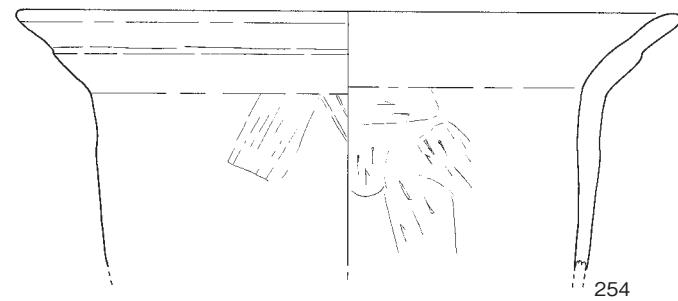
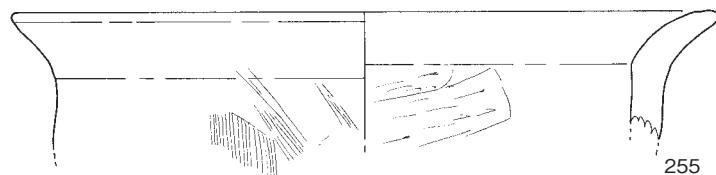


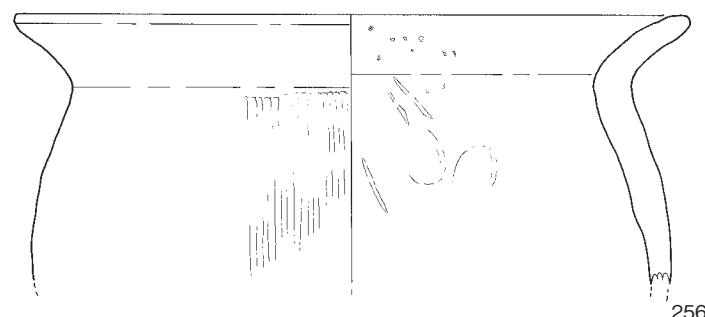
Fig.52 SX111出土遺物5 (1/3)



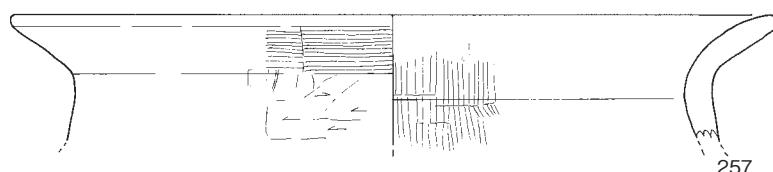
254



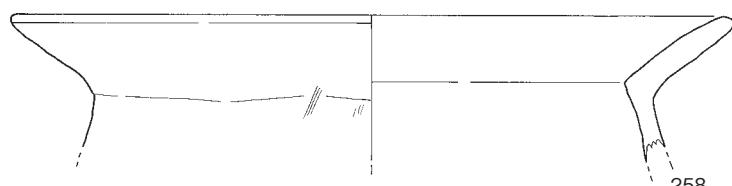
255



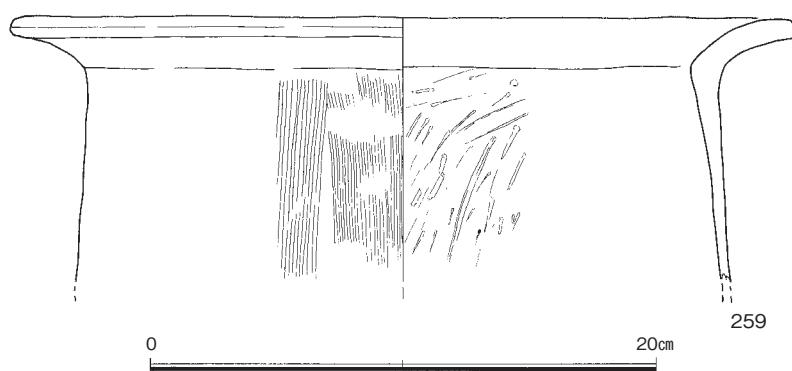
256



257



258



259

Fig.53 SX111出土遺物6 (1/3)

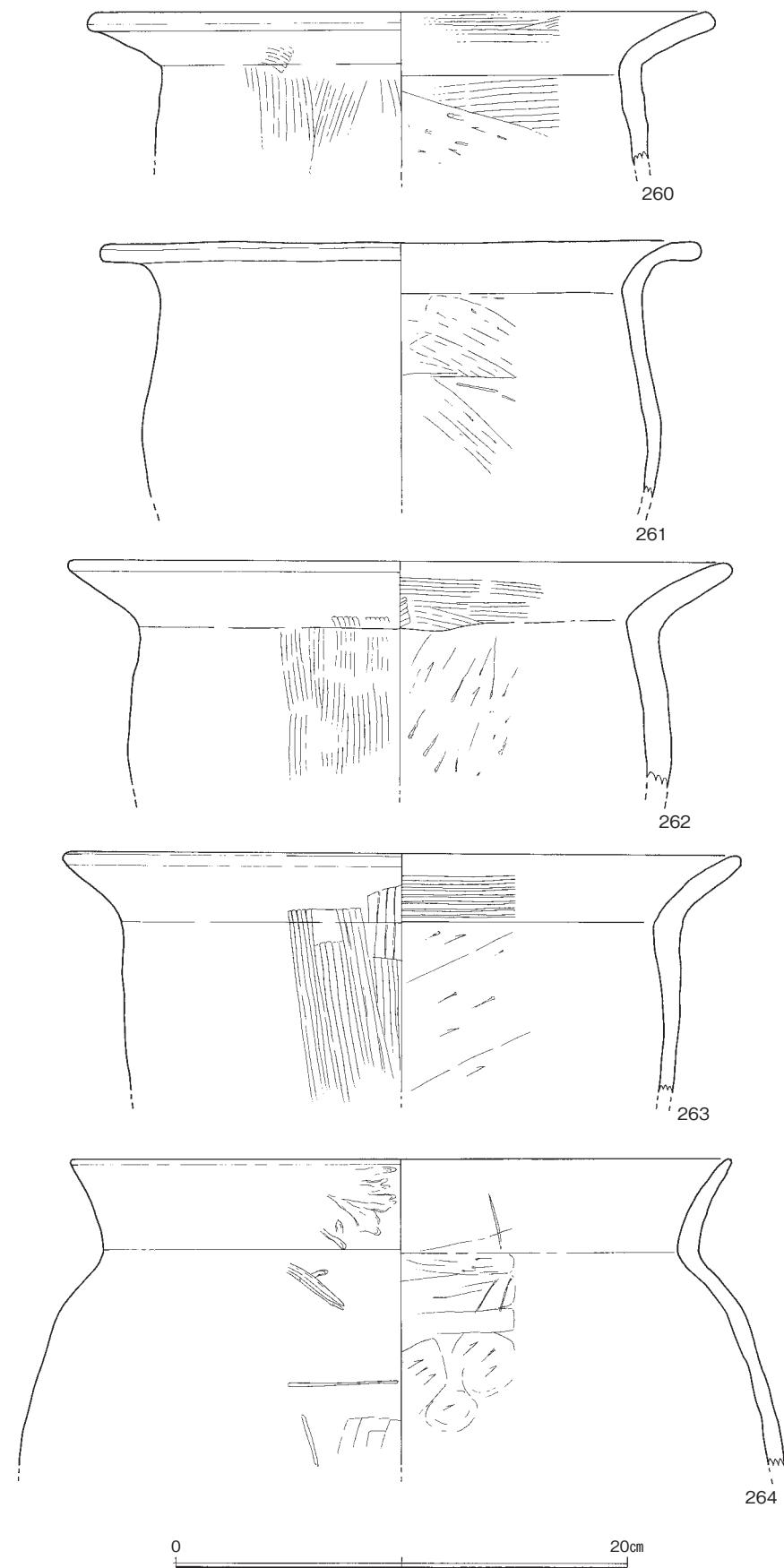


Fig.54 SX111出土遺物7 (1/3)

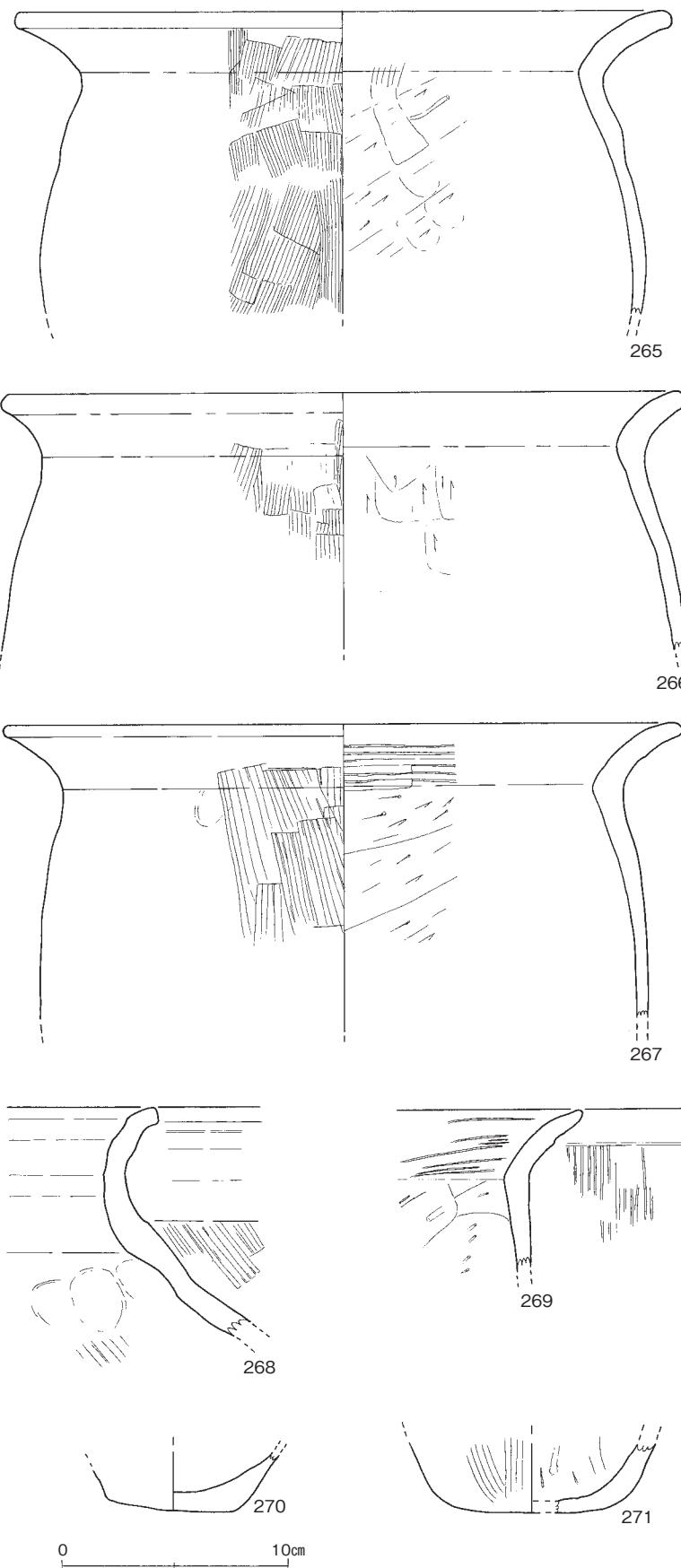


Fig.55 SX111出土遺物8 (1/3)

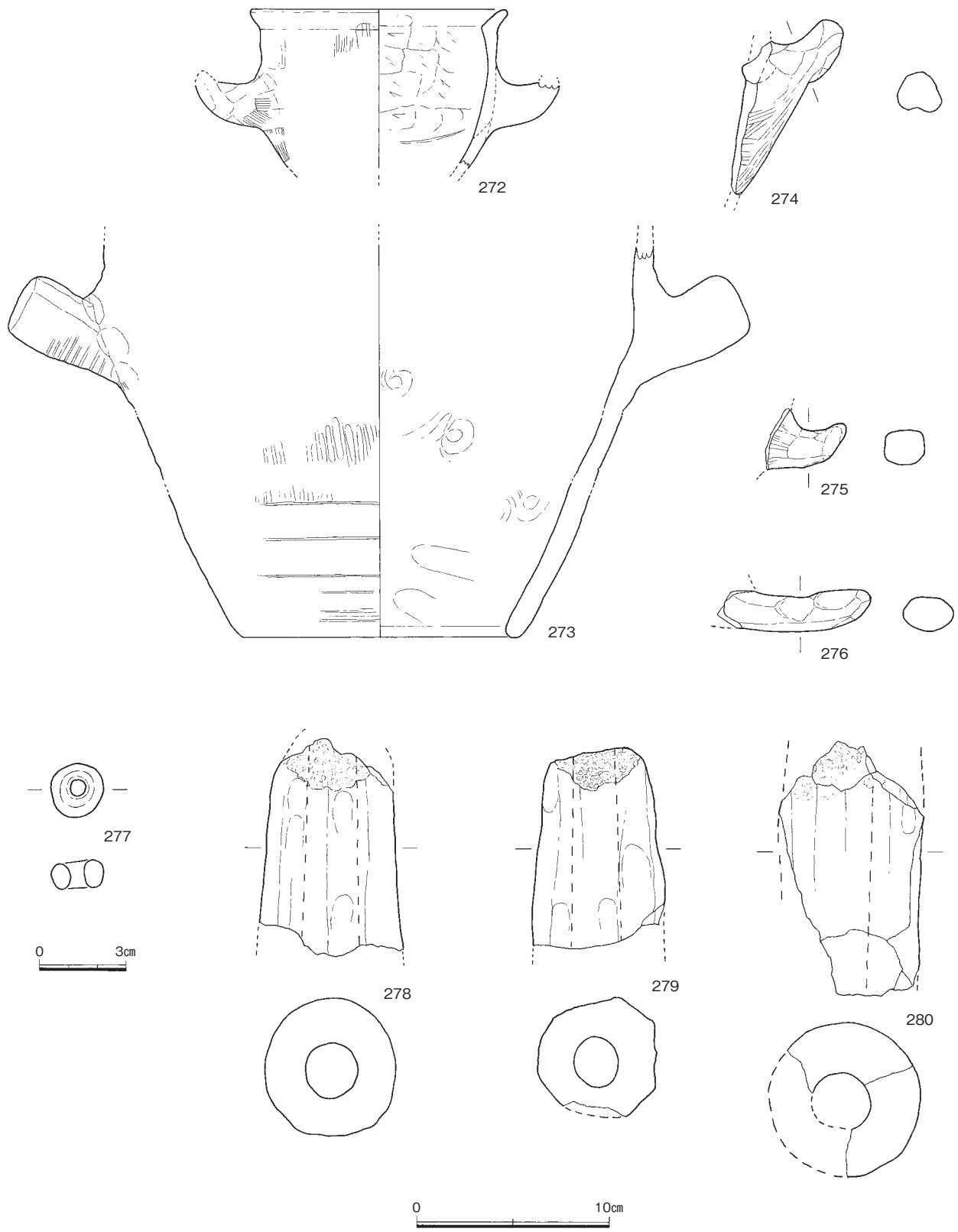
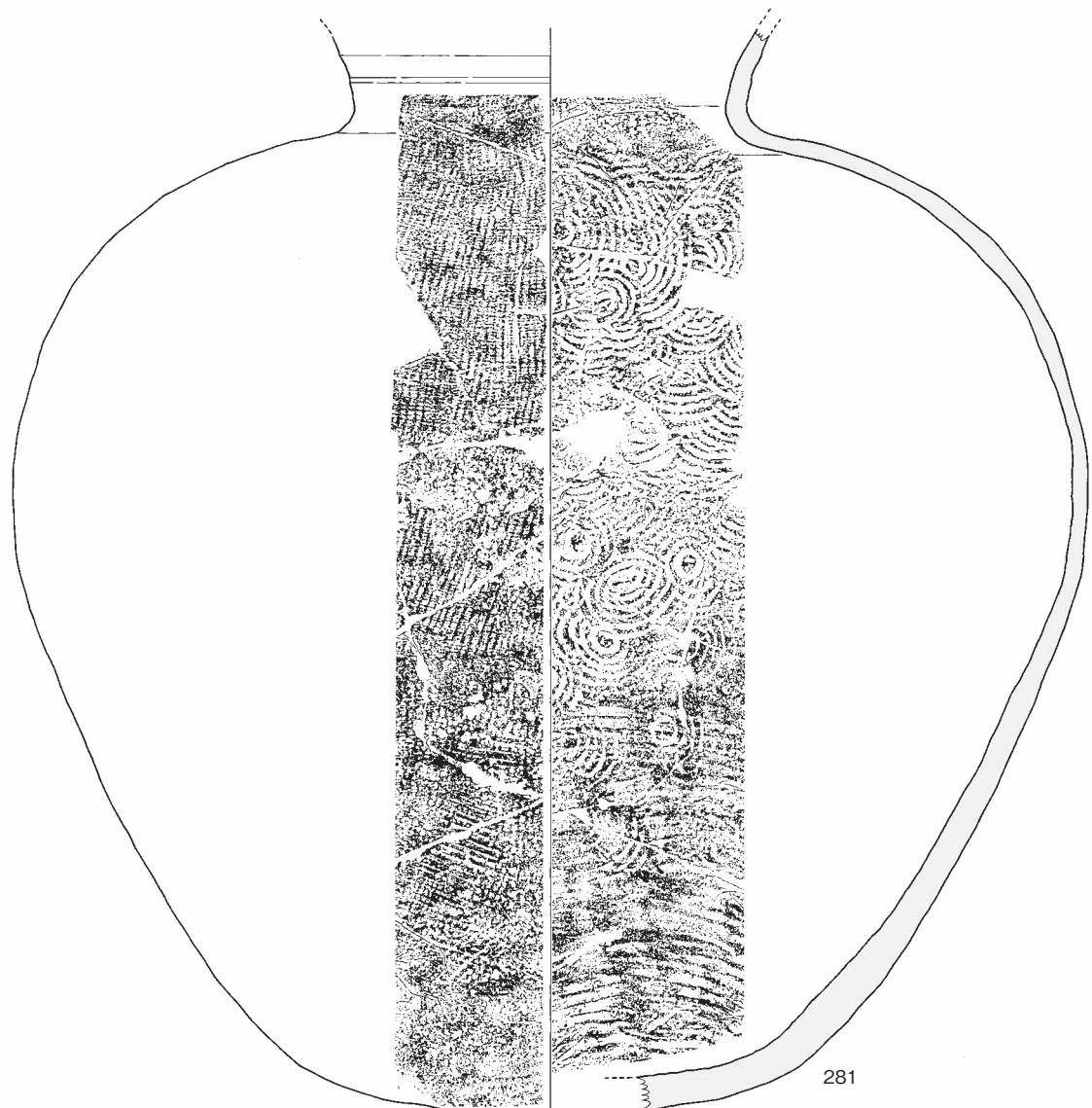
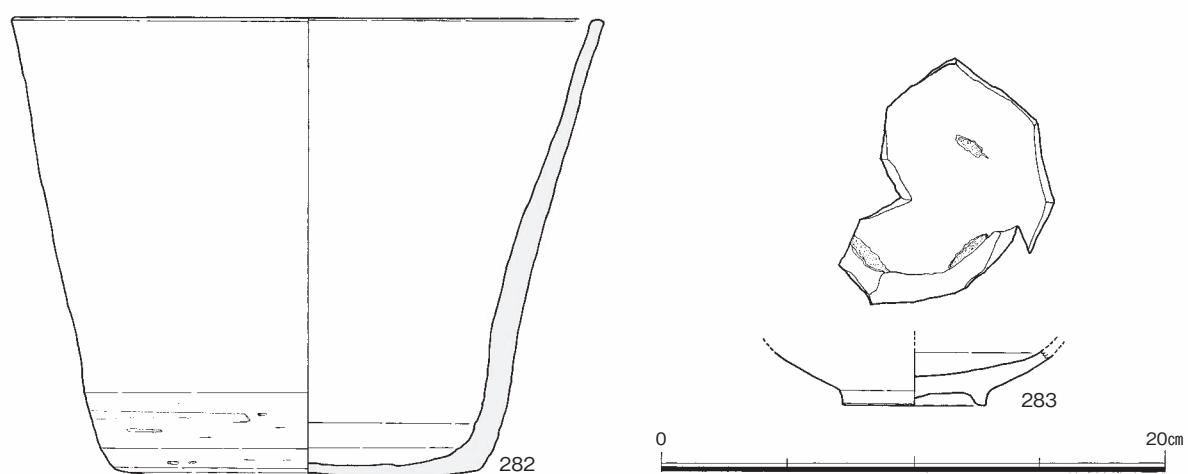


Fig.56 SX111出土遺物9 (1/2・1/3)



281



20cm

Fig.57 SX111～SX123上・中層出土遺物 (1/3)

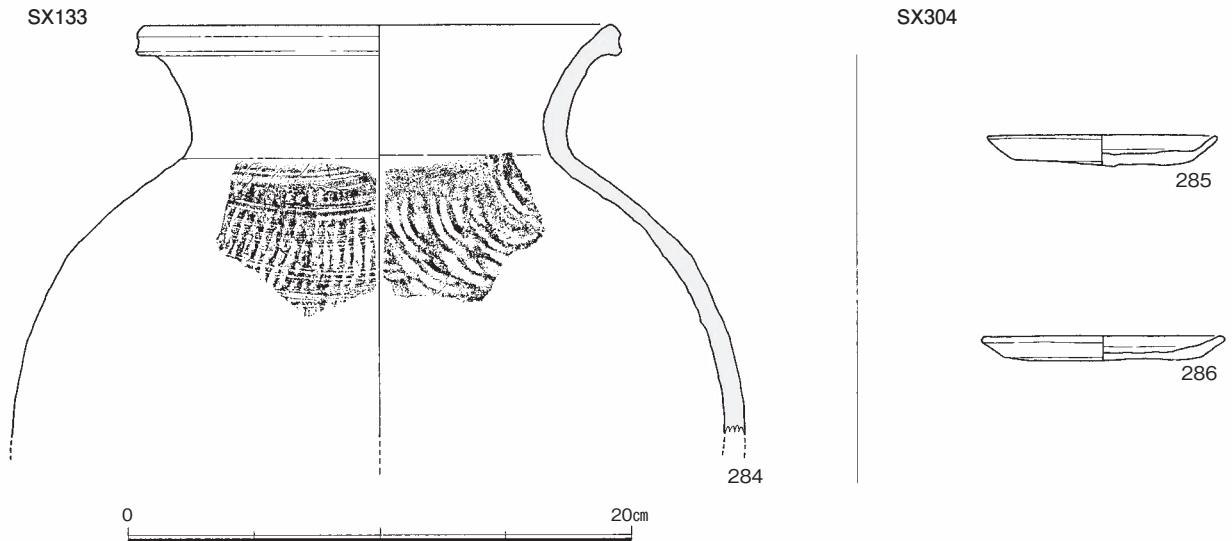


Fig.58 SX133・304出土遺物 (1/3)

22mである。上面は中～近世の畠地、棚田造営のための搅乱が著しく、相当の破壊が認められる。古代の造成も基盤層に達する掘削部分や盛土造成部分、二次堆積物の形成、複数の遺構の切り合いなど複雑なために、この遺構については遺構内でさらに2mグリットを設定して調査を進めた。その結果、遺物群の集中的検出範囲と標高から3群の造成面に区分される事が判明した。ここでは標高の高いほうから「上段」、「中段」、「下段」と呼ぶ。

上段は標高35m付近にあり、最も西側の山寄に配置する。南側は土坑SK180付近から北は建物SB153までであり、およそ南北30m、東西6～7mの範囲である。造成は地山の削り出しが主であり、山側には地山を掘り込んだコ字形や弧状の排水溝が繰り返し掘られている。東側は近世以降の削平で大きく失うが、地山削り出しだけでなく、一部に盛土が存在したと考えられる。この上段では比較的大型の掘立柱建物9棟や土坑などが重複して確認されている。

中段は標高32～33m付近にあり、北側は地山の削り出し、南側は埋め立て、盛土によって造成されている。上段と同様に山側には地山を掘り込んだコ字形や弧状の排水溝が掘られている。北側は建物SB148、南側は建物SB146付近までであり、およそ南北35m、東西10mの範囲である。中段が單一面をなしていたかは明らかに出来なかつたが、さらに複数の平坦面に区分される可能性もある。東側の境界は石垣SX142と考えられる。この中段では掘立柱建物11棟や鍛冶炉、土坑などが重複して確認されている。この中で特に遺跡内のほとんどの鍛冶炉はここに集中しており、工房域の様相がある。

下段は標高31m前後であり、石垣SX142以東の範囲であり、斜面の盛土や池状遺構SX123の西岸を埋め立てられた造成面である。南北15m、東西6mの範囲であり、遺構の検出状況から見て上・中段と異なり整然とした平坦面が設けられる事はなく、斜面のまま利用されていたと考えられる。この下段では総柱建物2棟や精錬炉、鍛冶炉などが検出された。

SX111検出時や造成土調査中に多くの遺物が出土した。遺物には須恵器、土師器、土製品、製鉄関連遺物がある。須恵器には壺類(145～168、179～194)、皿類(169～178)、高壺(195、196)、壺(197～207)、甕(208～213)、鉢(214、215)がある。土師器には壺類(216、217、224～234)、皿(218～223、235)、高壺(236、237)、壺(238)、甕(239～272)、甑(273)、取手(274～276)がある。土製品には玉(277)、製鉄関連遺物には鉄滓、鞴羽口(278～280)などがある。遺物の時期は須恵器壺類(145、146、164～166)や土師器壺(238)などが6世紀後葉～7世紀初頭となる以外のほ

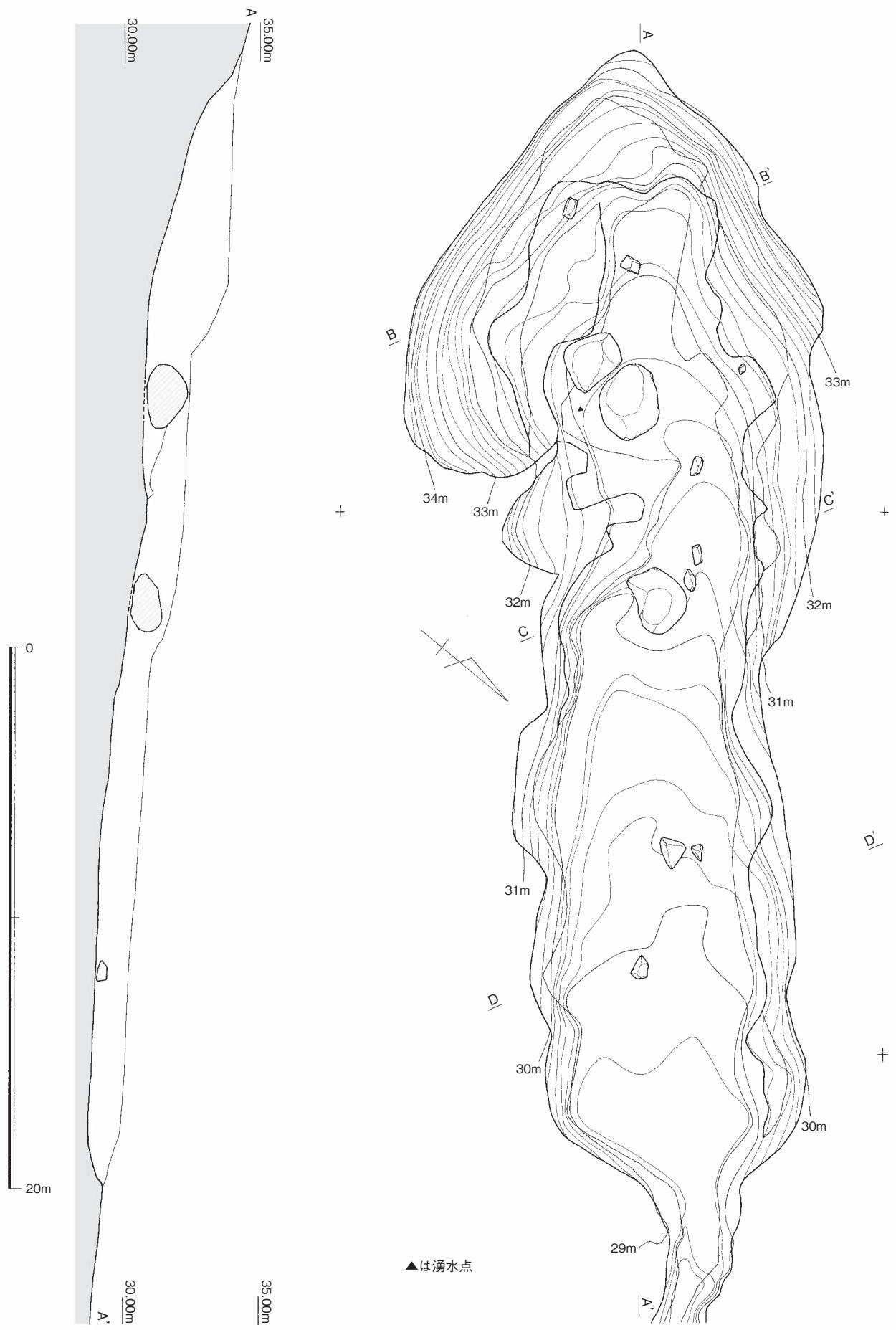
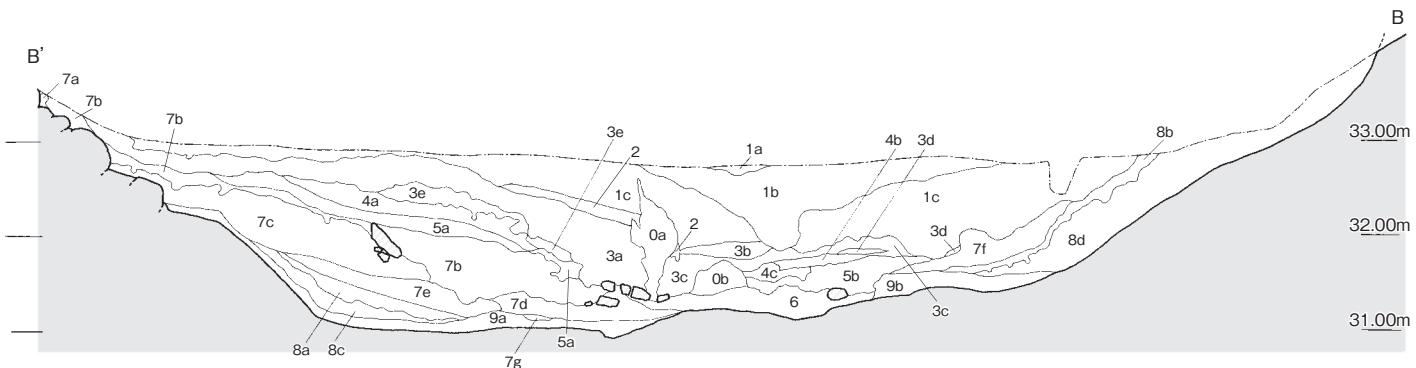
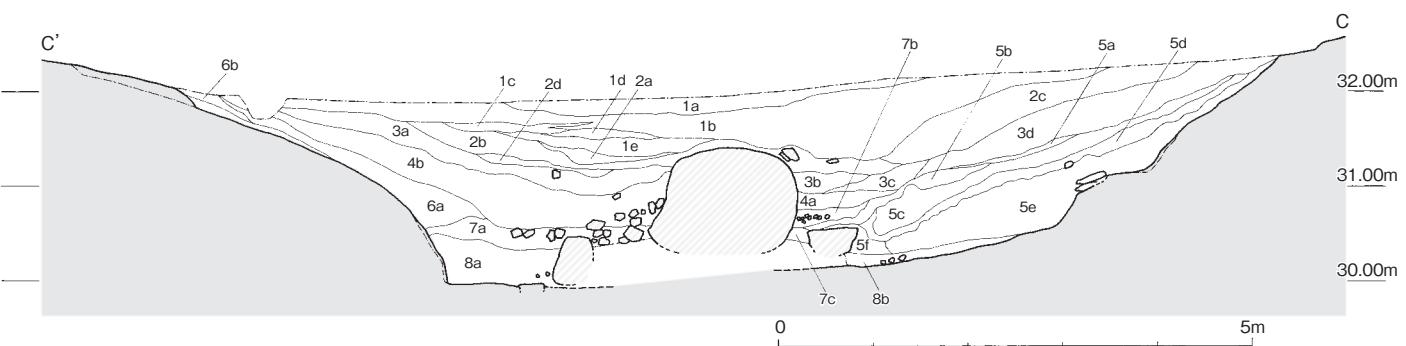


Fig.59 池状遺構SX123平面・断面図 (1/200)



- 0a. 灰白色粗砂 砂礫(φ4~5cm大)多く含む 無層理 下部湧水と関係する噴砂堆積土 6より垂直方向に形成
 0b. 灰白色粗砂 砂礫(φ4~5cm大)多く含む 無層理 下部湧水と関係する噴砂堆積土 6より垂直方向に形成
 1a. 黄灰色粗砂 層理状
 1b. 黒色~暗黒褐色有機質土 植物片多く含む いわゆる「馬フン層」状 下面と不明瞭
 1c. 黒・黒灰色土 小礫(φ5mm以下)多く含む 全体的に無層理 水分含むとドブ状(乾くとクラック) 下面やや凹凸、不明瞭
 2. 暗青灰色粗砂混じり土 地山二次堆積土(グライ化) 上下面やや凹凸 地山崩壊土か
 3a. 黑・黒灰色土 粗砂、小角礫(φ10cm以下)含む 全体的に無層理 下面著しい凹凸、やや漸移(層下位に層理)
 3b. 黒褐色有機質土 植物多量に含む 植物片、粗砂が層理状堆積 下面明瞭、フラット
 3c. 黑・黒灰色土 粗砂含む 粘性強い 6に直接接する ほぼ無層理
 3d. 黄灰色粗砂 細砂 やや鉄分沈色 層理状 上下層と明瞭、フラット
 3e. 灰黑色土 粗砂含む 上下面凹凸 4a-3aの漸移層
 4a. 青灰~暗青灰色粗砂混じり土 地山二次堆積土(グライ化) 下面フラット 上面凹凸 下半に粗砂の層理
 4b. 青灰~暗青灰色粗砂混じり土 地山二次堆積土(グライ化) 下面フラット 全体に層理状
 4c. 青灰~暗青灰色粗砂混じり土 暗色強い 粘性 下面やや凹凸かつ明瞭
 5a. 黒灰色粗砂混じり土 下部にて層理状 上部やや漸移気味堆積
 5b. 黒色~黒灰色土 粗砂、小角礫含む 粘性 上下面明瞭区分
 6. 磨層 角礫(φ50~60cm以下)、亜円礫(φ20~30cm以下)密に含む 磨間粗砂、小角礫 下面明瞭
 7a. 茶褐色土 粗砂多く含む 地山直接堆積 上面やや漸移 下面凹凸
 7b. 暗茶褐色土 粗砂多く含む 上下面凹凸 上部漸移 D区より東側はグライ化(青灰色気味)
 7c. 黄褐色土 硬くしまる 粗砂多く含む 谷中央に堆積、グライ化 下面フラット 上面やや凹凸、漸移 地山二次堆積土か
 7d. 青灰色土 硬くしまる 粗砂多く含む 鉄合柱若干形成 やや赤変 上面凹凸 下面フラット
 7e. 暗青灰色土 粗砂多く含む 粘性強い やや黒色の汚れ(腐植混入)
 7f. 暗灰色ラミナ層 全体に層理状 黒色粘質土レンズ、細砂、粗砂の互層状堆積 下面フラット明瞭
 8a. 暗茶色~暗青灰色土 粗砂多く含む 上部腐植形成 下面凹凸、漸移
 8b. 暗茶色~暗青灰色土 粗砂多く含む 上部腐植形成 下方一部ラミナ状堆積
 8c. 暗青灰色土 粗砂多く含む 下部明色化 上下面共に凹凸
 8d. 青灰色土 粗砂、小角礫含む 下面フラット(不整合) 上面凹凸
 9a. 黄灰・明黄褐色土 粗砂(谷部底ではφ10cm大角礫)多く含む 鉄分沈着か 下面フラット不整合
 9b. 青灰色砂礫 角礫(φ10cm以下)多く含む 磨間粗砂 ラミナ状堆積



- 1a. 黒灰色砂混じりシルト質砂 小礫(φ5mm以下)多く含む やや粘性 水分あまり含まない
 1b. 黒灰色(やや茶味)砂混じりシルト質砂 小礫(φ5mm以下)含む 炭化物(φ1cm以下)少量含む やや粘性 若干水分含む 木片、土器片含む
 1c. 暗黄灰色砂 小礫(φ1cm以下)含む 粘性なし 若干水分含む
 1d. 黑褐色シルト混じり砂 小礫(φ5mm以下)含む わずかに粘性 若干水分含む 砂層と互層状
 1e. 黑灰色砂混じりシルト質砂 小礫(φ2cm以下)少量含む やや粘性 若干水分含む 砂層と互層状
 2a. 暗灰褐色シルト混じり砂 小礫(φ2cm以下)多く含む わずかに粘性 若干水分含む
 2b. 黑灰色砂混じりシルト質砂 砂(φ10cm以下)、小礫(φ3cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 2c. 暗灰褐色砂混じりシルト質砂 小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 2d. 2aに似る
 3a. 暗青灰色シルト混じりシルト質砂 小礫(φ2cm以下)含む やや粘性 若干水分含む 土器片少量含む
 3b. 暗青灰色シルト混じりシルト質砂 小礫(φ5mm以下)含む やや粘性 若干水分含む 土器片少量含む
 *3a, 3b: 一連のものか
 3c. 暗灰色(やや青味) シルト混じりシルト質砂 小礫(φ5mm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 3d. 暗青灰色シルト混じり砂 小礫(φ2cm以下)含む わずかに粘性 若干水分含む 土器片含む
 4a. 暗黄灰色砂 小礫(φ2cm以下)含む わずかに粘性 若干水分含む 木片、土器片少量含む
 4b. 黑灰色(やや茶味)シルト混じりシルト質砂 砂(φ5cm以下)、小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 *4aと4b: 対応するものか
 5a. 暗青灰色シルト混じりシルト質砂 砂(φ5cm以下)、小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 5b. 暗青灰色シルト混じりシルト質砂 5aよりやや粗い 砂(φ5cm以下)、小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 *5aと5b: 一連のものか
 5c. 暗青色シルト混じりシルト質砂 砂(φ5cm以下)、小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 5d. 暗灰青色シルト混じりシルト質砂 砂(φ5cm以下)、小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 5e. 暗青色シルト混じりシルト質砂 砂(φ5cm以下)、小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 5f. 暗青色砂混じり砂質シルト 小礫(φ5mm以下)含む 粘性 若干水分含む
 6a. 暗青色シルト混じり砂 小礫(φ3cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 6b. 明褐色シルト混じり砂 小礫(φ5mm以下)含む わずかに粘性 水分あまり含まない
 7a. 暗灰色シルト混じり砂 砂(φ20cm以下)多く含む わずかに粘性 若干水分含む 木片、土器片(平行タタキのある余良期推測土器器窓片等)若干含む
 7c. 黑灰色シルト混じり砂 小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 8a. 明灰青色シルト混じり砂 砂(φ5cm以下)、小礫(φ1cm以下)含む やや粘性 若干水分含む
 8b. 明灰青色・黄灰色シルト混じり砂 砂(φ5cm以下)含む わずかに粘性 若干水分含む

Fig.60 SX123土層断面図 (1/80)

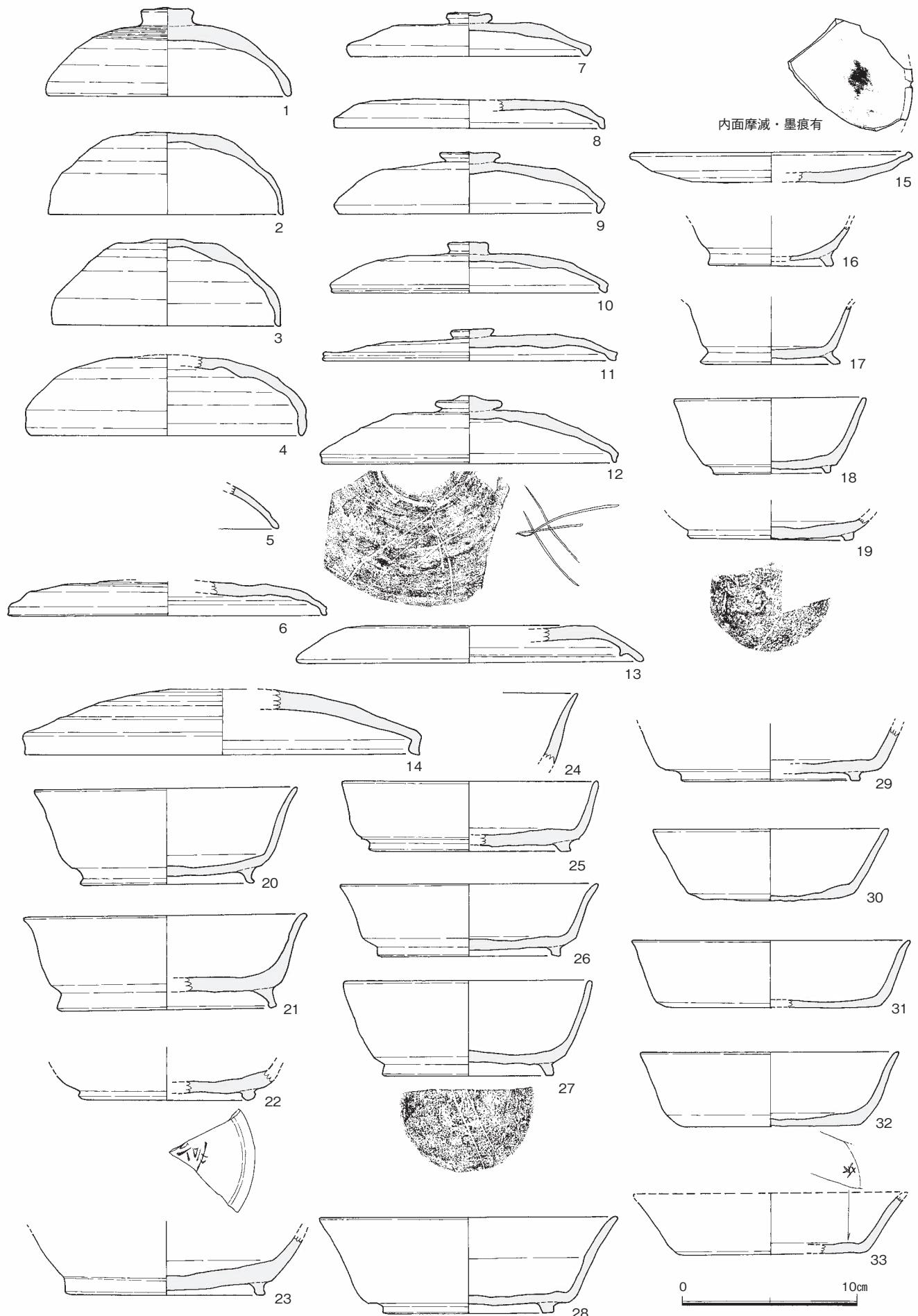


Fig.61 SX123上層出土遺物1 (1/3)

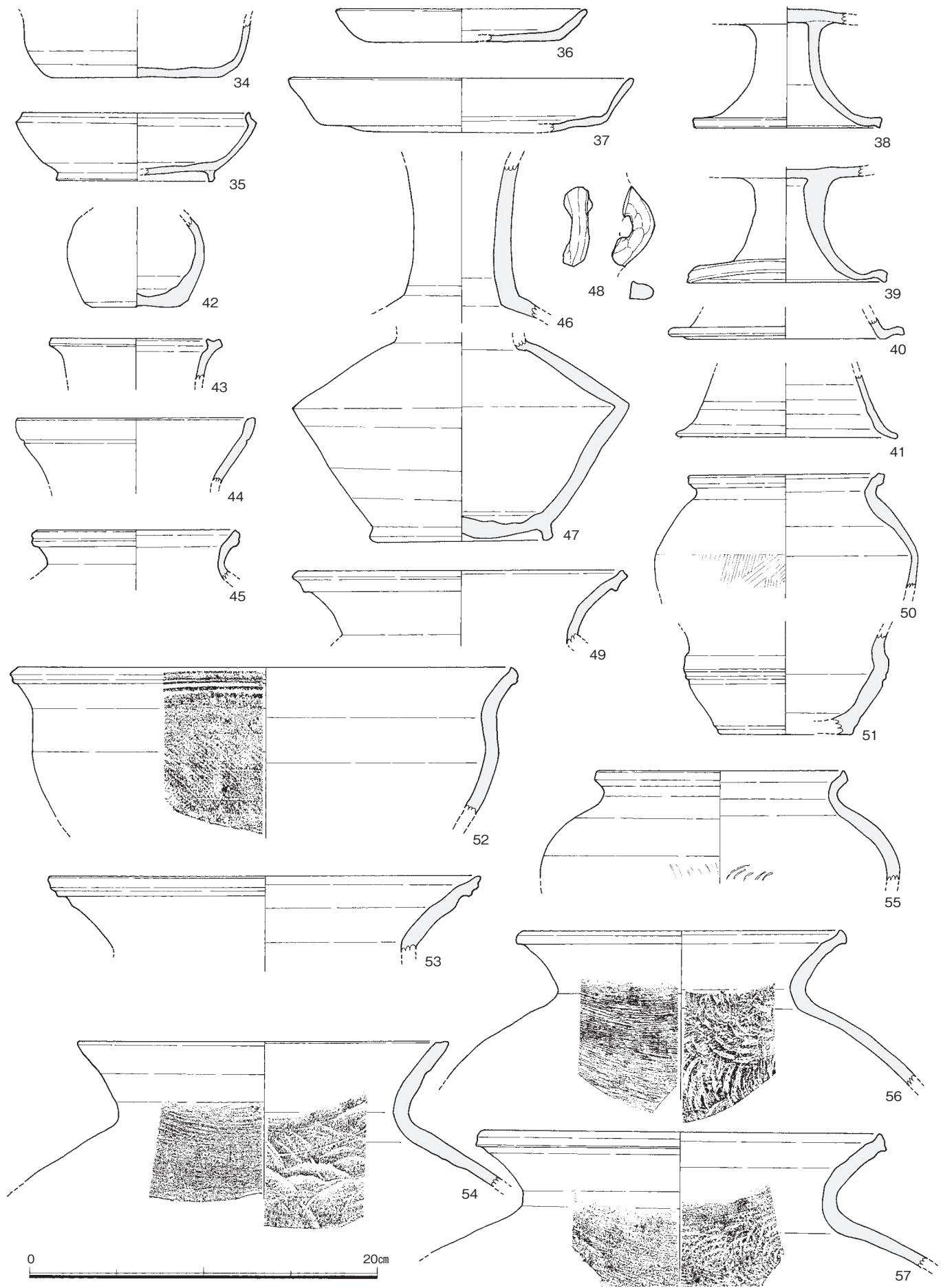


Fig.62 SX123上層出土遺物2 (1/3)

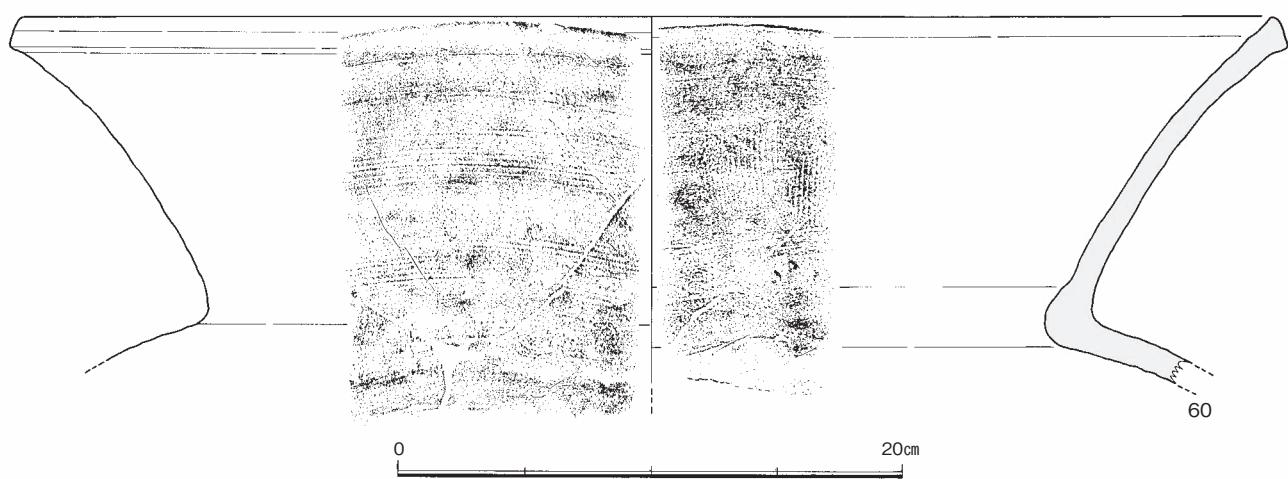
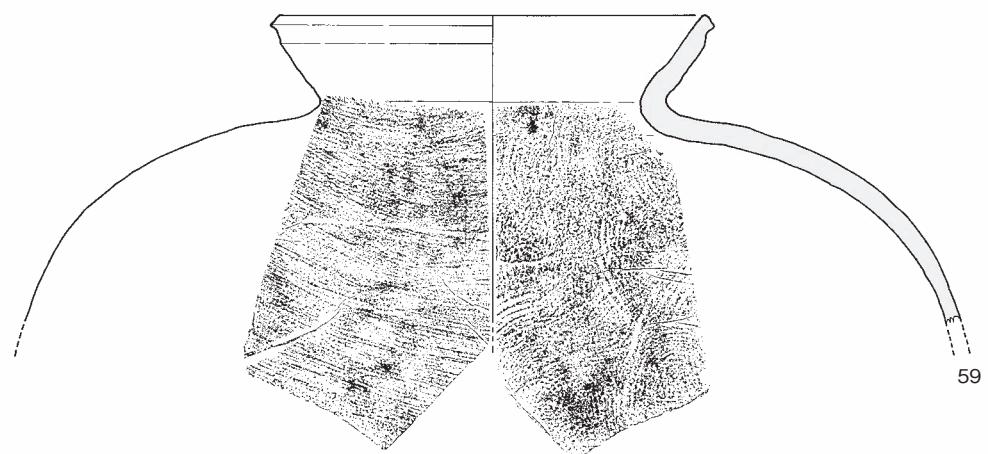
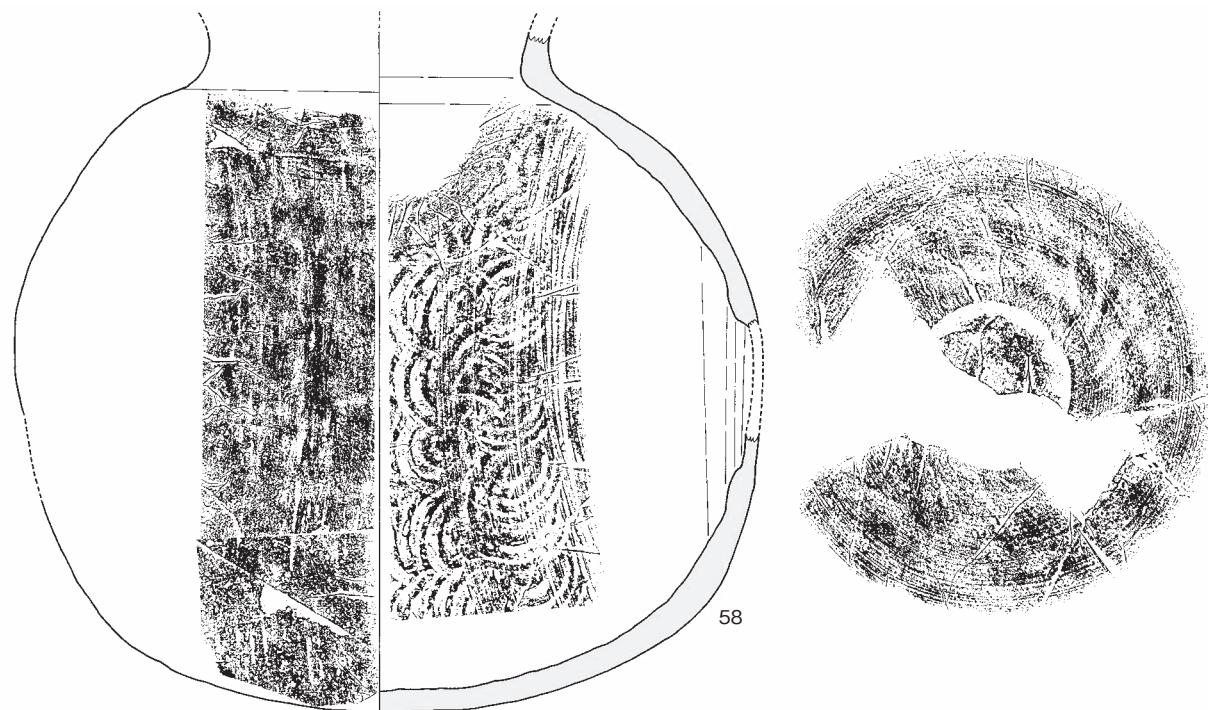


Fig.63 SX123上層出土遺物3 (1/3)

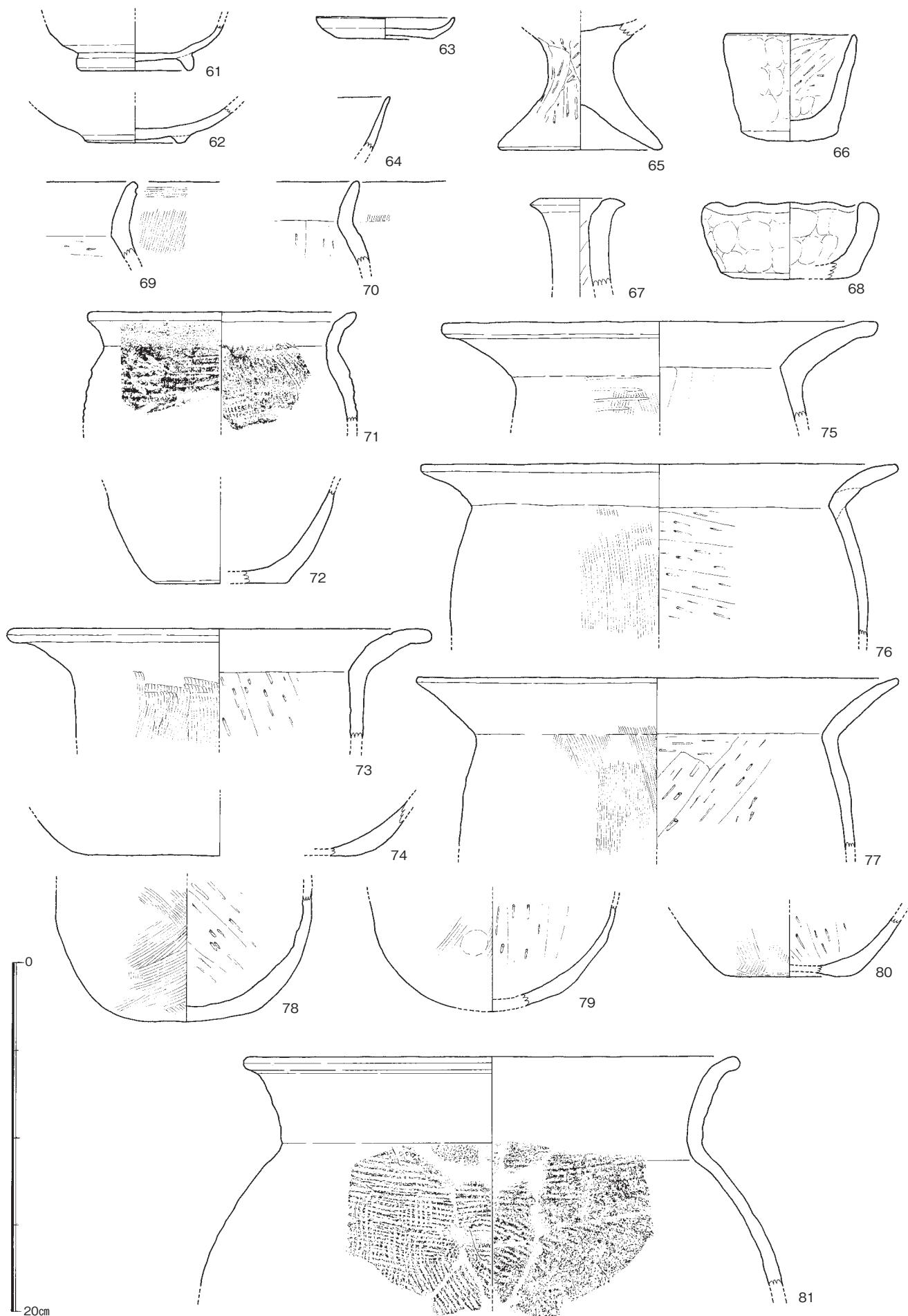


Fig.64 SX123上層出土遺物4 (1/3)

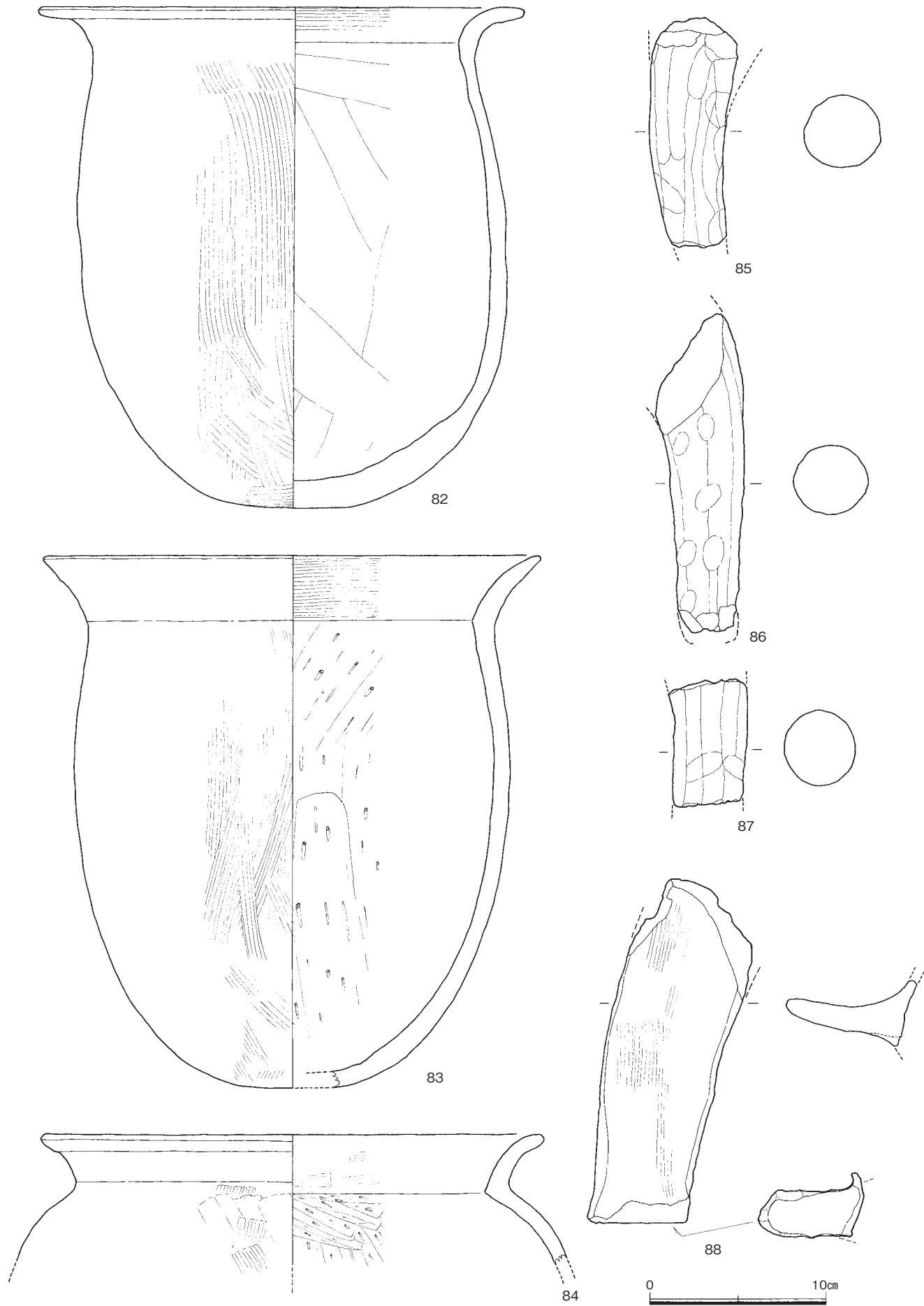


Fig.65 SX123上層出土遺物5 (1/3)

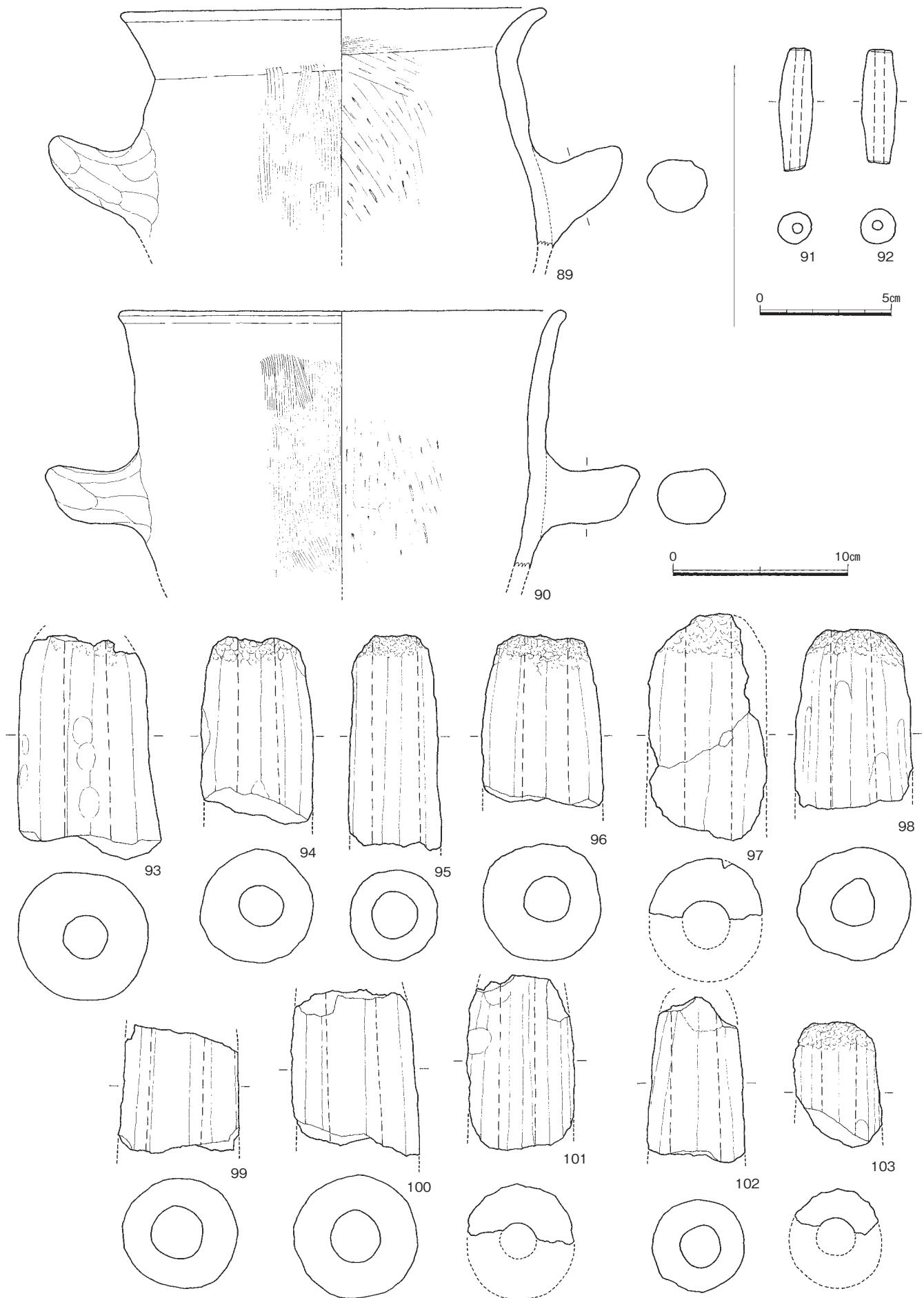


Fig.66 SX123上層出土遺物6 (1/2 · 1/3)

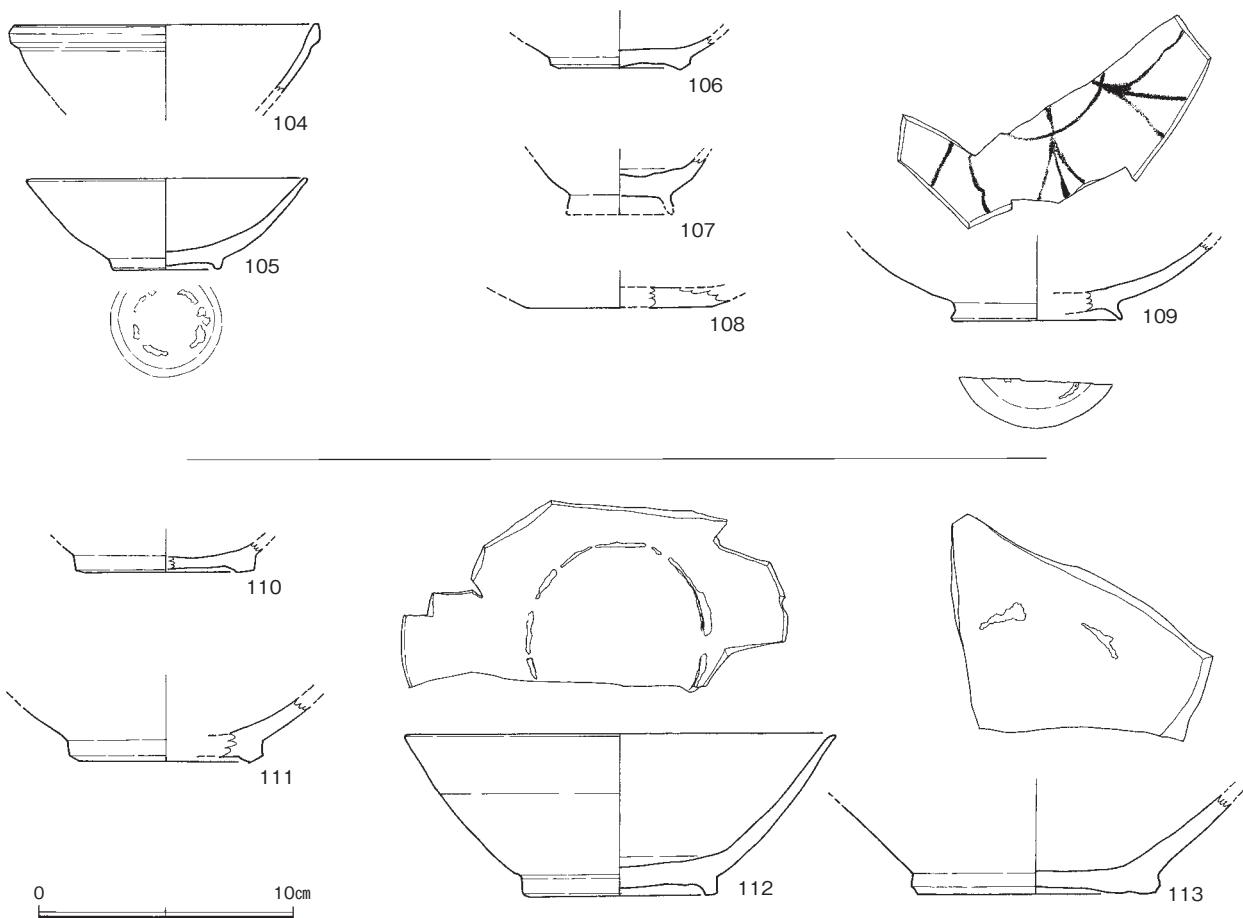


Fig.67 SX123上・中層出土陶磁器 (1/3)

とんどが、8世紀中～後葉の時期であり、少量の9世紀前半代遺物が含まれる。

10) 池状遺構

SX123 1、2区の谷部中央にあり、湧水点を中心に掘り広げられて設けられている。遺構としての検出は谷部が最大3.5mの埋土で覆われていたため、まず重機でこれを全て除去し、その後遺構内を手掘りで掘り下げた。したがって、検出面より上部の埋土についての観察や検討はできていない。なお調査中は1日あたり十数トンの湧水や谷全体から集約する雨水などの排水、土砂の対策に苦労した。

遺構は主軸をN-46°-Eにほぼ直線にとり、全長が42m、幅は南側で広く約15m、北側で約10mを測る。南側で堀方上部が拡大するのはこの部分の床面岩脈破断部分から湧水が吹き出すことや、谷奥からの雨水がこの付近から遺構内に流入するため、壁面上部のI～VI層を崩落させたことによると推定される。検出面での標高は29～34mであり、遺構としての深さは1.5～3mである。遺構の南半部並びに東壁下部はVII層（下部礫層）や基盤のVIII層（花崗岩）を掘り込んでいる。一部には岩盤上に掘削時の工具痕が認められた。北半部の西壁は浅い谷部との合流部であり、壁面上部には旧地表およびII、III層が現れている。壁面の傾斜は西側が急角で40～60°、東側はやや緩く30～40°である。床面はほぼ平坦であるが、断面C-C'付近で床面に段差がある。つまり南側は床面標高30.7～31mであり、北側は床面標高29mで平坦となる。両者の間には基盤岩の掘り残しが東壁から突出していて、本来はこの付近で池が上下に区分されていた可能性が強い。また、SX123北側で溝SD13と接続するが、その

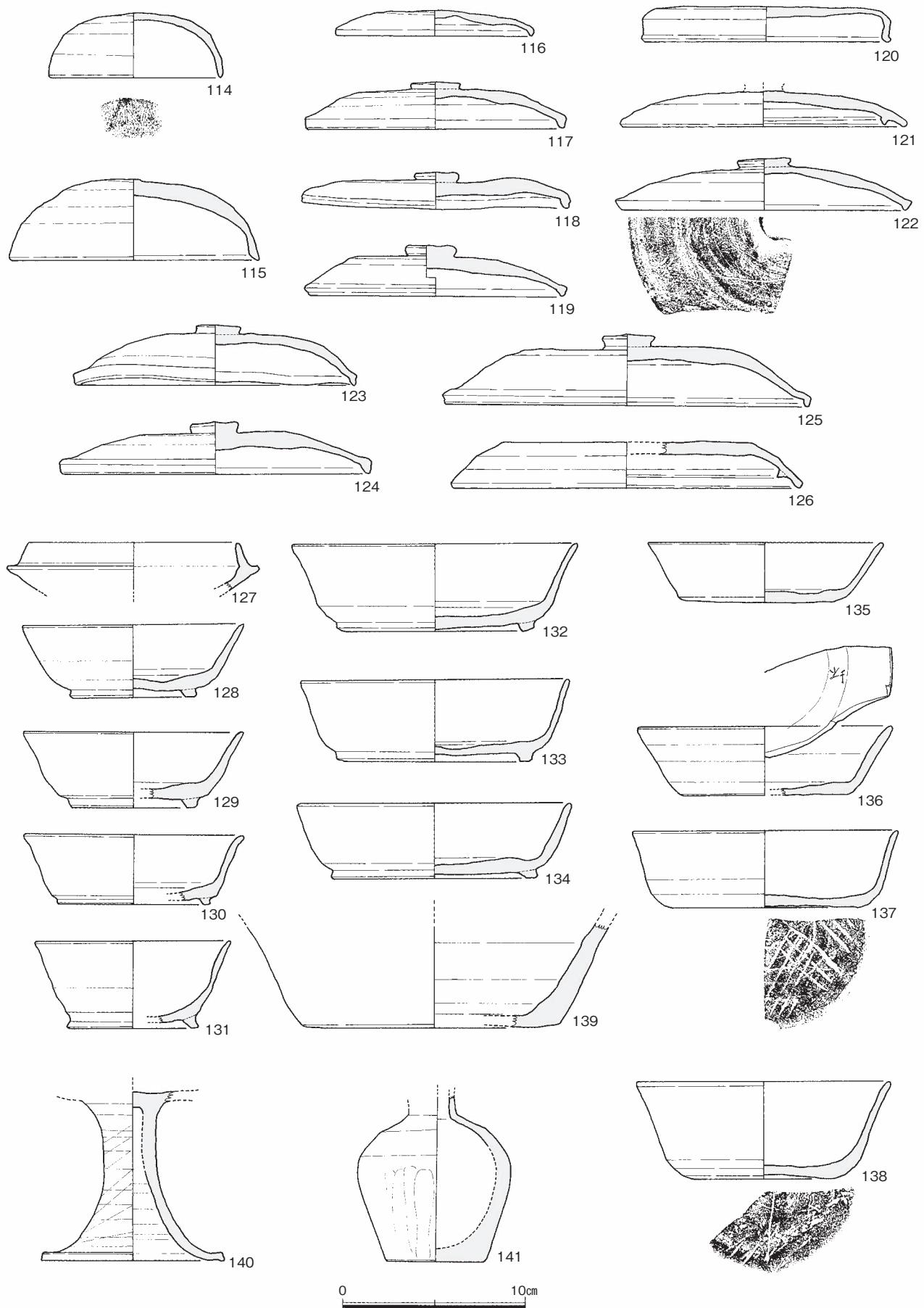


Fig.68 SX123中層出土遺物1 (1/3)

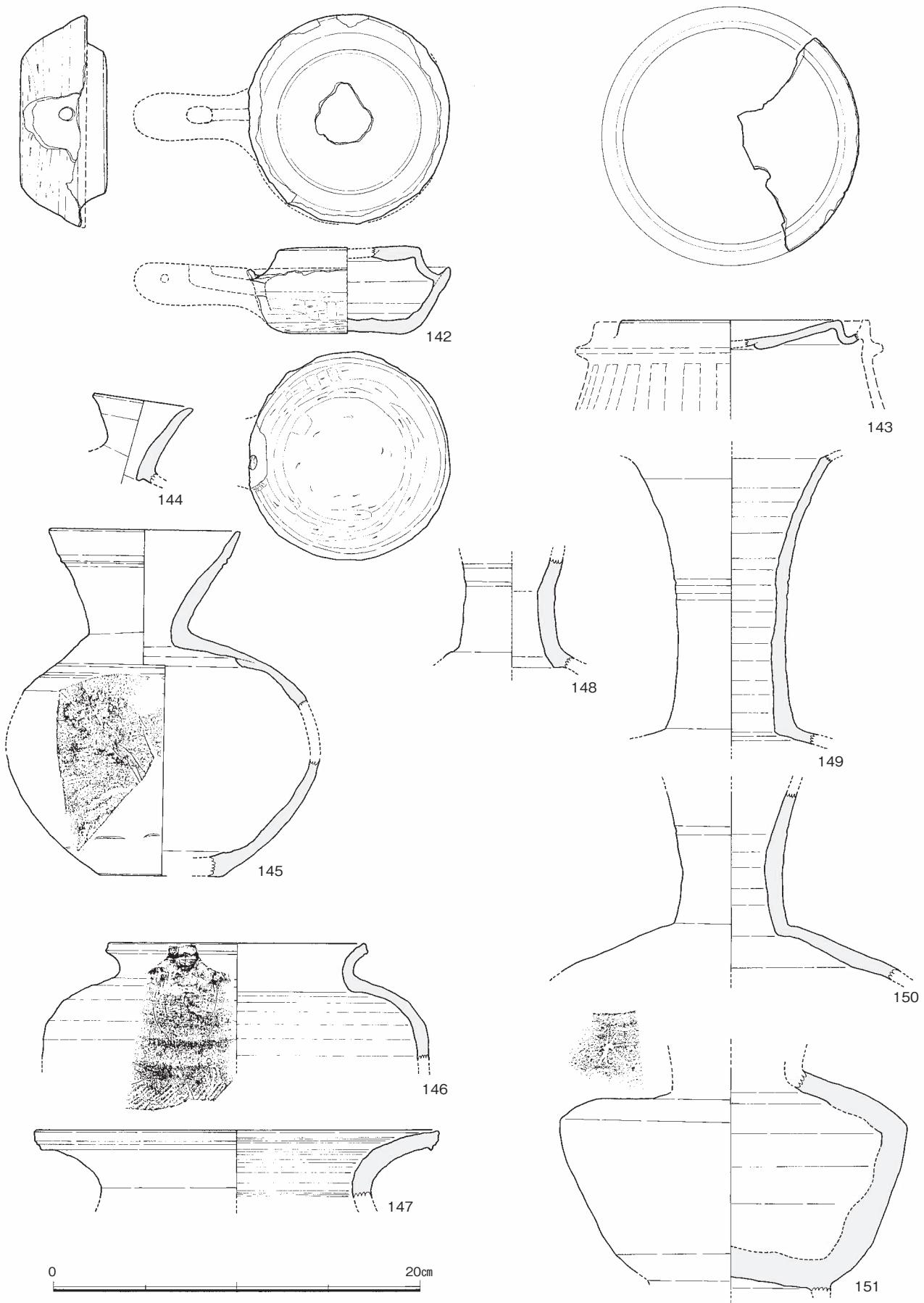


Fig.69 SX123中層出土遺物2 (1/3)

接続部に池として堰き止める杭列などの施設は認められない。ただしこの部分の床面は基盤岩が露出し、杭などが打ち込める状況ではなく、付近に厚く分布し、礫層として掘り上げた集石あるいは築堤の一部であった可能性も残る。池奥の中央部床面上に巨礫3個がある。何れも径2mを越える花崗岩亜円礫であり、本来はV層埋没のものが掘削時に残されたと考えられる。ただし、巨礫の下部に固定用と見られる礫が挿入されており、湧水点のすぐ横の巨礫の下には小型完形の鉢形土器（274）が埋置されているなど、何らかの人為的配置や利用があった可能性が高い。以下ではこの巨礫を「大磐」を呼ぶ。本遺構の埋土は床面から1.5~2.5mの範囲で観察できた。堆積状況は基本的に各所で共通し、遺構中央上層は黒褐色～黒灰色シルト、砂質土であり、中層はグライ化が進んだ暗青灰色シルト、砂質土、下層は茶褐色土を挟む暗灰色砂質土、粗砂である。

本遺構内から出土した遺物は多量であり、本遺跡出土遺物の三分の二を超える。出土遺物には須恵器、土師器、土製品、陶磁器、製鉄関連遺物、金属製品、木製品、瓦、石製品などがある。その出土状況は各層全体に及ぶ。ただし、南側の下層では遺物の出土が比較的少なく、それに対して遺構北側の下層では床面直上を中心に多量に出土した。また異なる時期の混入遺物としては遺構南側上層に隣接する池ノ浦古墳から転落した埴輪群があり、また縄文～弥生時代の土器類、石器類も各層から出土

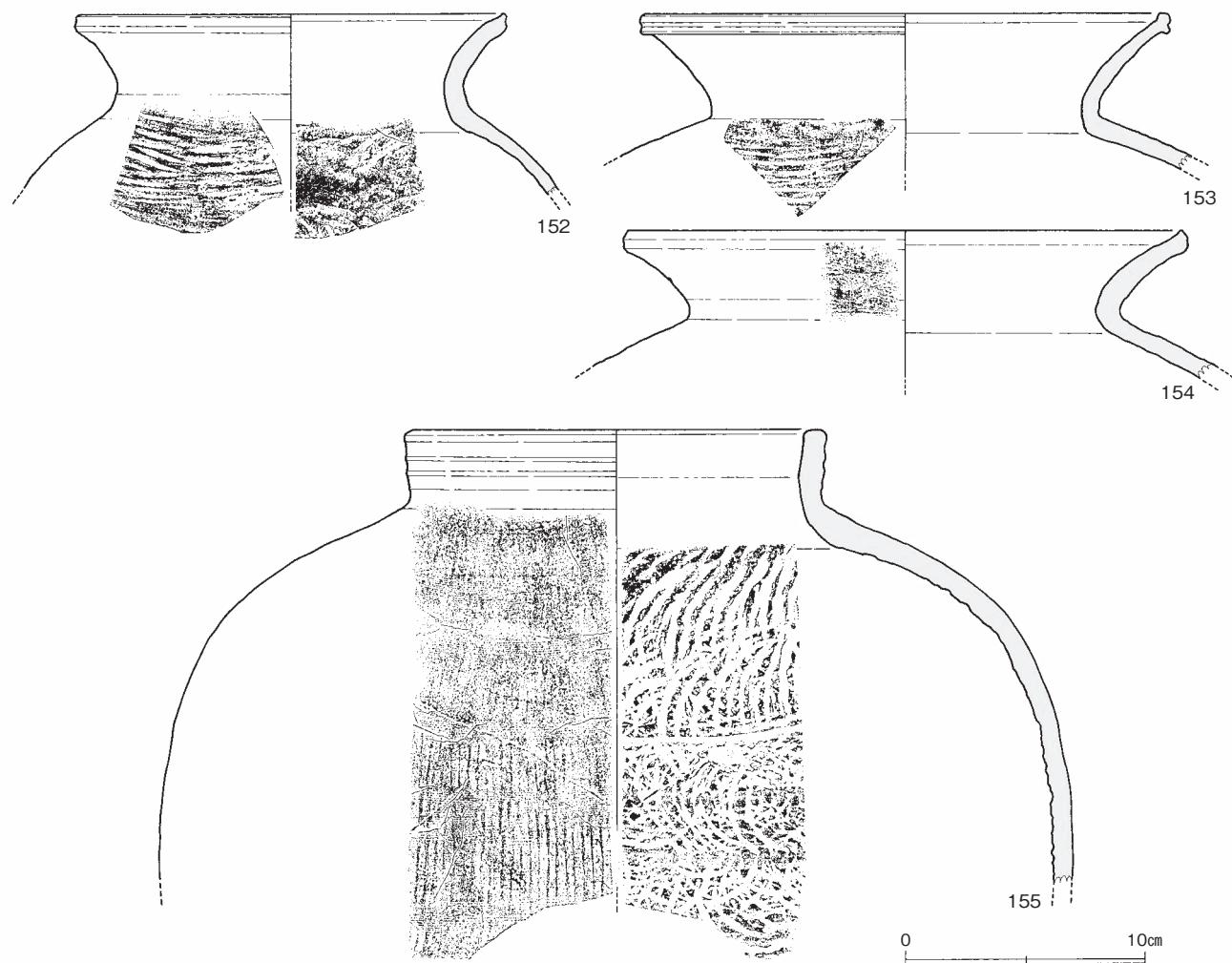


Fig.70 SX123中層出土遺物3 (1/3)

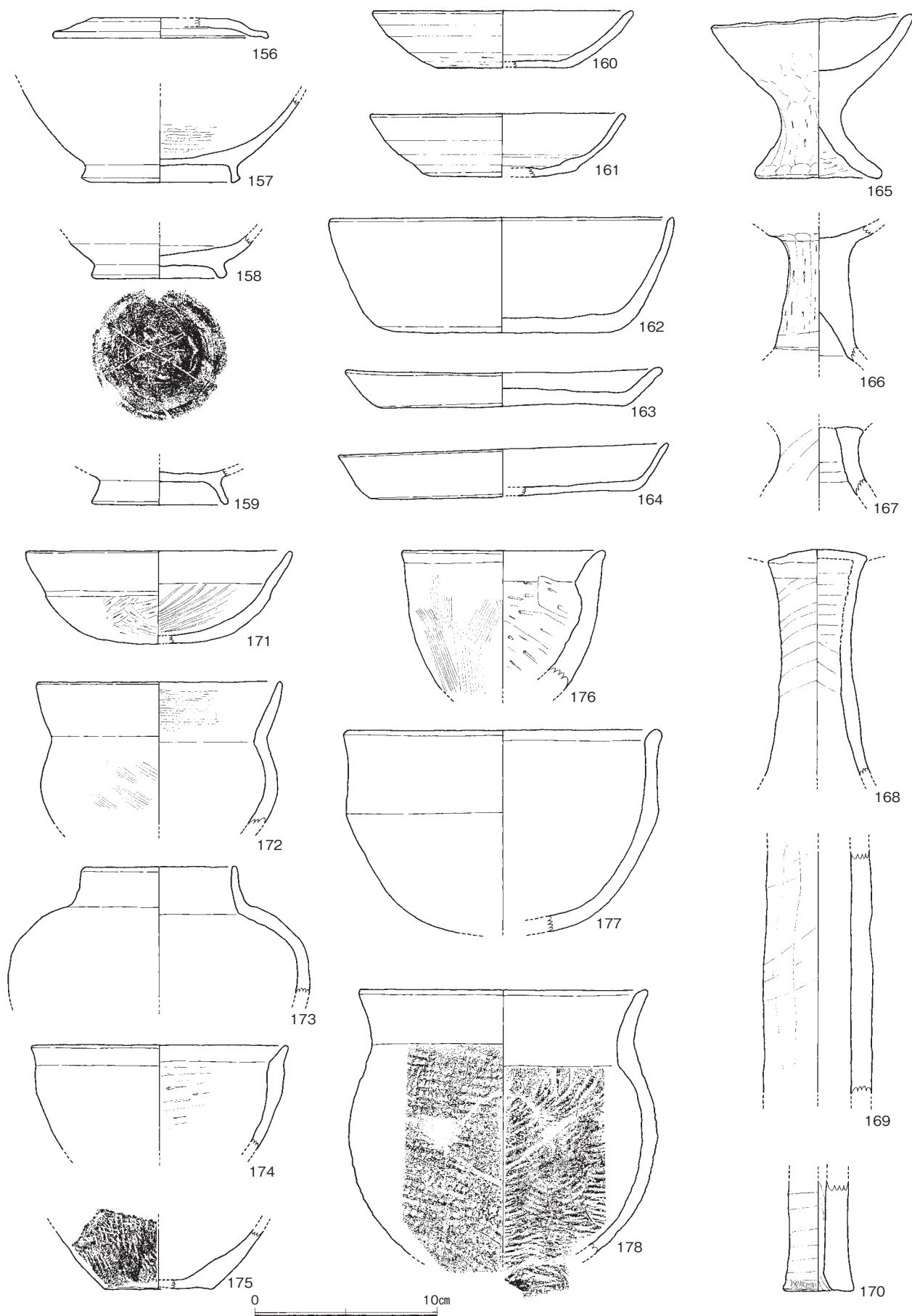


Fig.71 SX123中層出土遺物4 (1/3)

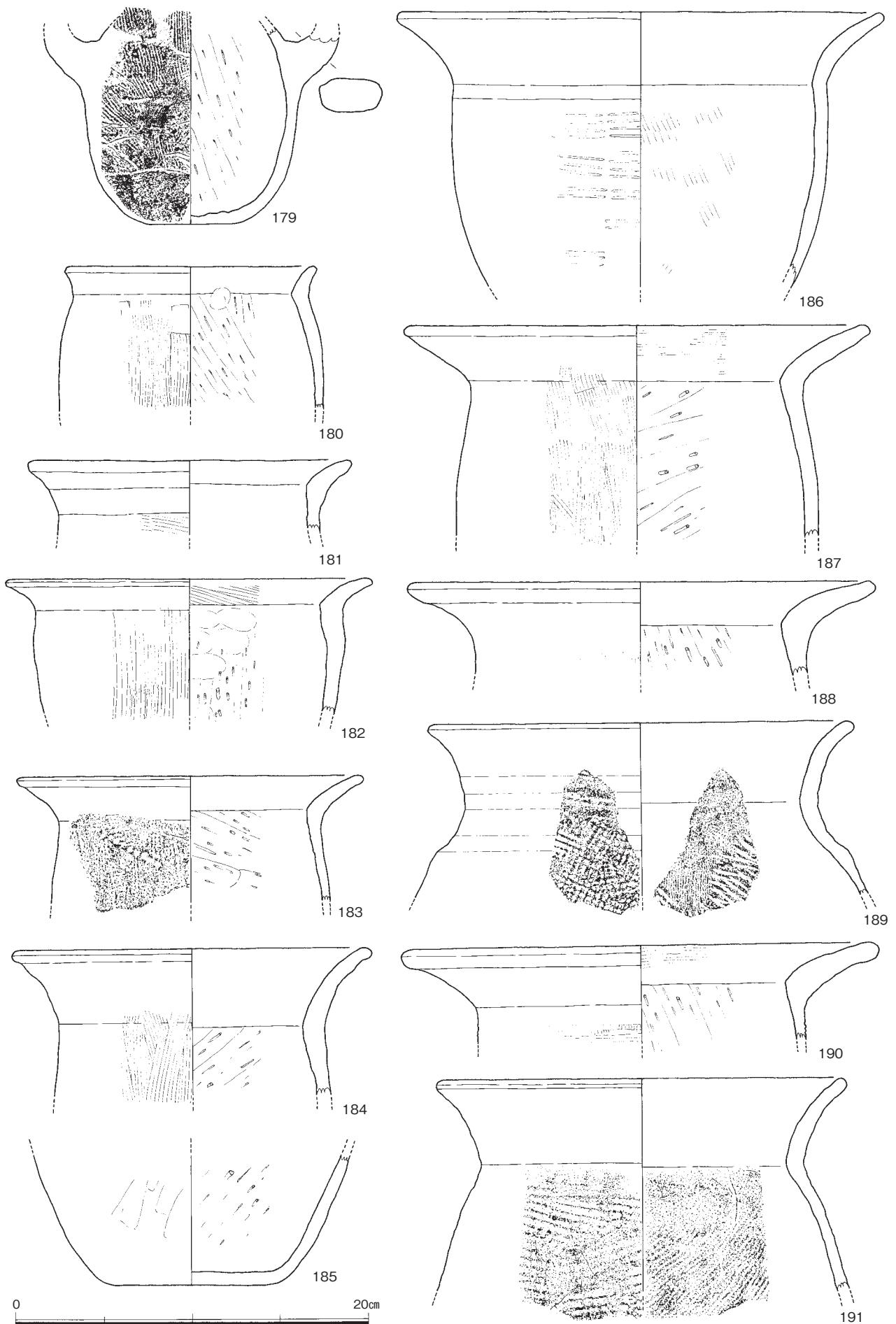


Fig.72 SX123中層出土遺物5 (1/3)

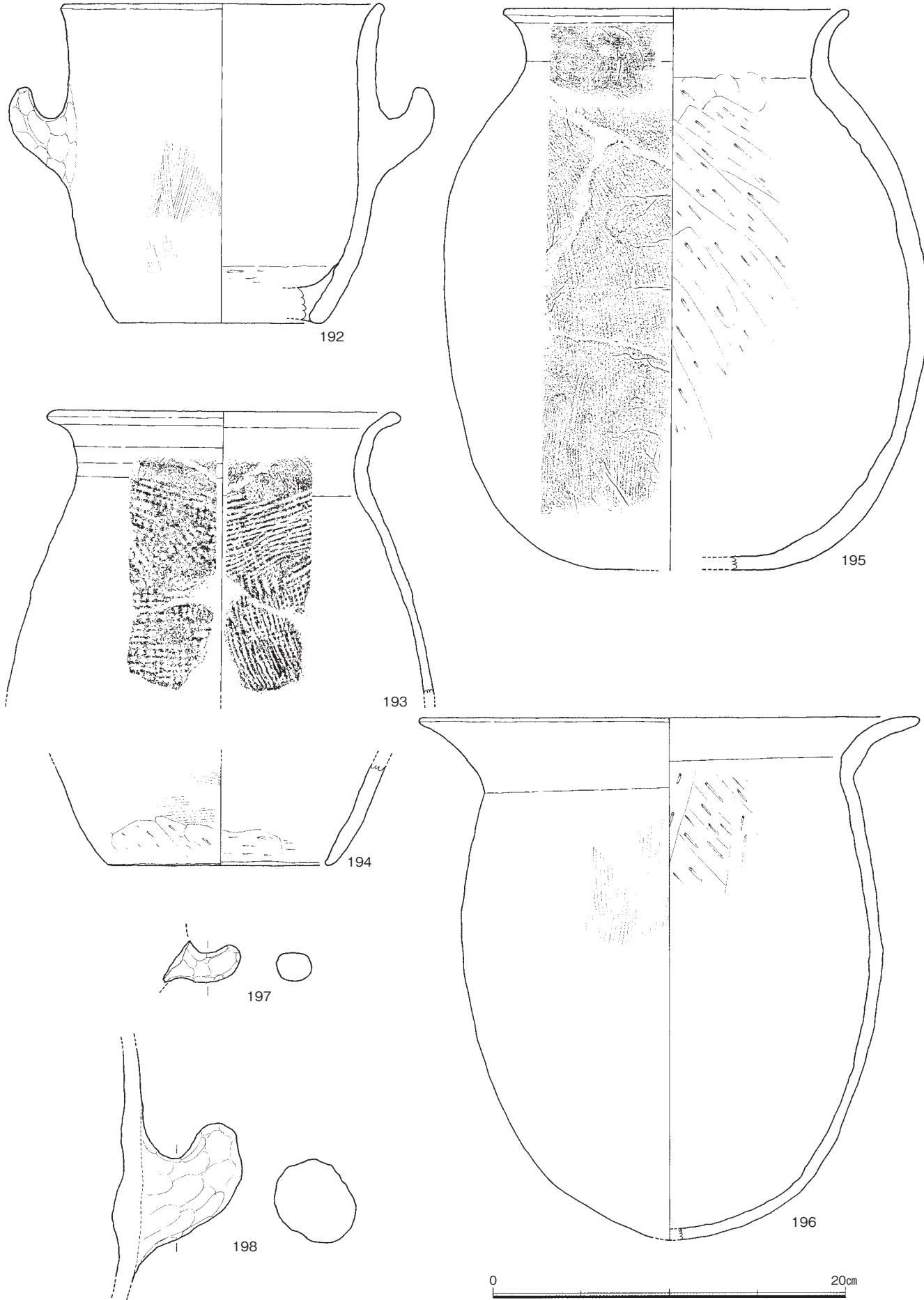


Fig.73 SX123中層出土遺物6 (1/3)

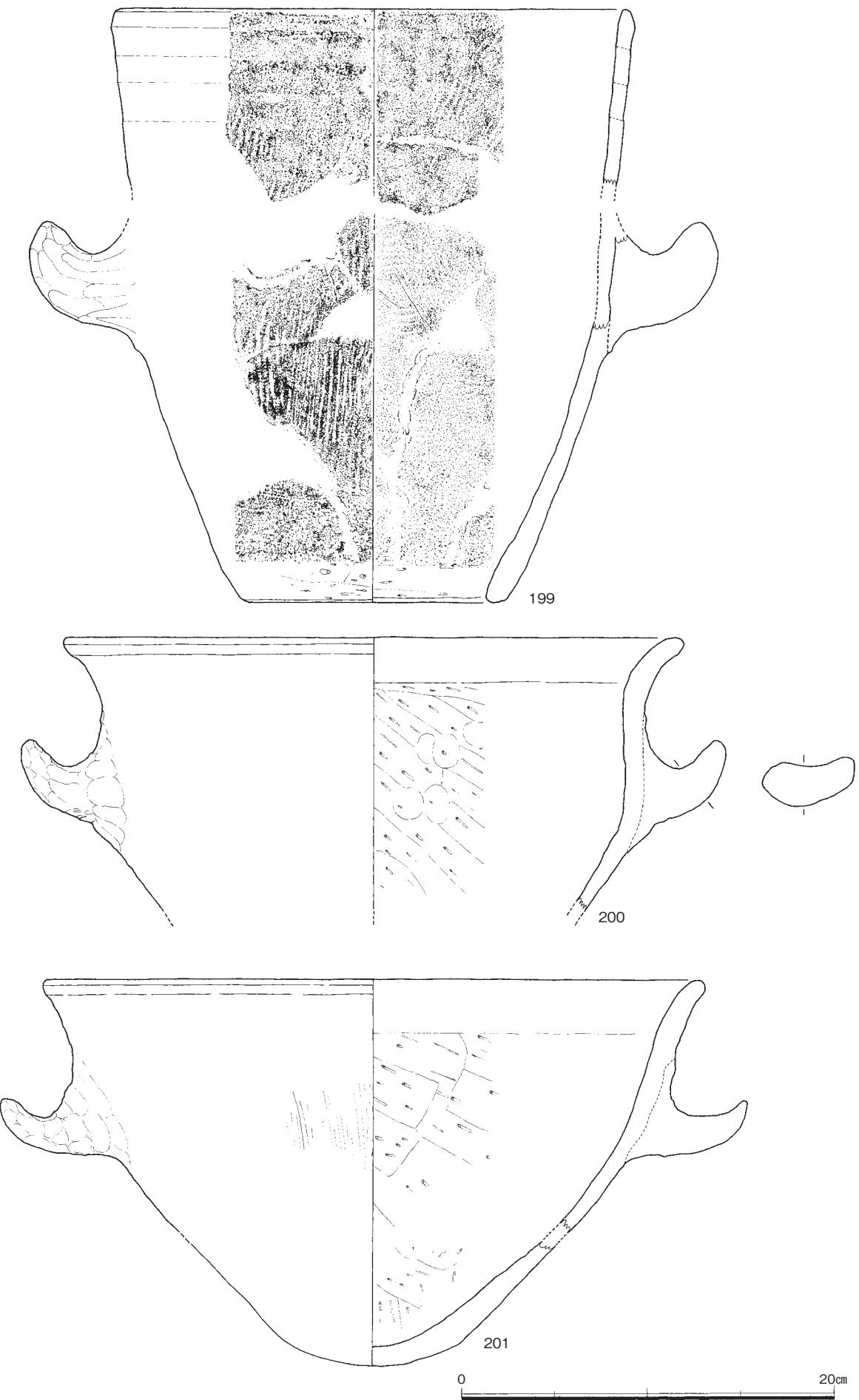


Fig.74 SX123中層出土遺物7 (1/3)

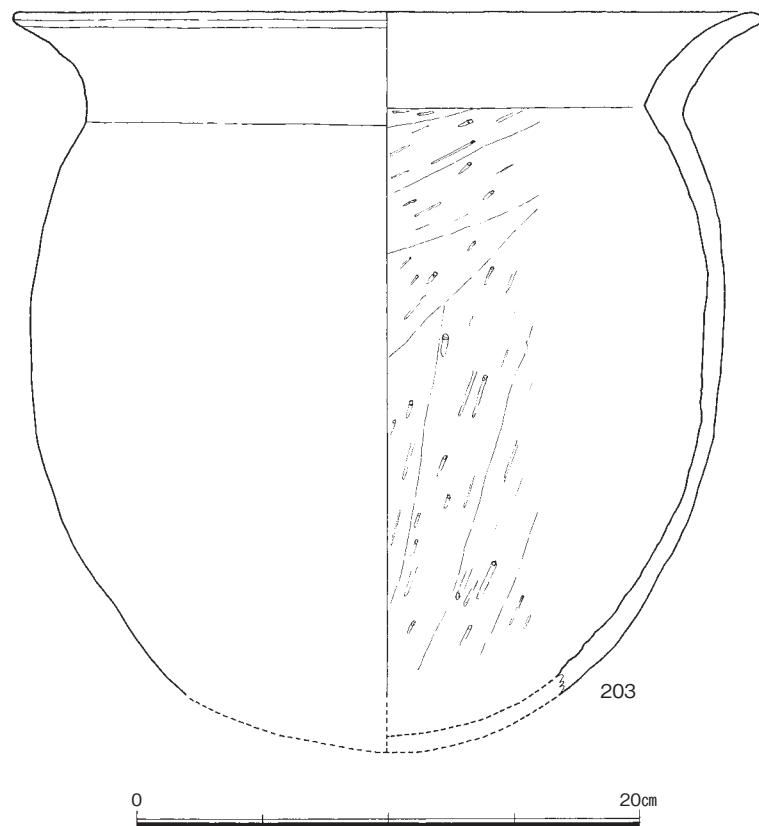
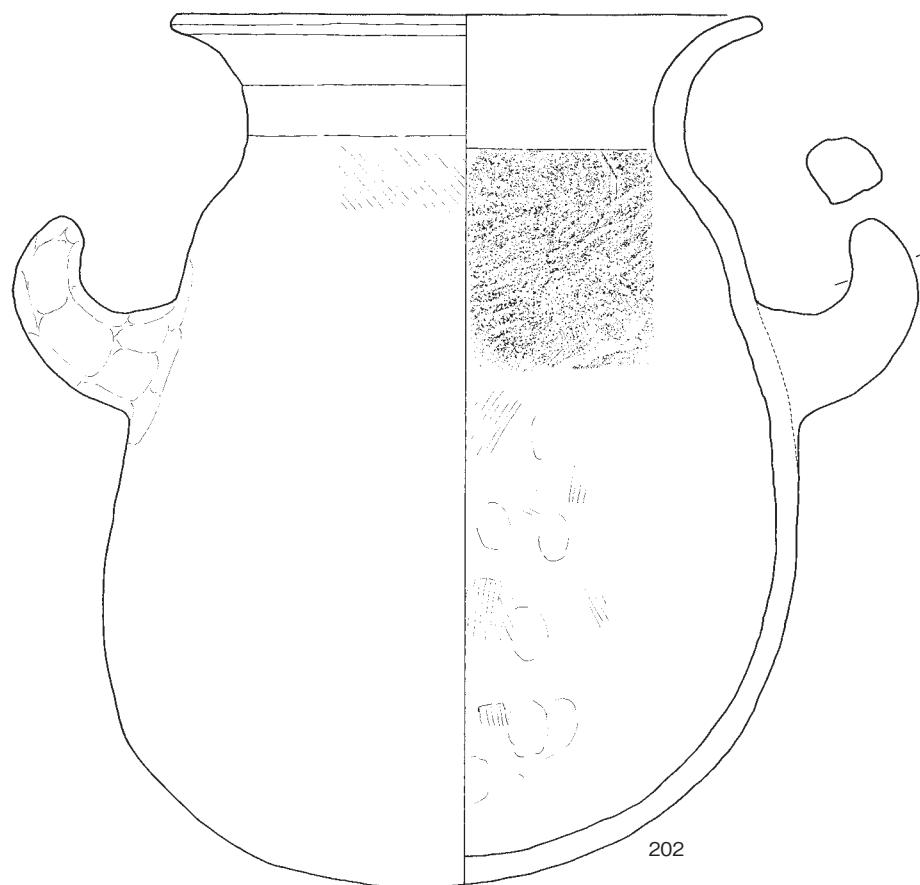


Fig.75 SX123中層出土遺物8 (1/3)

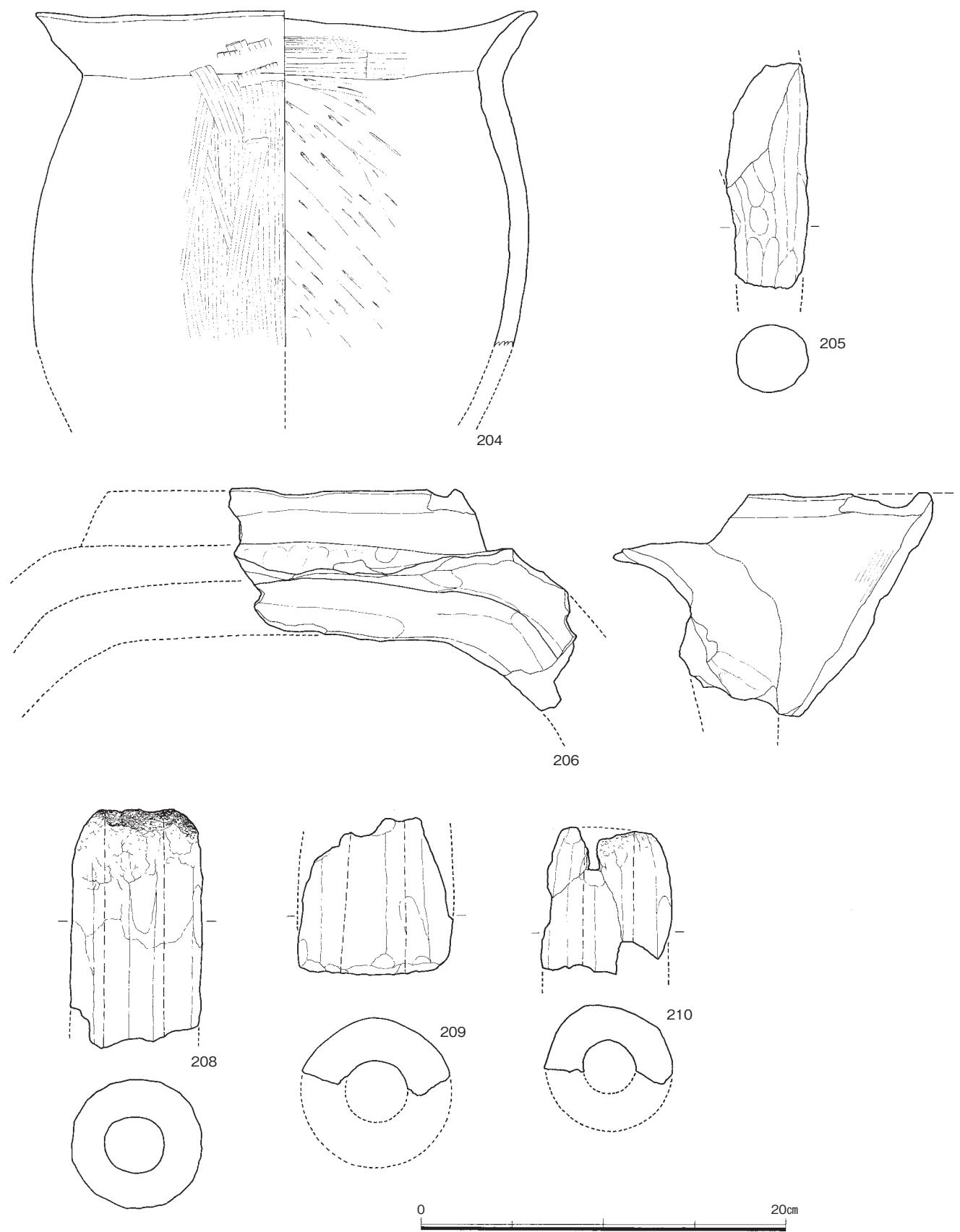


Fig.76 SX123中層出土遺物9 (1/3)

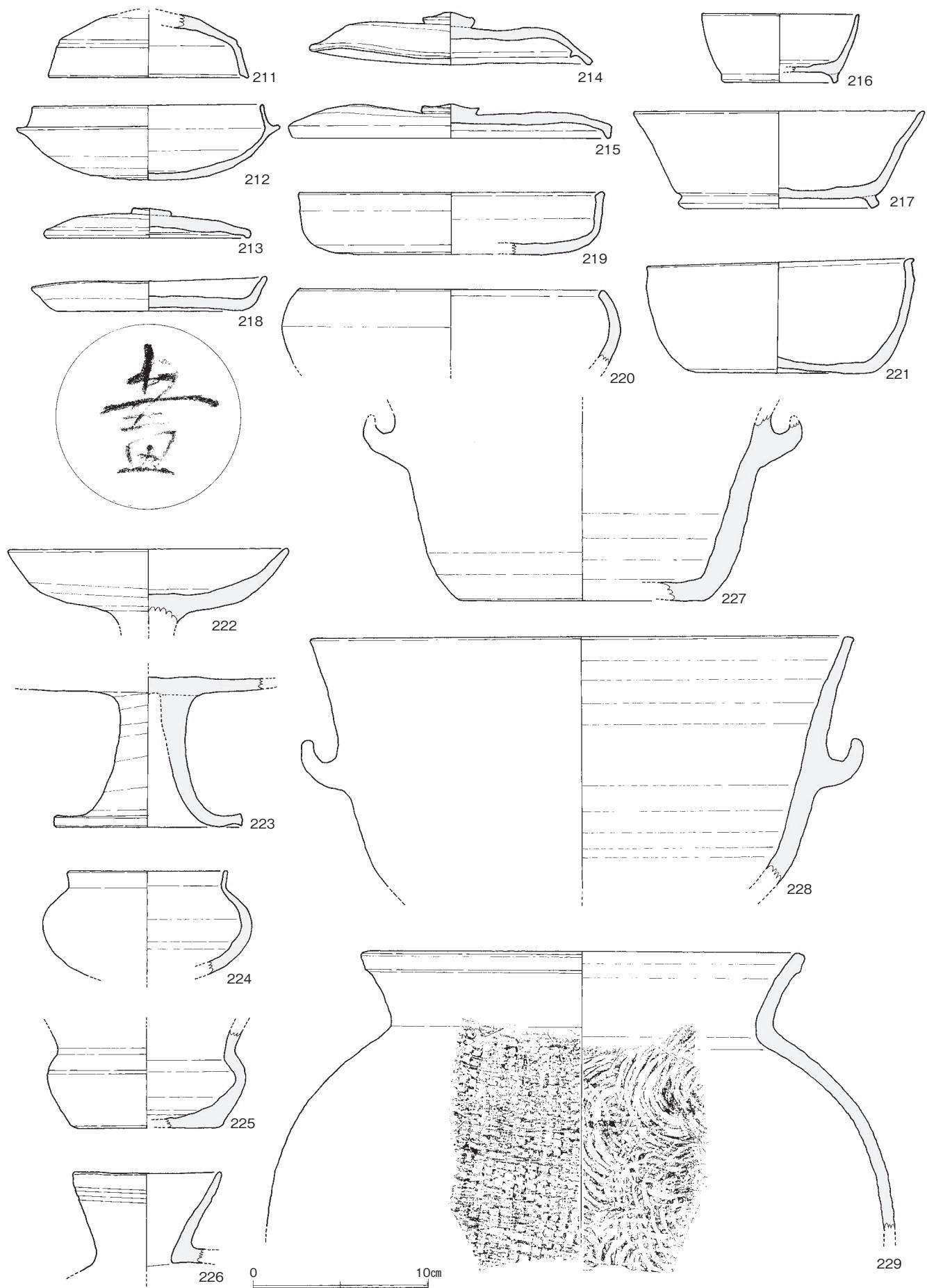


Fig.77 SX123下層出土遺物1 (1/3)

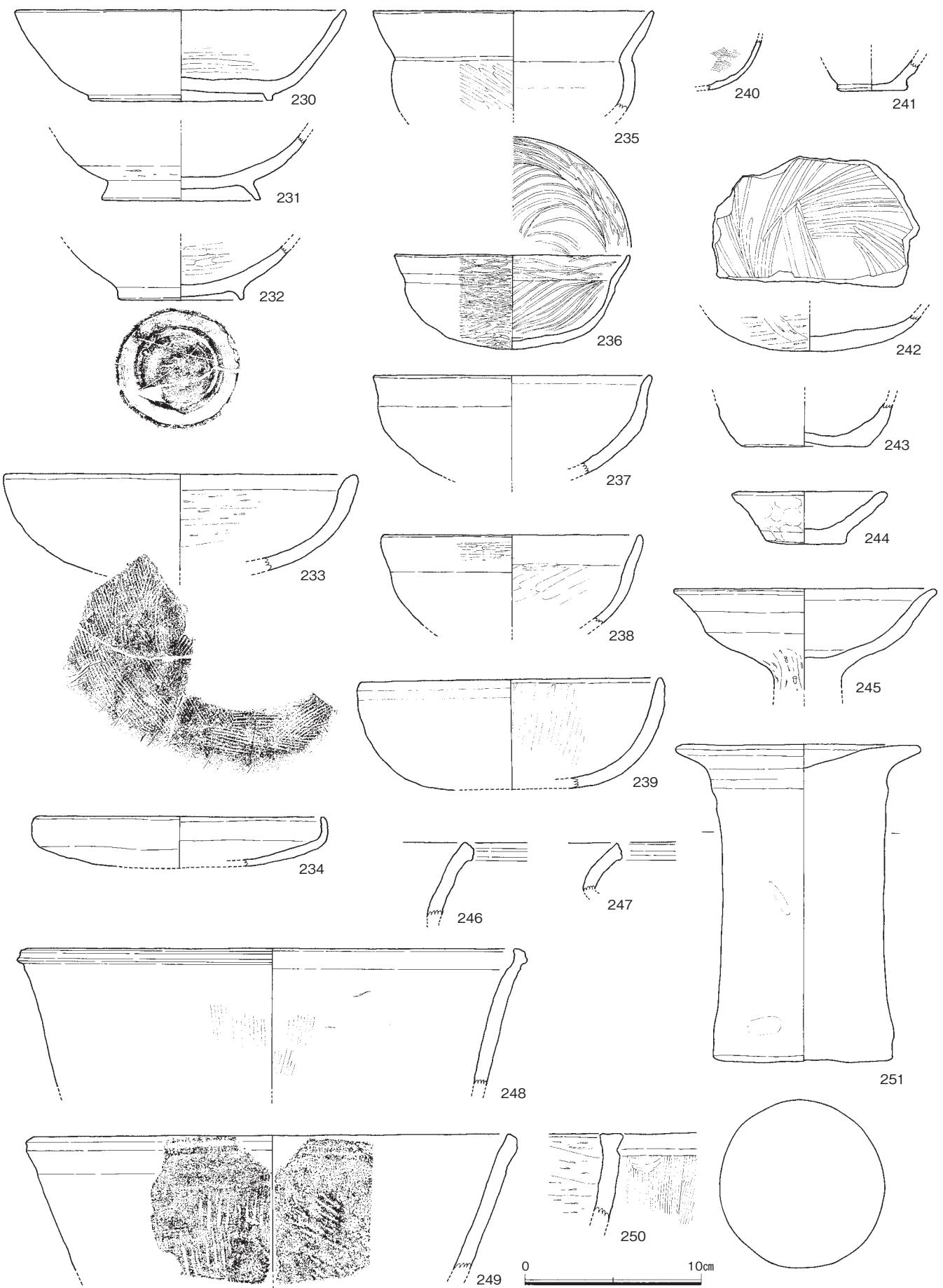


Fig.78 SX123下層出土遺物2 (1/3)

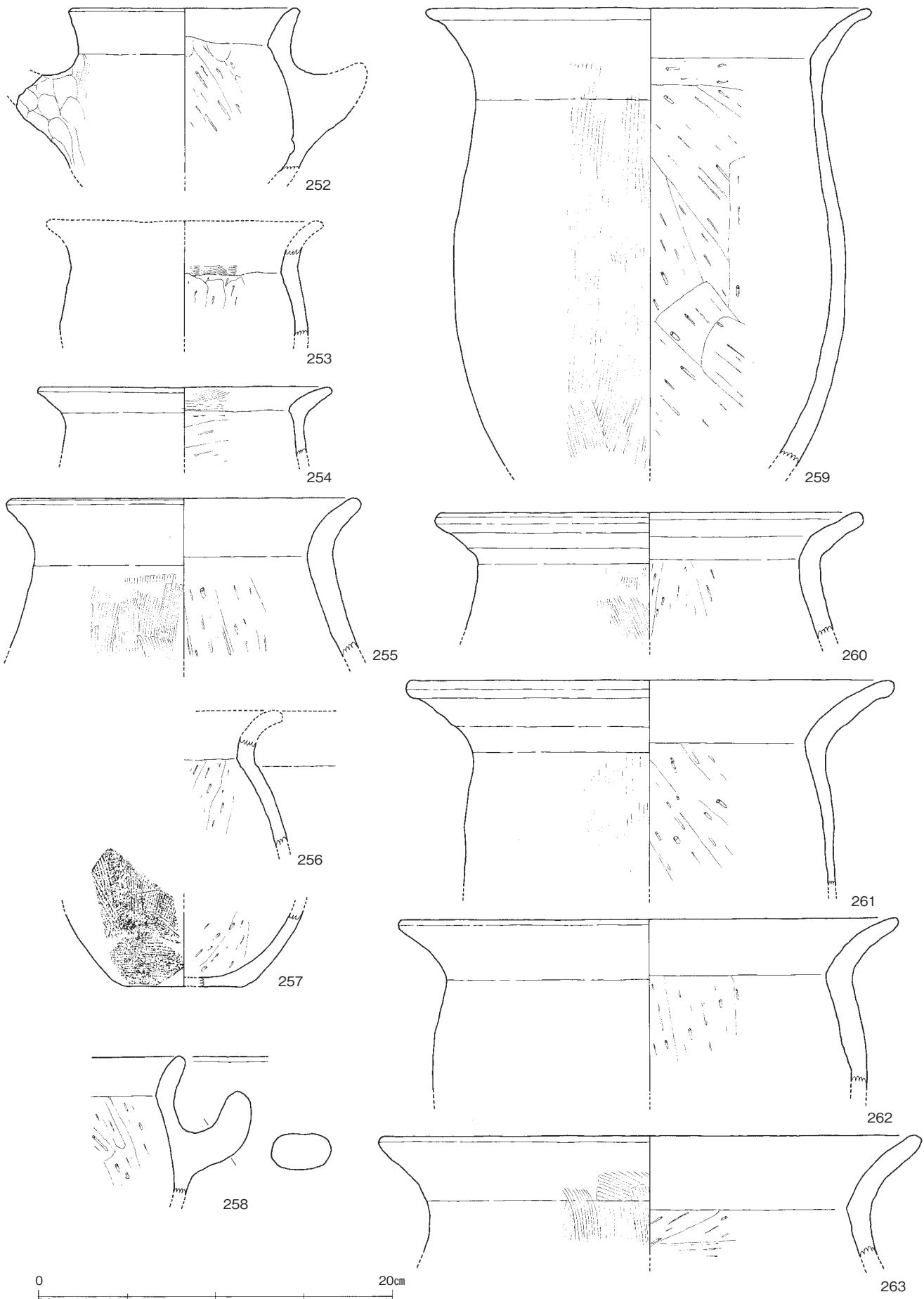


Fig.79 SX123下層出土遺物3 (1/3)

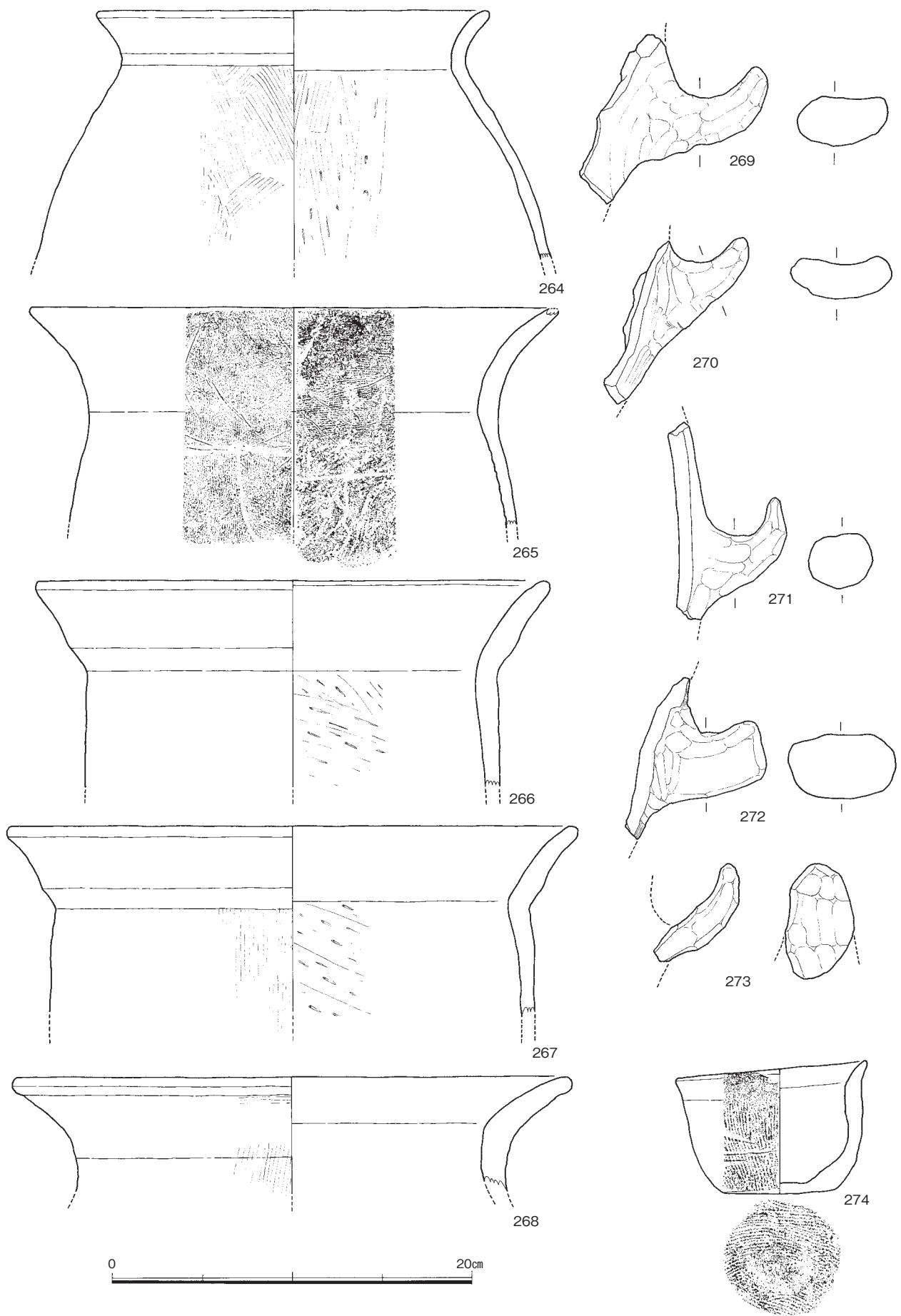


Fig.80 SX123下層出土遺物4 (1/3)

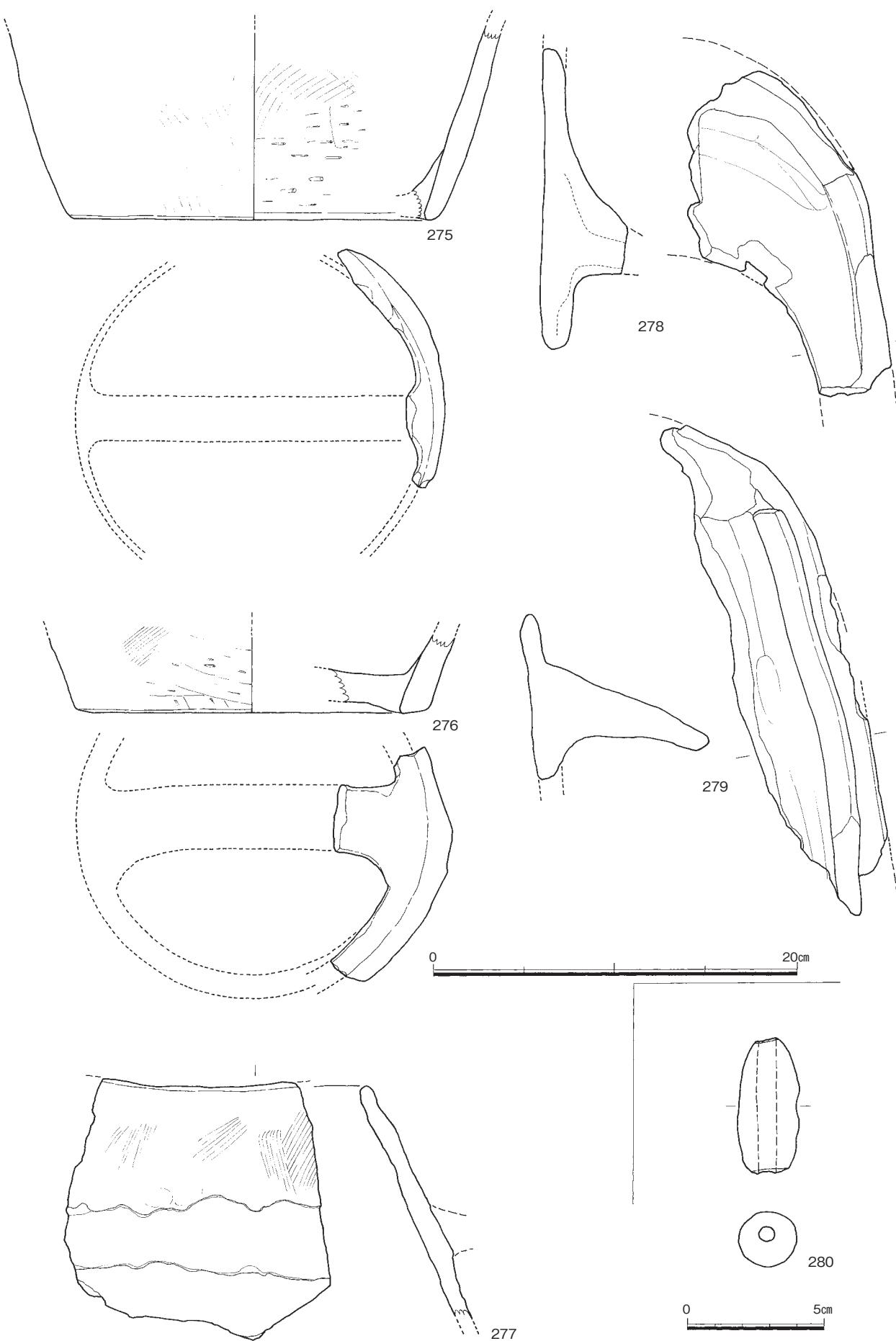


Fig.81 SX123下層出土遺物5 (1/2 · 1/3)

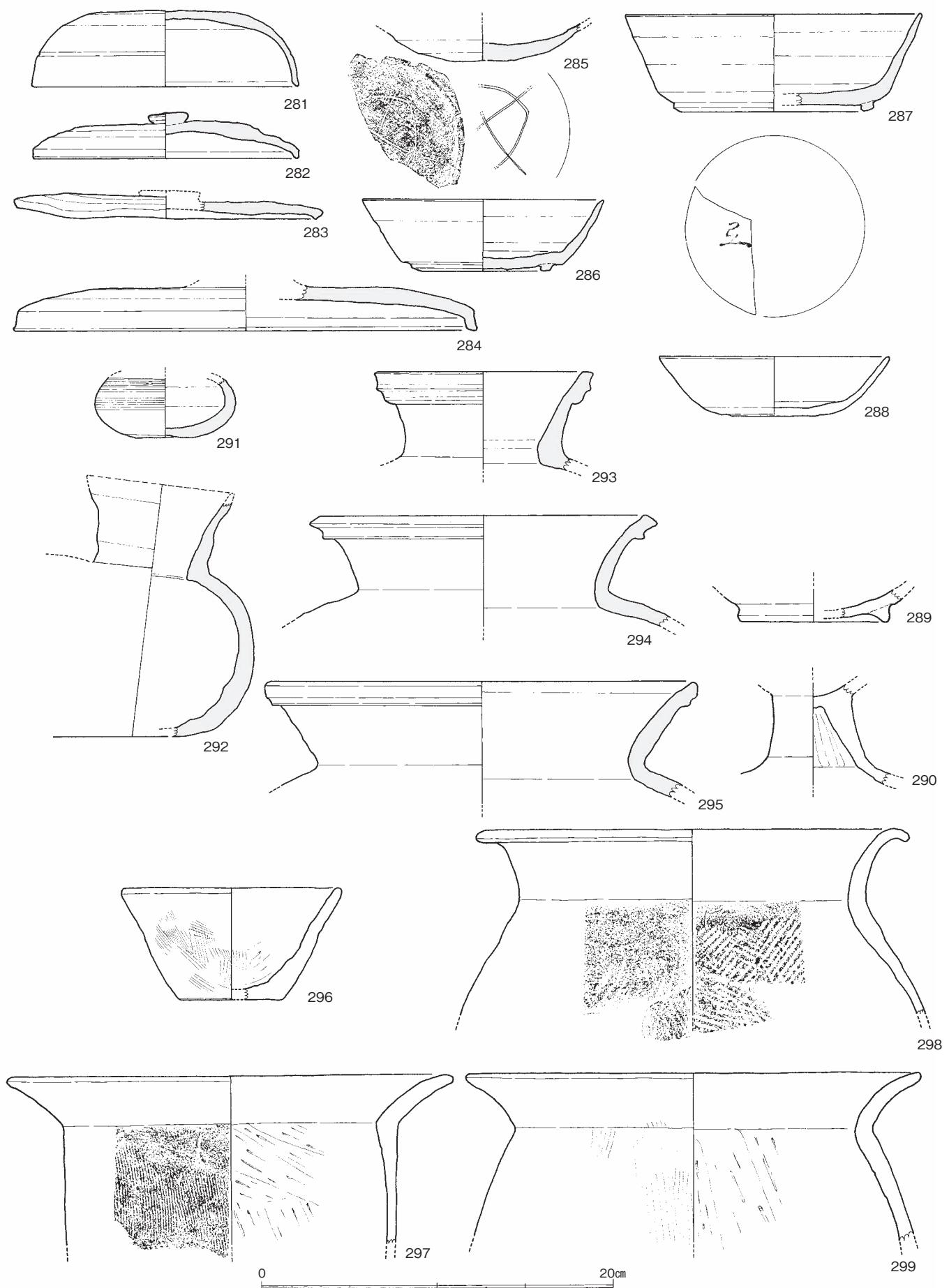


Fig.82 SX123その他の出土遺物1 (1/3)

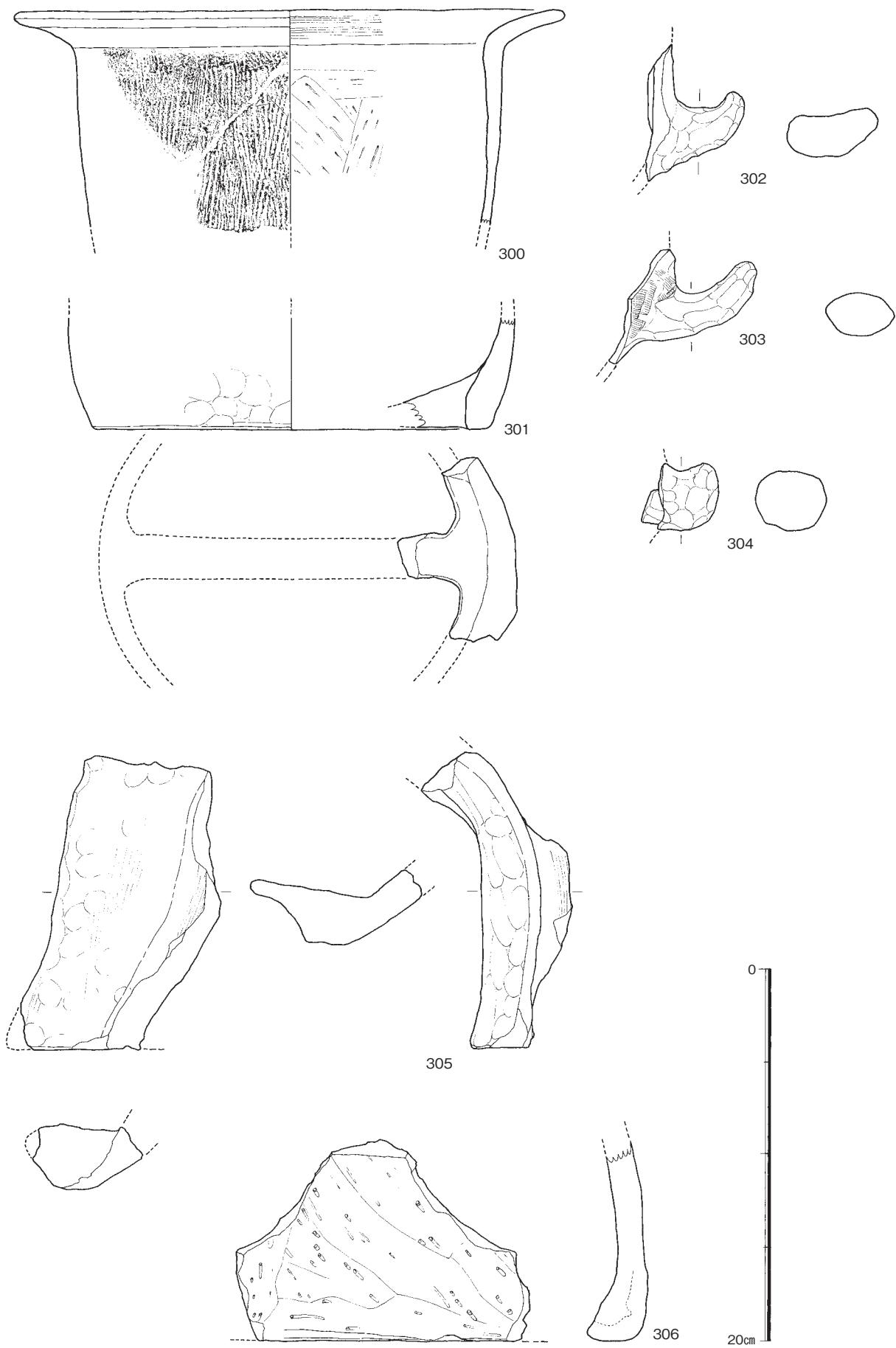


Fig.83 SX123その他の出土遺物2 (1/3)

した。

以下では各層の出土遺物の概要を示すが、本遺構から接続する溝SD13の1区出土遺物についても同じ層区分で把握しており、ここで示す。

上層出土の須恵器には壺類（1～33）、高壺（38～41）、皿（36、37）、鉢（34、35、51、52）、壺（瓶）（42～47、50、55、58）、甕（49、53、54、56、57、59、60）、取手（48）がある。壺蓋には転用硯（15）があり、文字資料としては壺身に刻書（22、33）がある。これは「萱？」、「壺」と読める。土師器には壺（61、62、64）、皿（63）、高壺（65）、手づくね鉢（66、68）、支脚（67）、甕（69～84）、甕（89、90）、鍋脚（85～87）、竈（88）がある。このうち皿、鍋脚は13世紀以降の遺物と見られる。また、小型の甕（71）は製塩土器である。輸入陶磁器には白磁碗（104）、越州窯系青磁（105～107、109）、緑釉陶器（108）がある。土製品としては土錘（91、92）がある。製鉄関連遺物としては鉄滓、炉壁、鞴羽口（93～103）がある。

中層出土の須恵器には壺類（114～138）、高壺（140）、壺（瓶）（141、144～151）、甕（139、152～155）、硯（142、143）がある。硯は中空円面硯（142）と硯部破片（143）の二個体があり、後者は足・脚台付に復元したが、これも中空円面硯となる可能性がある。文字資料としては、壺身に刻書（136）がある。これは「壺」と読める。土師器には壺（156～162）、皿（163、164）、高壺（165～170）、鉢（171、174～177、200、201）、壺（172、173）、甕（178～191、193、195、196、202～204）、甕（192、194、199）、鍋脚（205）、竈（206）、取手（197、198）がある。このうち小型の甕（178）は製塩土器である。輸入陶磁器には白磁碗（110、111）、越州窯系青磁（112、113）がある。製鉄関連遺物としては鉄滓、炉壁、鞴羽口（208～210）がある。

下層出土の須恵器には壺類（211～217）、皿（218、219）、鉢（220、221、227、228）、高壺（222、223）、壺（瓶）（224～226）、甕（229）がある。文字資料としては皿に墨書（218）がある。判読はできていない。土師器には壺（230～232）、皿（234）、高壺（245）、鉢（233、235～244、274）、支脚（251）、甕（246、247、252～268）、甕（248～250、275、276）、竈（277～279）、取手（269～273）がある。土製品としては土錘（280）がある。

上～下層としての層位区分ができなかった資料には、以下のものがある。須恵器には壺類（281～287）、壺（瓶）（291～293）、甕（294、295）がある。文字資料としては壺身に墨書（287）がある。これは「弓一」と読める。土師器には壺（288、289）、高壺（290）、鉢（296）、甕（297～300）、甕（301）、竈（305、306）、取手（302～304）がある。

以上の須恵器、土師器類以外の資料は器種毎に示す。

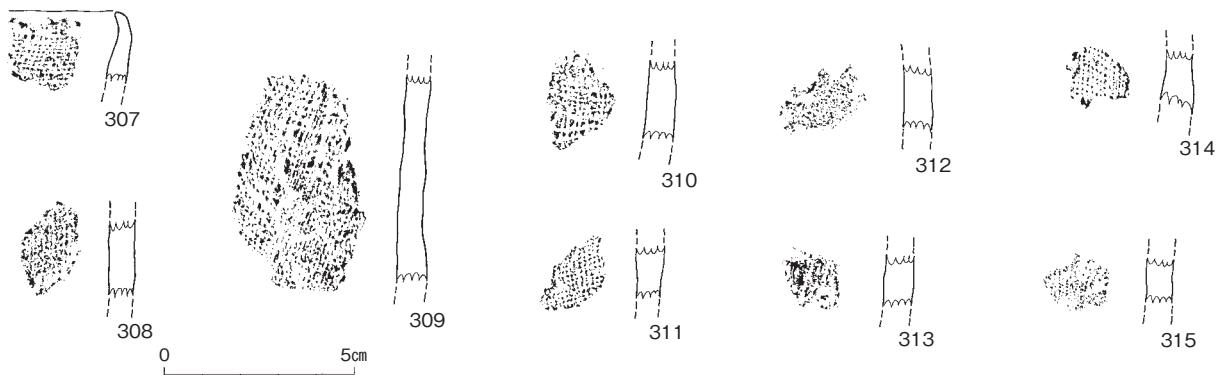


Fig.84 SX123出土製塩土器 (1/2)

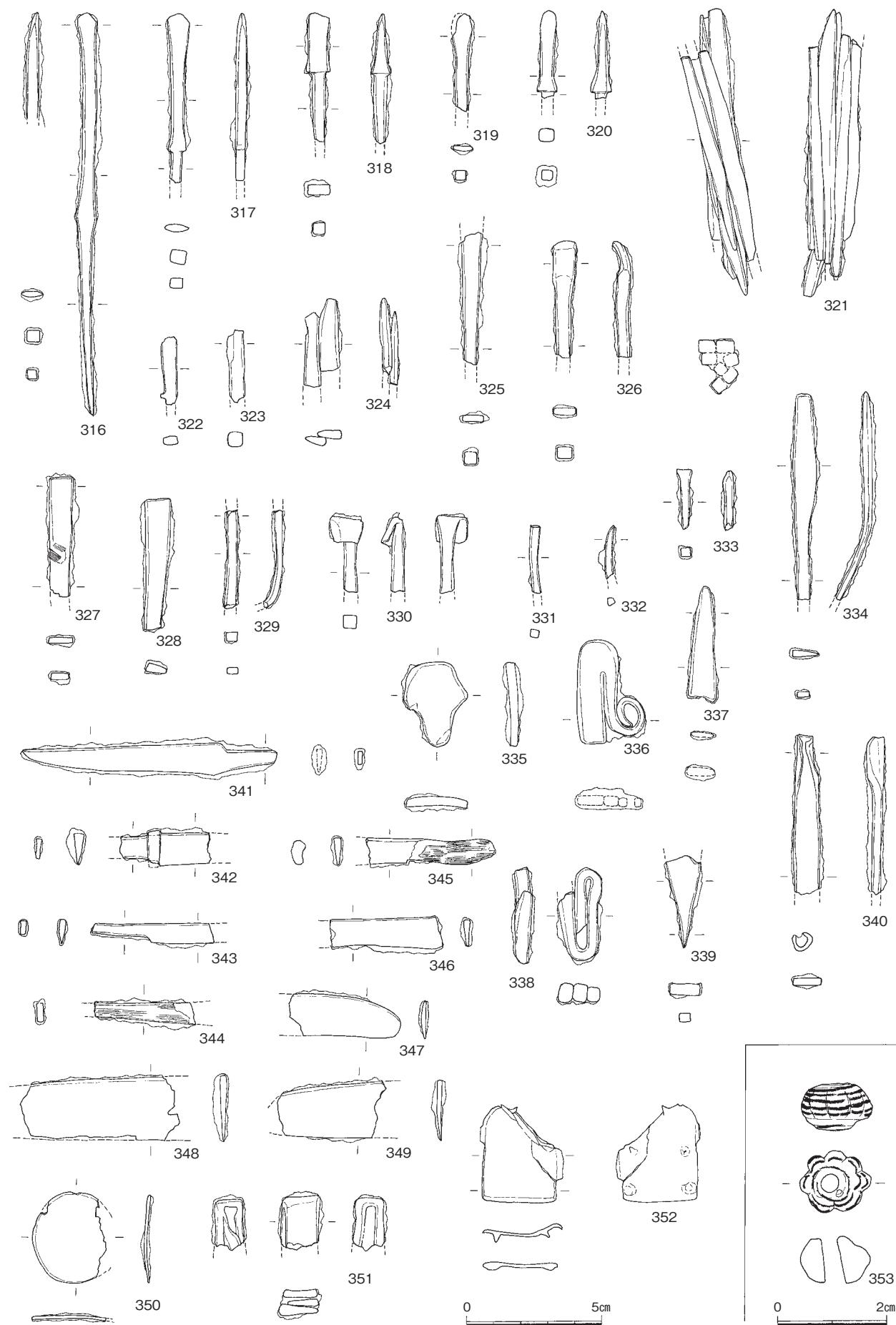


Fig.85 SX123出土金属製品・ガラス製品 (1/1・1/2)

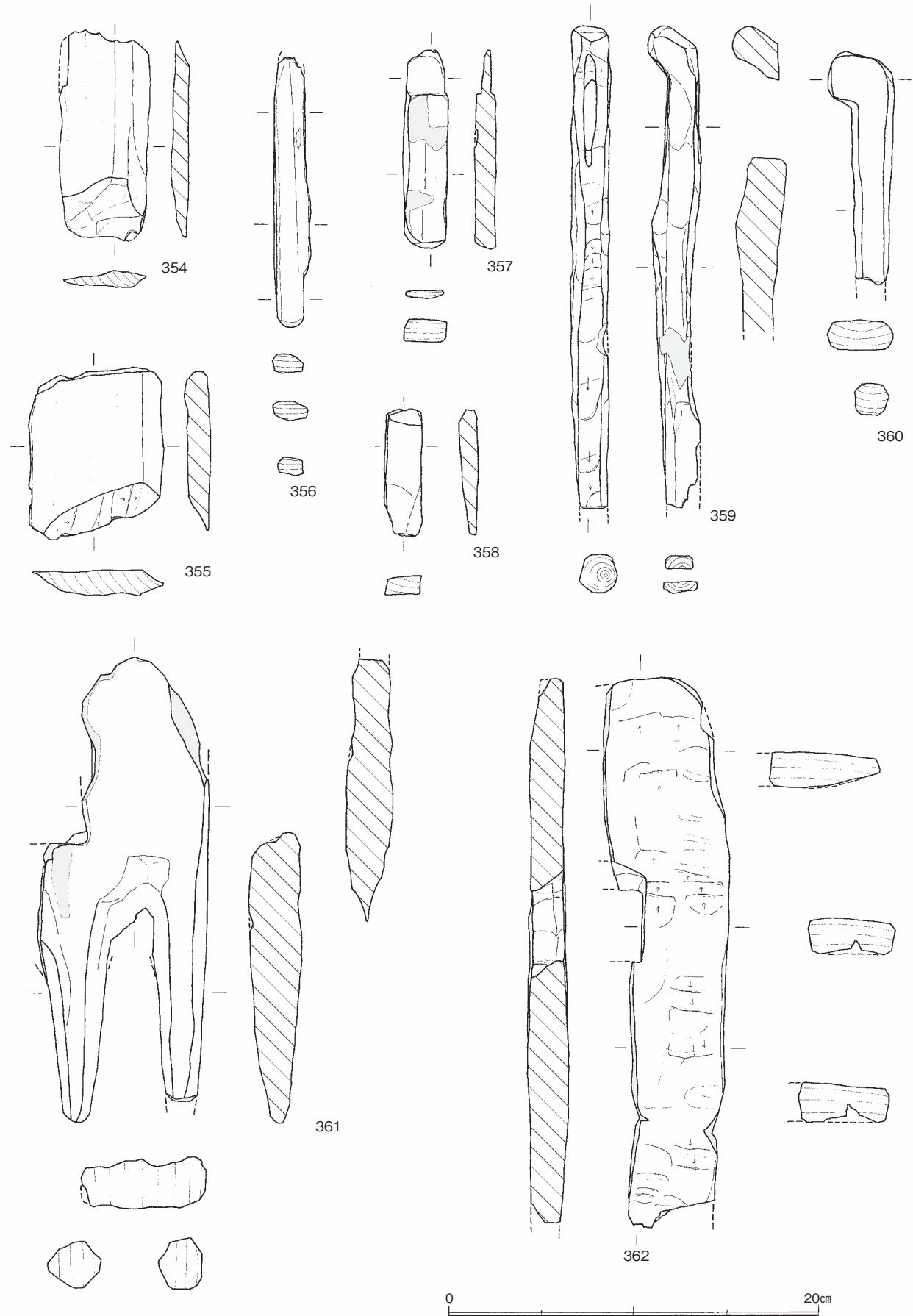


Fig.86 SX123出土木製品1 (1/3)

鉢形の製塙土器は小破片での出土であり9点(307~315)が確認された。

鉄製品には製品とともに、不明な素材様の鉄片も多い。鉄鎌(316~321)、不明棒状製品(322~334)、不明板状製品(335~340)、刀子(341~346)、鎌(347~349)、円盤状製品(350)、鉸具(351)がある。不明製品は未成品を多く含んでいるようであり、本遺跡で多く検出された鍛冶炉との関係が想定される。

銅製品には帶金具(352)がある。裏面に固定用の鉢が4点に残っている。

ガラス製品にはトンボ玉(353)がある。表面は風化が進み白色化するが、二色の練りガラスの外表に7ヶ所の刻みを施し花弁風に仕上げている。

木器はほとんどが下層出土である。農具、工具、編具・紡織具、馬具、装身具、漁具、容器、木簡、祭祀具、点火具、組合部材、板材、杭などがある。農具には鎌柄(359、360)、又鋤(361)、平鋤(362)、大足などの角枠型田下駄の部材(357)などがある。工具には、楔(354、355、358)などがある。編具・紡織具には薦編具の目盛板(367)、編錘(363)や、紡織具の棒(400)、糸枠の腕木(365)、部材(366、399)がある。馬具には鞍橋が4点あり、乗馬用の後輪(368)、居木(371)や、荷鞍用の部材(369、370)がある。後輪(368)は座部を中心に僅かに曲線を描き、後方に傾斜している。居木は推定される長さが30cm以下、幅6~7cmと小さく、小型の鞍で四本居木と考えられる。

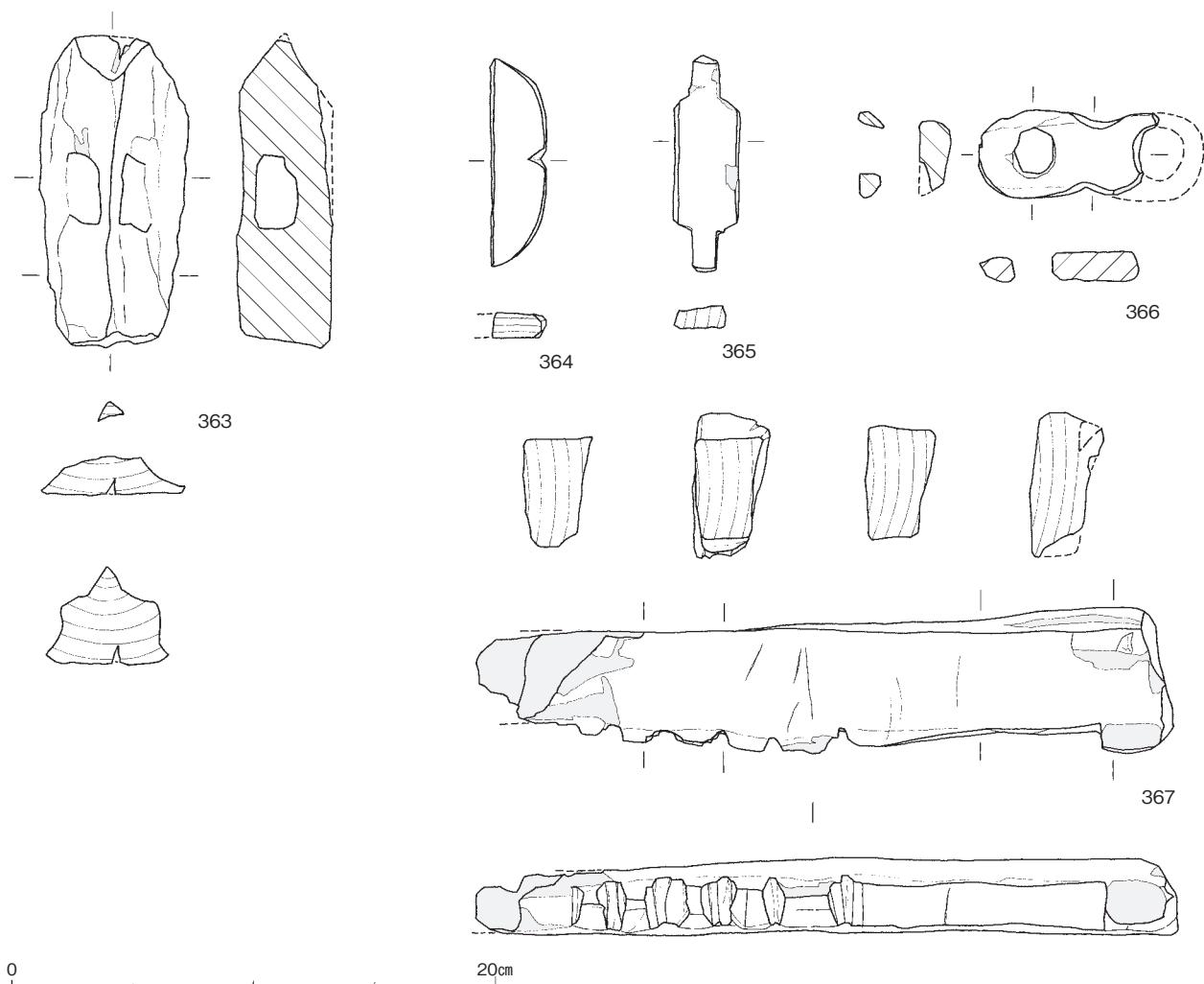


Fig.87 SX123出土木製品2 (1/3)

荷鞍（370）はほぞ穴がなく、未製品と考えられる。装身具としては横櫛372がある。漁具にはヤス（373、374）がある。容器には槽（376～379）、曲物蓋もしくは底板（380～383）がある。木簡は3点出土した。木簡（384）はSX123南側下部で出土した長さ50cm以上、幅3.3cmの大型品である。表に「□□□〔符白カ〕□里長□□〔五カ〕戸〈...□者大□神廿□〔二カ〕物」、裏に「□□□政丁□□部□□□□□一□□□〔婢馬カ〕□□□□...□〔瓦カ〕田○余戸人在\□□□嶋里□□□□□□□□□□□□...○」と読める。形態から郡符木簡と見られる。木簡（385）は溝SD13最下部から出土した荷札木簡であり、三分の一を欠損する。表に「壬辰年韓鐵□□」と読める。干支の壬辰年は出土層や遺物からみて持統6（692）年と考えられる。木簡（368）はSX123南側の下部で出土した破断品である。一面に墨書きがあるが、判読は困難であった。祭祀具は馬形（387）、船形（388）、人形？（389～397）がある。船形、

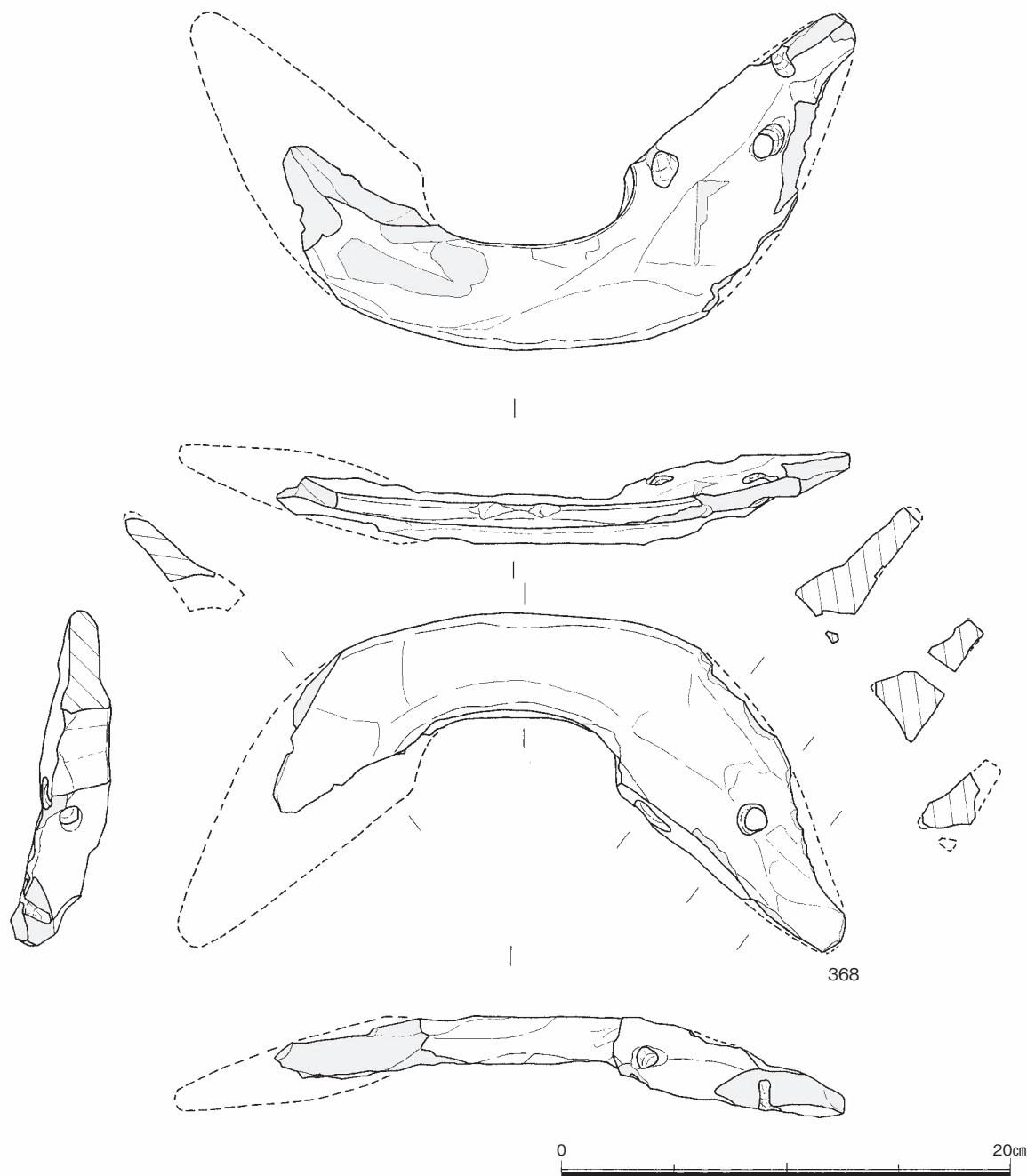


Fig.88 SX123出土木製品3 (1/3)

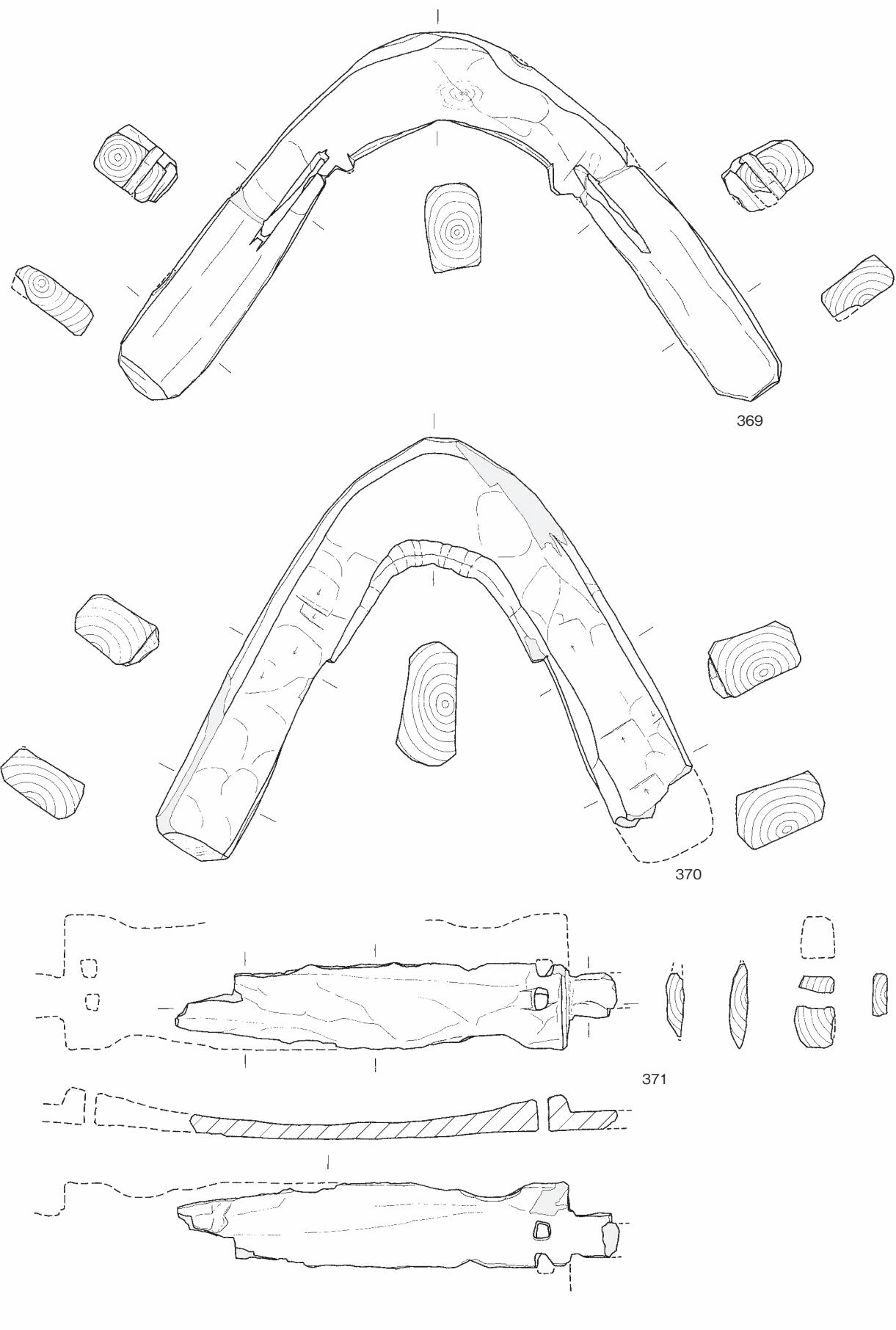


Fig.89 SX123出土木製品4 (1/3)

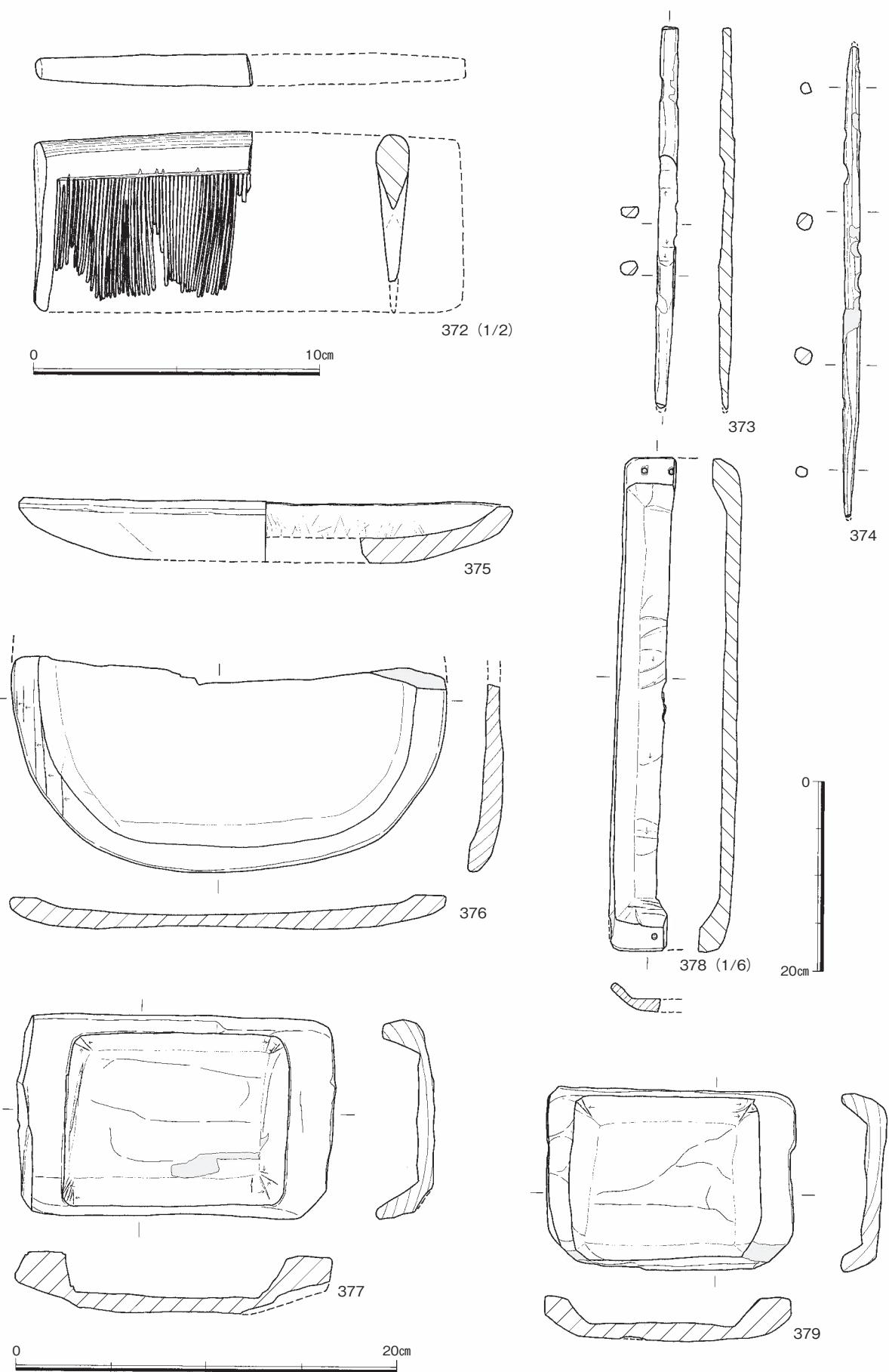


Fig.90 SX123出土木製品5 (1/2・1/3・1/6)

人形は20次調査で指摘された立体的なものであり、本地域の7～8世紀に固有のものと考えられる。点火具には火鑽臼（398、401）がある。その他に不明の組合部材として板（403）、角柱（404）があるが用途不明である。板材（405～411）は多数あるが、箱蓋？（405）らしきものもある。杭（412～419）は枝材で表皮を残すものが多い。

瓦は30点ほどが出土した。軒丸瓦（420）、熨斗瓦（422～424、426、428）、平瓦（421、425、427、429～443）などがある。表（凹）面は布圧痕、裏（凸）面は縄目敲痕が残る。全体に小型であるが、厚く仕上げられている。この特徴は怡土城出土瓦に類似している。

石製品には石鍋、権、紡錘車、軽石加工品、砥石などがある。石鍋（444～458）は滑石製で小型（444）と大型（445）があり、二方が四方の口縁部外面に正方形の取手が削出される。口縁部は直立もしくは内湾し、この種の容器としては古段階の様相を示す。石製品（459）は取手部を含む破片の

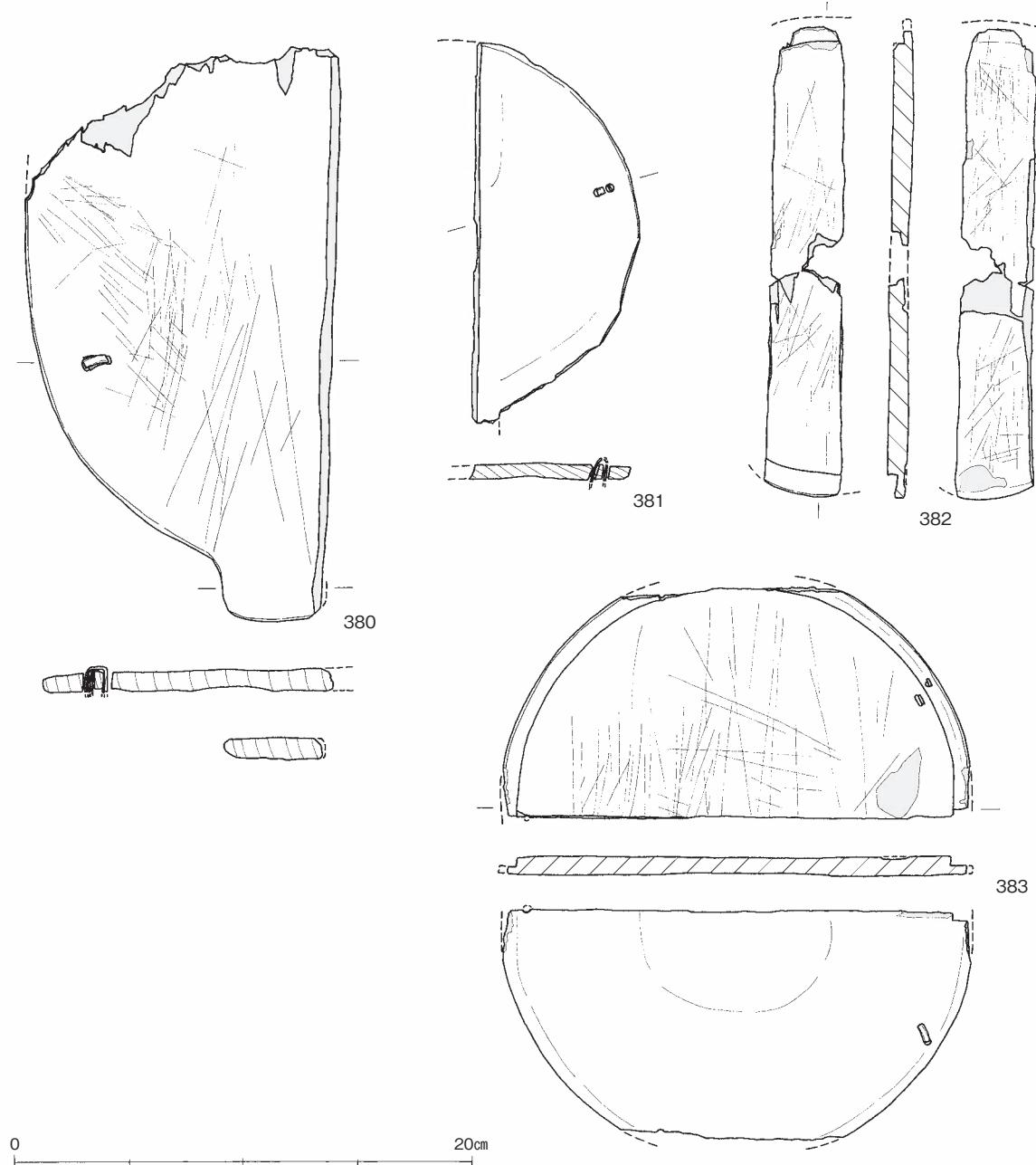


Fig.91 SX123出土木製品6 (1/3)

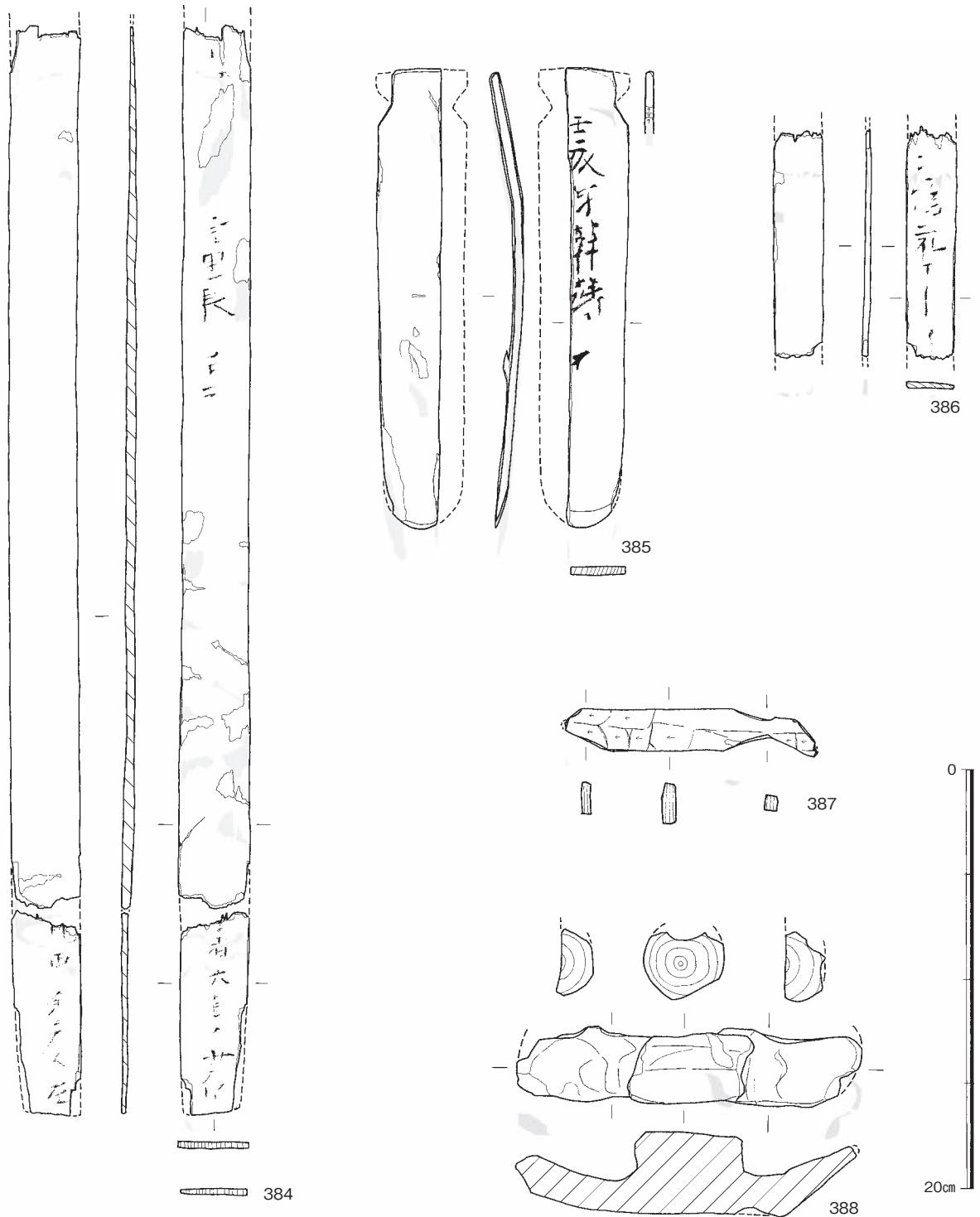


Fig.92 SX123出土木製品7 (1/3)

再利用品であるが、用途は不明である。権（460）は砂岩製の台形を呈し、中央上部に垂下用の穿孔がある。紡錘車（461～466）は滑石製であり、紡錘車（466）は穿孔が途中までの未製品である。軽石製品は刻みや穿孔があるもの（467、471）、周囲に整形痕があるもの（468～470）がある。砥石には小型（472～484）と中～大型（485～491）がある。

11) 道路状遺構

SX444 3、4区西側斜面中段にあり、最北端の3区北側の標高約22mから、南側の4区南側で標高29mを繋ぐ約60mの範囲に検出した。後世の畠地造成や山道の開削で破壊が著しいが、断片的に側溝

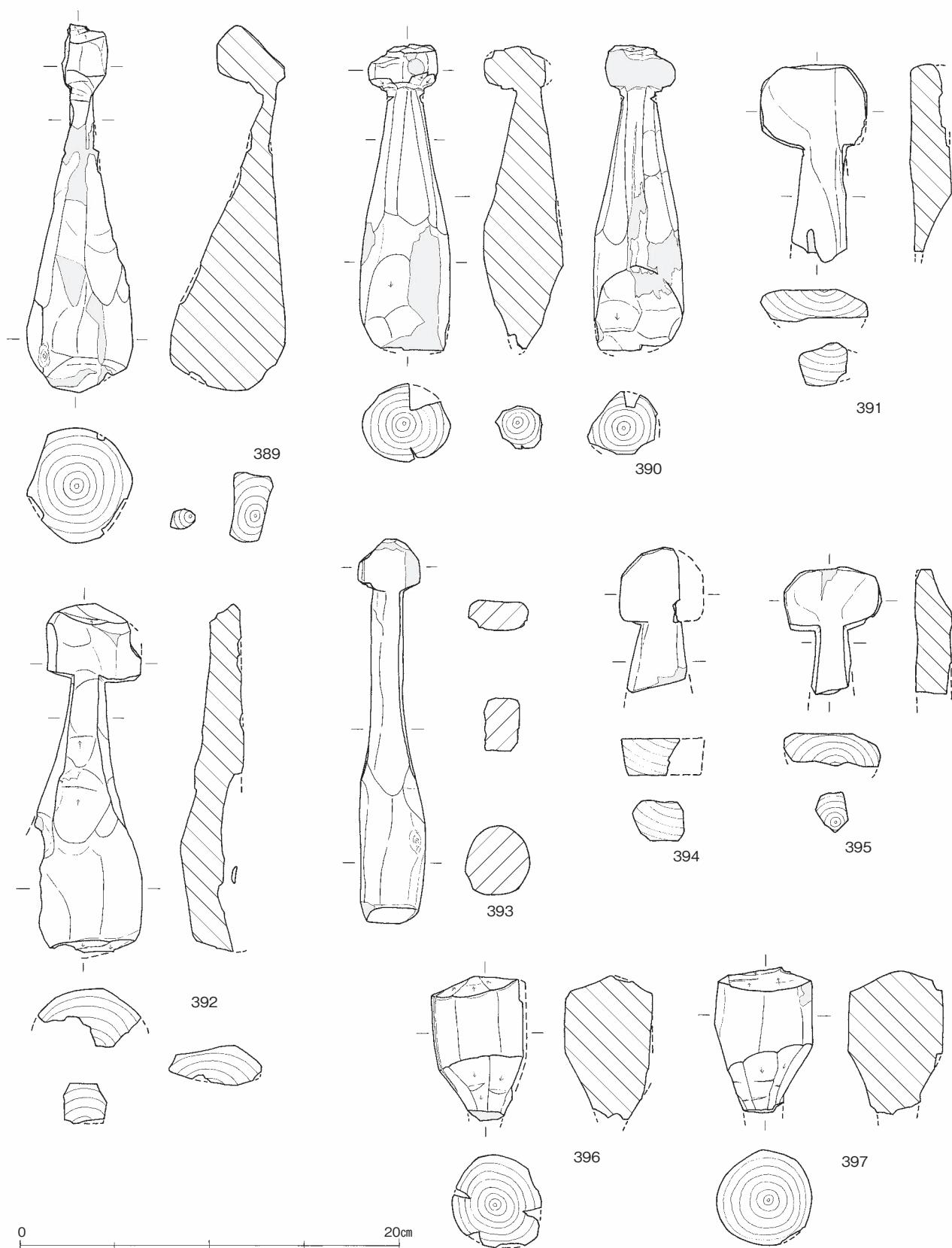
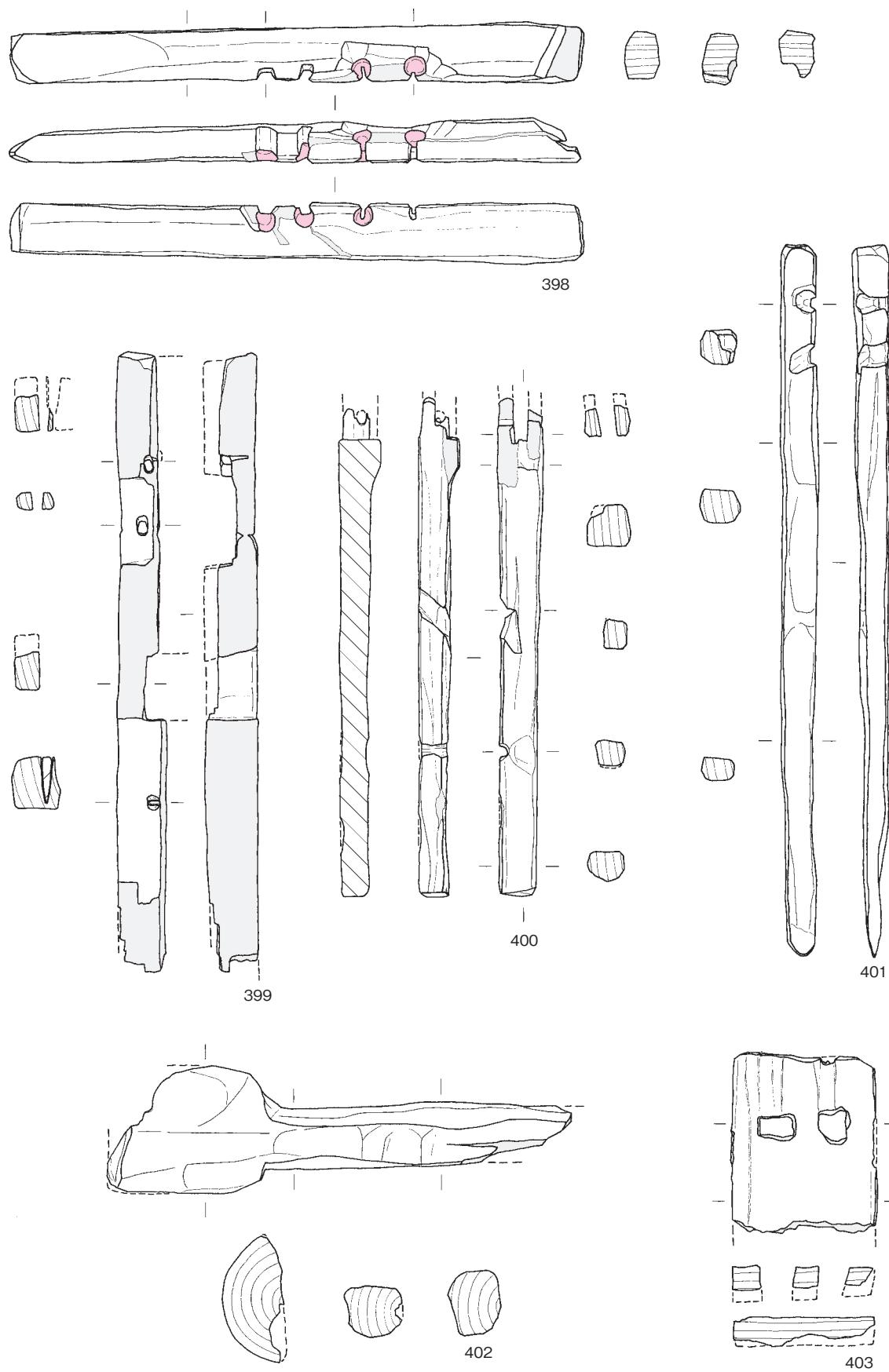


Fig.93 SX123出土木製品8 (1/3)



0 20cm

赤アミは炭化部分

Fig.94 SX123出土木製品9 (1/3)

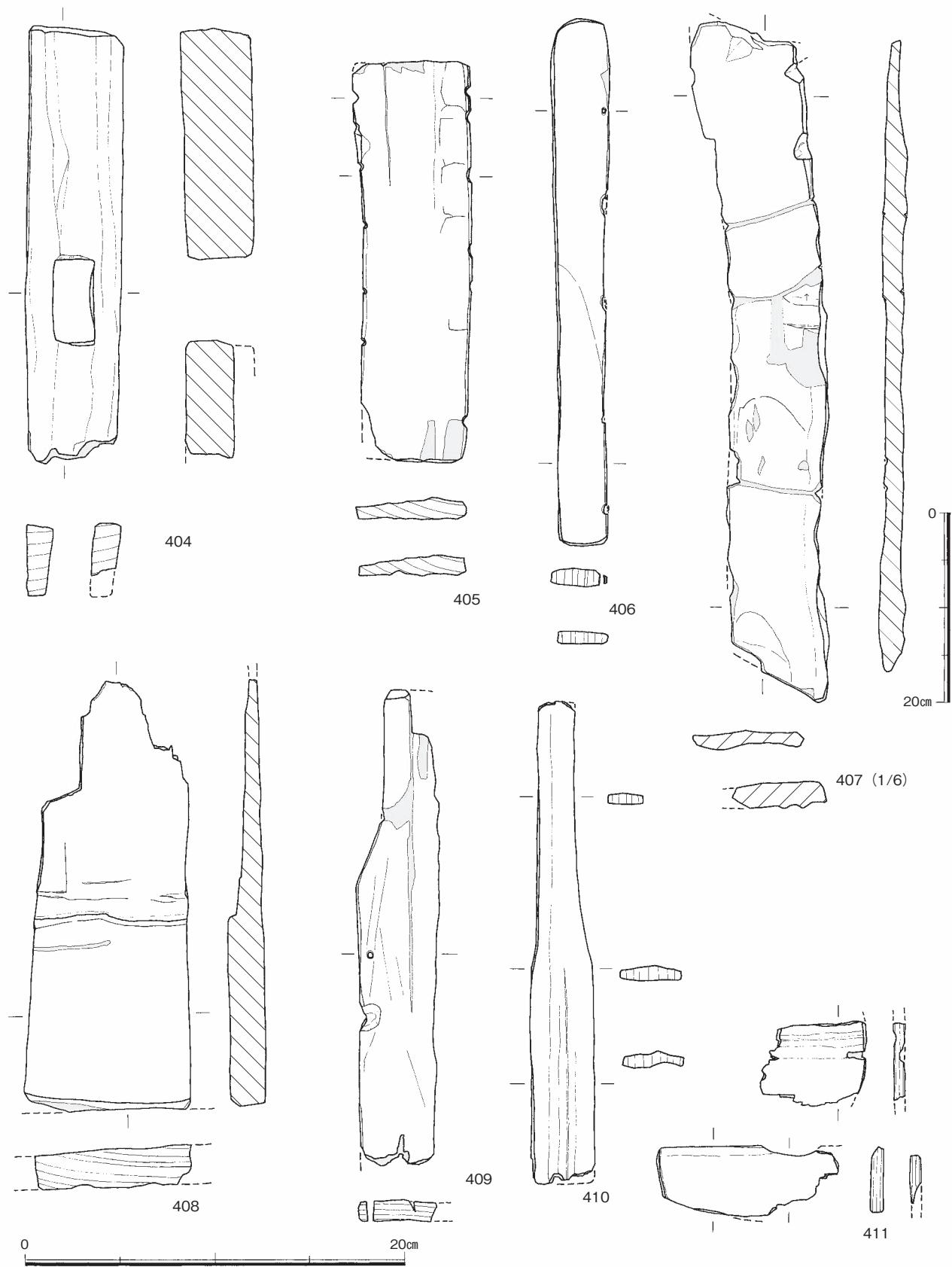


Fig.95 SX123出土木製品10 (1/3・1/6)

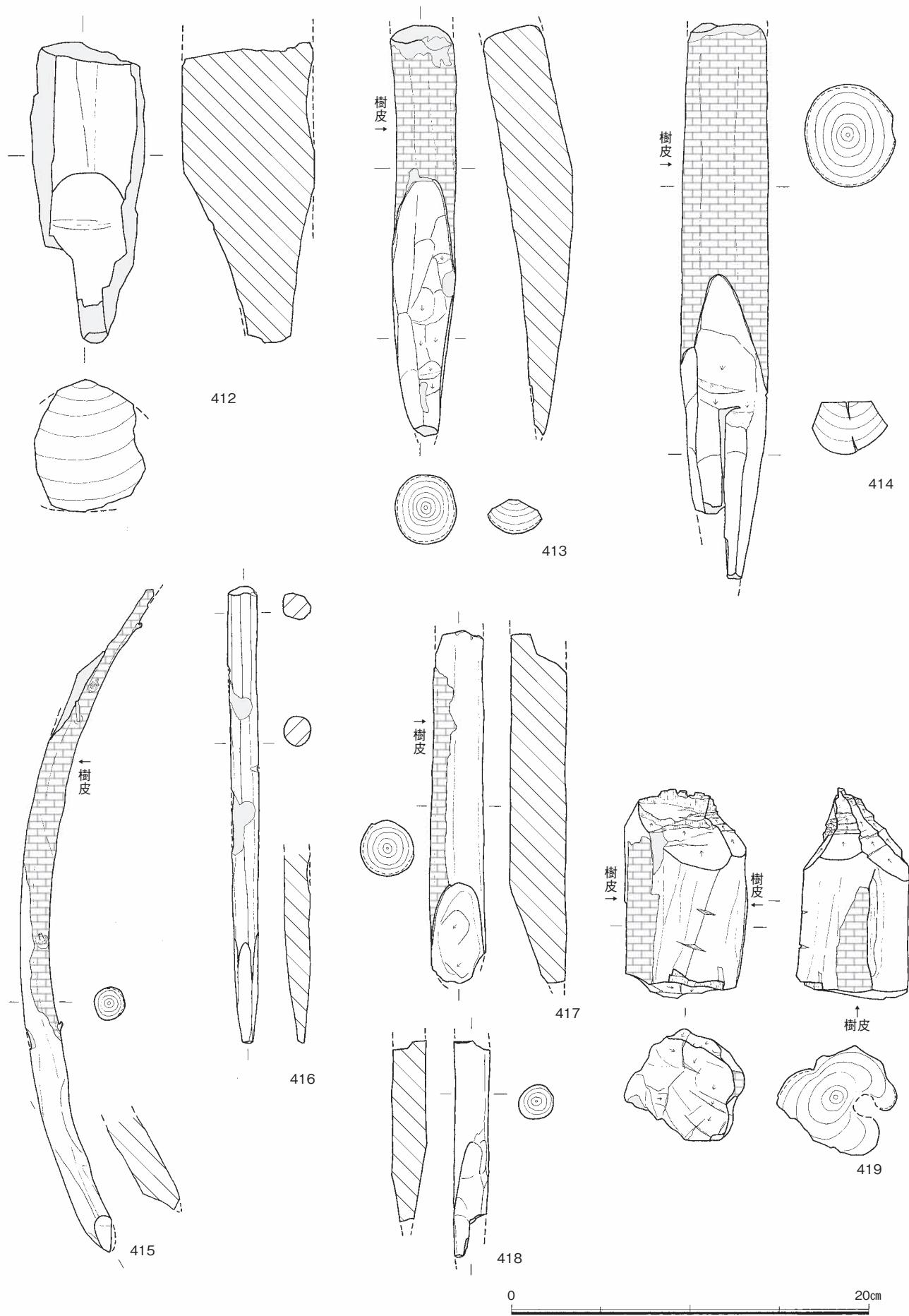


Fig.96 SX123出土木製品11 (1/3)

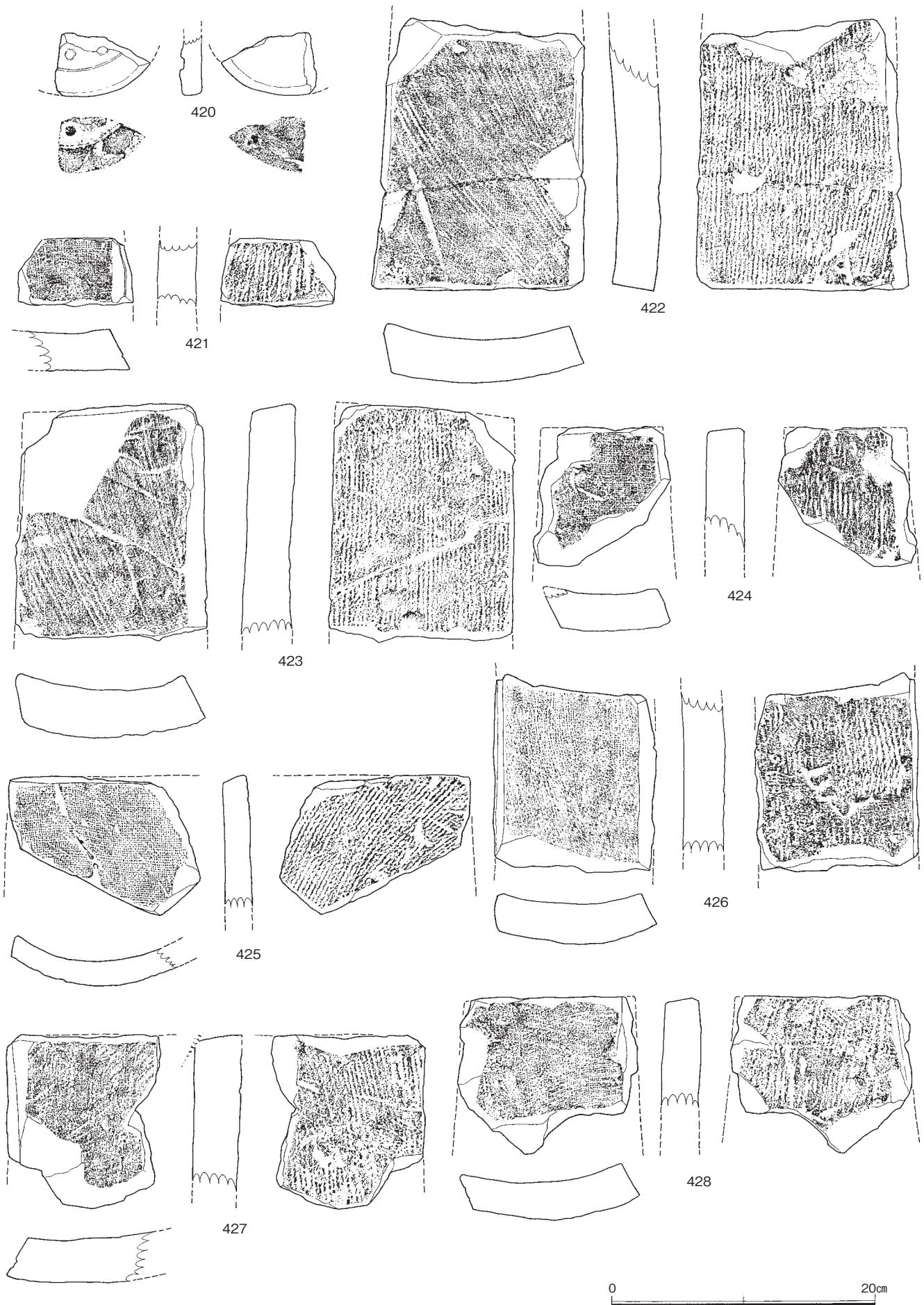


Fig.97 SX123出土瓦1 (1/4)

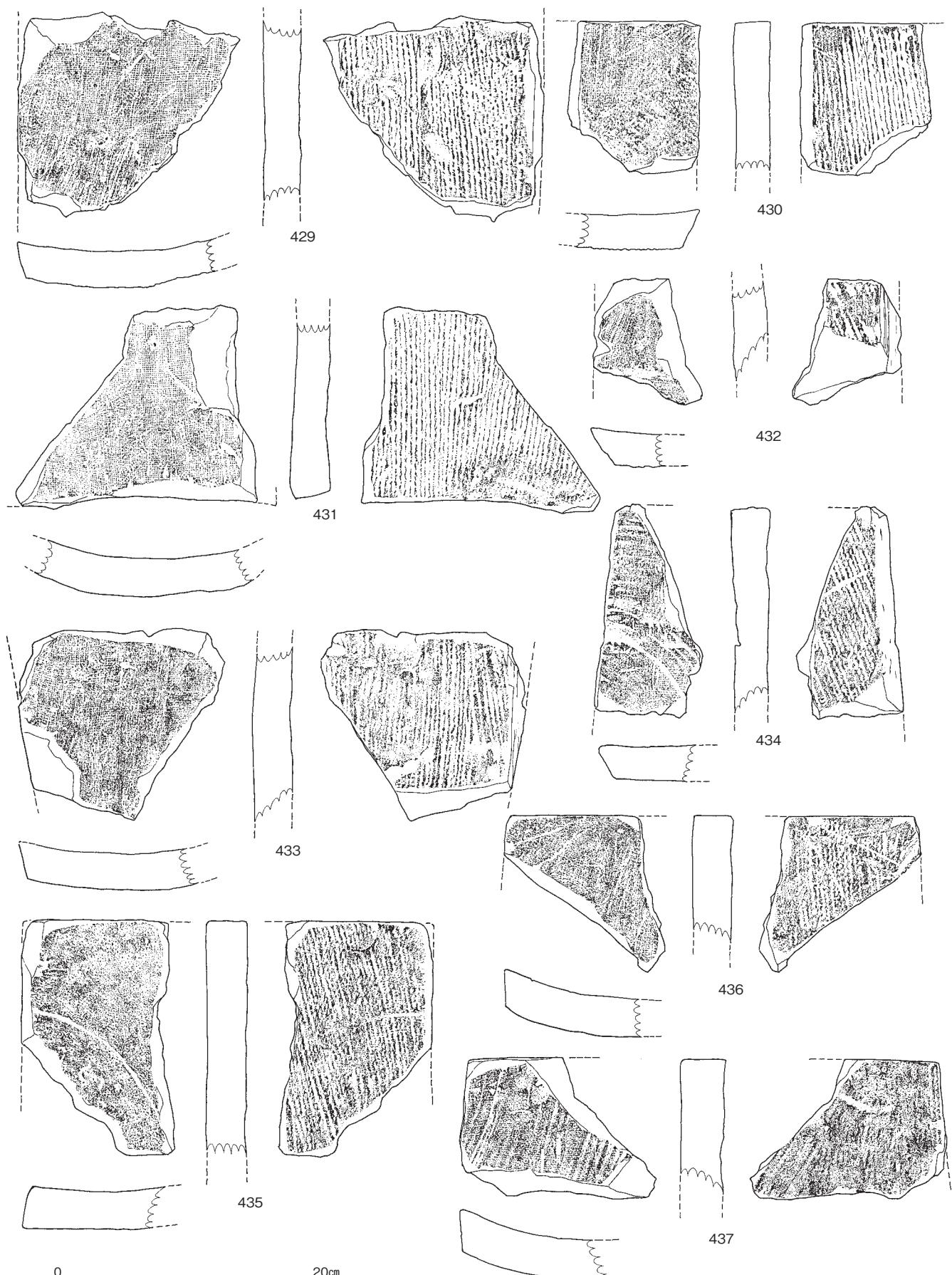


Fig.98 SX123出土瓦2 (1/4)

や路面が遺存していた。道路面に関わる堆積物が残されていたのは、断面図を作成したA地点からB地点付近である。土層断面からみると、山側の側溝は幅70~80cm、深さ20~30cmであり、4~5回の掘り直しがある。路面は一部のみ残存していたが、水平に造られ、側溝の掘り直しのたびに路面が上昇している。谷側の側溝は一条のみが断続的に検出されたに過ぎない。初期の段階の道路幅は芯々で3.5mと復元される。なお推定される道路ラインに沿って柱穴列が見られる。柱穴列は道路の谷側に並行して2~3列が復元され、関連する遺構と考えられ、土留め用の柵列などが想定される。この道路は1区と4区の境界付近に見られる西側斜面の迫り出しを迂回し、1区製鉄炉SR52付近の平坦面に達すると見られるが、関連する遺構は検出できなかった。

12) その他の遺構と遺物

以上その他に柱穴や溝など取り上げられなかった遺構・遺物も多い。また遺物には注目すべき資料もある事から、以下では遺物について本遺跡の変遷を検討する上で重要な資料について報告する。

(1) 3、4区谷部包含層

2区池状遺構SX123から1区溝SD13を経て3、4区谷部中央を北に進む流路を検出したが、その

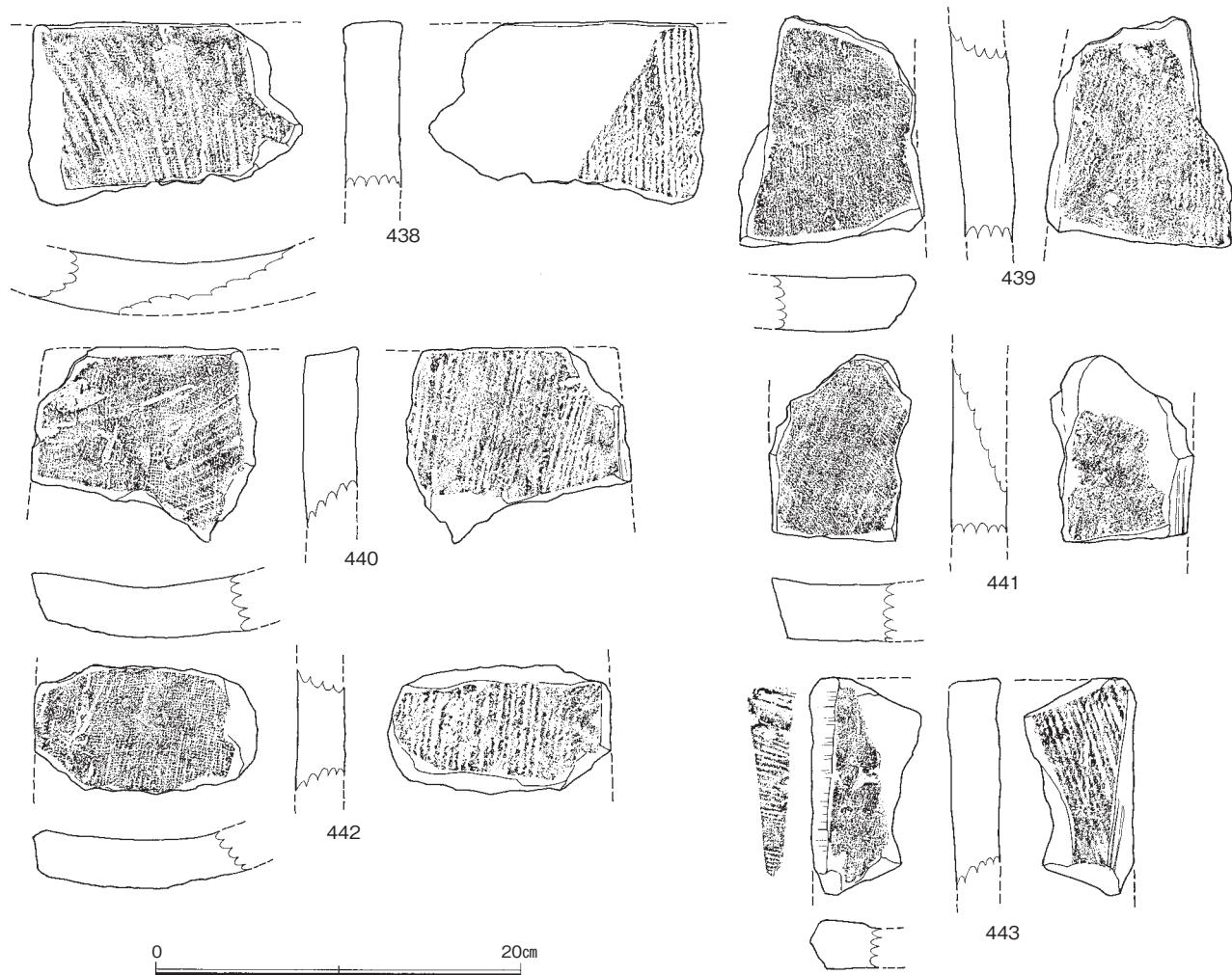


Fig.99 SX123出土瓦3 (1/4)

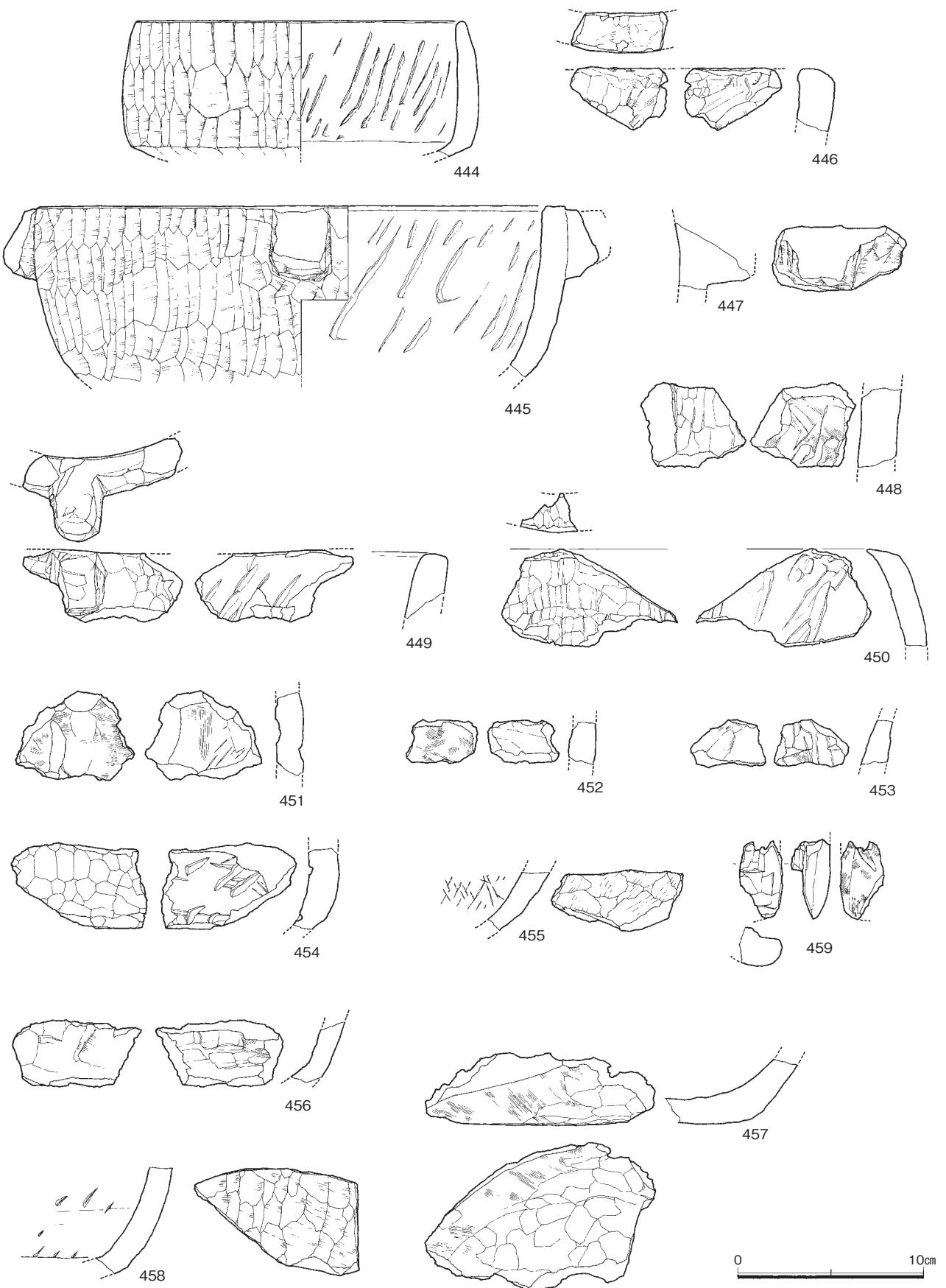


Fig.100 SX123出土石製品1 (1/3)

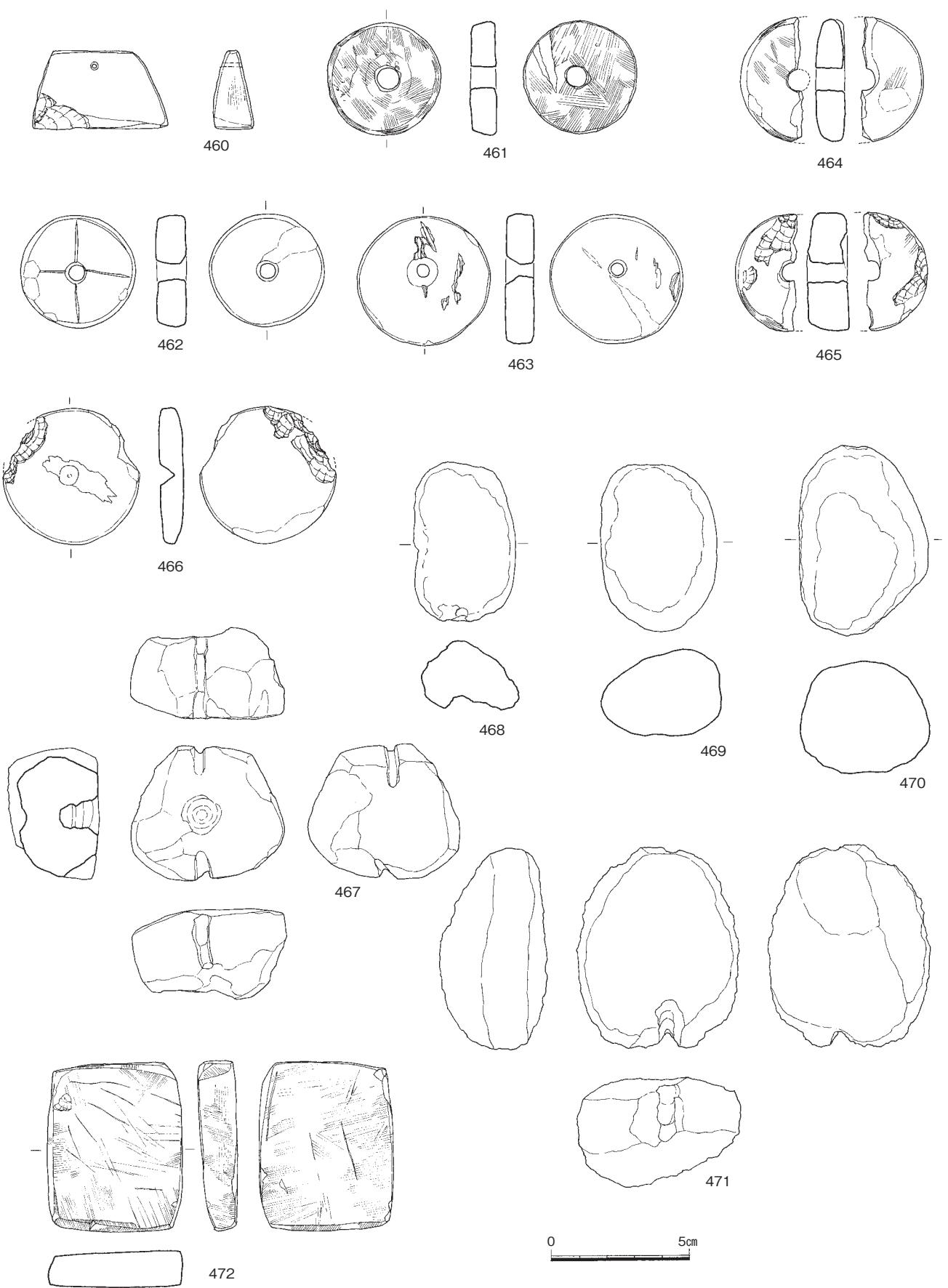


Fig.101 SX123出土石製品2 (1/2)

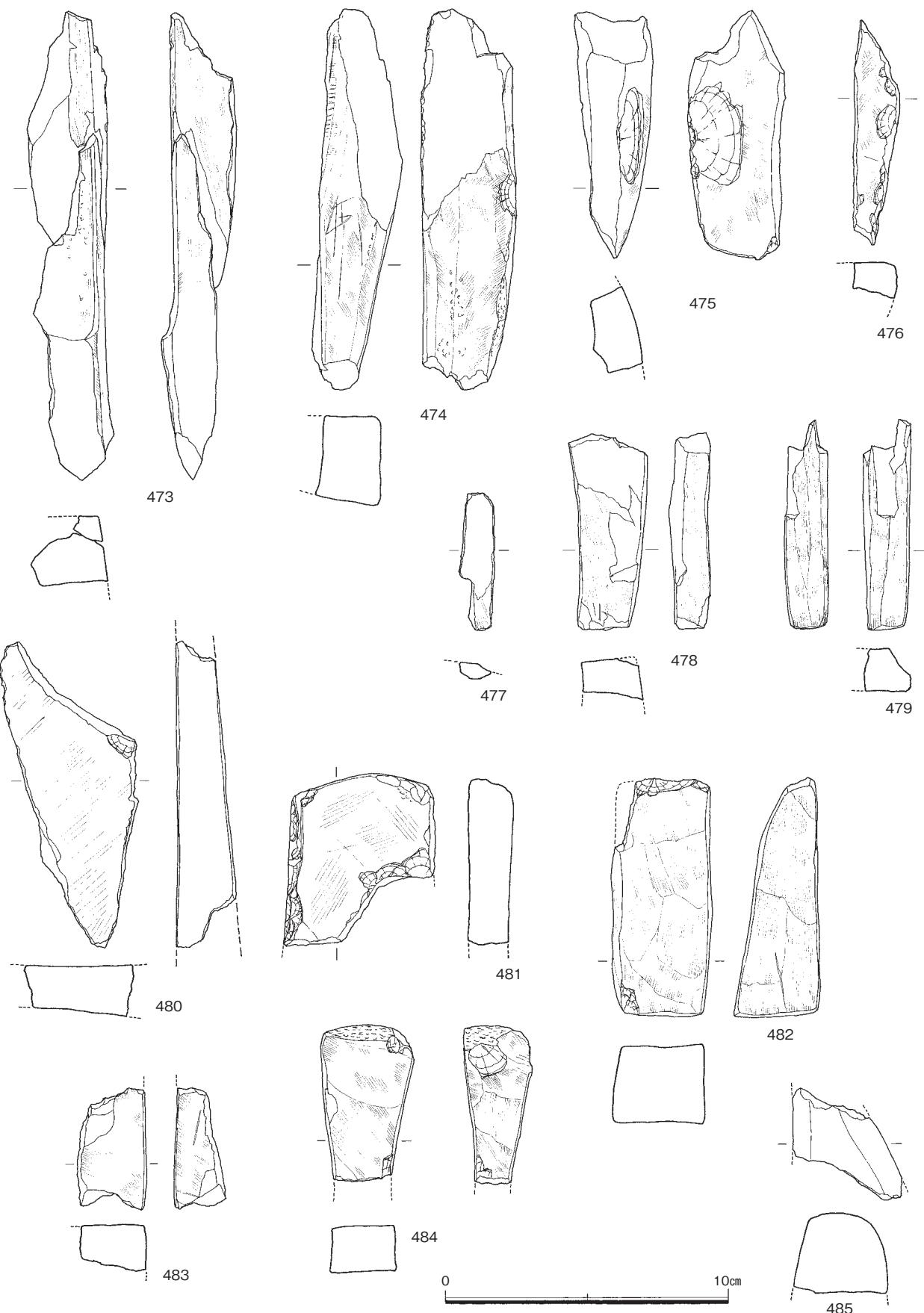


Fig.102 SX123出土砾石1 (1/2)

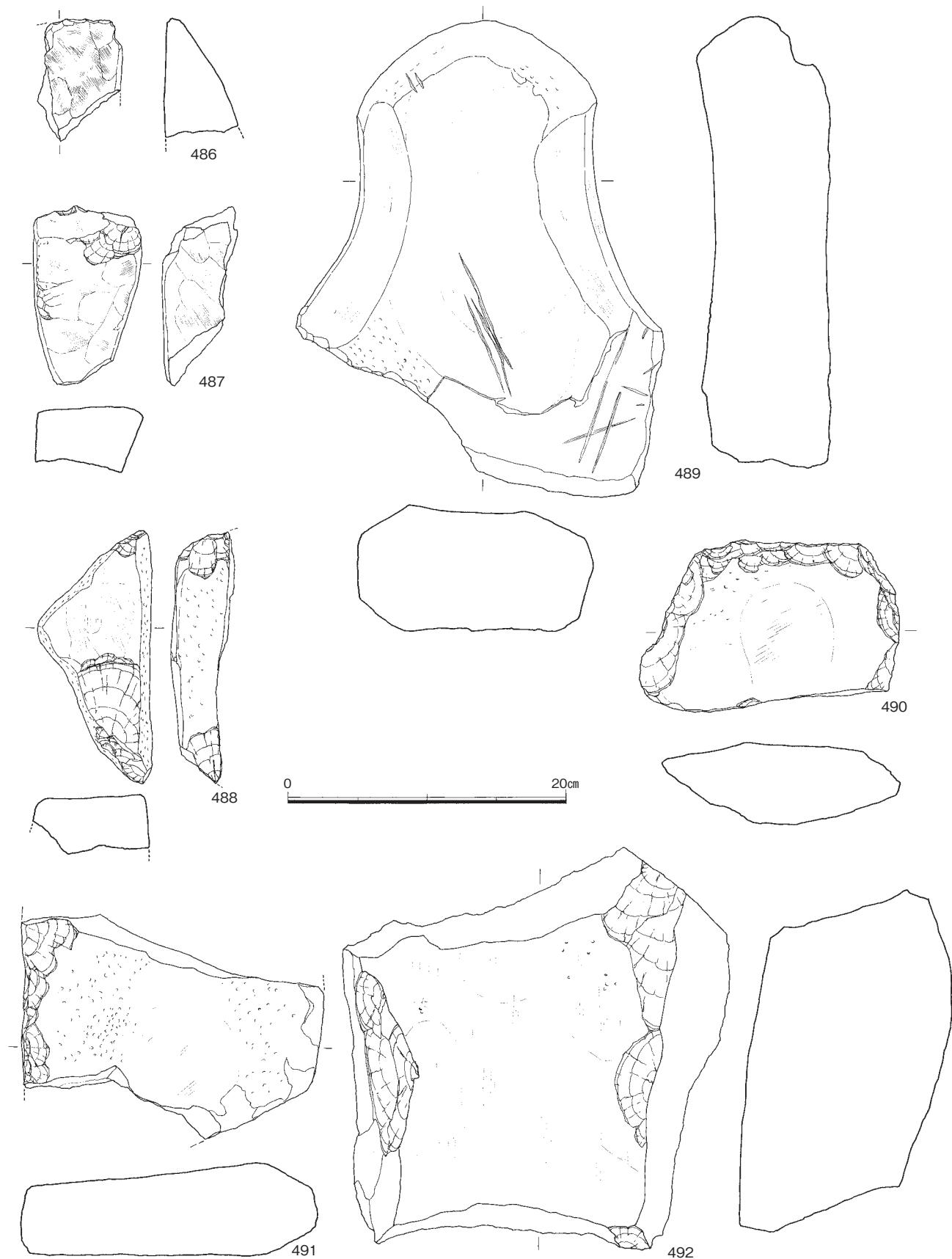


Fig.103 SX123出土砾石2 (1/4)

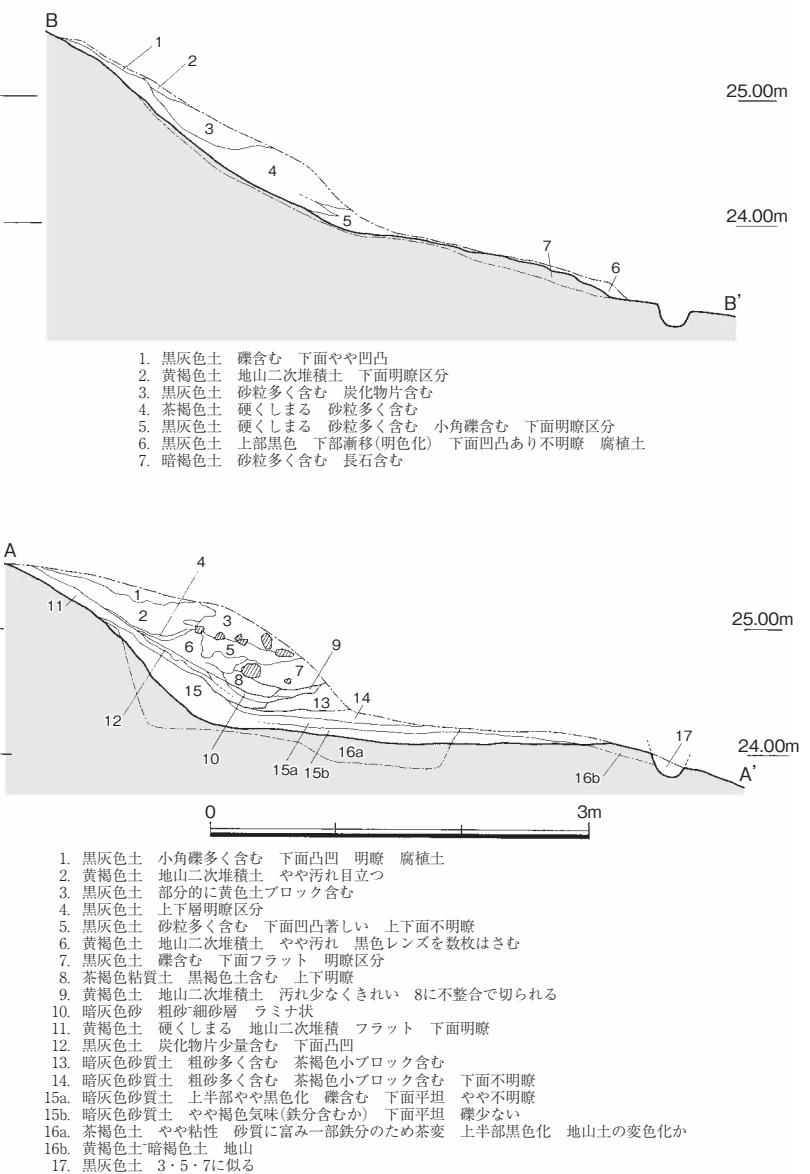
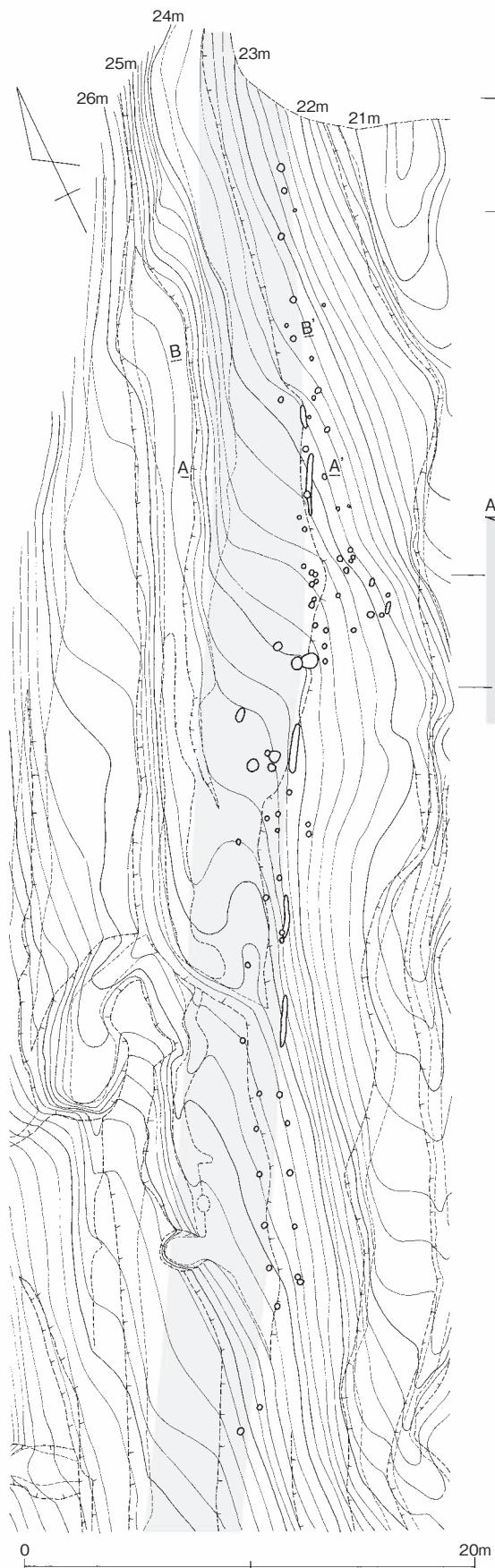


Fig.105 道路状遺構断面図 (1/60)



1. 4区道路状遺構土層断面 (南から)

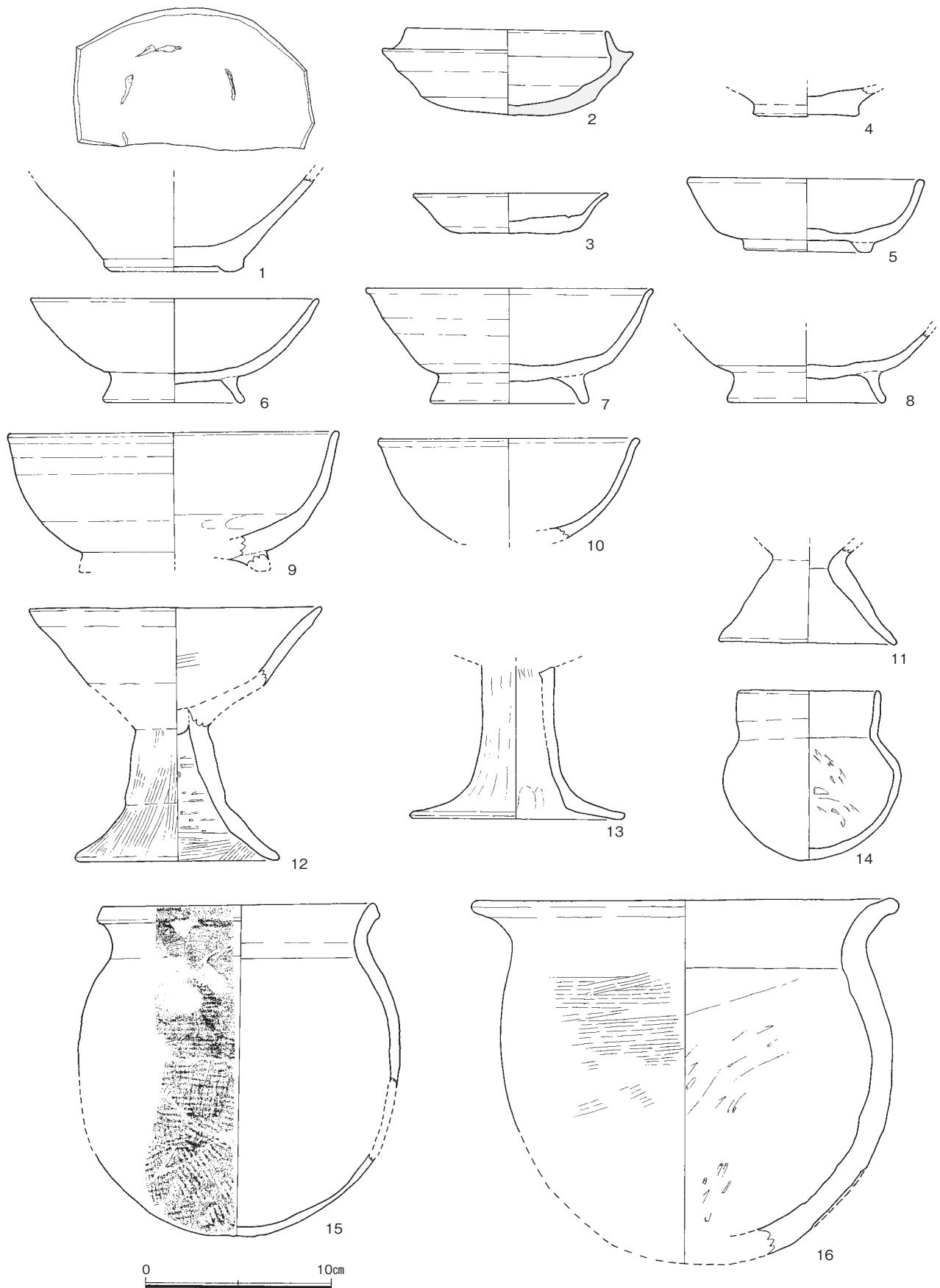


Fig.106 3区谷部包含層出土遺物1 (1/3)

流路に沿って暗褐色土（Ⅲ層）の包含層が形成されていた。包含層中は古代～中世の遺物が含まれており、さらに下部の砂礫層（V層）には少量であるが、縄文時代土器片や剥片石器などが含まれていた。この部分での流路には明確な掘方がないが、包含層を含む堆積土も上下に漸移変化を示すことから自然流路に近い状況であったと見られる。

より下流の3区では陶磁器、須恵器、土師器が出土した。陶磁器には越州窯系碗（1）があり、須恵器には壺身（2）、土師器には皿（3）、壺（5）、碗（6～10）、高壺（11～13）、壺（4、14、21）、甕（15～20）がある。このうち壺（4）は弥生時代、壺（21）は古墳時代前～中期で池ノ浦古墳関連か。壺身（2）、高壺（11～13）と甕（18～20）は古墳時代後期、他は古代と見られる。古代の遺物は10世

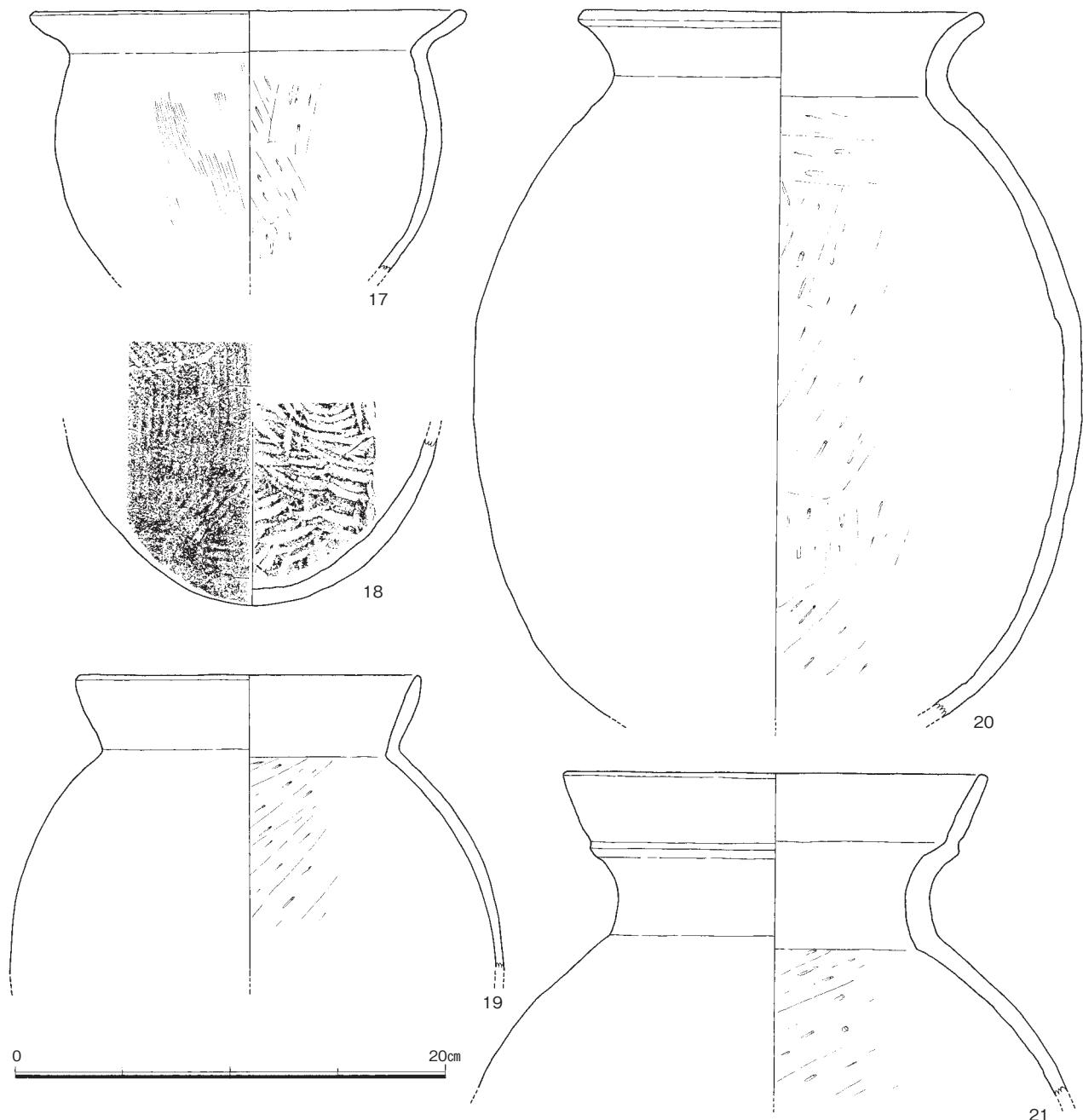


Fig.107 3区谷部包含層出土遺物2 (1/3)

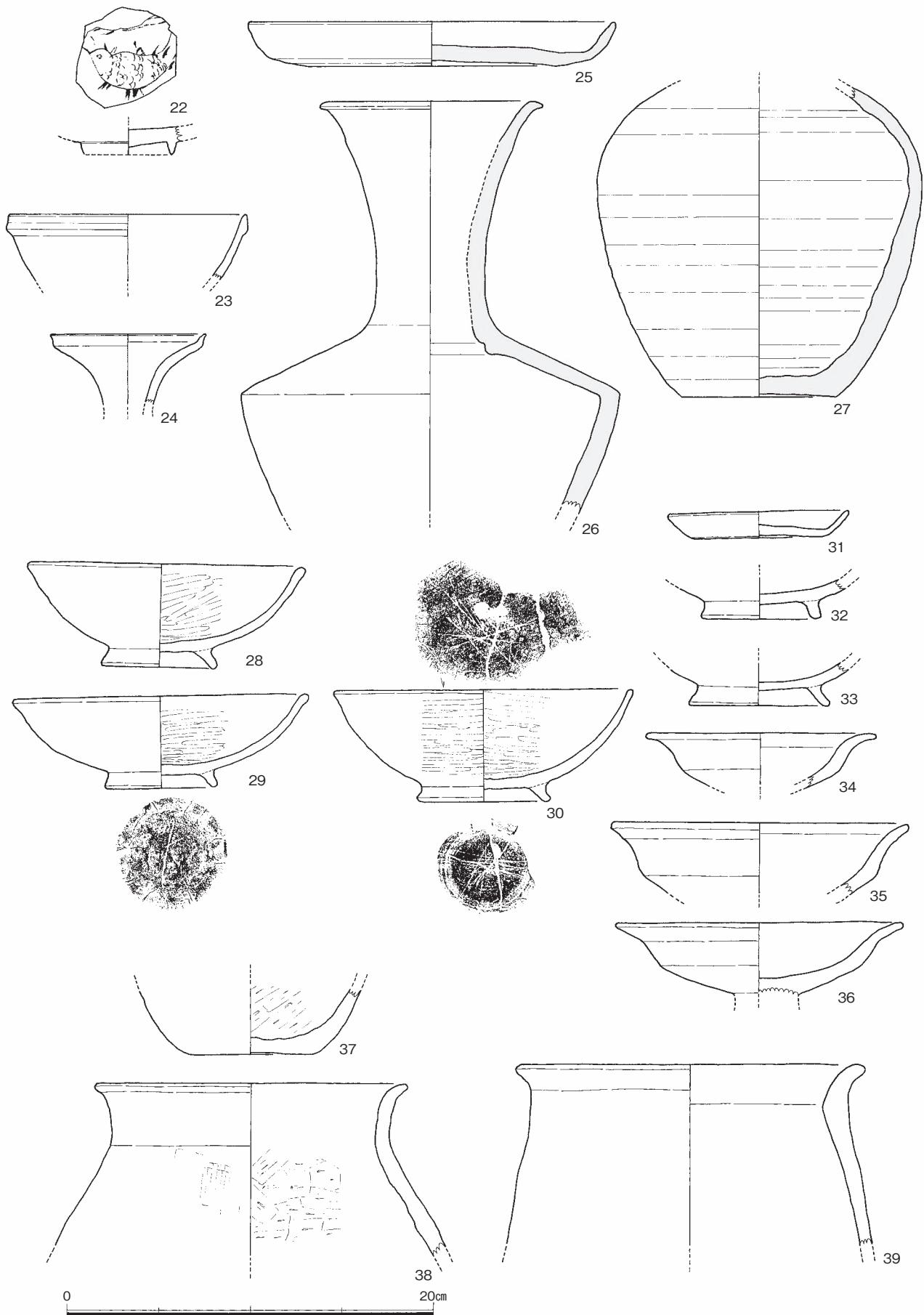


Fig.108 4区谷部包含層出土遺物1 (1/3)

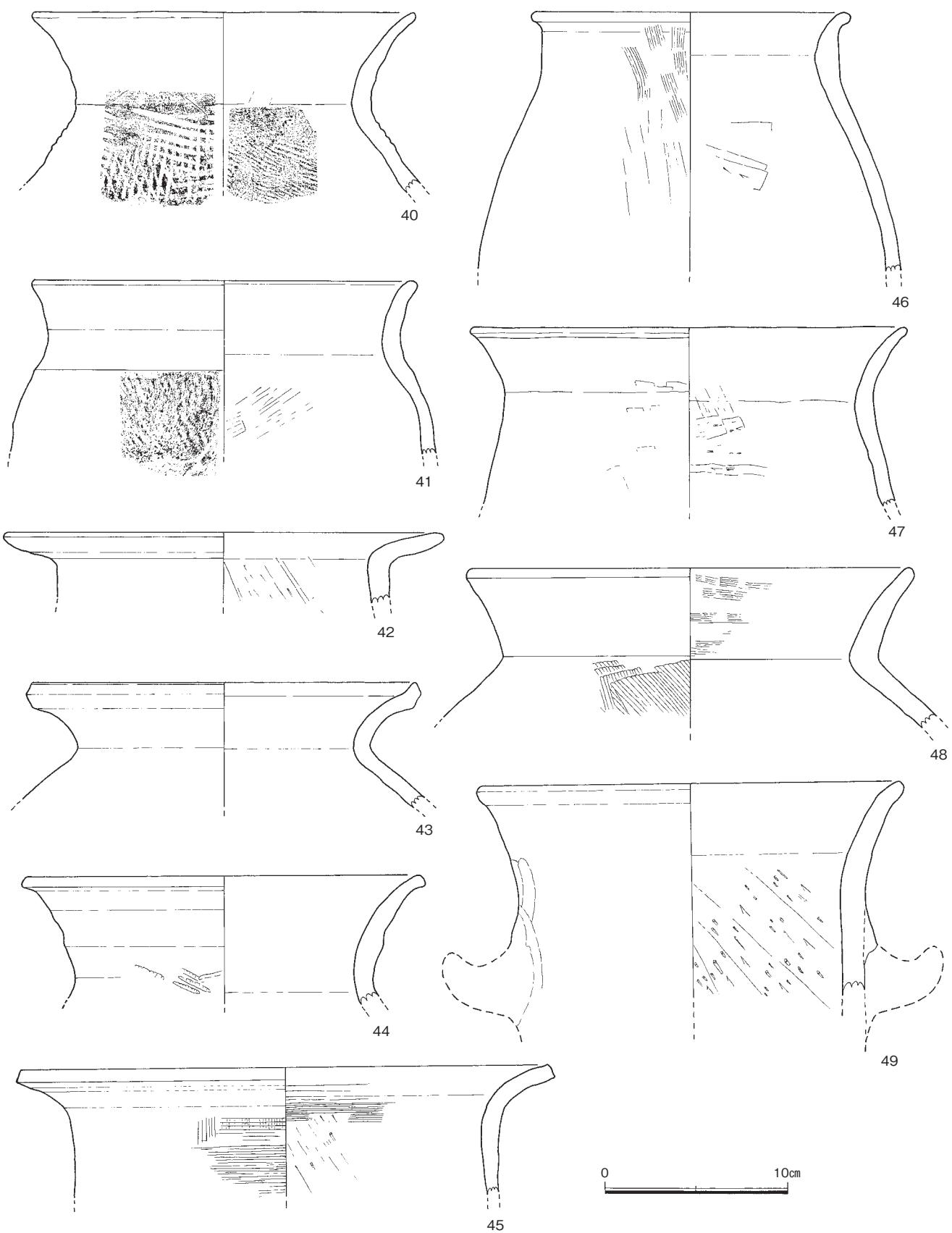


Fig.109 4区谷部包含層出土遺物2 (1/3)

紀代が多く3区で検出した建物SB300との関連が指摘できる。

4区では陶磁器、須恵器、土師器、製鉄関連遺物が出土した。陶磁器には青磁(22)、白磁(23)、壺(24)があり、青磁には皿(25)、壺(26、27)がある。土師器には皿(31)、椀(28~30、32、33)、高坏(34~36)、甕(37~48)、甑(49~51)、竈(52)がある。製鉄関連遺物には鉄滓、炉壁、轍羽口(53、54)があり、製鉄炉SR413からの流入と考えられる。古代以降が主であり、須恵器25~27は8世紀後半から9世紀、椀類は10世紀、陶磁器は11~13世紀である。

そのほかに出土地区は不明であるが表土除去中に陶磁器、須恵器、土師器類が出土している。陶磁器には越州窯系椀(55)、須恵器には坏身(56)、壺(57)、甕(58~61)がある。土師器には甕(62)がある。

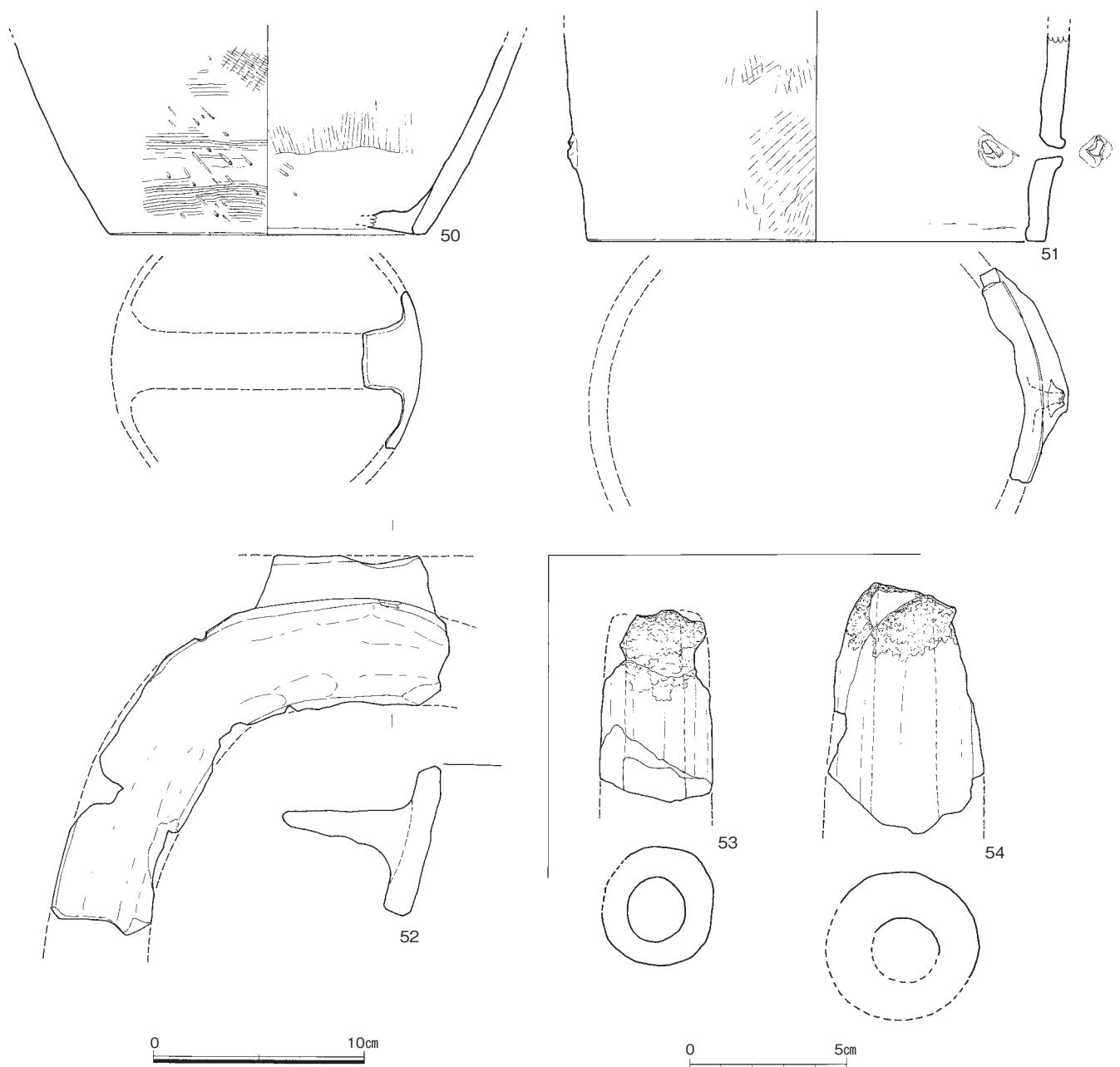


Fig.110 4区谷部包含層出土遺物3 (1/2・1/3)

(2) 増輪（池ノ浦古墳崩落遺物）

池状遺構SX123の南側上部覆土を中心に増輪片が出土した。調査区に古墳や増輪窯などは想定し難い。出土地点の南側40mに隣接する池ノ浦古墳の後円部北側墳丘が崩落していることは、現地や測量図から確認され、その崩落により墳丘上にあった増輪が本遺構に流れ込んだものと見られる。崩落の時期は遺構内の出土遺物から見て8世紀後半から9世紀代と考えられる。

増輪には壺形増輪（63～70）と円筒増輪（71～73）がある。壺形増輪には單口縁形（63～67）と二重口縁形（70）があり、何れも口縁の拡張が少なく、内外面の調整が丁寧である。底部は1点（69）のみ確認したが、穿孔後に低い輪台状に拡張している。円筒増輪は壺形増輪に比べて少ないが、外面は丁寧な一次縦ハケのみで、高い突帯を巡らす。透かしは三角透かしが1点（72）あり、これまでの表面採集資料と矛盾しない。

(3) 旧石器時代～縄文草創期の遺物

包含層はなく後世の縄文時代資料などと共に出土した。細石刃（1）、細石刃核（2）、ナイフ形石器（3）、使用痕や二次調整のある剥片（4～7）がある。北東約100mに位置する3区と同様に、後期旧

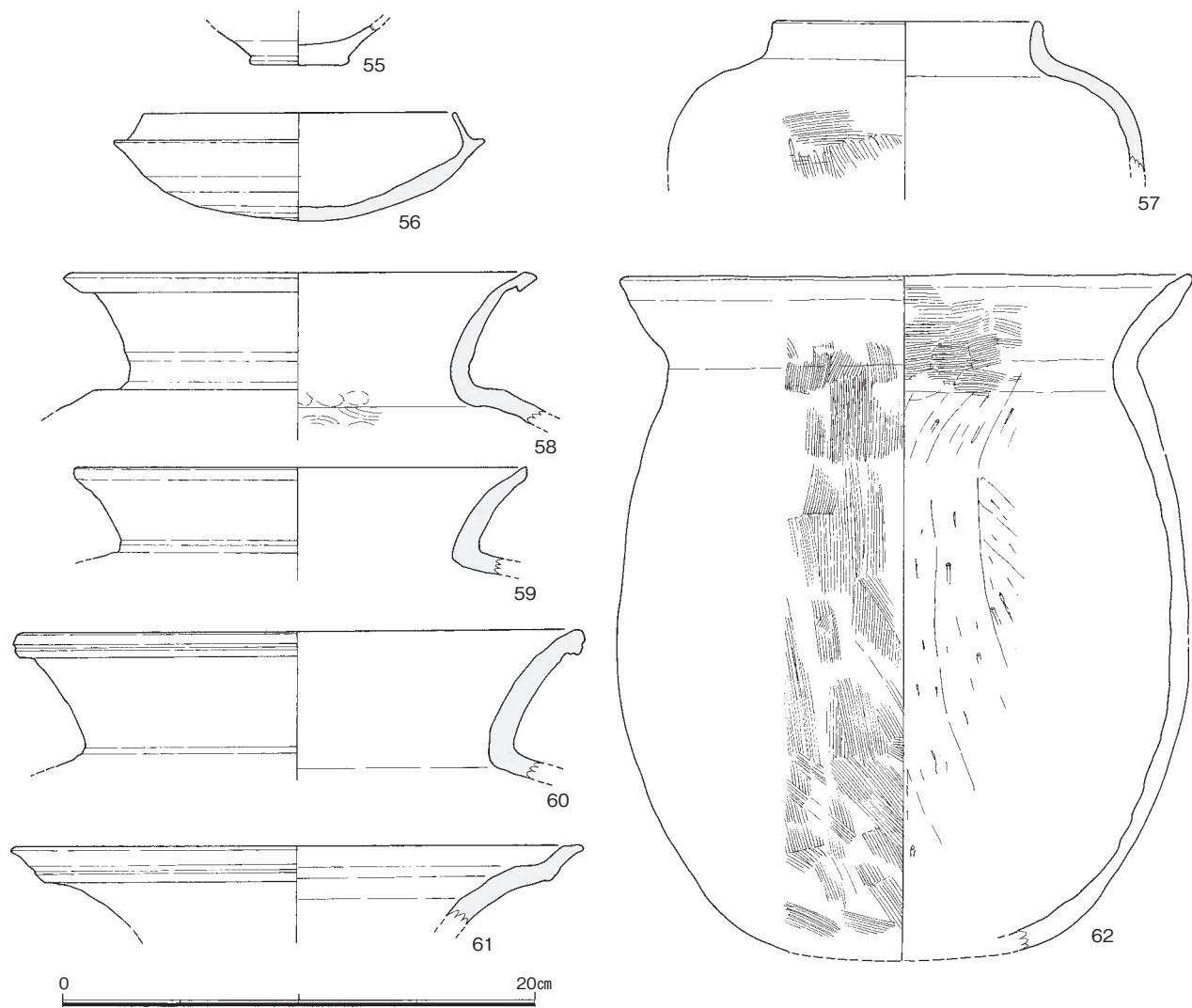


Fig.111 その他の出土遺物（1/3）

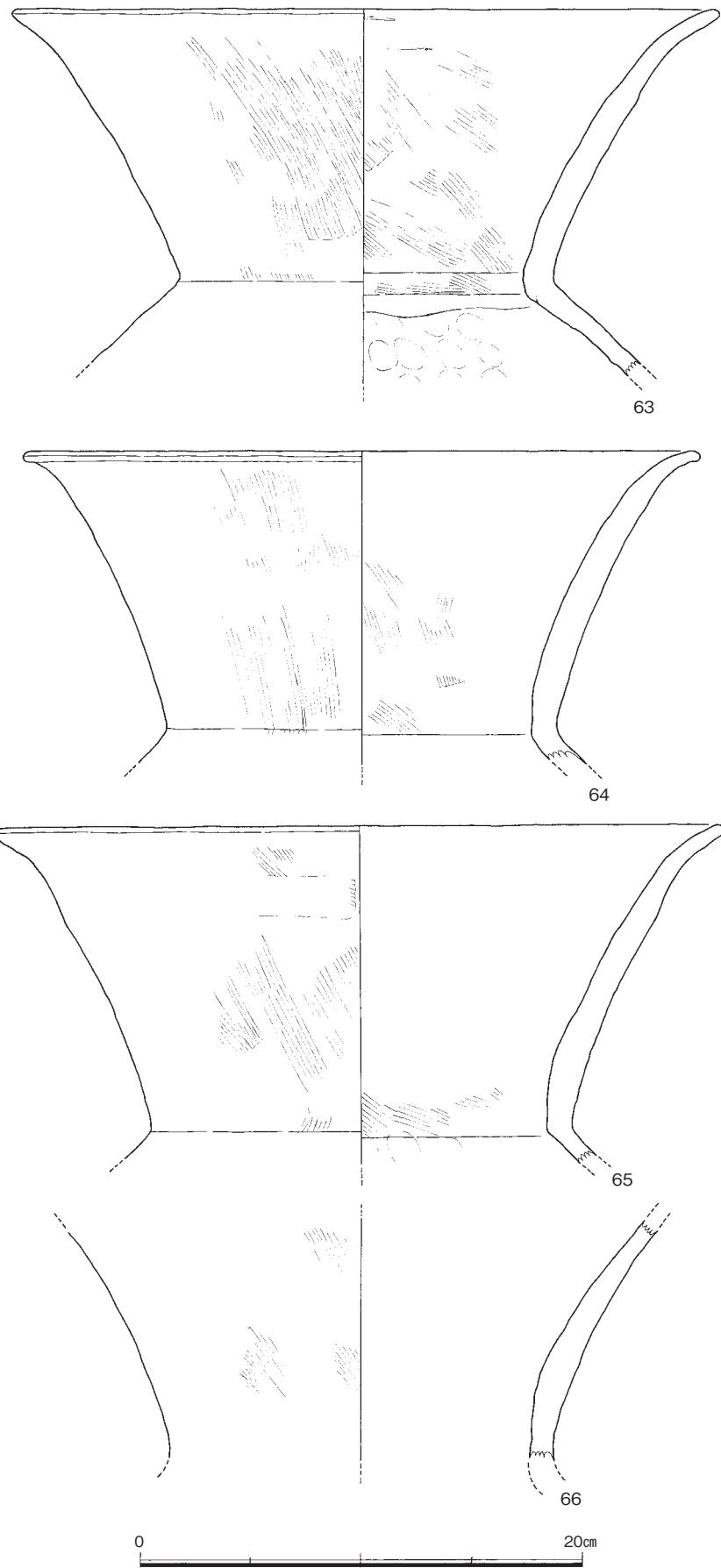


Fig.112 墳輪1 (1/3)

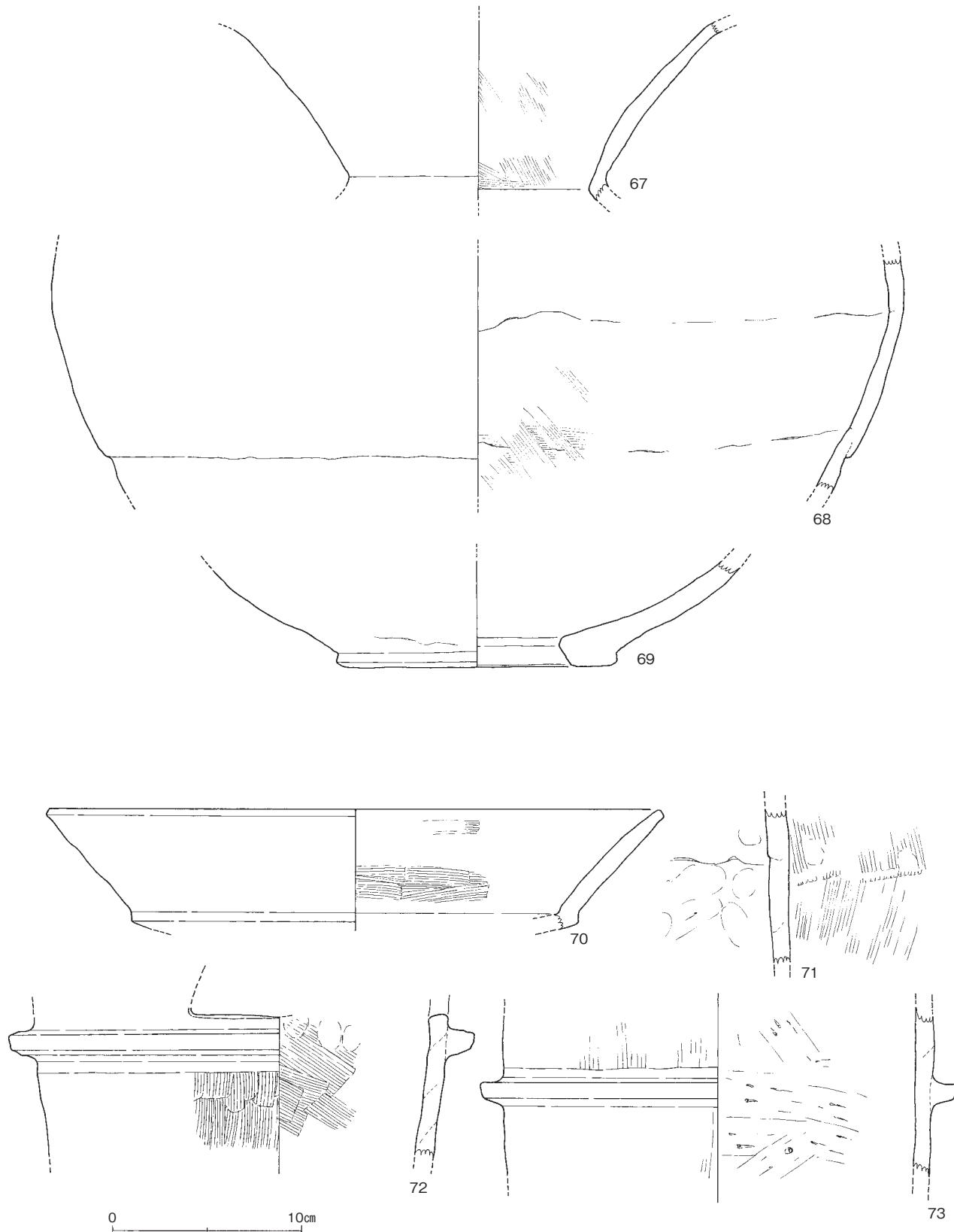


Fig.113 墳輪2 (1/3)

石器時代後半期のナイフ形石器段階と縄文時代草創期の段階の二時期の石器類に区分され、それぞれの小規模な活動の痕跡とみられる。

(4) 縄文時代の遺物

縄文時代の資料としては早期、後期前葉、晚期前葉の三段階の遺物と一部に包含層を確認した。早期は造成面SX111の中段下部に包含層を一部確認したが、古代の造成事業で多くを失っている。遺物としては土器、石器類がある。土器 (Fig.115、116) には条痕土器 (1~4、11~22)、押型文土器 (5~10) などがある。剥片石器 (Fig.119、120) には三角鏃 (2、4、5)、鍬形鏃 (6)、削器 (18) がある。石鏃 (5) の背面には研磨が施されている。

後期前葉は整地遺構SX107の下部に包含層と少数の柱穴を検出した。土器 (Fig.116) には阿高式系土器 (23~25) と無文粗製土器 (26、27) がある。剥片石器 (Fig.119) には鋸歯縁長脚鏃 (3) がある。

晚期前葉は造成面SX111から池状遺構SX123、また3、4区で出土したが明確な包含層は未検出であった。土器 (Fig.116、117) には精製の鉢形土器 (31、38) 以外は粗製深鉢形土器 (28~30、36) が多い。それ以外は後期土器との区分が困難であり、Fig.116~118に一括して提示する。剥片石器 (Fig.119、120) には縦長剥片を素材とする刃器 (10~12、14) があり、横刃削器 (17、20) があり、礫石器 (Fig.123、124) には扁平打製石斧 (27~34) がある。なお、時期の限定は困難であるが、礫石器 (Fig.122~127) として磨製石斧 (2~10、12~16)、打製石斧 (19~26)、敲石 (35~41)、凹石 (42~56)、磨石 (57~94) がある。

(5) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は造成面SX111、池状遺構SX123を中心に出土したが、明確な遺構、包含層は未検出であった。古代の造成により失われたと考えられる。出土遺物には土器、石器類がある。土器には壺 (1、2、11)、甕 (3~9、10、12、13)、器台 (14~16) がある。中期中葉の須玖I式 (1、3、4、8) と中期後葉の須玖II式 (2、5~7、9) がある。剥片石器 (Fig.119) には石鏃 (1) がある。礫石器 (Fig.122) には今山産玄武岩製の太形磨製石斧 (1、11)、穂積具 (17、18) などがある。

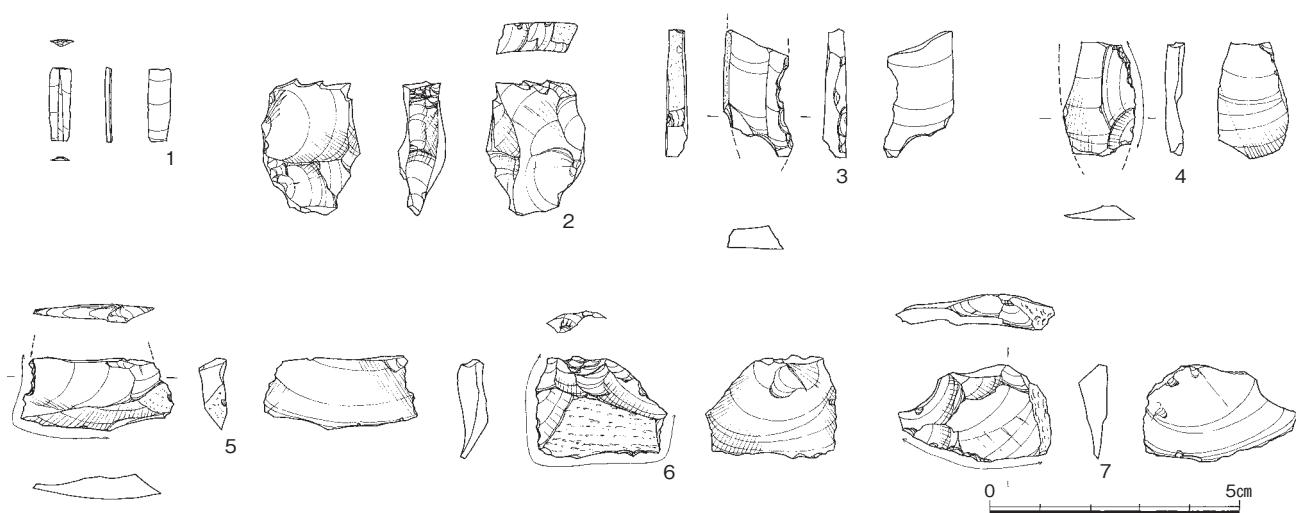


Fig.114 旧石器時代遺物 (2/3)

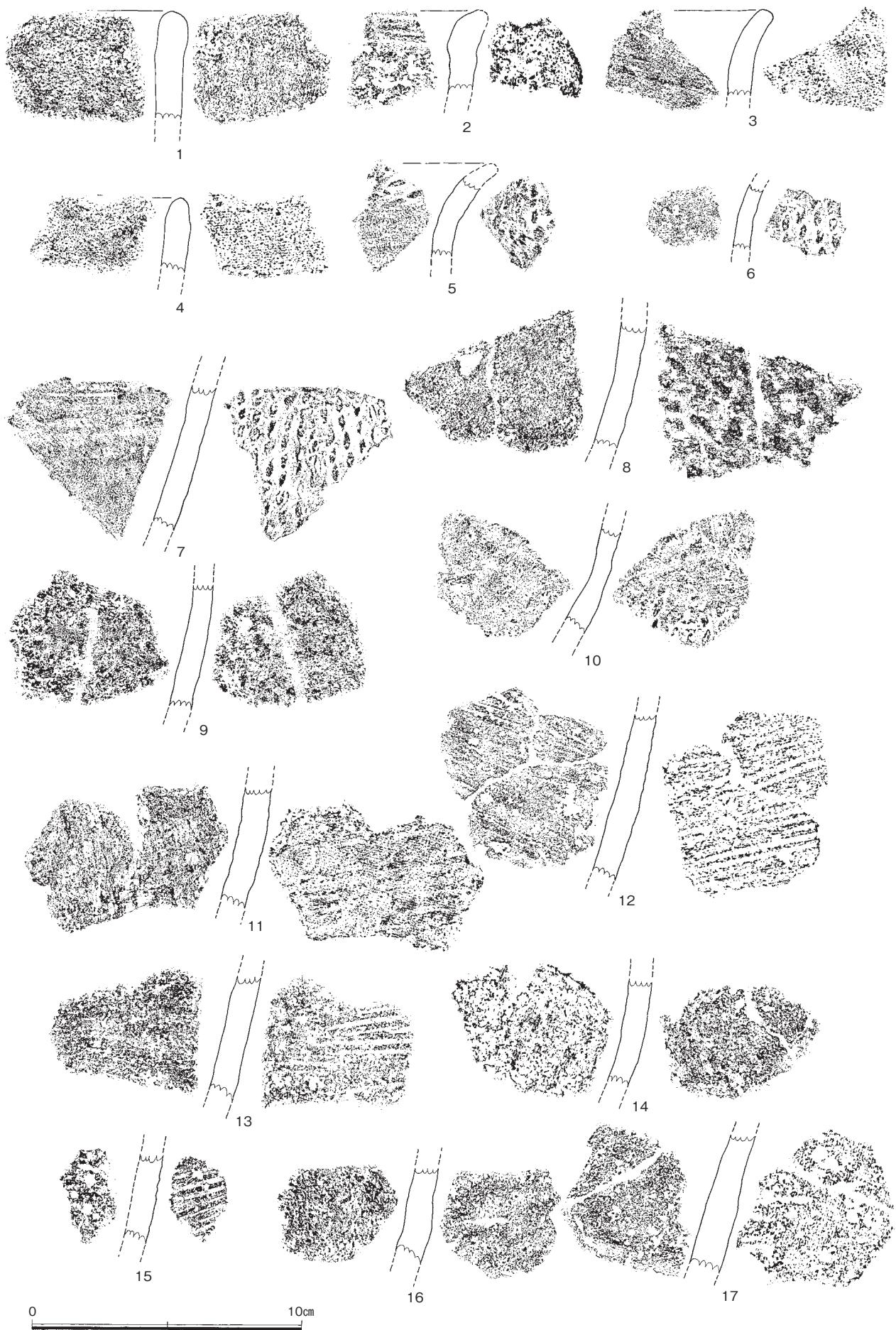


Fig.115 繩文時代遺物1 (1/2)

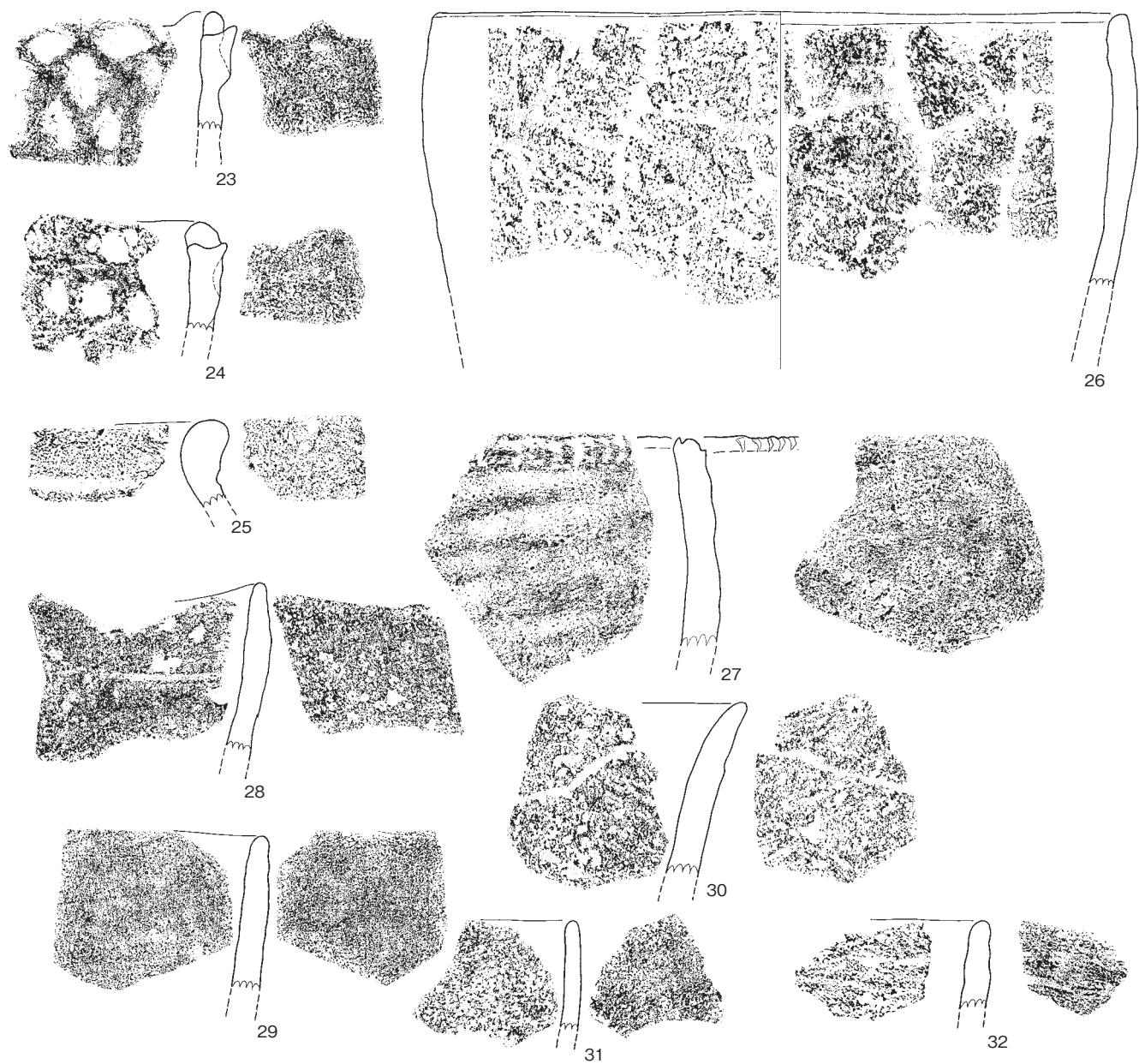
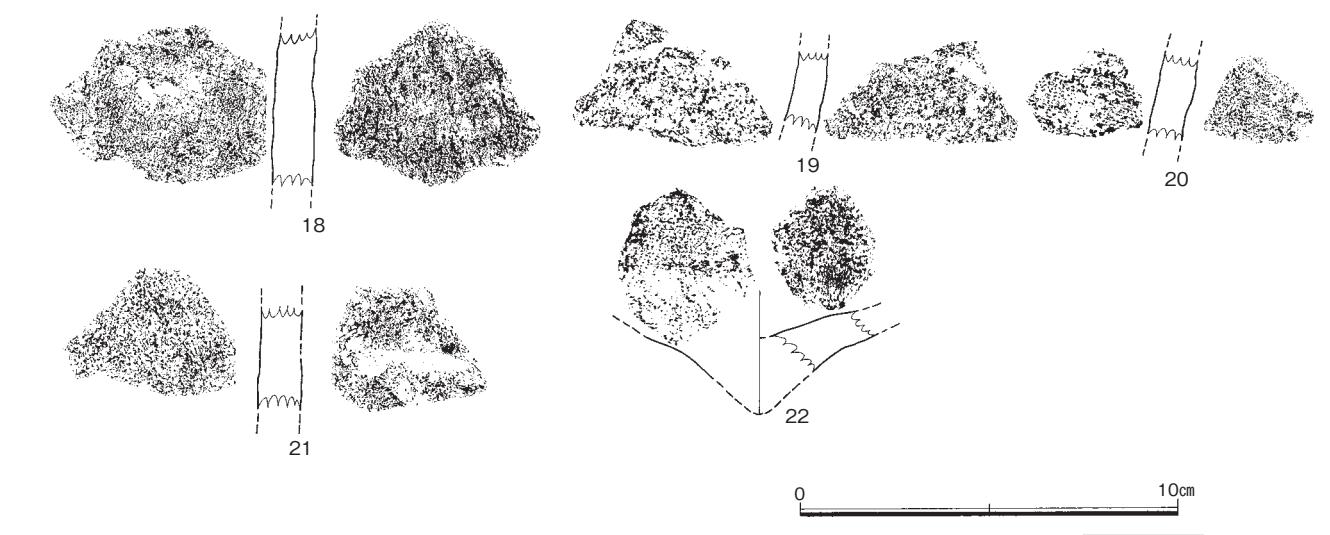


Fig.116 縄文時代遺物2 (1/2)

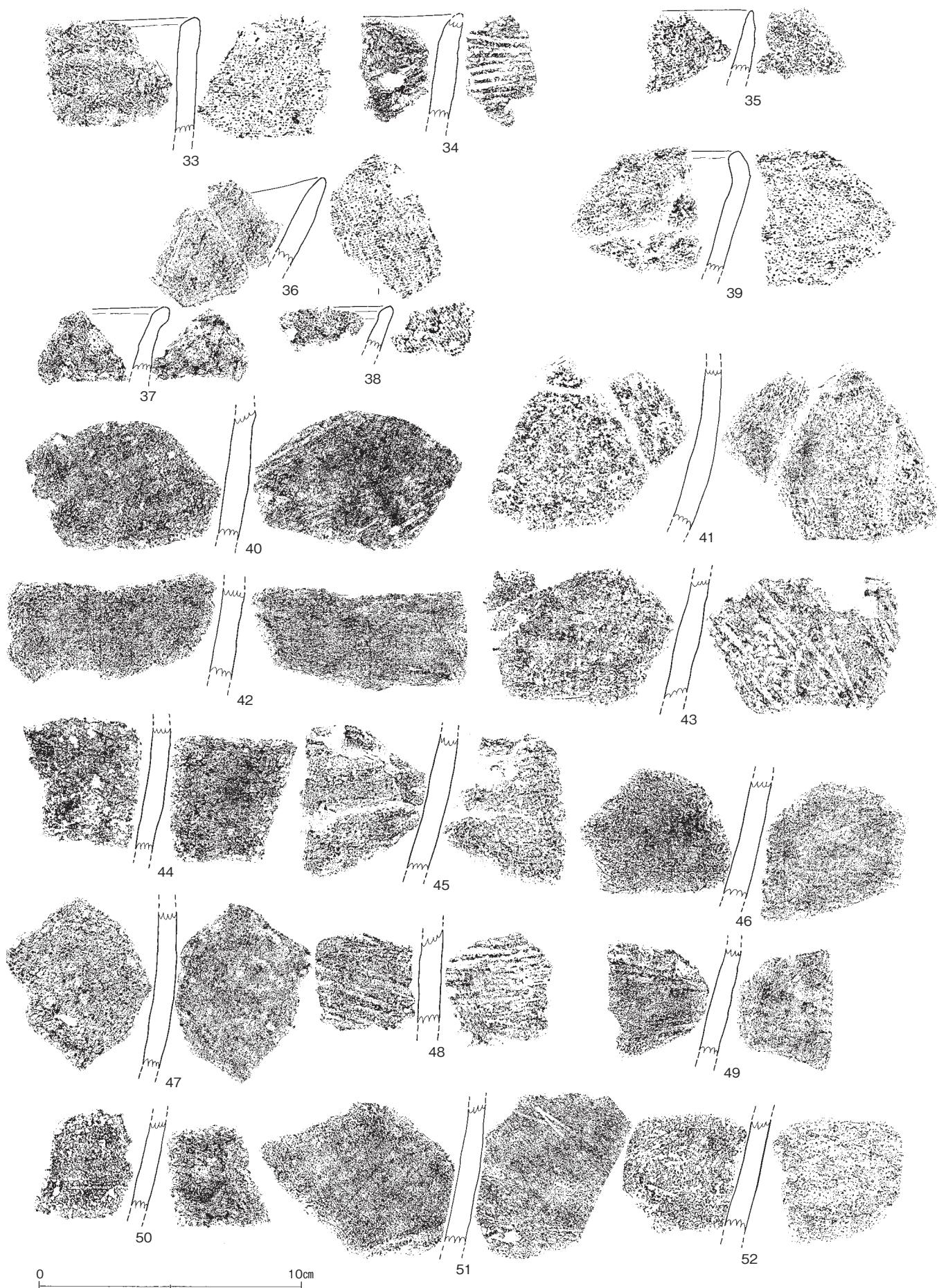


Fig.117 繩文時代遺物3 (1/2)

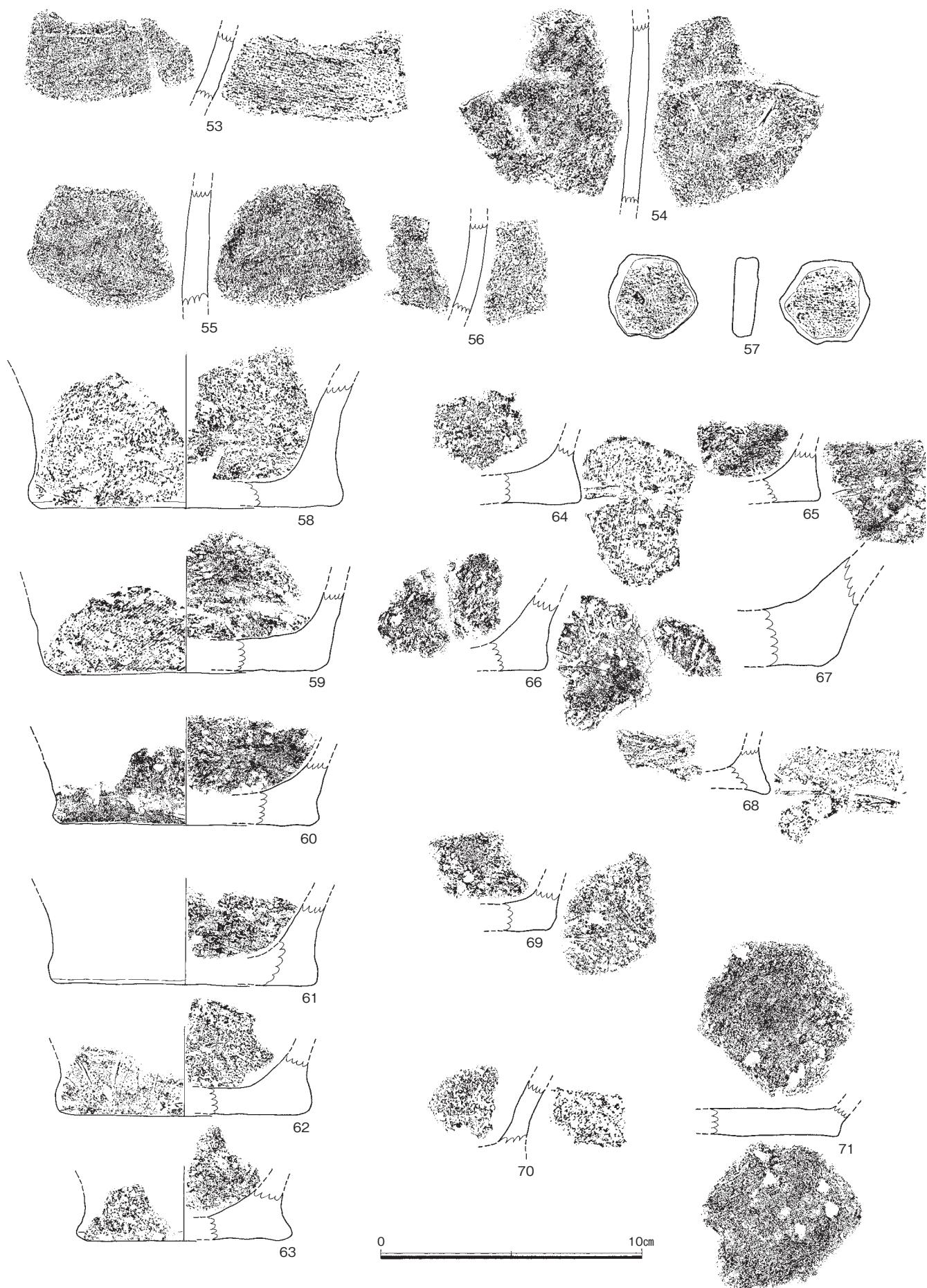


Fig.118 繩文時代遺物4 (1/2)

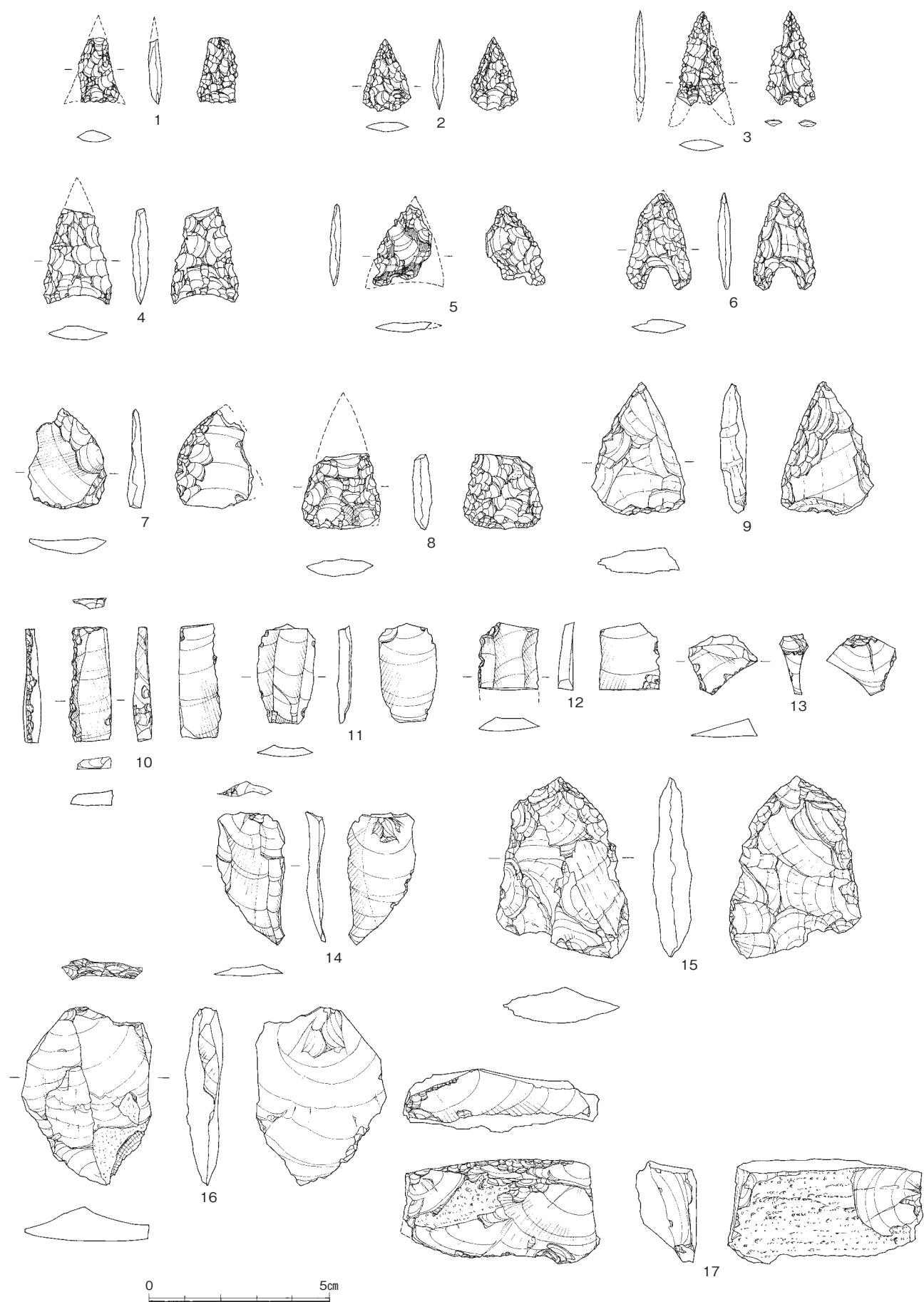


Fig.119 剥片石器1 (2/3)

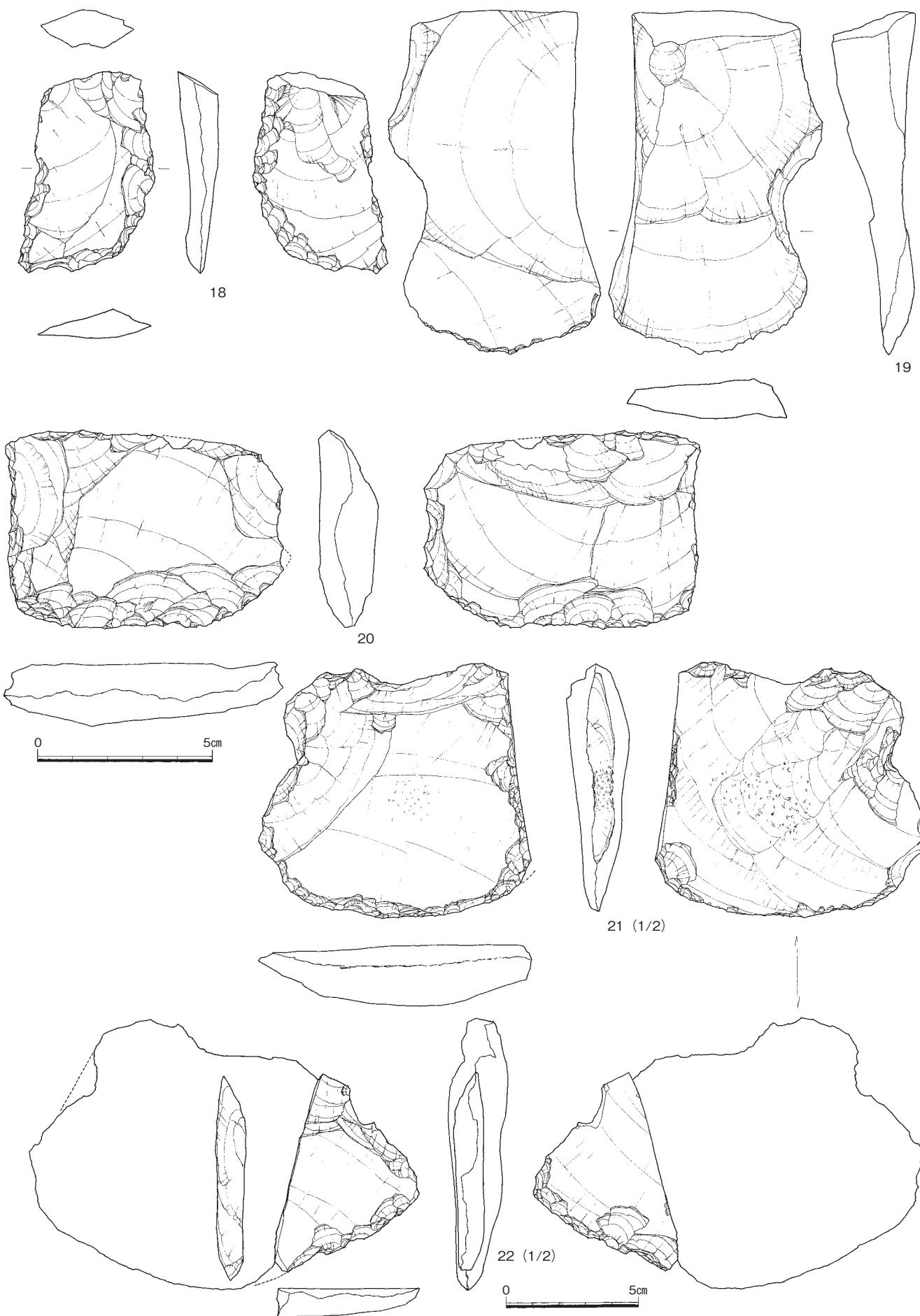


Fig.120 剥片石器2 (2/3 · 1/2)

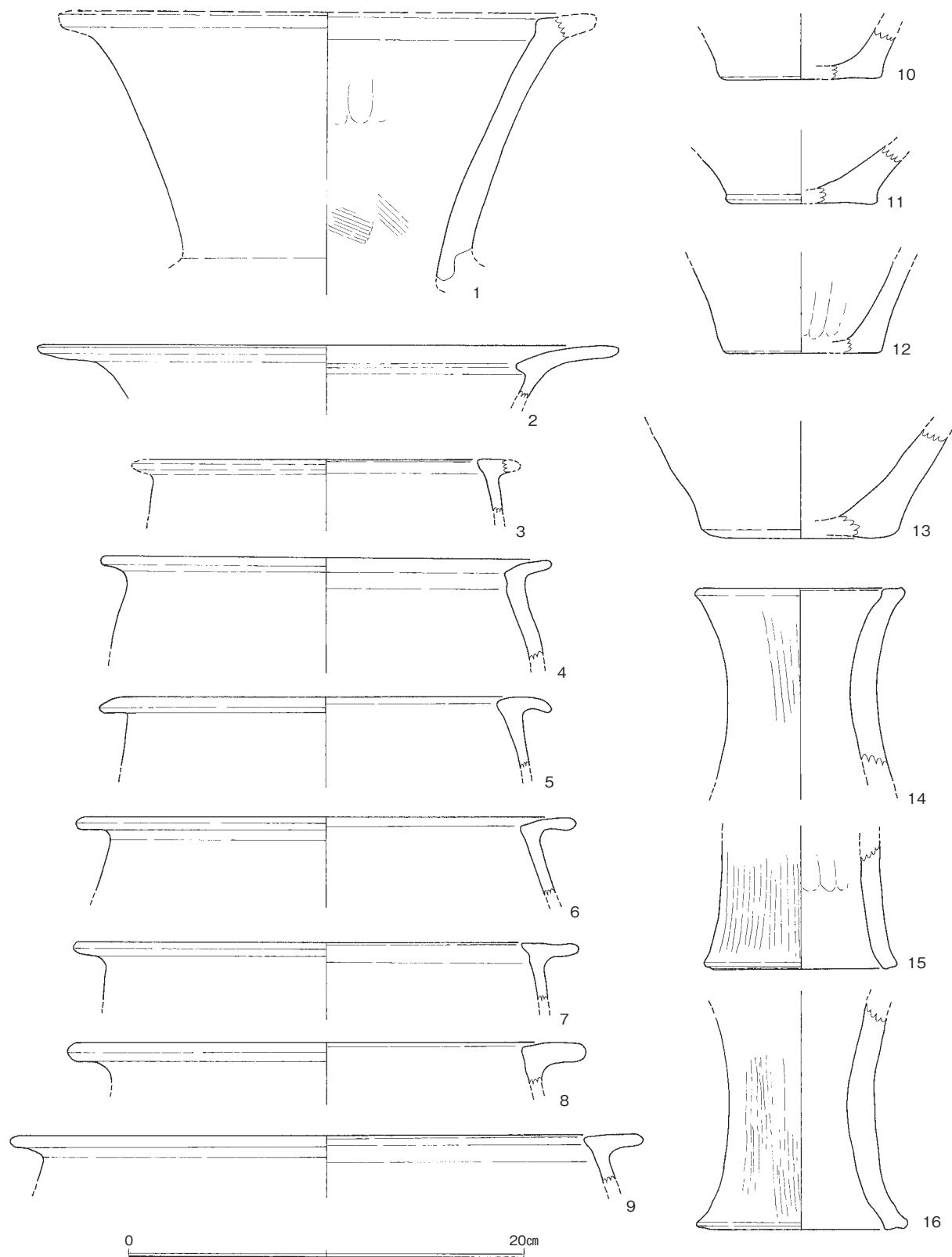


Fig.121 弥生時代遺物 (1/3)

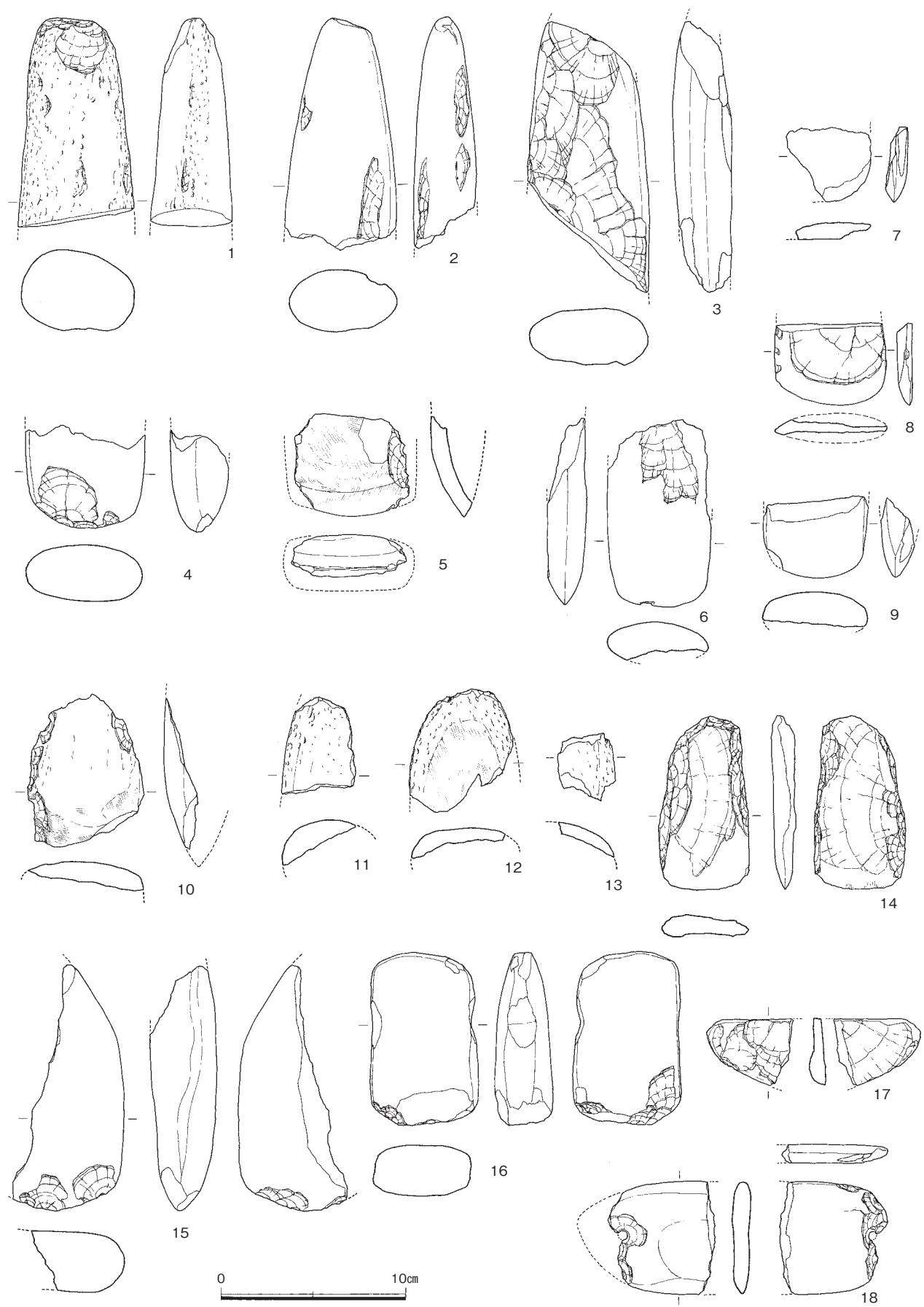


Fig.122 出土砾石器1 (1/3)

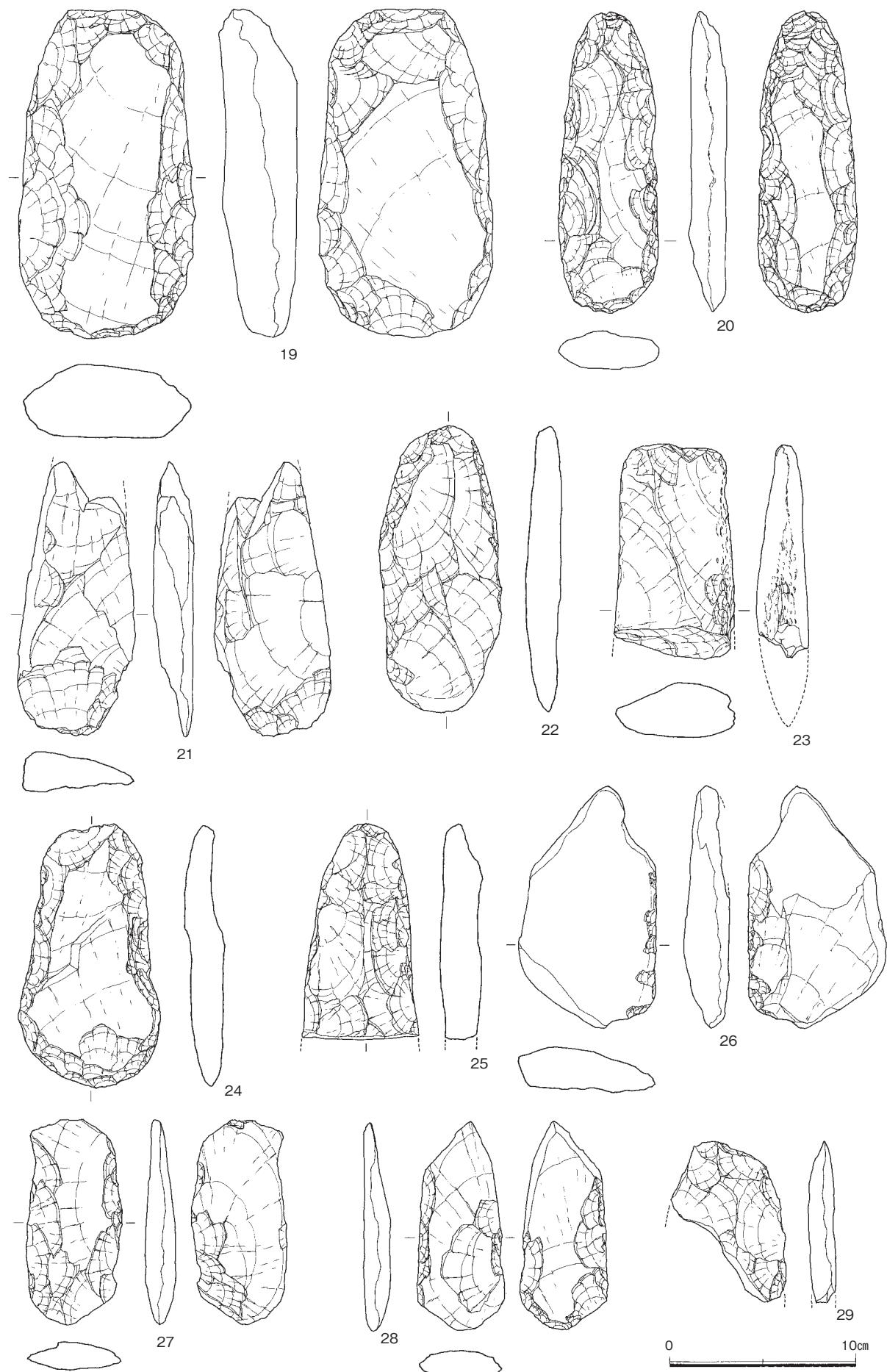


Fig.123 出土砾石器2 (1/3)



Fig.124 出土礫石器3 (1/3)

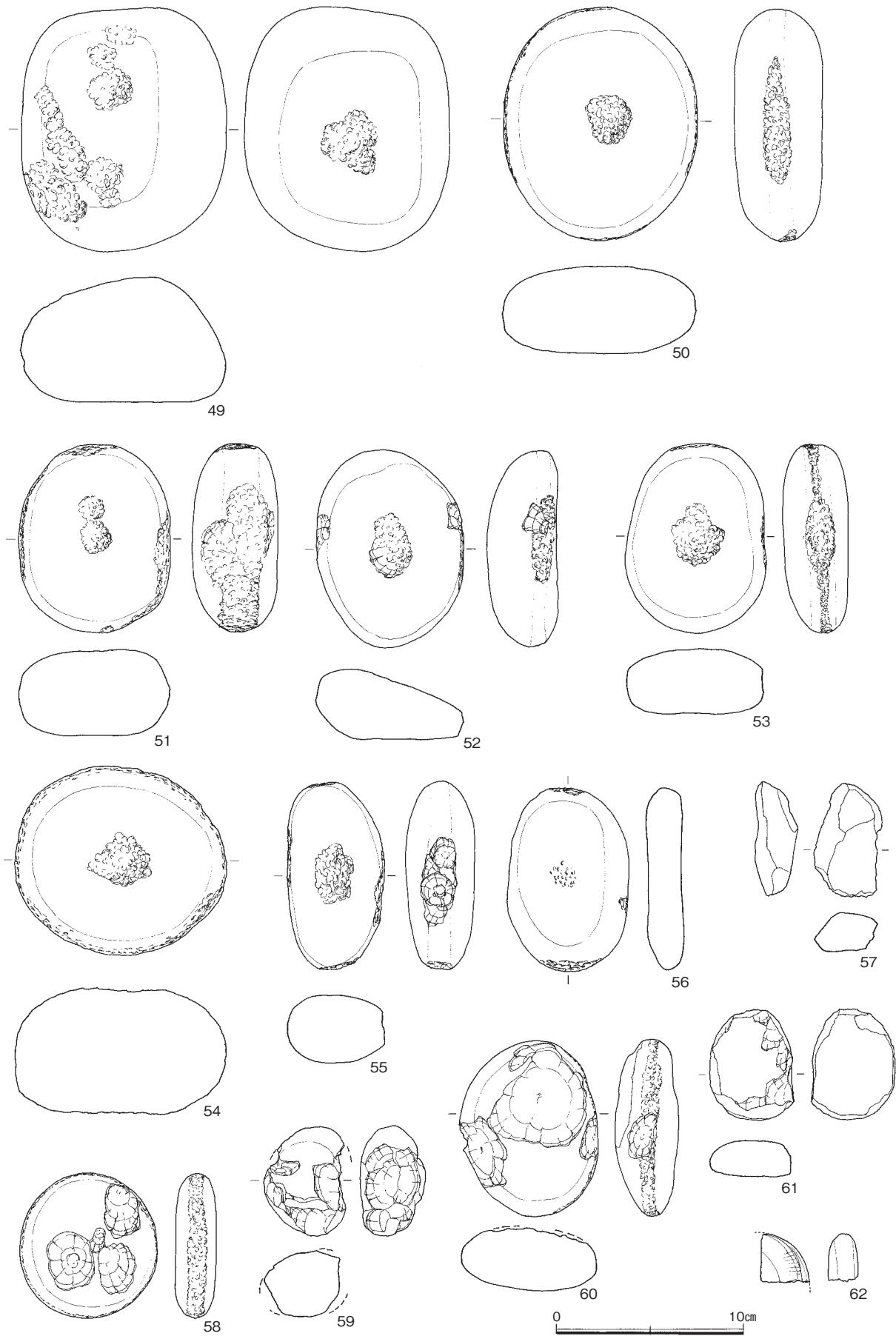


Fig.125 出土礫石器4 (1/3)

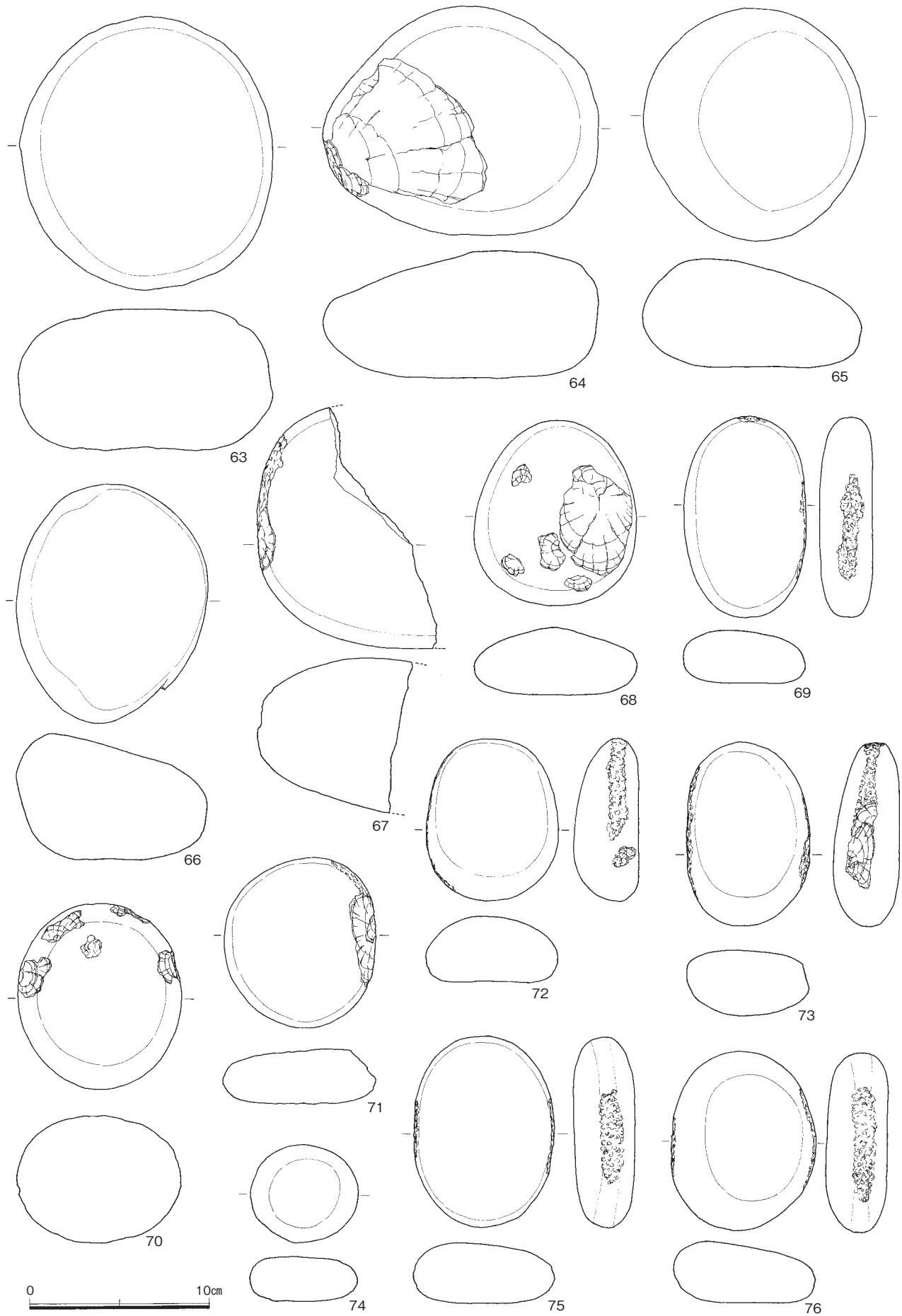


Fig.126 出土礫石器5 (1/3)



Fig.127 出土礫石器6 (1/3)

4.まとめ

7次調査地区の位置する谷で本格的集落が初めて形成されるのは古墳時代後期である。その時期は6世紀第3四半期から7世紀第1四半期と考えている。集落は比較的緩斜面で日当たりの良い谷奥の西側斜面を中心に展開している。6棟の竪穴式住居と2棟の総柱建物、造成面、区画溝などがある。ただし古代以降の造成により保存状況は悪く、既に失われた遺構も多いと考えられる。住居の区画溝に切り合いが見られることや出土須恵器の時期幅から見て同時に全ての建物が存在していない。集落規模は極めて小規模であるが、倉庫と見られる総柱建物は一辺3.6mの規模で、谷奥最上段の造成面に建てられるなどを特異な状況を示す。その生産基盤や集落の性格については不明である。なお住居内の覆土と出土遺物の検討から、この集落の廃絶後、古代の建物群形成の間には間隙が予測される。

古代の遺構は谷奥部に掘られた池状遺構SX123とそれを見下ろす西側斜面に三段の造成をして建物群が建てられている。また造成面に鍛冶炉、谷部流路に沿って精錬炉が設けられている。谷の入り口に当たる3区の建物2棟は10世紀前後と考えられ、当初は谷奥のみが開発利用されている。復元できた建物は23棟あり、うち6棟は総柱建物、17棟が側柱建物である。建物の主軸方位は造成面が地形に沿ってスタジアム状に展開するために統一していない。また、最大6棟の重複を含め切り合う建物が多く、同時存在の建物は限られたものと考えられる。総柱建物は二間二間の倉庫と見られ、何れも一辺3m以下と小規模であり造成面の中、下段に多く建てられている。側柱建物は桁間五間5棟、四間6棟、三間6棟などあるが、梁行の規模や庇などは不明である。全体に桁間が小さく、桁行規模は6m以下6棟、6~8m8棟、8m以上3棟などがある。桁間、規模の大きいものは造成面でも中、上段に多い傾向がある。ただし最大規模の建物SB146は池状遺構SX123の池際に沿って建てられていて、規則性を見出すのは困難である。池状遺構SX123は谷奥中央の湧水点を基点に全長42mと長大に掘られており、その造営時期は下部出土遺物から7世紀第4四半期と考えられる。これは池の排水溝である溝SD13の最下部から出土した木簡に記された「壬辰年」とも矛盾しない。池は単一の水面をなすのではなく、池底の形態から二段以上に区分されていたと考えられた。湧水のある南側上流の池には「大磐」が設置され、泉水とこの大磐を中心に祭祀行為が行われている。この部分での池底の遺物は少ない。北側下流の池は床面直上から土器類や木簡を含む木製品などが多量に出土した。このように池は内部が区分され、水面毎に機能を違えていたことが考えられた。池から溢れた水は溝SD13を通り谷部に沿って3、4区を流れるが、溝SD13より下流には木製品はなく、遺物も上部覆土に出土したのみであった。3、4区で注目されるのは、西側斜面に設けられた道路状遺構SX444である。これは幅3.5m以下の小規模なものであるが、谷奥の建物群と外部を連絡する通路と考えられる。

遺跡の性格を考える上で注目される遺構としては製鉄関連遺構がある。精錬炉は造成面SX111下段や流路に沿った低位置に設けられている。精錬炉は小規模で生産量も少ないと考えられる。池状遺構SX123の埋没がある程度進んだ段階に設けられており、少なくとも8世紀中葉以前には存在していない。これに対し鍛冶炉は遺構が後世に失われたものも多いと見られるが造成面SX111中段に17基あり、大きく二ヶ所に集中しその一部に覆屋が存在したことも予測される。本遺跡での生産活動の中心的存在と言える。

9世紀に入ると谷奥部の遺物量は減少し、建物群の継続も失われるようである。10世紀には僅かな遺物と共に先に示した谷開口部の建物SB302・357を中心に短期間で谷の活動は終焉を迎えている。

このように本遺跡は池を中心に建物群、製鉄遺構などがあり、出土品に馬具や木簡、硯、墨書土器、木簡、権、鎍帶具、瓦などが含まれていて、一般集落とは様相を異にしている。木簡や墨書土器など文字資料の検討はできなかったが、荷札、郡符木簡などがあり、何らかの公的機能を有していたことは明らかである。しかし、遺跡の性格やその推移については今後の検討が必要であり、課題としたい。

報告書抄録

書名ふりがな	きゅうしゅうだいがくとうごういてんようちないまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ		
書名	九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書		
副書名	元岡・桑原遺跡群12 - 第7次調査報告 -		
巻次	12		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第1012集		
編著者名	吉留秀敏		
編集機関	福岡市教育委員会		
発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	20080331		
作成法人ID			
郵便番号	810-0721	電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神1-8-1		
遺跡名ふりがな	もとおか・くわばらいせきぐん		
遺跡名	元岡・桑原遺跡群		
遺跡所在地ふりがな	ふくおかにしくおおあざもとおかあざいけのうら		
遺跡所在地	福岡市西区大字元岡字池ノ浦		
市町村コード	40135	遺跡番号	2782
北緯	333543		
東経	1301316		
調査期間	19980506~19990611		
調査面積	7500m ²		
調査原因	大学移転		
種別	集落、生産		
主な時代	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世		
遺跡概要	主な遺構	古墳時代後期 - 壱穴式住居5+掘立柱建物2+溝/古代 - 掘立柱建物29+土坑3+焼土坑12、鍛冶炉16、精錬炉6+溝+柵列+道路+池	
	主な遺物	旧石器時代 - 石器/縄文時代 - 土器+石器/弥生時代 - 土器+石器/古墳時代前期 - 土器+埴輪/古墳時代後期 - 須恵器+土師器/古代 - 須恵器+土師器+輸入陶磁器+瓦+石製品+土製品+木製品+鉄製品+銅製品+製鉄関連遺物	
特記事項	古墳時代以前は小規模な活動痕跡のみ。古墳時代後期に谷奥に集落形成。古代に官衙的遺構群が出現。精錬炉、鍛冶炉などの製鉄遺構は小規模だが、斜面を造成した建物群は建て替えながら長期継続。遺物に硯、権、銅鏡帶、瓦、馬具、輸入陶磁器、文字資料として刻書、墨書き土器、木簡などがあり何らかの官衙機能を有する。特に木簡には郡符、荷札形式があり「壬辰年韓鐵…」「里長」「嶋里」などが記される。		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1012集
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群12 第7次調査報告

2008年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田3-9-32

